

平安京左京八條三坊二町

—第 2 次 調 查—

平安京跡研究調查報告

第16輯

財團法人 古代學協會

昭和60年

序 文

財団法人古代學協會・平安博物館は、昭和54年より55年にかけて平安京左京八条三坊二町の発掘調査を行い、多くの成果をえて、その結果を昭和58年、『平安京跡研究調査報告』第6輯として公刊した。

今回、その西隣りの地を発掘調査する機会を得たが、前回同様多くの成果を挙げる事が出来た。特に、平安時代前期の木簡・人形等を初めとした木器・木製品が出土したこと、鎌倉時代の常滑焼や東播系須恵器大甕を使用した墓を検出したことは、当地に関する新しい知見を加えることとなった。

整理期間が約4ヶ月間と短かく、ために不備な点はあろうかと思われるが、ここに『平安京跡研究調査報告』第16輯として上梓することとした。本報告書が平安京研究にいささかでも寄与するならば幸である。

文末ではあるが、本調査と報告書刊行に際しては各方面から多大な援助をいただき、これら諸氏・諸機関に深く感謝の意を表すものである。

昭和60年3月

財団法人古代學協會専務理事 角 田 文 衛
平安博物館館長兼教授

例 言

1. 本書は、昭和59年に(勅)古代學協會・平安博物館が(株)竹中工務店の委託を受けて実施した京都市下京区西洞院通塩小路上ル東塩小路町608番地の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆は、定森秀夫、植山茂、隴谷寿が分担し、瓦を植山、文献学的考察を隴谷、その他を定森が執筆した。また、動物骨に関しては当館非常勤嘱託・辻村純代氏、植物遺体に関しては大阪市立大学・粉川昭平教授、石帯・小玉の石材に関しては当館講師・上田健夫氏に鑑定していただいた。
3. 遺構・遺物の実測・トレースは、調査員・調査補助員・整理員が各々分担して行った。遺構写真は定森、遺物写真は当館の水口薫が撮影した。
4. 本書では、第1図を除いて、磁北を使用した。遺物実測図は原則として縮尺を $\frac{1}{2}$ とした。図版の遺物写真は縮尺不同であり、図版の遺物番号は挿図の番号と一致する。
5. 編集は定森が行った。

目 次

	頁
I. はじめに	1
1. 調査に至る経過と調査組織	1
2. 調査の経過	2
3. 位置と周辺の調査例	5
II. 層位	8
III. 遺構と出土遺物	15
1. 遺構の概要	15
2. 溝と出土遺物	15
3. 墓と出土遺物	53
4. 井戸と出土遺物	70
5. 土塙と出土遺物	93
6. 江戸時代の遺構	104
7. その他の遺構と遺物	113
IV. まとめ	130
1. 遺構・遺物のまとめ	130
2. 文献学的考察	132

図 版 目 次

- | | |
|---------------------------------------|----------------------|
| 図版第 1 遺跡(1) | 図版第32 井戸37(1) |
| 図版第 2 同上(2) | 図版第33 井戸37(2)・39 |
| 図版第 3 層位 | 図版第34 井戸38 |
| 図版第 4 溝29・24 | 図版第35 井戸42・46 |
| 図版第 5 溝29遺物出土状況(1) | 図版第36 井戸44 |
| 図版第 6 同 上 (2) | 図版第37 井戸1003・1004 |
| 図版第 7 埋壘 2・3・4(1) | 図版第38 土塋 1 |
| 図版第 8 同 上 (2) | 図版第39 土塋 8・116 |
| 図版第 9 埋壘 5 | 図版第40 土塋60・104 |
| 図版第10 埋壘 6 | 図版第41 溝21(1) |
| 図版第11 埋壘 7 | 図版第42 同上(2) |
| 図版第12 土塋88(1) | 図版第43 溝22 |
| 図版第13 同上 (2) | 図版第44 暗渠(1) |
| 図版第14 同上 (3) | 図版第45 同上(2) |
| 図版第15 同上 (4) | 図版第46 畝状遺構・石組溝 |
| 図版第16 土塋50・3 | 図版第47 埋壘 1・柵列・柱穴 |
| 図版第17 土塋10, 埋壘 2・3・4・5 と
土塋10の配置状況 | 図版第48 土師皿群 |
| 図版第18 井戸 4・8 | 図版第49 溝29出土遺物(1) |
| 図版第19 井戸 9・10A | 図版第50 同 上 (2) |
| 図版第20 井戸11・12 | 図版第51 同 上 (3) |
| 図版第21 井戸13・18 | 図版第52 同 上 (4) |
| 図版第22 井戸20 | 図版第53 同 上 (5) |
| 図版第23 井戸21・土塋114 | 図版第54 同 上 (6) |
| 図版第24 井戸22(1) | 図版第55 同 上 (7) |
| 図版第25 井戸22(2)・23 | 図版第56 埋壘 1・2 出土遺物 |
| 図版第26 井戸24・27 | 図版第57 埋壘 3・4 出土遺物 |
| 図版第27 井戸28・29 | 図版第58 埋壘 6・7 出土遺物 |
| 図版第28 井戸30・31 | 図版第59 土塋 3・井戸 4 出土遺物 |
| 図版第29 井戸32・33 | 図版第60 井戸12出土遺物 |
| 図版第30 井戸34・36(1) | 図版第61 土塋 1・2 出土遺物 |
| 図版第31 井戸36(2) | 図版第62 土塋 8・102出土遺物 |
| | 図版第63 七条大路の民家 |

挿 図 目 次

	頁		頁
第1図 調査地位置図	1	第30図 同 上 (4)	42
第2図 発掘区域とグリッド配置図	3	第31図 同 上 (5)	43
第3図 平安京条坊復原図	5	第32図 同 上 (6)	44
第4図 左京八条三坊二町周辺図	6	第33図 同 上 (7)	45
第5図 層位模式図	8	第34図 溝29出土土製品・石製品・ 骨製品実測図	46
第6図 I・III地区南壁断面図	9	第35図 溝29出土古銭拓影・一覧	47
第7図 I・II・IV地区西壁断面図	10・11	第36図 溝24実測図	49
第8図 包含層出土古銭拓影・一覧	12	第37図 溝24出土遺物実測図(1)	50
第9図 遺構全体図	13・14	第38図 同 上 (2)	51
第10図 溝29実測図	15	第39図 溝24出土古銭拓影・一覧	52
第11図 溝29層位断面図	17	第40図 溝23出土遺物実測図	53
第12図 溝29最下砂層出土遺物実測図	19	第41図 墓分布図	54
第13図 溝29緑色砂層 出土遺物実測図(1)	20	第42図 埋甕2・3・4実測図	56
第14図 同 上 (2)	21	第43図 埋甕2出土遺物実測図	57
第15図 溝29暗灰色粘質土層 出土遺物実測図(1)	23	第44図 埋甕2出土古銭拓影・一覧	57
第16図 同 上 (2)	24	第45図 埋甕3出土遺物実測図	58
第17図 同 上 (3)	25	第46図 埋甕3出土古銭拓影・一覧	58
第18図 同 上 (4)	26	第47図 埋甕4出土遺物実測図	59
第19図 同 上 (5)	27	第48図 埋甕4出土古銭拓影・一覧	59
第20図 同 上 (6)	28	第49図 埋甕5・6・7実測図	60
第21図 同 上 (7)	29	第50図 埋甕5出土遺物実測図	61
第22図 同 上 (8)	32	第51図 埋甕5出土古銭拓影・一覧	61
第23図 同 上 (9)	33	第52図 埋甕6出土遺物実測図	62
第24図 同 上 (10)	34	第53図 埋甕7出土遺物実測図	63
第25図 同 上 (11)	35	第54図 埋甕7出土古銭拓影・一覧	63
第26図 溝29黄褐色砂層 出土遺物実測図	37	第55図 土塙42出土遺物実測図	64
第27図 溝29暗灰緑色砂質土層 出土遺物実測図(1)	39	第56図 土塙42出土古銭拓影・一覧	64
第28図 同 上 (2)	40	第57図 土塙3・10・50実測図	65
第29図 同 上 (3)	41	第58図 土塙88実測図	66・67
		第59図 土塙88出土古銭拓影・一覧	66
		第60図 土塙3出土遺物実測図	68
		第61図 井戸分布図	71・72

第62図	井戸出土古銭拓影・一覧……………74	第91図	同上(2)……………101
第63図	素掘曲物式井戸実測図……………74	第92図	同上(3)……………102
第64図	井戸8出土遺物実測図……………75	第93図	土塙102出土遺物実測図……………103
第65図	方形横板式井戸実測図……………75	第94図	土塙104出土遺物実測図……………103
第66図	方形木組式井戸実測図……………76	第95図	土塙1015出土遺物実測図……………104
第67図	方形隅柱横棧式井戸実測図……………76	第96図	江戸時代遺構全体図……………105・106
第68図	方形横棧式井戸実測図(1)……………77	第97図	石組溝実測図……………108
第69図	同上(2)……………78	第98図	溝21実測図……………109・110
第70図	同上(3)……………79	第99図	溝22実測図……………111
第71図	井戸4出土遺物実測図……………81	第100図	暗渠実測図……………112
第72図	井戸9出土遺物実測図(1)……………83	第101図	埋甕1実測図……………113
第73図	同上(2)……………84	第102図	埋甕1出土遺物実測図……………114
第74図	井戸12出土遺物実測図(1)……………85	第103図	土師皿群出土遺物実測図(1)……………115
第75図	同上(2)……………86	第104図	同上(2)……………116
第76図	井戸24出土遺物実測図・写真……………87	第105図	柵列実測図……………117
第77図	井戸36出土遺物実測図……………88	第106図	発掘区出土瓦実測図(1)……………118
第78図	多角形竪板側式井戸実測図(1)……………89	第107図	同上(2)……………119
第79図	同上(2)……………90	第108図	同上(3)……………120
第80図	石組側式井戸実測図……………91	第109図	同上(4)……………122
第81図	漆喰側式井戸実測図……………91	第110図	同上(5)……………123
第82図	土塙出土古銭拓影・一覧……………92	第111図	同上(6)……………124
第83図	土塙1出土遺物実測図(1)……………93	第112図	同上(7)……………125
第84図	同上(2)……………94	第113図	同上(8)……………126
第85図	土塙2出土遺物実測図……………95	第114図	同上(9)……………127
第86図	土塙8出土遺物実測図(1)……………96	第115図	同上(10)……………128
第87図	同上(2)……………97	第116図	平安時代後期から 鎌倉時代にかけての居住者図……………133
第88図	土塙18出土遺物実測図……………98	第117図	鎌倉時代初期の火災図……………136
第89図	土塙60遺物出土状況実測図……………99	第118図	江戸時代の調査地周辺図……………138
第90図	土塙60出土塼拓影(1)……………100		

表 目 次

第1表	井戸一覧表……………73
-----	--------------

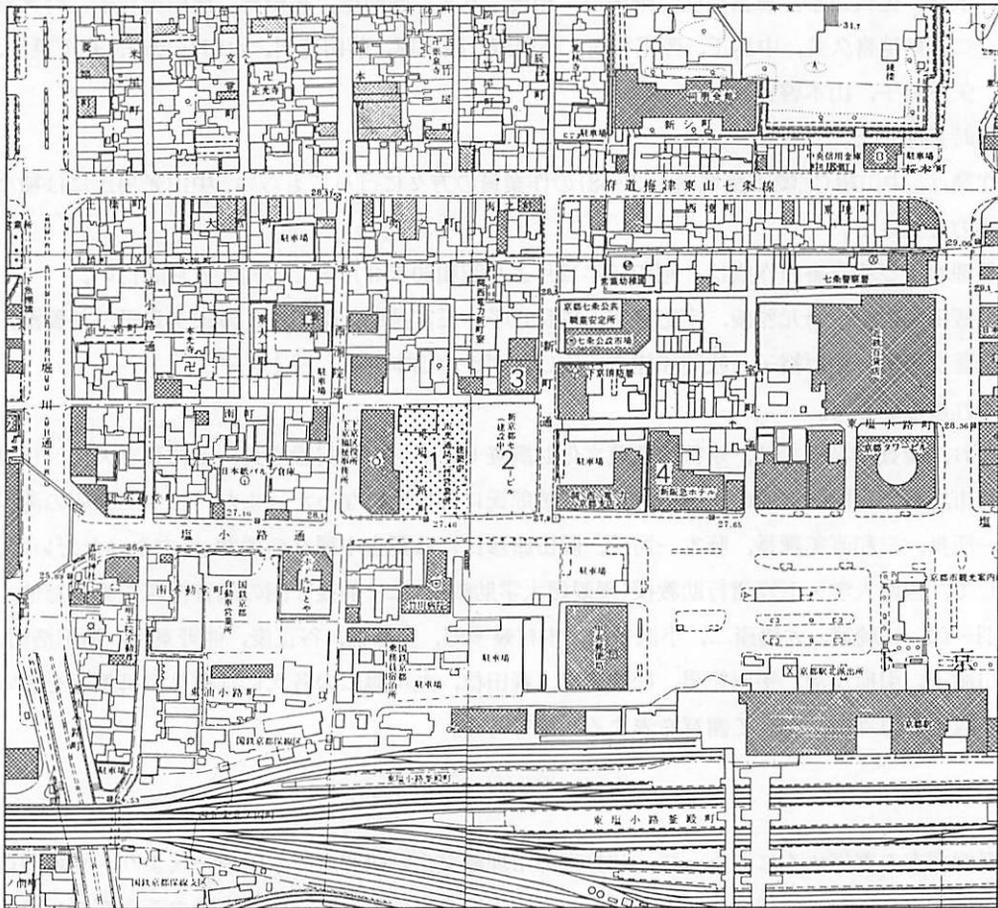
I. はじめに

1. 調査に至る経過と調査組織

調査の発端は、日本生命保険相互会社が、京都駅前に所在する旧市交通局三哲営業所敷地(京都市下京区西洞院通塩小路上ル東塩小路町608番地)内に、日本生命京都駅前第2ビルを新築する計画をたて、昭和59年末に着工する予定であったことによる。

昭和59年5月、京都市埋蔵文化財調査センターを介して、施行業者である(株)竹中工務店より、当平安博物館調査部に発掘調査の依頼があった。該地は、当館が昭和54年から55年にかけて発掘調査を行った新京都センタービルの西隣りの地でもあり、この発掘調査を引き受けることにした。

新ビルは南北に『コ』の字形をなす計画であったので、その部分のみの調査を行うこととした。



第1図 調査地位置図(縮尺:1/5,000) 1.平安博物館昭和59年調査地点, 2.同昭和54・55年調査地点, 3.京都市埋蔵文化財研究所昭和52・53年調査地点, 4.同53年調査地点

2 1. 調査に至る経過と調査組織

しかし、北側の「一」にあたる部分では、その西側に建物がたっていたために、この部分に関しては、建物解体後、包含層・遺構の残存状況を見極めたうえで、京都市埋蔵文化財調査センターが発掘調査の必要性の有無を指導するという事で合意に達した。まず、建物を含めた北側を除いて、調査を行うことにし、昭和59年6月29日に竹中工務店と依頼契約書を取り交わした。そして、建物を含んだ北側に関しては、建物部分は完全に破壊を受けていたが、その東側部分では江戸時代の包含層以下が残存していることが判明した。このため、京都市埋蔵文化財調査センターの指導により追加調査としてこの部分の発掘調査を行うことになり、調査中の10月19日に依頼契約書を取り交わした。

実際の発掘調査は、7月20日より11月22日までの約4ヶ月間を要した。

調査は、平安博物館調査部・定森秀夫を調査主任とし、片岡肇、隼谷寿が加わり、統括は片岡(調査部長)が行った。

そして、調査補助員として、

石黒朋子、池上元子、上杉英世、宇野克実、緒方泉、勝浩伸、片野坂春友、清滝龍、坂田孝彦、佐長正子、三宮昌弘、柴田悟、相馬ふみえ、園田稔、高橋潔、津田美貴子、時元省二、鳥越喜久美、中島正、西尾智樹、朴賢淑、藤平寧、前田達男、水口好志子、森下英治、矢原路子、山本啓貴

が随時参加した。

作業は、中山組(尼崎市築地南浜3-58)の作業員の方々に行ってもらい、中山光男氏には種々の協力を受けた。

整理および報告書の作成は、昭和59年12月より昭和60年3月までの約4ヶ月間行い、

飯田美佐子、岩元雅毅、宇野克実、佐長正子、三宮昌弘、柴田悟、津田美貴子、朴賢淑、藤友陽子、船戸裕子、牧岡和佳奈、山口あずさ、山本啓貴、脇上礼子

がこれに参加した。

なお、調査に当っては、京都市埋蔵文化財調査センターの浪貝毅所長、玉村登志夫氏、(財)京都市埋蔵文化財研究所の永田信一氏、巽敏郎氏に御世話になった。また、竹中工務店の滝川義一所長、三和直美課長、藤本一司氏、藤田康彦氏には調査中種々の援助・協力をいただいた。そして、西南大学・下條信行助教授(現愛媛大学助教授)には前後2回の調査指導を受けた他、赤羽一郎、江崎武、大橋康二、小沢一弘、木村幾多郎、佐藤信、谷正俊、仲野泰裕、鳴田浩司、西口順子、引原茂治、平出紀男、松井忠春、森田稔、丸川義広の各氏には種々の御教示を頂いた。以上の方々に、記して謝意を表する次第である。

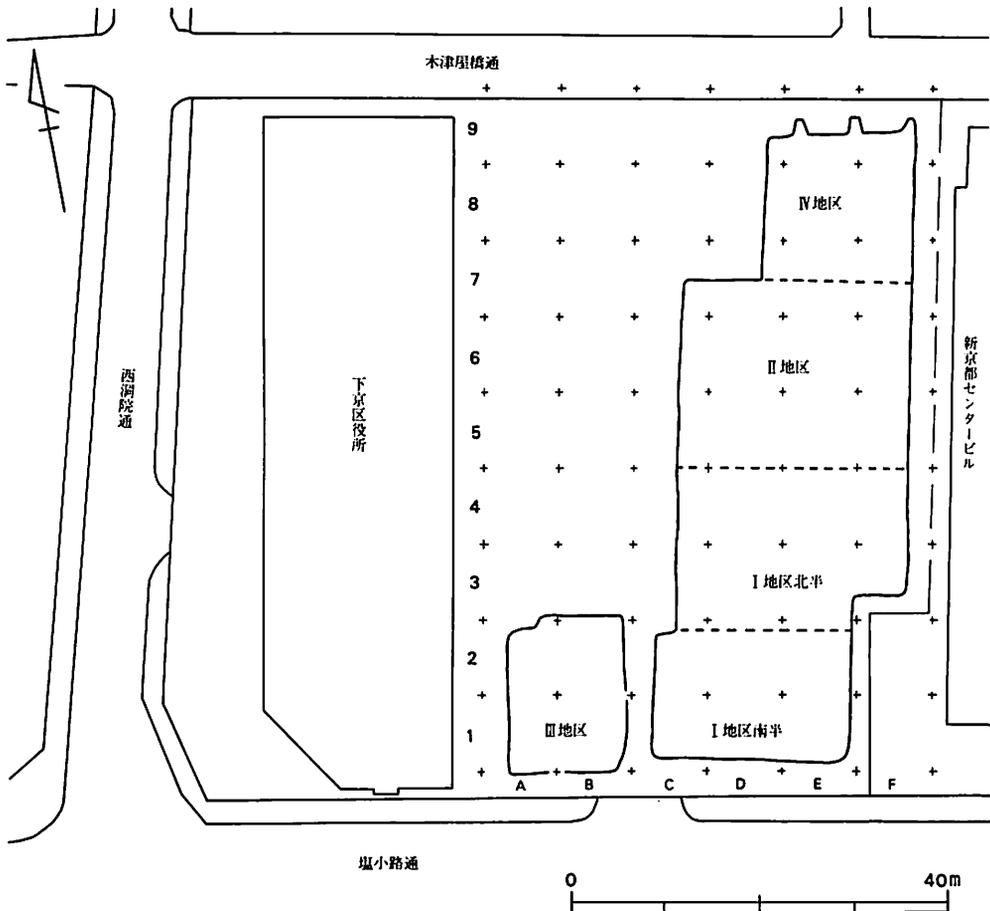
2. 調査の経過(図版第1・2)

発掘調査を実施するにあたって、(財)京都市埋蔵文化財研究所の永田信一氏より、当地周辺の発掘・立会調査等の状況説明を受け、一方、当地西隣の下京区役所、東隣の新京都センタービル、塩小路通を隔てた武田病院それぞれの屋上より、現状の写真撮影を行った。

昭和59年7月20日に器材等の搬入を行ったが、前日よりのアスファルト除去作業によって、その下にさらにコンクリート敷や地下埋設物がかなり存在することが確認され、重機による盛土掘削排土は難行することが予想された。

翌日より、グリッドの設定に入り、第2図のようなグリッドを組んだ。グリッドは、調査対象地の西南隅に原点を決め、南北線を下京区役所建物ラインと平行するようにした。各グリッドは8m四方で、この原点より東側へはA, B, C……の順、北側へは1, 2, 3……の順とし、各区はその組み合わせでA1, A2……と呼称することにした。

実際の発掘区域は、建築予定のビルディングが『コ』の字状になるので、それにそった形で設定することにした。そして、排土置き場や作業工程の都合により、I地区(これは南半と北半に分ける)、II地区、III地区、それに調査対象地北西隅の建物解体が終了した時点で、包含層の残存状況を見て調査するか否かを定めるIV地区の4地区に大きく分けて作業を行うことにした。作業は、基本的にはI→II→III→IV地区の順に行うこととしたが、実際には各地区の作業は重複して行われた。



第2図 発掘区域とグリッド配置図 (縮尺: 1/800)

4 1. 調査に至る経過と調査組織

重機による盛土排土は、地下埋設物等の除去と併行して、まず南側の1ラインから5ラインまで一気に行うこととしたが、このI地区の盛土排土は、前述の予想どおり約10日間を要した。実際の発掘作業は、この間南の方から順次行い始め、3ラインにおいてほぼ東西に連なる江戸時代の木柵溝(溝21)を検出した。I地区は広いため便宜的に、この木柵溝を境として南半と北半に分けることにした。なお、北半のほぼ中央付近では5.0×6.5mの長方形に燃料タンクが埋設されていて、この部分は地山以下まで破壊されていた。

I地区南半の主な遺構としては、近代では漆喰井戸2基、江戸時代では畝数条、鎌倉時代では埋壔6基の他に井戸・土塋等、平安時代では井戸・土塋等を検出したが、全体に遺構の分布密度は粗く、このI地区南半の調査は9月7日に終了した。

I地区北半は南半の作業と併行して行っていたが、主な遺構としては、江戸時代では木柵溝(溝21)にほぼ直交する南北方向の木柵溝(溝22)、鎌倉時代では井戸・土塋等、平安時代ではほぼ東から西へ流れる大溝(溝24)を検出した。こゝも南半と同様遺構の分布密度は粗い方ではあったが、南半に比べるとやや密になっていて、作業は9月17日に終了した。

なお、I地区の調査中に、II地区、IV地区(前述のように、建物のあった部分は基礎によって完全に破壊されていたため、その東側部のみを対象に別途契約による追加調査の形をとった)の盛土を重機で排土する作業も行ったが、II地区の中央部は地山の黄褐色砂礫層まで攪乱を受けていた。

II地区においては、江戸時代のある時点での畑の畝状遺構をかなり明瞭に確認することができ、その他に木柵溝(溝22)の北への続き、I地区では検出されなかった石組溝、暗渠等を検出した。鎌倉時代では、井戸・土塋等が錯綜としており、特に溝29の上部周辺に密集する形となっていた。その他の遺構としては平安時代末の埋壔1基、鎌倉時代と思われる木棺墓1基の墓を検出した。これらの平安時代末から鎌倉時代の包含層・遺構を完掘した後、10月中旬より平安時代の大溝(溝29)の調査に入った。この溝は東隣の新京都センタービル地で検出された溝につながるもので、重点的な調査を行う予定にしていた遺構であった。特に、溝内埋土の暗灰色粘質土中から自然木、木製品、植物遺体、動物骨等が多数出土したことから、調査に約20日間ほどを要した。

III地区の調査は、10月初旬より開始した。主な遺構としては、近代では漆喰井戸2基、江戸時代では木柵溝(溝21)の西への続きの他、I地区南半では検出されなかった暗渠、鎌倉時代では井戸・土塋の他に柵列、平安時代では溝24の西への続きを検出し、11月8日に終了した。

IV地区は、別途契約直後の10月20日に本格的に開始したが、江戸時代の畝状遺構・石組溝の調査はII地区の調査に併行してすでに行っておいた。このIV地区では、江戸時代の包含層をとると、すぐ砂層になる部分が多く、平安・鎌倉時代の包含層はほとんど存在していなかった。主な遺構としては平安・鎌倉時代の土塋多数、井戸の他、平安時代の溝(溝29)の東への続きを検出した。

なお、IV地区北辺で塩小路南側側溝が検出される可能性があったので、第2図のように3つ

の小トレンチを可能な限り北へのぼしたが、地山まで完全に攪乱されていて、確認することはできなかった。

以上の各地区の調査面積は、I地区南半が約280㎡、I地区北半が約400㎡、II地区が約480㎡、III地区が約200㎡、IV地区が約250㎡で、合計約1600㎡強であった。

すべての現場作業は11月22日に終了し、残務整理を行った後、11月30日に撤収を行った。

3. 位置と周辺の調査例(第1～4図)

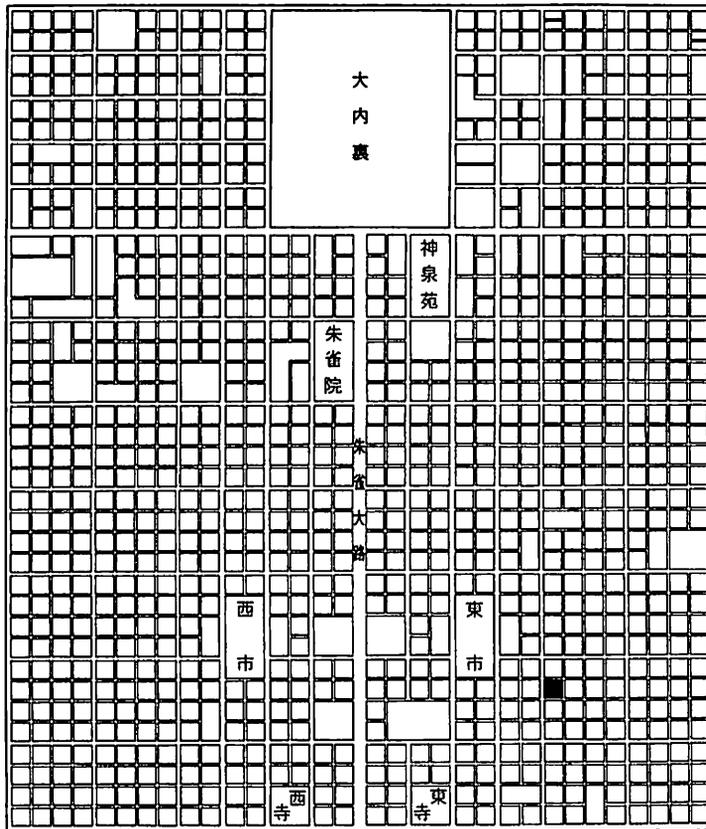
本遺跡は、京都駅北側の塩小路通を西行し、西洞院通と交わるころの東北角、下京区役所の東側に位置している。また、ここは東本願寺の南方にあたる。現行政区画名は、京都市下京区西洞院通塩小路上ル東塩小路町608番地であり、平安京の条坊制で言えば、左京八条三坊二町にあたる。

本遺跡で設定したグリッド原点(第2図の西南隅)の第IV座標系数値は、以下のとおりである。

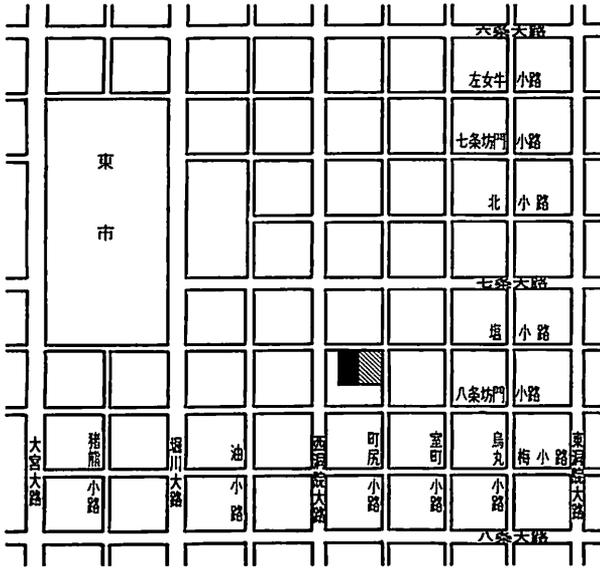
$$X = -112668.27m$$

$$Y = -22048.83m$$

本遺跡周辺の調査例をみると、左京八条三坊二町内(周囲の大路・小路を含めて)の調査



第3図 平安京条坊復原図(黒印が左京八条三坊二町)



第4図 左京八条三坊二町周辺図（黒印が調査地点，斜線部は昭和54・55年調査地点）

では、これまでに京都市埋蔵文化財研究所によって10地点で立会・発掘が行われており、当平安博物館も当地の東隣の新京都センタービル地を発掘している。なお、当館が発掘調査した新京都センタービル地の調査を第1次調査とし、今回の調査を第2次調査とすることにした。

当館が昭和54年から55年にかけて行った新京都センタービル地の第1次調査では、平安時代の溝が検出され、各種土器類の他に、土馬・墨書人面土器等祭祀関係の遺物も出土している。今回の調査でも、この溝の西への続きが検出されることが当然

予測された。その他に、平安～室町時代にわたる井戸・土壇多数の他、墓と思われるものも若干確認されていて、江戸時代の畝状遺構も検出されている。遺構の分布密度は、発掘区域の南北で言えば北側、東西で言えば東側の方に各種遺構が密集しているような状況を示している。遺物で注意されるのは、平安時代末～鎌倉時代前期の刀装金具鋳型が多数出土していることで、工房址の存在を推測させるものである¹⁾。なお、この調査より先に、新京都センタービル地の南東部に関しては、昭和52年に京都市埋蔵文化財研究所が立会調査を行っていて、その際、鎌倉時代に属する甕を入れた土壇3基を確認している²⁾。

その他、京都市埋蔵文化財研究所が、昭和51年、塩小路通南側の当時の下京区役所地を調査し、八条坊門小路北側側溝(推定)を検出している³⁾。この八条坊門小路側溝は、同研究所による昭和53・54年の京都駅前地下街建設に伴う発掘調査でも確認された。昭和53年には、当地の西側の現下京区役所南側を調査していて、江戸時代の西洞院川を検出し、また同時代の暗渠等も検出している⁴⁾。

さらに、この左京八条三坊二町より枠を広げると、烏丸線遺跡調査会・京都市埋蔵文化財研究所が立会・発掘調査をかなり行っている。

昭和53年に、京都市埋蔵文化財研究所が新阪急ホテル地の左京八条三坊七町の発掘を行っていて、この調査では、平安時代の南北に走る大溝を検出し、そこから各種土器類等が多量に出土した。鎌倉時代後半から室町時代では、鑄造遺構が検出され、遺物中には銭の鋳型が含まれていた。また、鉢や鍋、大甕を用いたり、集石遺構の形をとる墓が多数検出されている⁵⁾。

昭和54年には、京都第3タワーホテル地の左京八条三坊一町の発掘調査が同じく京都市埋蔵文化財研究所によって行われている。平安時代では、井戸や掘立柱建物の一部が検出され、鎌

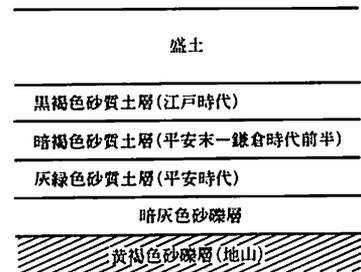
倉時代前半では、埴埴・鋳型等が出土していて、生産跡の推定がなされている。そして、鎌倉時代後半から室町時代の墓が40基前後検出されている⁶⁾。

以上のように、当地周辺においてはかなりの調査が行われている。今回の調査で、左京八条三坊の歴史的変遷に関するこれまでの調査成果に、また一つの知見を追加しえたものと思う。

II. 層位(第5～7図, 図版第3)

調査対象地の現地表面高(アスファルト面)は28.00m前後であるが、当地が市バス車庫であったため、出入口である塩小路通に面した南の方, 2ラインより北約2mほどのところから徐々に低くなる。最南端では27.60mを測り、歩道をへて塩小路通の27.56mにつながる。

南北に長い一連のⅠ・Ⅱ・Ⅳ地区では南壁・東壁・西壁と中央部断面としてⅠ地区北半北壁(5ライン)の層位図をとり、またⅢ地区では南壁と西壁の層位図をとったが、これら全体を総合してみると、第5図のような基本層位が得られる。上から順に、盛土層、黒褐色砂質土層、暗褐色砂質土層、灰緑色砂質土層、灰色砂礫層で、最後に地山の黄褐色砂礫層に至る。新京都市センタービル地での土層と対応させると、黒褐色砂質土層は耕土層に、暗褐色砂質土層は褐色土層に、灰緑色砂質土層は灰色砂質土層にそれぞれ相当するであろう。

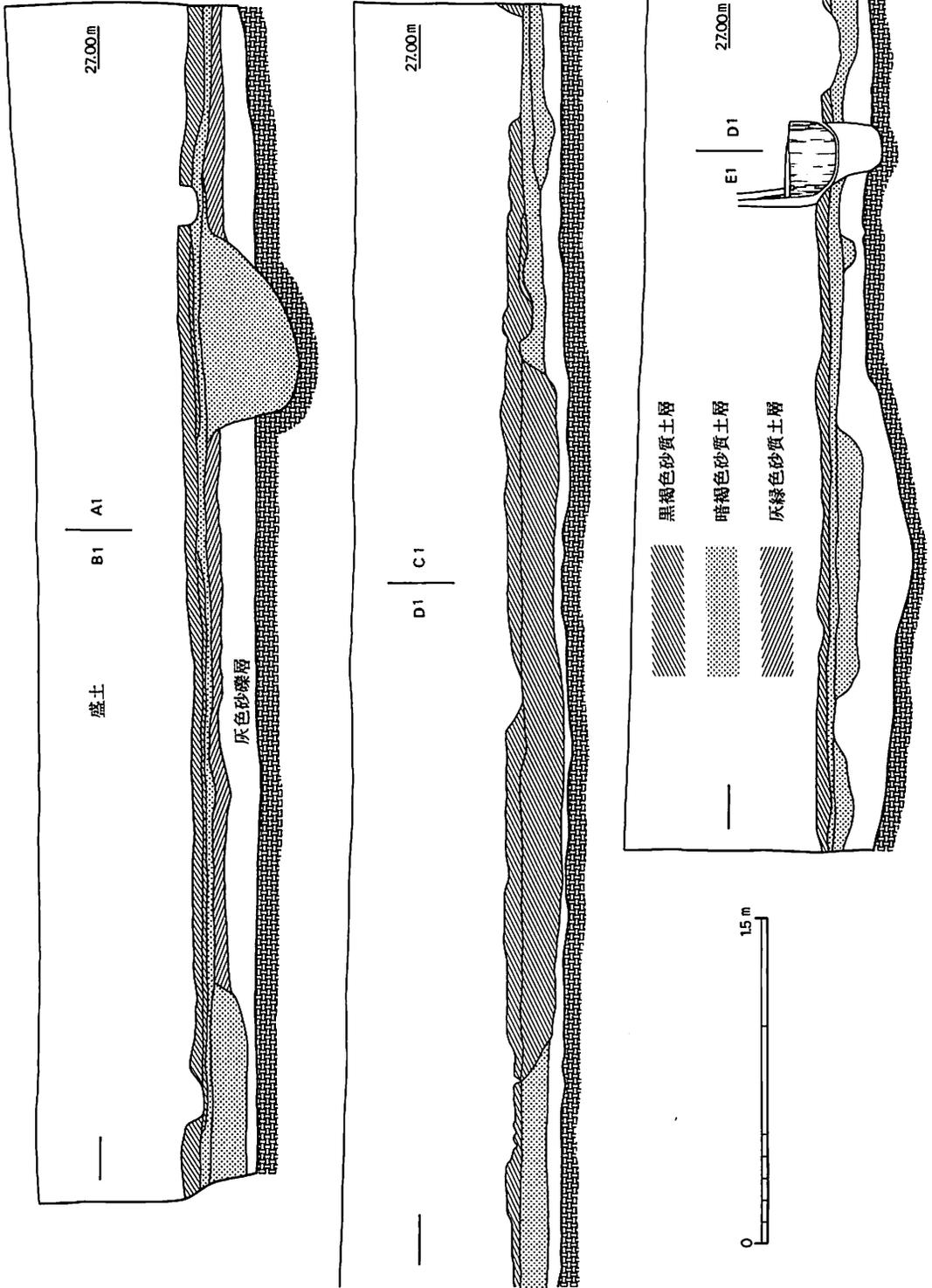


第5図 層位模式図

盛土層は、アスファルトまで含めて、厚さ1.5～1.6mで、近世、近・現代の攪乱等が入り乱れている。

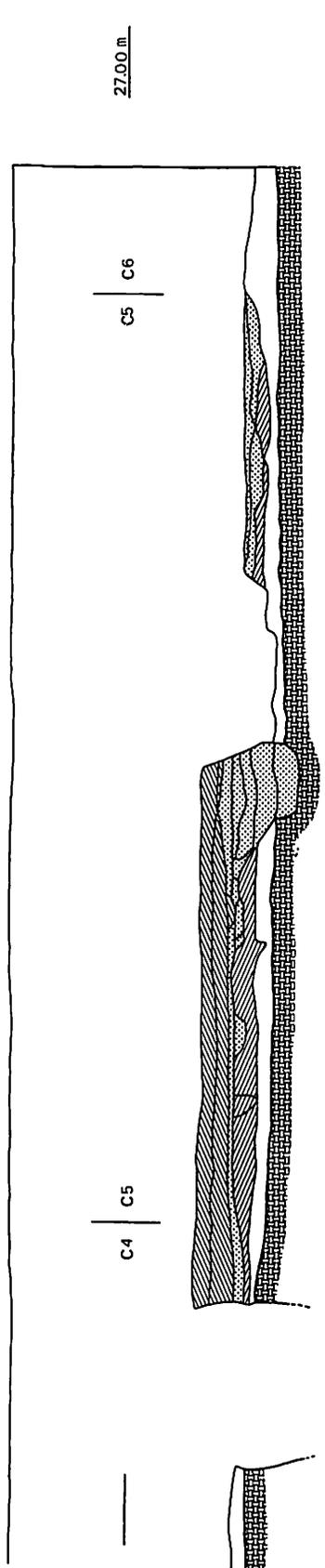
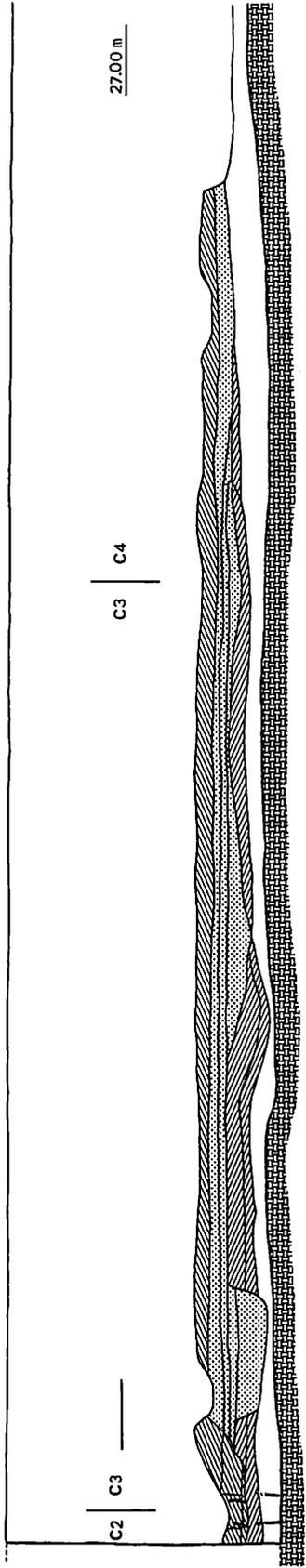
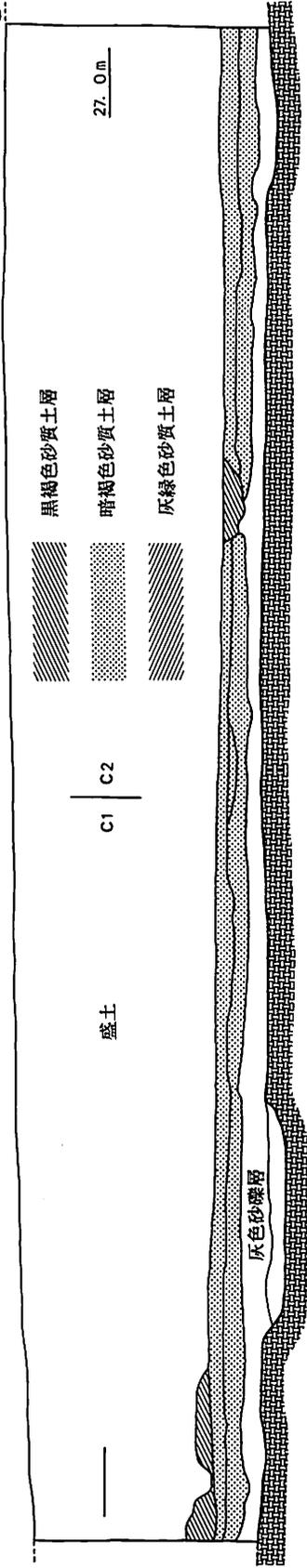
黒褐色砂質土層は江戸時代の耕作土層で、発掘区域全面に存在し、土質はサクサクとして軟いが、一部粘性を有するところもある。厚さとしては平均20cmほどのものである。下面レベルをみると、僅少な差ではあるが、溝21と溝22によってそれが3分されることが分かる(第96図参照)。溝21より北・溝22より東の区画では26.30m前後、溝21より北・溝22より西の区画では26.20m前後、溝21より南の区画では26.10m前後を示す。このように各区画は約10cmほどの段差になり、明らかに整地されたことを示している。また各区画内では多少の凹凸はみられるものの、北から南へ、東から西へ若干低くなる傾向がみられる。このことは、導水・排水等の関係で、南と西の方へ低くしていくという整地の際の意図があったものと考えられる。新京都市センタービル地でも発掘区域のほぼ中央で、南北に連なる杭によって区画し、西側の方が東側より30～40cm低くなっていて、段落ちが確認されている。

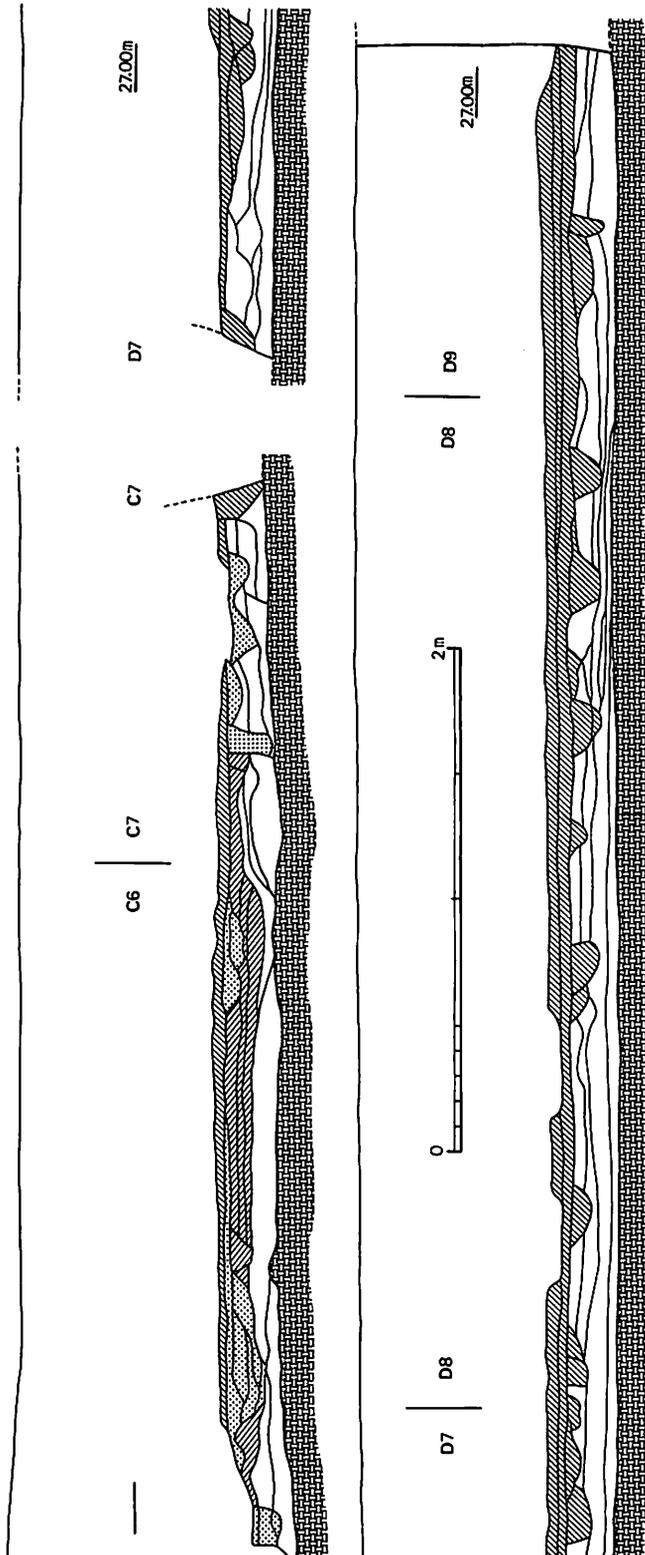
暗褐色砂質土層は、小礫を含み、わりと締った土層である。この層は発掘区全域にほぼ存在するが、Ⅳ地区の大半(主に北西部)では認められなかった。下面レベルは、北の方で26.20m、南の方で25.80mで、北から南へ向かって低くなっている。この層の厚さは、北側では5～10cmと薄いですが、南側に行くにしたがい厚くなり、20～30cmほどになる。このことは、江戸時代の整地の際にほぼ水平となるように削平されたためと考えられる。新京都市センタービル地でも、この層は北にいくほど薄くなることが認められていて、厚さは北の方で28～36cm、南の方で40～50cmとなっている。ところで、当地ではこの層の厚さが新京都市センタービル地の半分か半分以下となっていて、江戸時代にかなり削平されたことを示唆している。このため、新京都市センター



第 6 图 I · III 地区南壁断面图 (縮尺 : 1/60)

10:



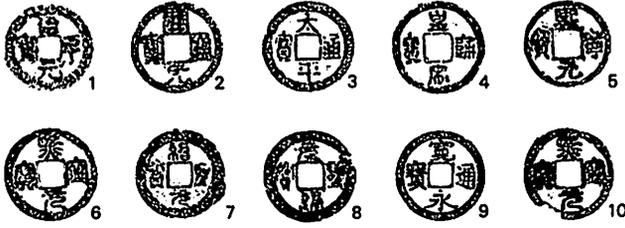


第7図 I・II・IV地区西壁断面図 (縮尺: 1/60)

ビル地ではこの層の上半が南北朝から室町時代、下半は平安時代末から鎌倉時代に併行することが確認されていたが、当地ではこの上半がほぼ削平されていると考えられることになる。実際にこの層からは、南北朝から室町時代の遺物は出土していない。

灰緑色砂質土層は、緑色がやや強く、かなり固く締っている土層で、礫はあまり含まない。この層は全域にわたって認められるものではなく、I地区南半・IV地区では認められず、I地区北半・II地区・III地区で部分的に認めることができる。溝24の埋土や、溝29の上層である暗灰緑色砂質土層は、この層に近い。厚さはまちまちであったが、10~20cm前後であった。平安時代後期(11~12世紀)に相当するものと思われる。

灰色砂礫層は、汚れていて、地山層とは認め難かった。発掘区域の全域にほぼ認められるが、II地区北側からIV地区南側で消失してしまう。それ以北では、地山の上に砂層(無遺物層で、平安京創設以前の自然流路の可能性はある。これは、溝29にほぼ平行していて、グリッド横軸に対してやや斜めになっている)が載って



	古銭名	初 鑄 (西 曆)	出 土 層
1	治平元宝	治平元年 (1064)	E1 暗褐色砂質
2	開元通宝	武徳四年 (621)	E2 暗褐色砂質
3	太平通宝	太平興国元年 (976)	” ”
4	皇宋通宝	宝元二年 (1039)	” ”
5	熙寧元宝	熙寧元年 (1068)	” ”
6	”	” (”)	” ”
7	紹聖元宝	紹聖年間 (1094~1097)	” ”
8	元口通宝		” ”
9	寛永通宝	寛永二年 (1625)	C1 黒褐色砂質
10	熙寧元宝	熙寧元年 (1068)	表採

第 8 図 包含層出土古銭拓影・一覧 (縮尺: 1/2)

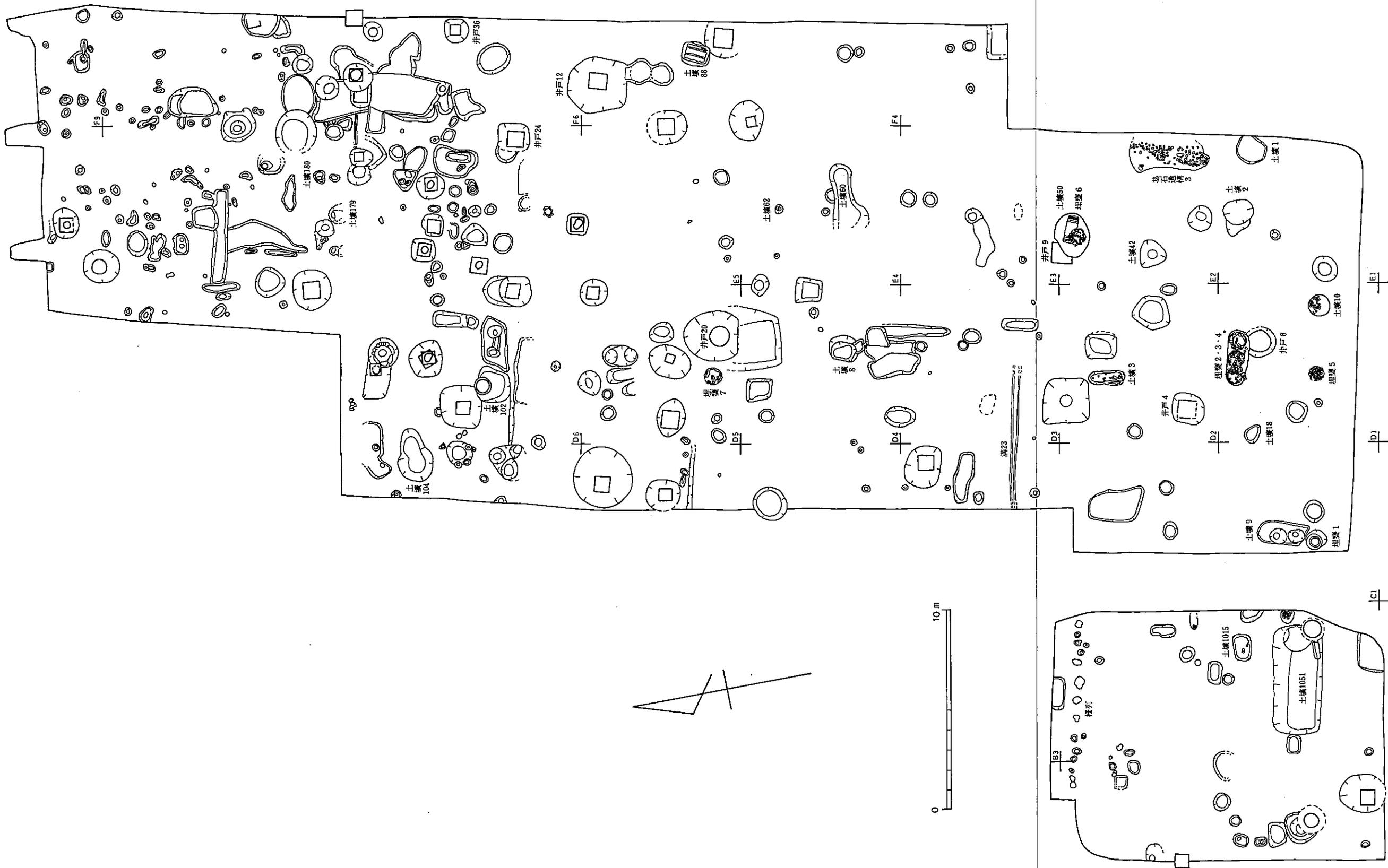
知見とさほど変わるものではなかった。

なお、包含層出土古銭を第 8 図に掲げておいた。

いる。この灰色砂礫層は遺物をほとんど含まず、年代は与え難いが、灰緑色砂質土層・溝24・溝29の形成以前となる。

地山は黄褐色砂礫層であるが、明灰色砂礫の部分もある。この地山の上面レベルは、多少の凹凸はあるものの、北側で25.90m、南側で、25.60~25.70mとなり、南に行くにしたがい低くなっている。東西方向は、それほど顕著なレベル差は認められなかった。

以上、黒褐色砂質土層を除いて、各層は全体に南の方に傾斜しており、層位の基本に関しては、第1次調査の新京都センタービル地の



第9図 遺構全体図(縮尺:1/200) 溝24・29と江戸時代遺構は省く

III. 遺構と出土遺物

1. 遺構の概要(第9図)

今回の第2次調査でも、第1次調査と同様、各種の遺構が検出されている。しかし、遺構の分布密度で言えば、第1次調査時の新京都センタービル地より薄い傾向が認められる。

遺構の大略は前章の『調査の経過』で略述しておいたが、簡単に再述すれば、以下の通りとなる。平安時代では溝3条、井戸・土壇等、鎌倉時代では大甕を使用した墓の他、井戸・土壇等を検出した。今回の調査では、この平安時代から鎌倉時代の遺構がほとんどであって、室町時代から桃山時代の遺構は数えるほどしかない。また、江戸時代では、畝状遺構、溝、暗渠を検出した。

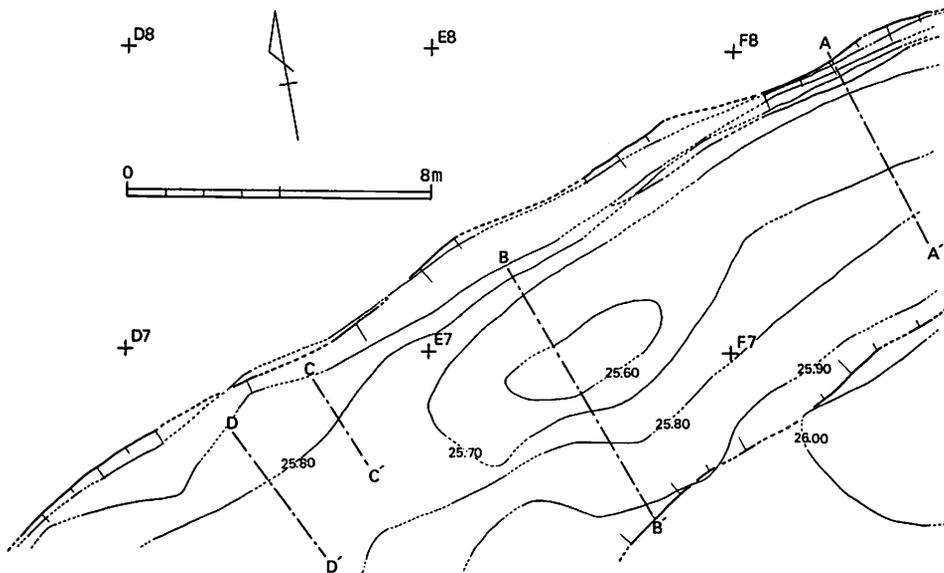
第9図は平安時代から室町時代の遺構全体図である。平安時代の溝である溝29・24は、それぞれ第10・36図に示すことにし、墓と井戸の分布図は、それぞれ第41・61図に示した。また、江戸時代の遺構全体図は第96図に示した。

2. 溝と出土遺物

1) 溝29と出土遺物

(1) 遺構(第10・11図, 図版第4上・5・6)

この溝29は、東隣の新京都センタービル建設に伴う第1次調査の際に検出された大溝の西への続きである。発掘区の北方、7ラインに対して約30度の角度で交わり、ほぼ東から西にかけ



第10図 溝29実測図 (縮尺: 1/200)

て全長約26mほどを検出した。そのうち、南西部分の一部は近代の攪乱によって破壊されていた。また、この溝29は、上方より平安時代末から鎌倉時代の土壌・井戸が錯綜として掘り込まれていて、破壊を受けた部分が多かった。このようになりかなり破壊された状況にはあったが、その全体像を把握するには支障はなかった。

溝の幅は、東側で7.3m、西側の残存部で9.3mを測る。西に行くにしたがって幅が若干広くなる傾向はあるが、平均幅8.3m前後のものであろう。新京都センタービル地では、東側で2条の小溝が合流して1条の大溝になり、その合流点で幅11mを測る。そして、西に行くにしたがって幅を減じ、7～8mと狭くなっていくので、ほぼその幅で、この溝29の東側につながるものと考えられる。

溝の上場は、北側(右岸)ではほぼ26.00～26.10mを測る。この右岸の東側部分ではそこからかなり急激に落ち込んでいて、下場を確認できたが、西に行くにしたがってその下場は明瞭でなくなり、なだらかに下っていく。南側(左岸)の上場は、ほぼ25.90～26.00mの間にあるようで、なだらかに下っていき、明瞭に上場・下場を認め難い点があった。この点は、新京都センタービル地での知見でも認められるところであった。

さらに、この溝の東側において等高線が北側(右岸)において密であることは、新京都センタービル地の調査報告書で指摘されているように、水の流れが溝の右岸を洗って流れていたと考えて良い状況証拠の一つとなろう。

溝の深さは、全体を通してみると、東側(深約40cm)から中央部(深約50cm)にかけて徐々に深くなっていき、中央部より西の方へは高くなっている(深25cm前後)。このように、検出した溝のほぼ中央部で、最も深くなっていることが確認できた。そこでは25.70mの等高線が東から西へ抜けることなく、東へ逆回りし、25.60mの等高線が独立して存在する。また、これより西に行くと北側(右岸)でも等高線の間隔が粗くなり、一方、25.80mの等高線が西側のところで括れるような状況を呈している。このような状況は、流れに『淀み』があったことを示していると考えられる。後述するが、ここに暗灰色粘質土が厚く堆積し、西へ行くにしたがってその土層が薄くなっていくことも、『淀み』の状況を説明するものであろう。

溝内埋土の堆積状況に関しては、第11図のように東側で2本の断面図を作成したが、西側ではこの東側の堆積状況と若干異なるようであったため、溝調査中に急拠、畔を設定し、2本の断面図をとった。

溝内層位は、前述したように東側と西側で、また場所によって若干ずつ異なるようであったが、基本的には三層に分かれるようである。その上層は暗灰緑色砂質土層(東側では暗青灰色砂質土〔粘質土〕層となる)、中層は暗灰色粘質土層、下層は緑色砂層(最下砂層)と分離することができる。

下層の緑色砂層(最下砂層)は、主に溝の西側に多く堆積していて、厚さは10～20cmである。この層は東側に行くと、緑色ではなく、灰色ないし黄褐色の色調を呈する部分がある。また、一部地山の黄褐色砂礫層の礫等を含んでいることもある。新京都センタービル地では、この層

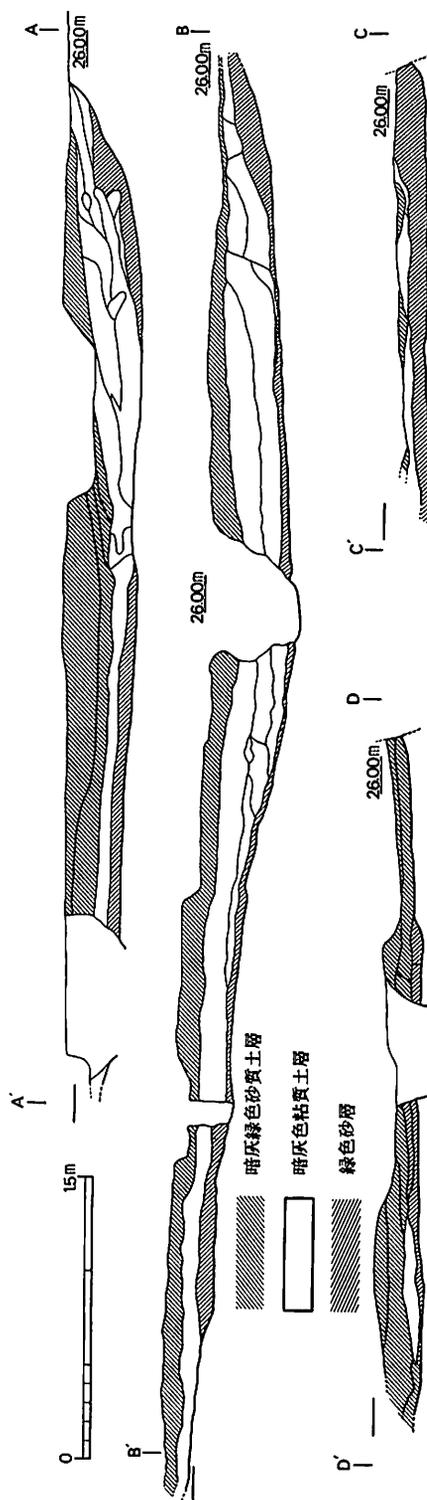
はなかったようである。

中層の暗灰色粘質土層は、新京都センタービル地での溝最下層の同様の名称の層と対応するもので、東側では厚さ10~20cm、中央の淀み部分では10cmから厚いところで30cm弱堆積している。そして、そこから西に行くにしたがって厚さ5~10cmと薄くなり、また部分的な広がりとなる。この層からは、土器類の他、多量の自然木を含めて、木筒・人形・櫛・下駄・沓等の木製品、そして植物遺体や動物骨が出土している。

上層の暗灰緑色砂質土層は、新京都センタービル地での黄灰色砂質土層に相当すると思われる。中央部では厚さ10cm前後である。東側では色調が異なり、暗青灰色を呈していて、厚さは10~20cmである。また、この層の下部は粘性があり、畔断面では分離が可能ではあったが、暗灰色粘質土層と色調において明瞭に区別されたので、この層と同一と考えた。

以上のような堆積状況を大略示すわけであるが、溝の北側(右岸)付近での堆積は、中層の暗灰色粘質土層に対応する部分が土質や色調を異にし、かつ複雑な様相を呈していて、やや特殊な状況をみせている。これは黄褐色砂層としてとらえた。このことも、前述したように、流れが北側(右岸)を洗って流れていたことを示す状況証拠になろうかと思われる。

この溝29の有する性格に関しては、新京都センタービル地の第1次調査報告書で指摘されているように、人工掘削による溝ではなく、自然流路であり、その流れは遅いものであったと思われる。また、これが河川として認識されていたという指摘も、今回の調査で緑色砂層(最下砂層)と暗灰色粘質土層から土馬・木製人形などが出土していることから追認しうるが、ただ今回は墨書人面土器が1点も出土していないことは



第11図 溝29層位断面図 (縮尺: 1/40)

注意される。

なお、この溝29出土の瓦に関しては、次の遺物の項では扱わず、『その他の遺構と遺物』で他の遺構・包含層出土の瓦と一括して扱うことにした。

(2)遺物

(a)最下砂層出土遺物(第12図・第34図1, 図版第49・51)

〔土師器〕第12図1は杯で、底部外面は調整せず、内面と口縁部外面にヨコナデを施す。内面に漆が付着している。

2～5は皿。調整は、内面と口縁部外面にヨコナデを施すが、2は底部外面未調整で、3～5は底部外面にヘラケズリを施す。4は底部外面に墨書が認められるが、薄くて判読不可。

6は鉢で、口縁部を除いた内面全面に漆が厚く付着している。

7は高杯杯部片で、内面にヨコナデ、外面にミガキを施す。

8～10は甕で、3者とも口縁端部が内側に丸く肥厚する。

11は墨書のある杯片であるが、文字の下半のみが残存していて、文字不明。

〔須恵器〕第12図12・13は杯蓋。

14は無高台の杯で、焼成が甘い。

15は小形の長頸壺。16は高台付の大形の長頸壺になると思われる。

〔土製品〕第34図1は土馬で、赤褐色を呈し、全長13.5cm、全高10.3cm、脚幅6.9cm。全体にケズリを施した後、丁寧にナデを施している。頭部は別の粘土を二つ折りにして首にかぶせるようにして付け、目は竹管状のもので押して作出している。頭頂部には指頭圧痕がある。首には左右に手綱を粘土付着で表現し、肩両側と胴部下半両側に指頭圧痕が認められる。尾にはケズリが明瞭に残る。

(b)緑色砂層出土遺物(第13・14図, 図版第49)

〔土師器〕第13図1は杯で、内面と口縁部外面にヨコナデを施し、底部外面は未調整であるが、若干ミガキを施す。2は高台付の杯底部片。

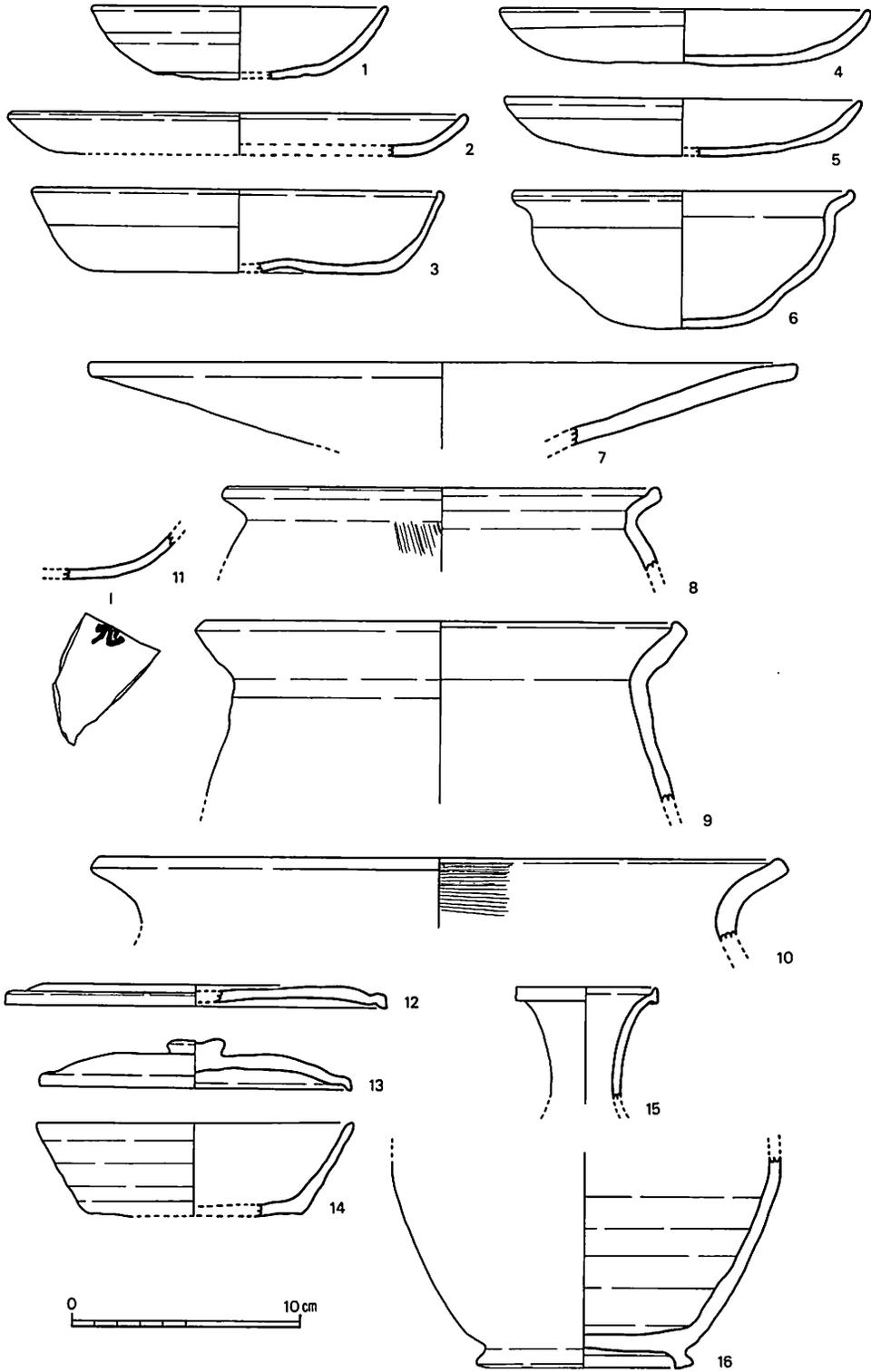
3～14は皿。口径は大きなもので20cm前後あり、器高も高いものでは3.8cmあるものもある。また、口縁端部が内側に肥厚するものもある。12は口径16.2cm、器高1.7cmで、口縁部が垂直に近く立つ。14は復原口径8.6cmの小形の皿。以上の皿の調整は、内面と口縁部外面にヨコナデを施すが、8・12～14を除いて、底部外面にヘラケズリないしミガキを施す。

15は高杯脚部片。

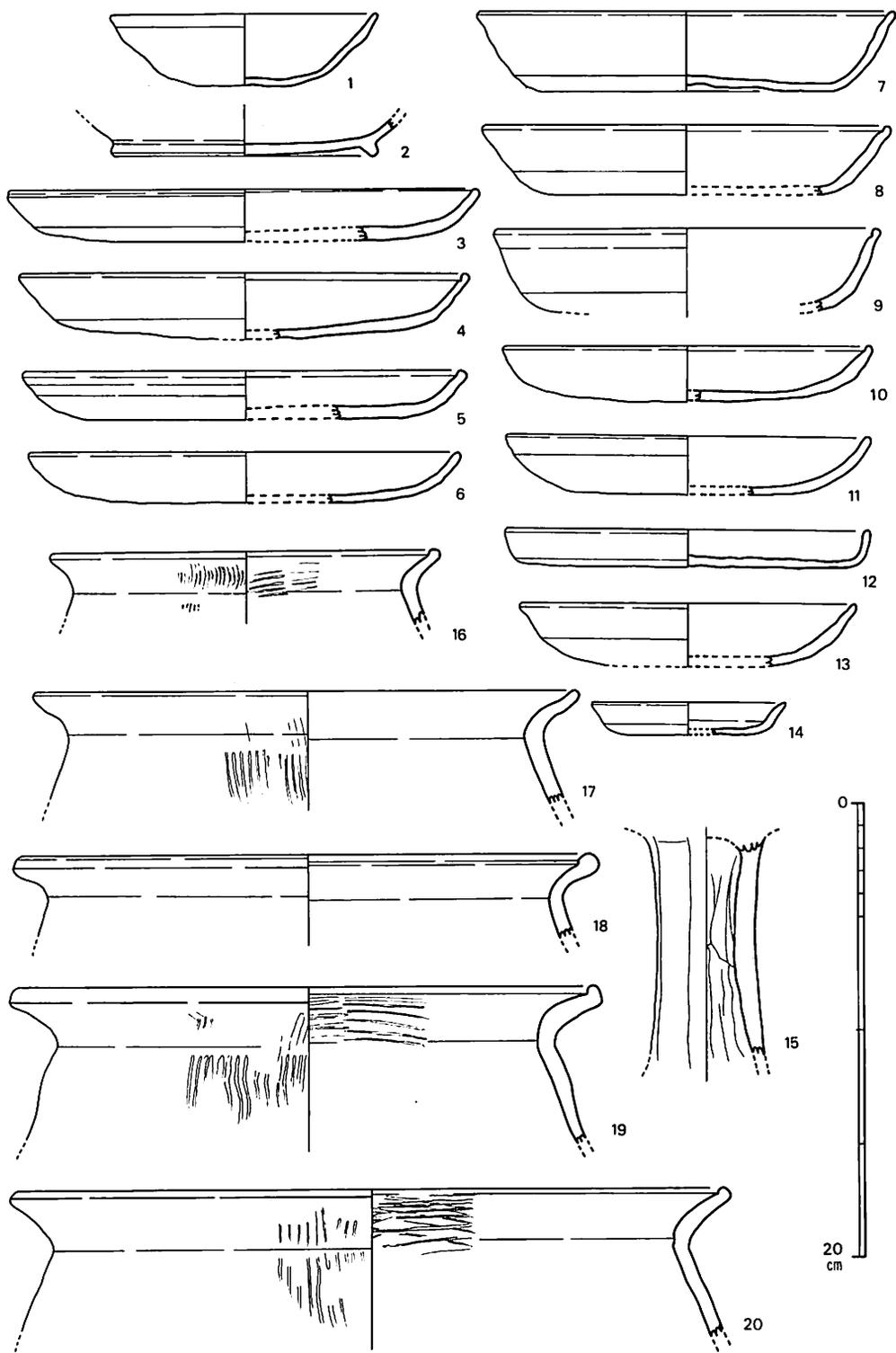
17～20は甕。18～20は口縁端部が内側に丸く肥厚する。

〔黒色土器〕第14図1は大形の杯。黒色土器Bで、内外面にミガキを施す。内面側面に螺旋暗文を施す。

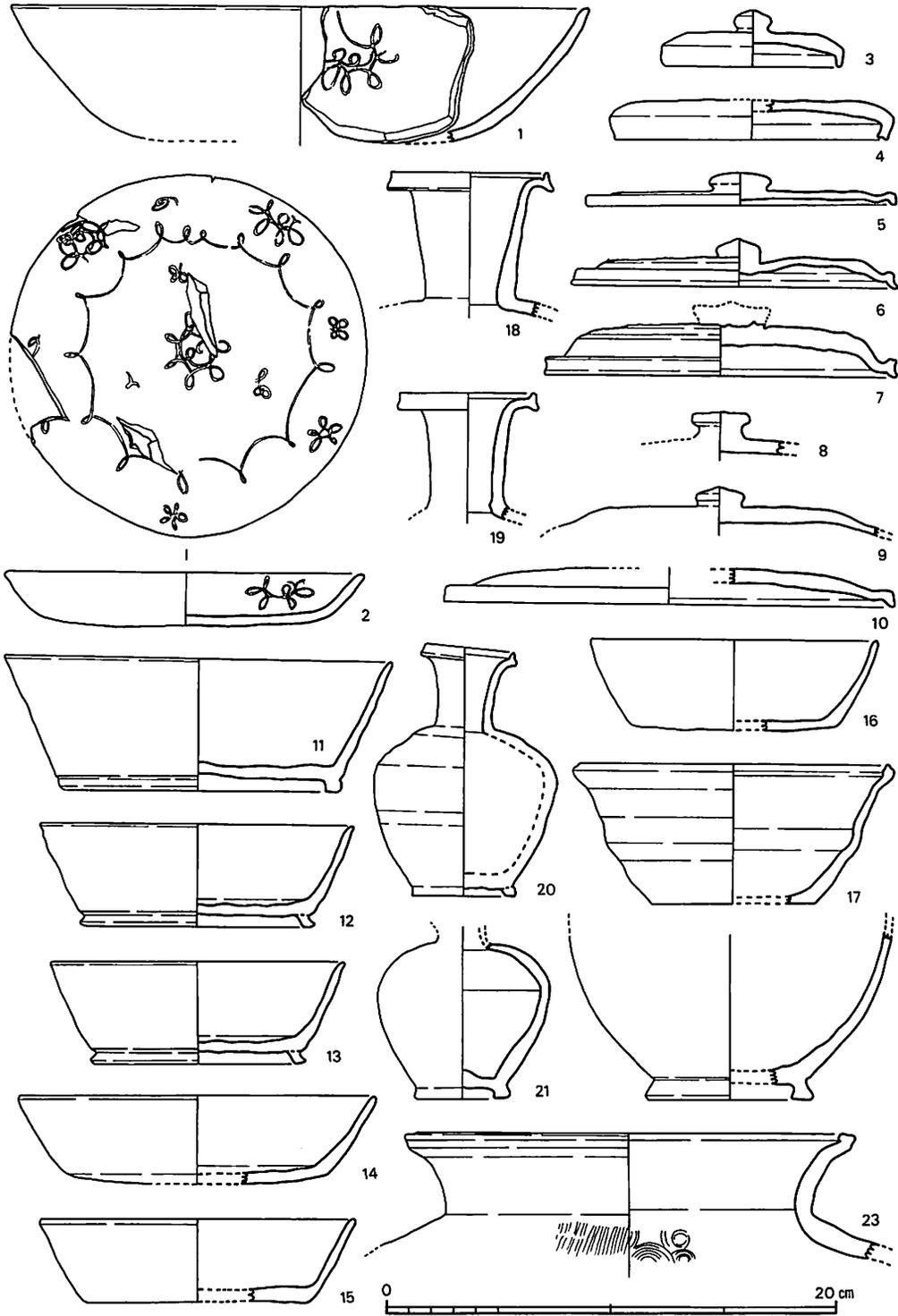
2はほぼ完形に近い皿で、口径15.9cm、器高2.4cm。黒色土器Aで、ミガキを施す。見込み中心に螺旋暗文を施し、そしてその周囲に小さな螺旋暗文を3ヶ所に配し、底部から口縁部への立ち上がりの境に螺旋暗文を一周巡らす。そして、内面の側面には8ヶ所ほどに螺旋暗文を施



第12図 溝29最下砂層出土遺物実測図（縮尺：1/3）



第13図 溝29綠色砂層出土遺物実測図(1) (縮尺：1/3)



第14図 溝29綠色砂層出土遺物実測図(2) (縮尺：1/3)

す。

〔須恵器〕第14図3・4は壺類の蓋になると思われ、両者とも外面に自然釉がかかる。5～10は杯蓋。7は宝珠つまみにはならないようである。8は赤褐色硬質の焼きで、つまみ周囲に方形にハケ目が認められる。

11～13は高台付の杯。14～16は無高台の杯で、焼成は甘い。

17は鉢で、口縁端部が内側に肥厚し、これも焼成が甘い。

18～22は長頸壺。20は器高11cmの高台付小形長頸壺で、完形品(出土状況は図版第5上左参照)。底部付近はヘラケズリを施し、それ以上はヨコナデを施す。底部外面に糸切り痕を残す。

23は甕で、焼成は甘い。

(c)暗灰色粘質土層出土遺物(第15～25図, 第34図2～9・11・12, 図版第49～55)

〔土師器〕第15図1～29は無高台の杯。口径は、17.0cm前後のものが多い。7は口径10cmと小形のものである。器高はほとんどが3.0～4.0cmの間に収まる。調整に関しては、1～7が内面と口縁部外面にヨコナデを施し、さらに底部外面から口縁部外面にかけてケズリを施すもの。8～29は底部外面を未調整のまま残すものである。なお、この暗灰色粘質土層からは、杯内面に漆が付着した破片がかなり出土しており、2・12・14・16の内面には漆が付着している。14の底部外面には墨書があるが、薄くて判読不可。第16図1～8は高台付杯で、ミガキを施しているものがほとんどである。

第16図9～28・第17図1～4は無高台の皿。第16図9～13は、口径18.5cm～20.5cmの大形のもので、口縁端部が内側に肥厚するものが多い。第17図4は口径13.4cmで、その他は口径が14.5～17.5cmの間に収まる。器高は、第16図10・14が3.5cm前後と高いが、ほとんどは2.0～2.5cmの間に収まる。調整は、内面と口縁部にヨコナデを施すだけのものが第16図11・14・15・24・26、第17図2・3で、他のものはさらに底部外面にヘラケズリを施すものである。第16図21は、底部外面に墨書が認められるが、薄くて判読不可。第17図5は高台付皿の底部片と思われる。第17図6は、口縁部が外反し、端部が上方へ丸く肥厚するやや深めの皿。

第17図7～18は墨書のある杯・皿である。7～13は「大」、14は「石廊」か。15は「人給酒」。16は「巻」。17は不明。18は「可」か。

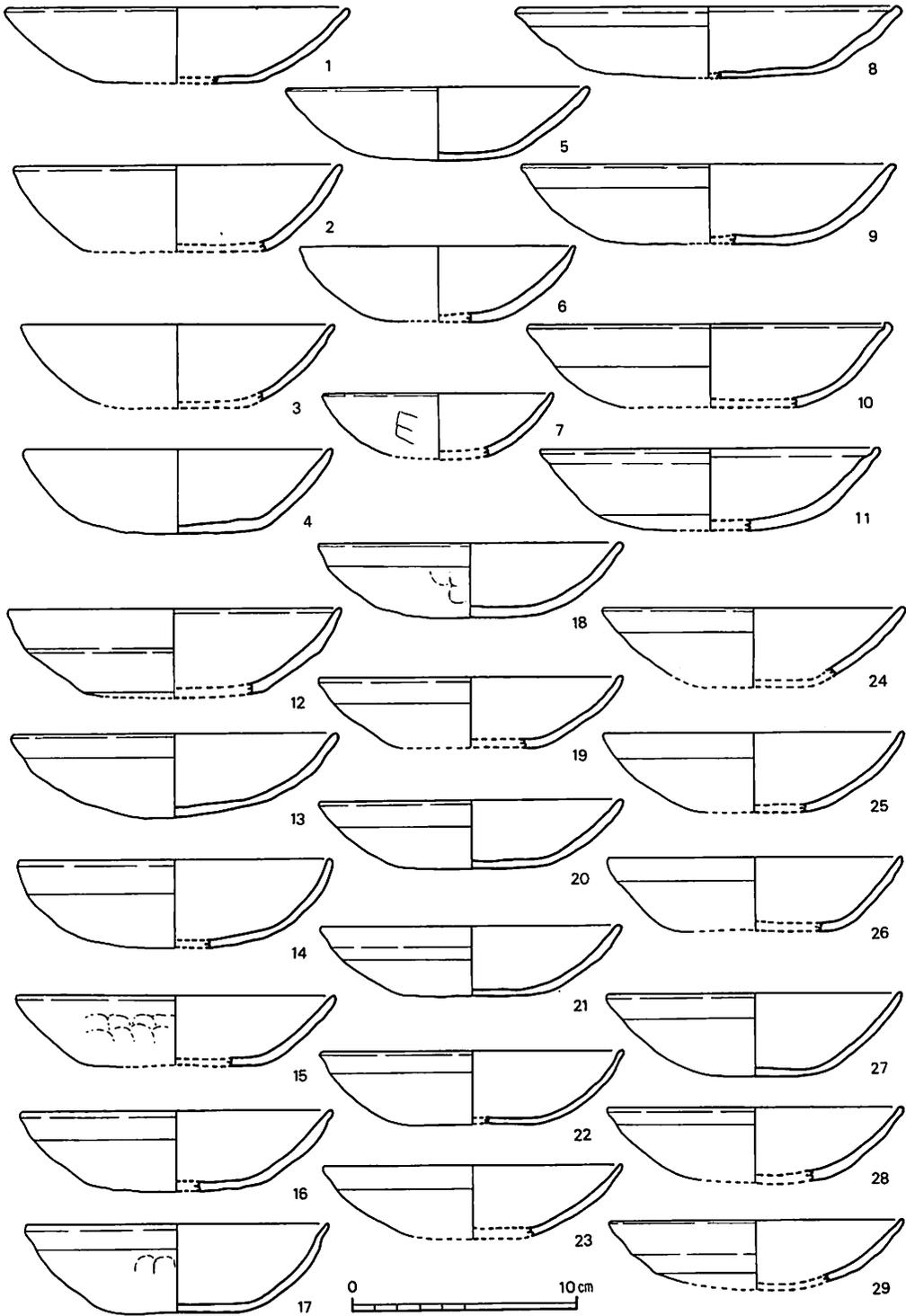
第18図・第19図1～7は甕。大形品では第18図1が口径38.2cm、最も小さなもので口径10.0cmであり、大きさには各種がある。第19図6を除いて、他はすべて口縁端部が内側に丸く肥厚する。また、胴部があまり張らないものがほとんどである。第19図3・4にはタタキが使用されている。

第19図8・9は鉢で、両者とも内面に漆が付着している。

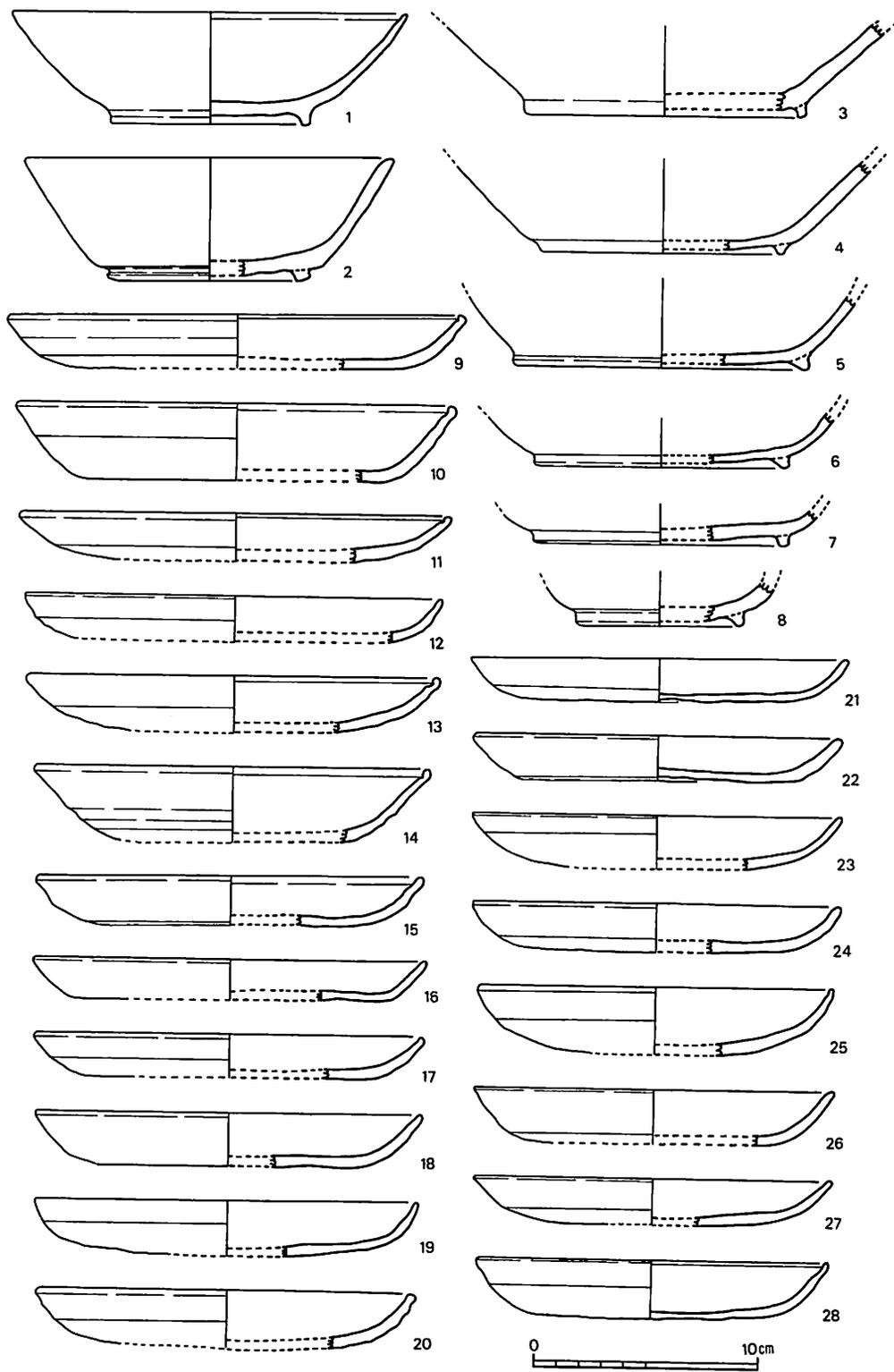
10は高杯脚部片で、脚底付近では、外面タテハケの後、ヨコナデを施し、内面はハケ調整。脚部はケズリで9面をとり、杯部との接合部にまでケズリが若干及んでいる部分もある。

11は羽釜。

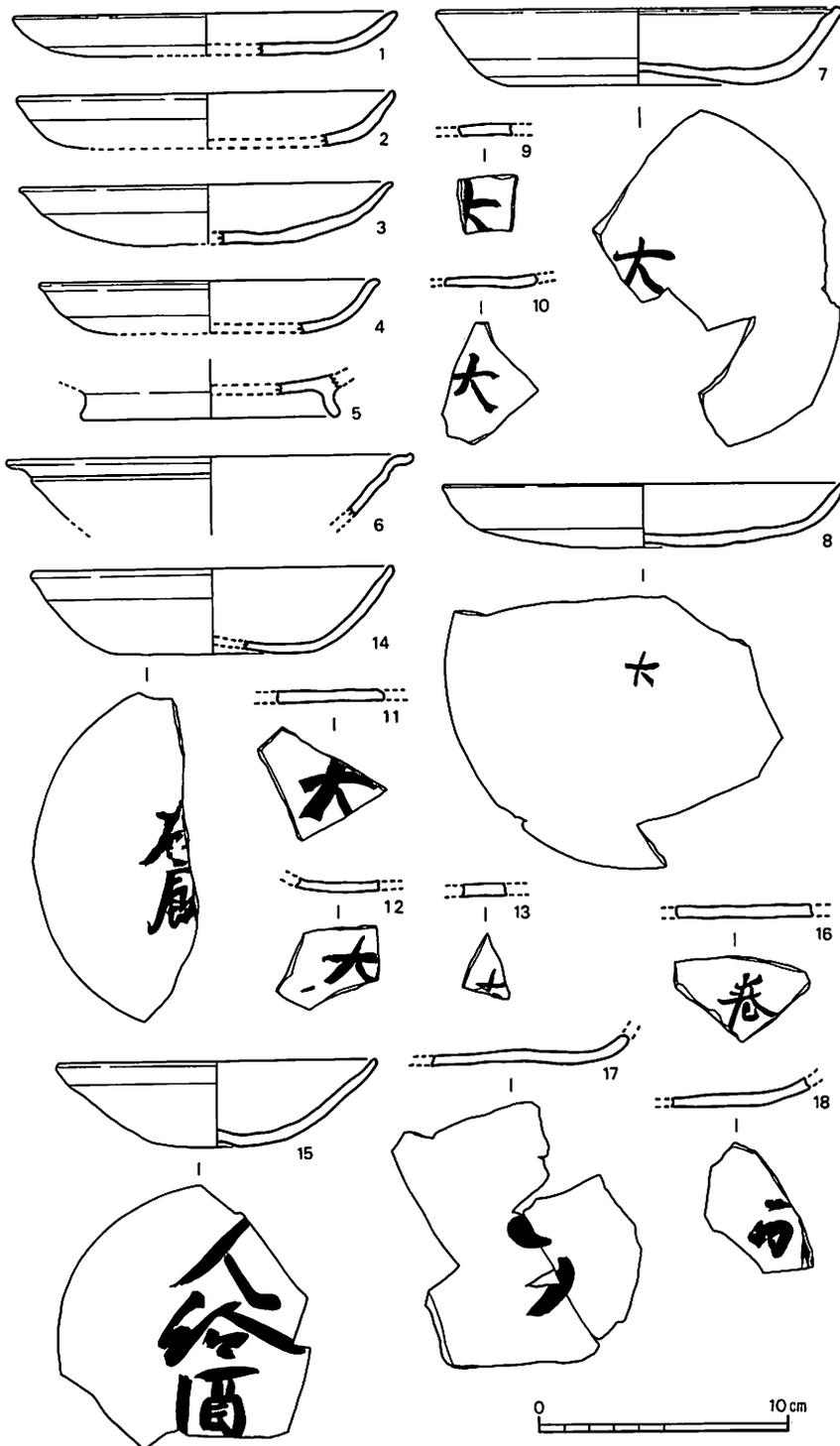
〔黒色土器〕第19図12・13は大形の杯で、共に黒色土器A。内面側面に螺旋暗文を施すが、



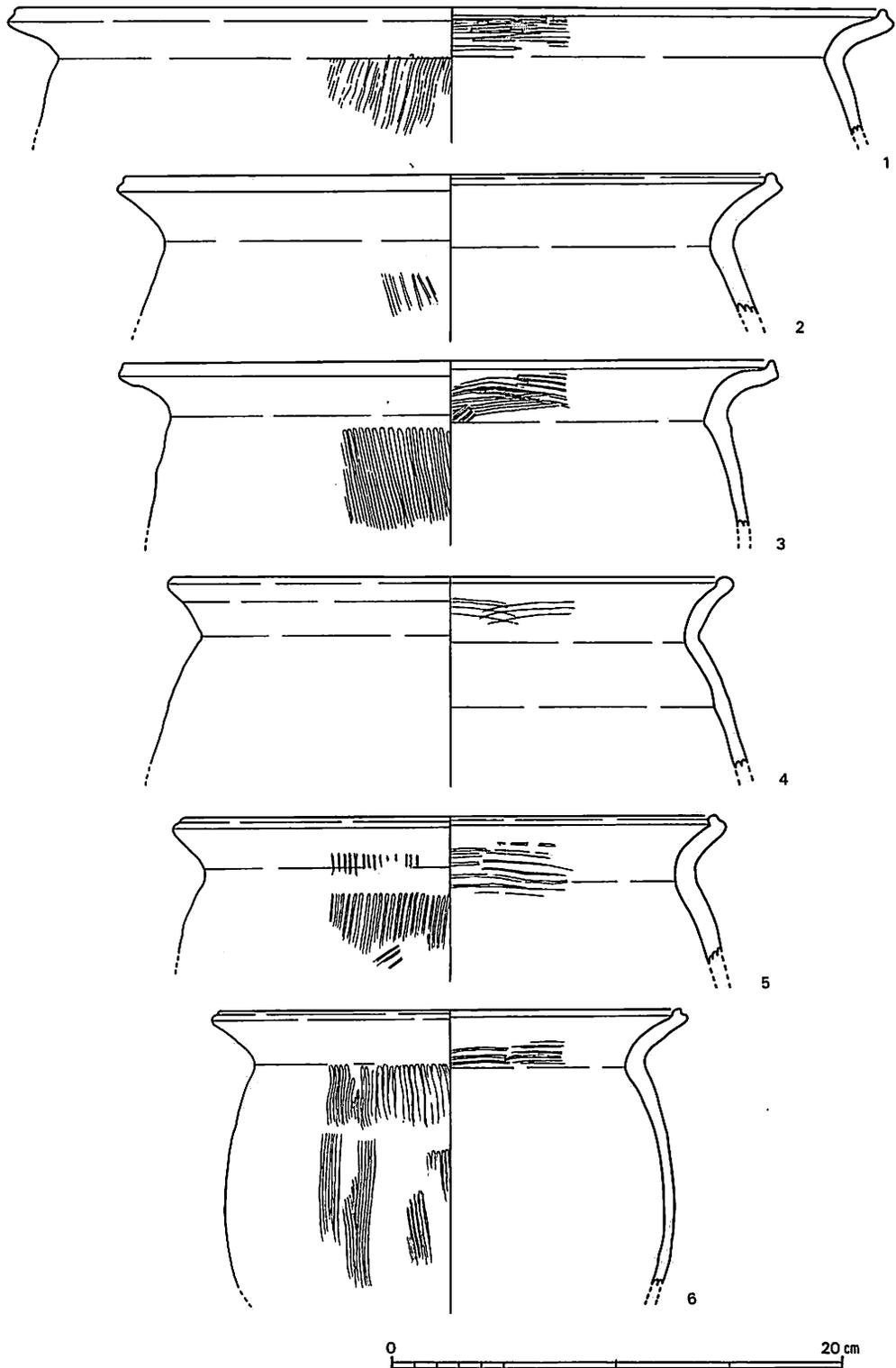
第15図 溝29暗灰色粘質土層出土遺物実測図(1) (縮尺：1/3)



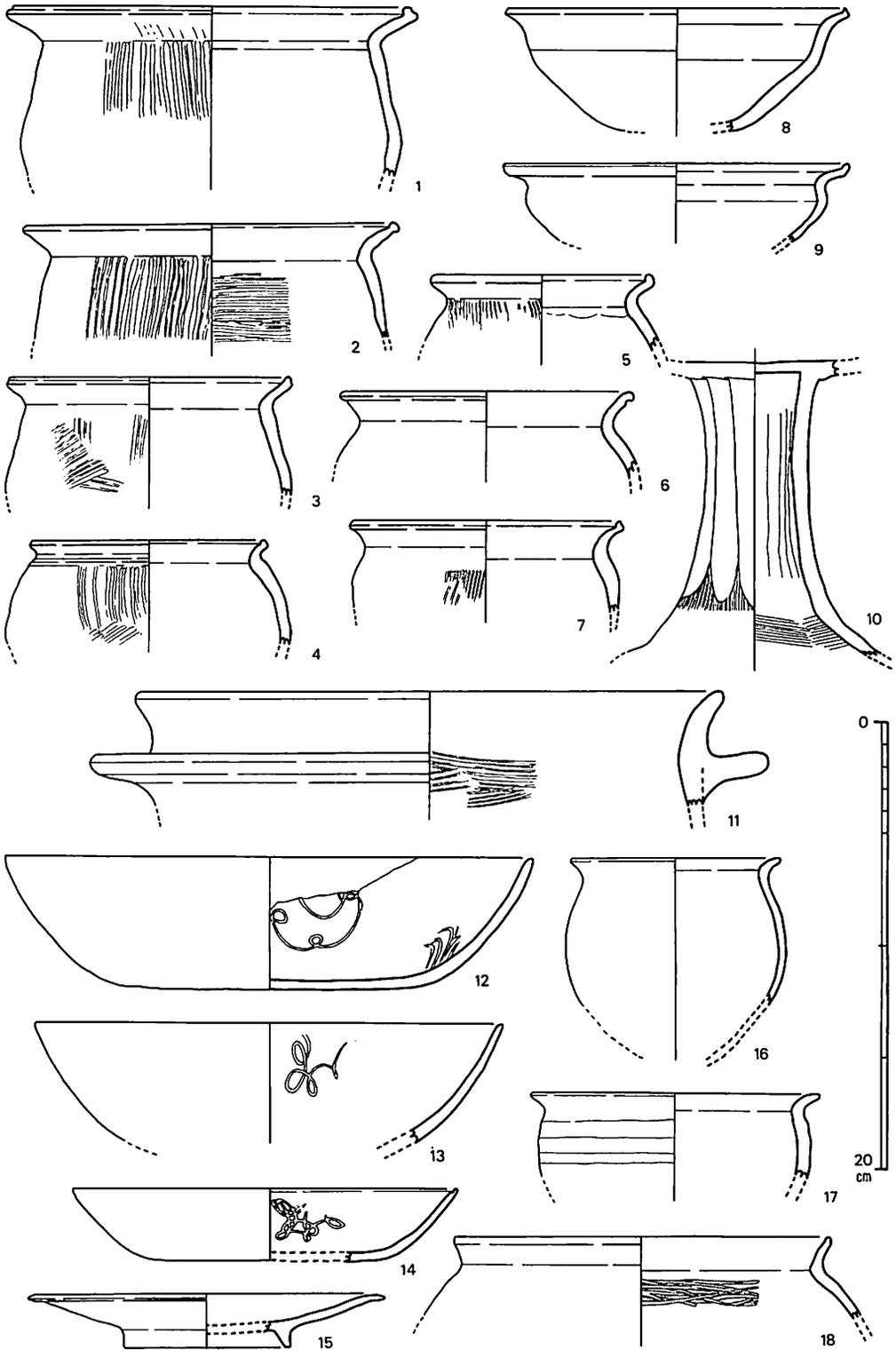
第16図 溝29暗灰色粘質土層出土遺物実測図(2) (縮尺：1/3)



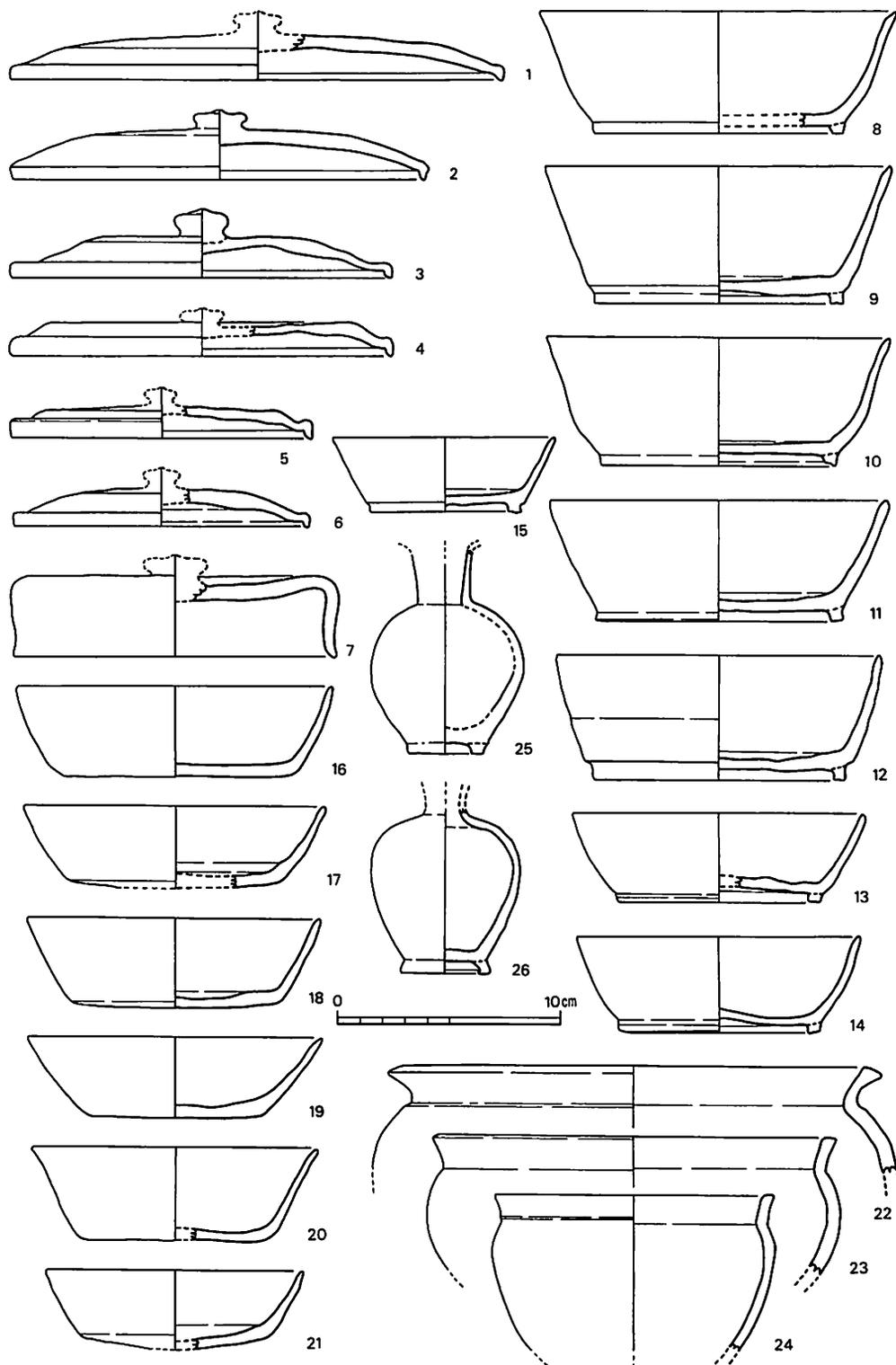
第17図 溝29暗灰色粘質土層出土遺物実測図(3) (縮尺: 1/3)



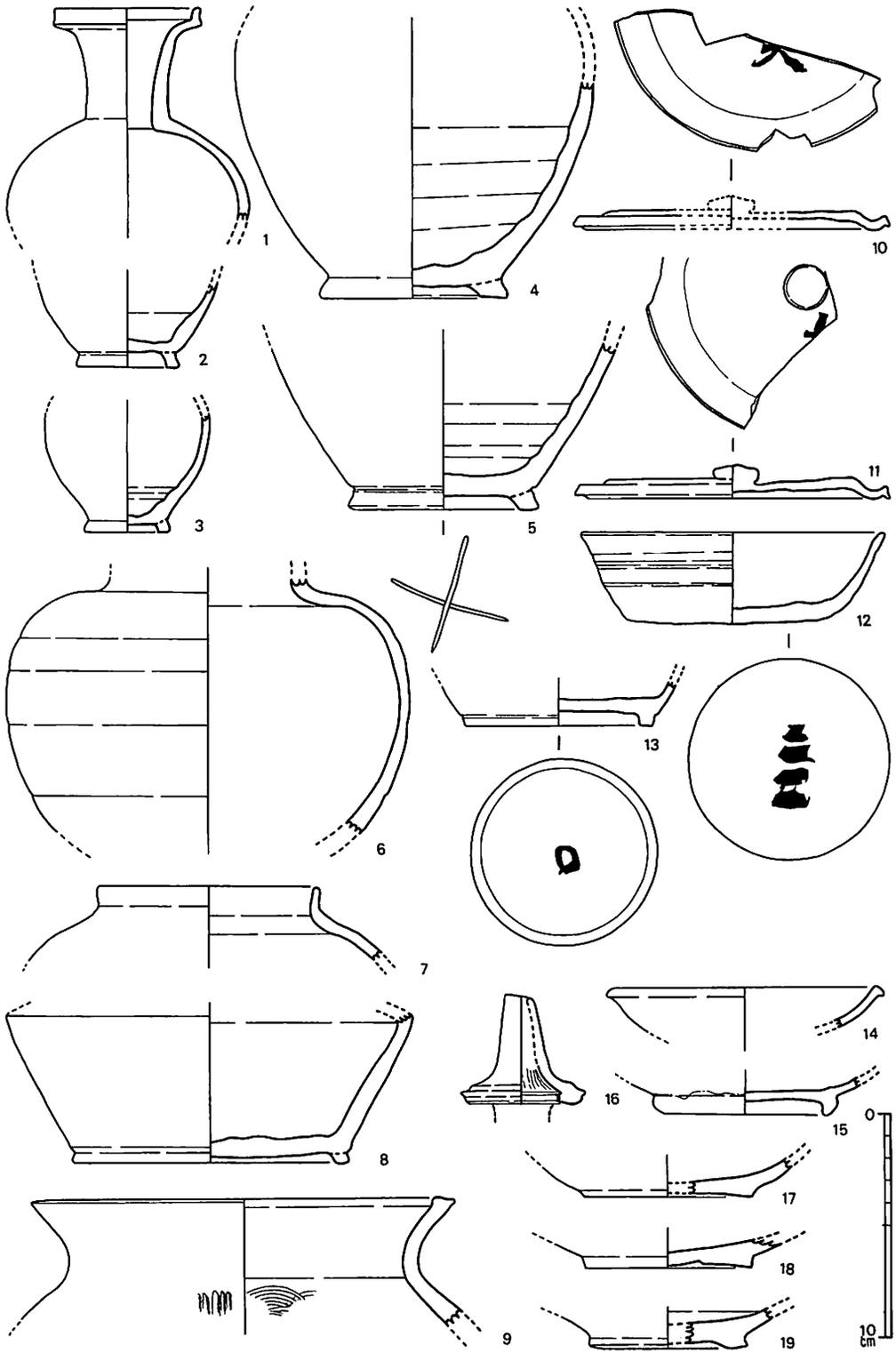
第18図 溝29暗灰色粘質土層出土遺物実測図(4) (縮尺：1/3)



第19圖 溝29暗灰色粘質土層出土遺物実測図(5) (縮尺：1/3)



第20図 溝29暗灰色粘質土層出土遺物実測図(6) (縮尺: 1/3)



第21図 溝29暗灰色粘質土層出土遺物実測図(7) (縮尺: 1/3)

12には草様の暗文を加えている。

14は皿で、黒色土器B。内面側面に螺旋暗文を施す。15は高台付皿で、黒色土器A。

16～18は甕で、すべて黒色土器A。内外面にミガキを施し、内面のミガキは特に丁寧である。

〔須恵器〕第20図1～6は杯蓋。口径は、1が22.0cm、2が18.2cm、3・4が17.0cm、5・6が13.0cm前後を示す。7は短頸壺の蓋。

8～15は高台付の杯で、口径15.0cm前後のものとは13.0cm前後のものがあり、15は口径10.0cm、器高3.3cmの小形の杯である。12の外側面には墨書があるが、判読不可。16～21は無高台の杯で、焼成は甘い。

22～24は鉢で、3者とも焼成は甘い。

第20図25・26、第21図1～5は長頸壺。第20図25(出土状況は図版第5上右)・26、第21図2・3は小形の高台付長頸壺になる。第21図5は、底部外面にヘラによる窯記号がある。

第21図6・7は短頸壺。

8は平瓶になるものと思われる。

9は甕。

第21図10～13は墨書のある杯蓋と杯。10・11は「大」。12は文字というよりは記号か、あるいは「二二」か。13は「○」である。

〔灰釉陶器〕第21図16は、浄瓶の口縁部片。

14は皿になると思われる。

15は碗の底部片と思われ、内面に重ね焼きの痕が認められる。

〔土製品〕第34図2～4は土馬の破片。2・3は胴体で、ケズリの後、ナデを施す。4は頭部片で、最下砂層出土品と同様、首に別の粘土を二つ折りにして、かぶせるように頭部を作出している。そして、頭頂部には指頭圧痕が認められる。目は最下砂層出土品とは異なり、円棒状のもので押す。首の部分には、両側に薄く粘土がはりつけてある。

第34図5・6は土師質の土錘。

〔石製品〕第34図7～9は石帯。3者とも同石材で、輝緑岩を使用している。7・8は巡方で、大きさは良く似ている。2.9×2.6cmの方形で、厚さは6.2mm。裏面には4ヶ所に孔を穿っているが、7は一ヶ所方向を違えている。8の孔には鉄錆が付いているので鉄製の針金で帯に付けたものと思われる。9は丸柄で、大きさは3.0×2.0cm、厚さ6.5mm。裏面には3ヶ所孔を穿っている。

〔骨製品〕第34図11は、長さ11.4cm、幅1.3cmで、一側は骨の丸い形状を残し、丁寧にケズリを施す。一側は平坦に加工している。用途不明。12は、弾丸状に作出された長さ5.6cmのもので、これも用途不明。

〔木製品〕第22図は木筒。1・7は先端が若干欠けているだけで、完形に近く、7は両面に墨書がある。2は頂部を台形状に作出しているが、下半部以下が欠失している。両面に墨書がある。8は先端は残存するが、上部が欠失している。10は頂部を斜めに切っているが、半分は

欠失している。両面に墨書がある。11は一側が弧状になっていて、曲物底を利用か。これも両面に墨書があり、一面の字は2行にわたっている。その他はすべて断片である。

釈文と法量は以下の通りであり、番号は第22図の番号と一致する⁷⁾。

- | | | |
|----|-----------------------------|---------------|
| 1 | 三月十九日 | (114)×19×4 |
| 2 | ・六年□月□□
〔十カ〕 | |
| | ・山代□ | (80)×23×4 |
| 3 | 在京□ | (69)×(10)×(1) |
| 4 | □「美」□
〔節カ〕〔研カ〕 | (104)×(17)×4 |
| 5 | □□□□
〔入カ〕 | (80)×(11)×(1) |
| 6 | □□□ | (69)×(12)×3 |
| 7 | ・七□□□□
・□□ | (105)×19×4 |
| 8 | 「□」中 | (90)×(18)×2 |
| 9 | □□□ | (49)×(5)×4 |
| 10 | ・□女羊人
・□ | (45)×(17)×3 |
| 11 | ・ □□□□□□
□□□□□部□
・□□也 | (110)×(19)×2 |

第23図1～3は人形。1は頭部で、墨で目鼻口を表現し、結髪を作出している。2は頭部の一部と足部が欠失していて、胴部をみると削り損いがあるので、未成品と思われる。3は脚部で、足と関節を表現している。

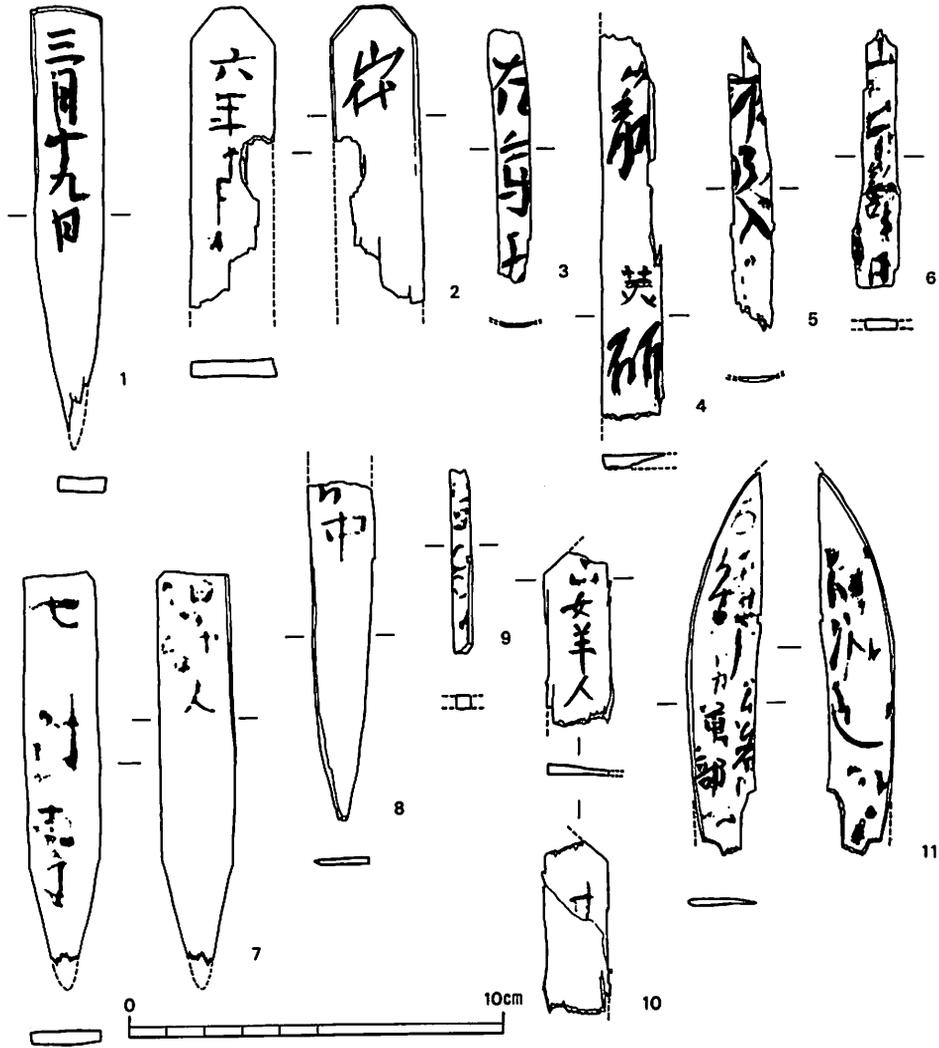
4は柳葉形の鏝形木製品。5も茎と思われる部分が欠失しているが、鏝形木製品と考えられる。

6はバチ形をしたヘラ。漆が付着しているので、漆塗りに使用されたものと思われる。この暗灰色粘質土層からは、漆の付着した土師器杯が多数出土していて、これらとの関連が考えられよう。

7～9は櫛。

10は小形の曲物底。

11～14は用途不明品。11は上方やや右よりに小さな孔をあけている。12はケズリにより面をとり、一端でやや段がつくようになっている。13は、両短辺が突出するように作出され、その両突起部に一孔ずつをあけている。14は分胴形に似た形状で、両端は両側から斜めにきられ、



第22図 溝29暗灰色粘質土層出土遺物実測図(8) (縮尺: 1/2)

鋭利になるように作出し、中央の括れ部に孔を2個穿っている。何らかの装飾品か。

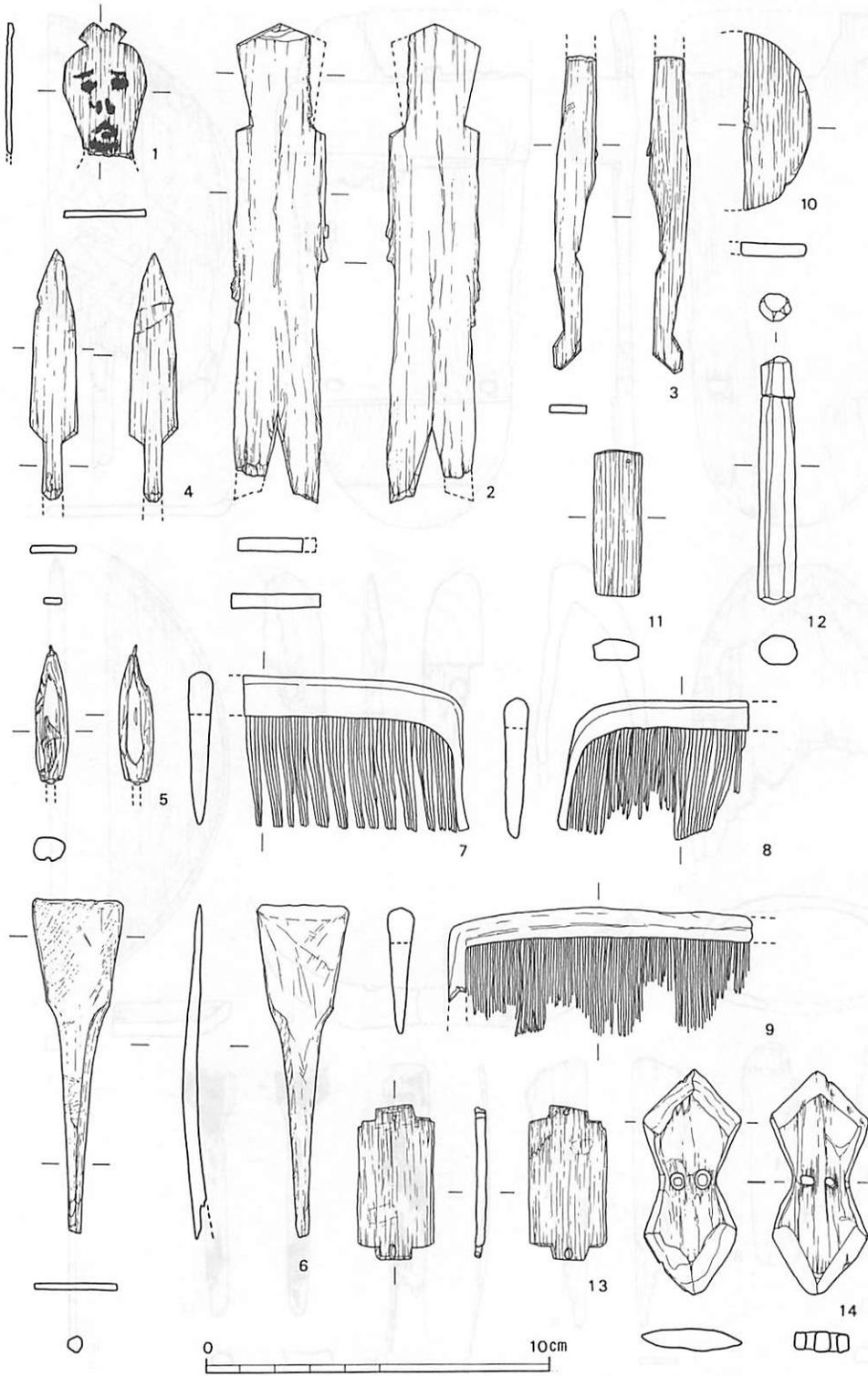
第24図1・2は下駄。1は長さ22.4cm、幅10.4cmで、つま先の方が幅広くなり、先は平坦に作出されていたようである。後の方は丸く作出されている。後歯は使用によってほとんどすりへっている。2は下駄の後方の部分の破片で、これも歯が使用によってほとんどすりへっている。

3は沓の破片で、現存長12.9cm、現存幅9.0cm。足が入る部分をくり抜いている。

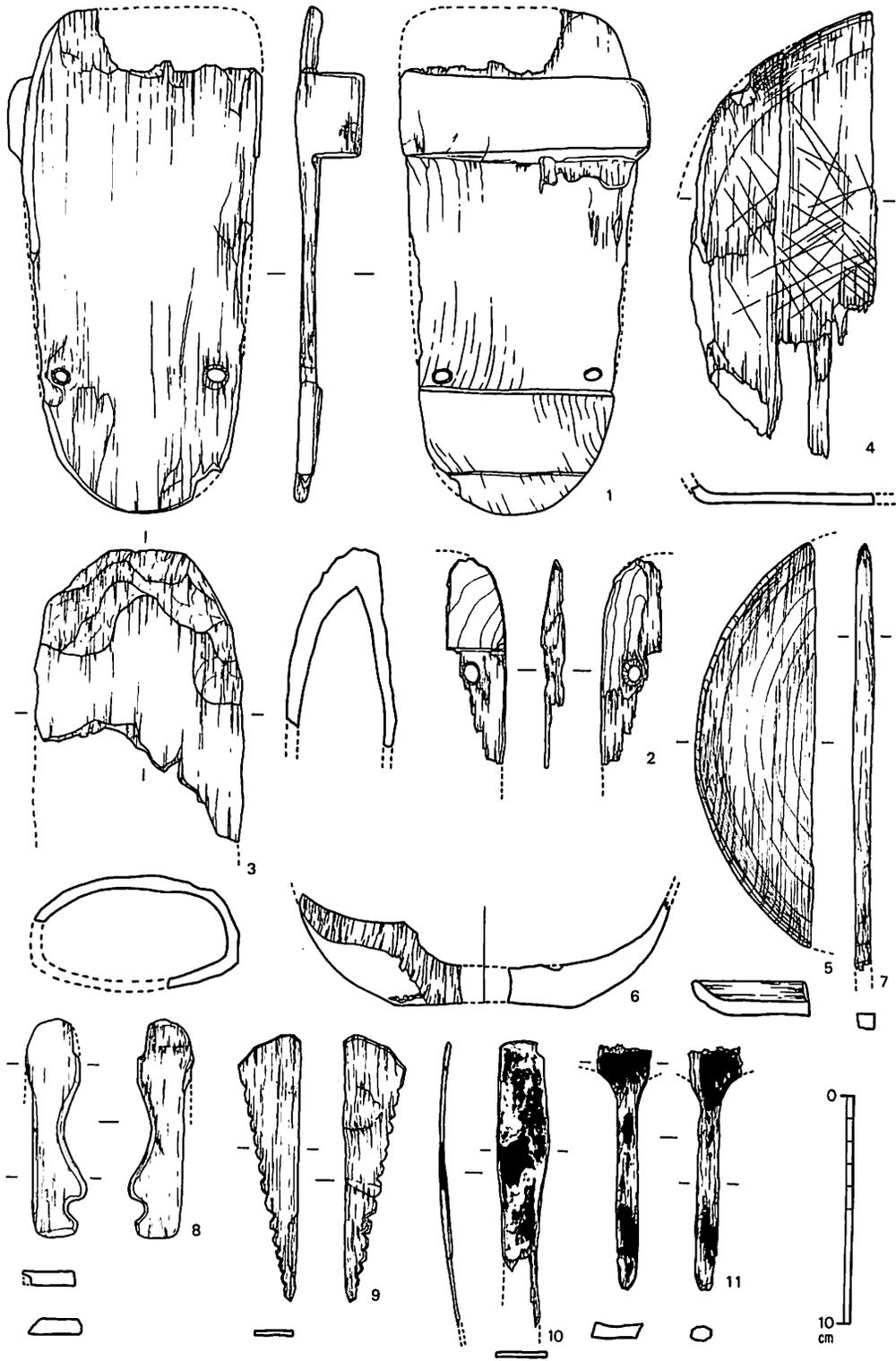
4・5は大皿か盆の形態になるものである。

6は漆器破片で、底部の厚さが1.5~2.0cmもある。

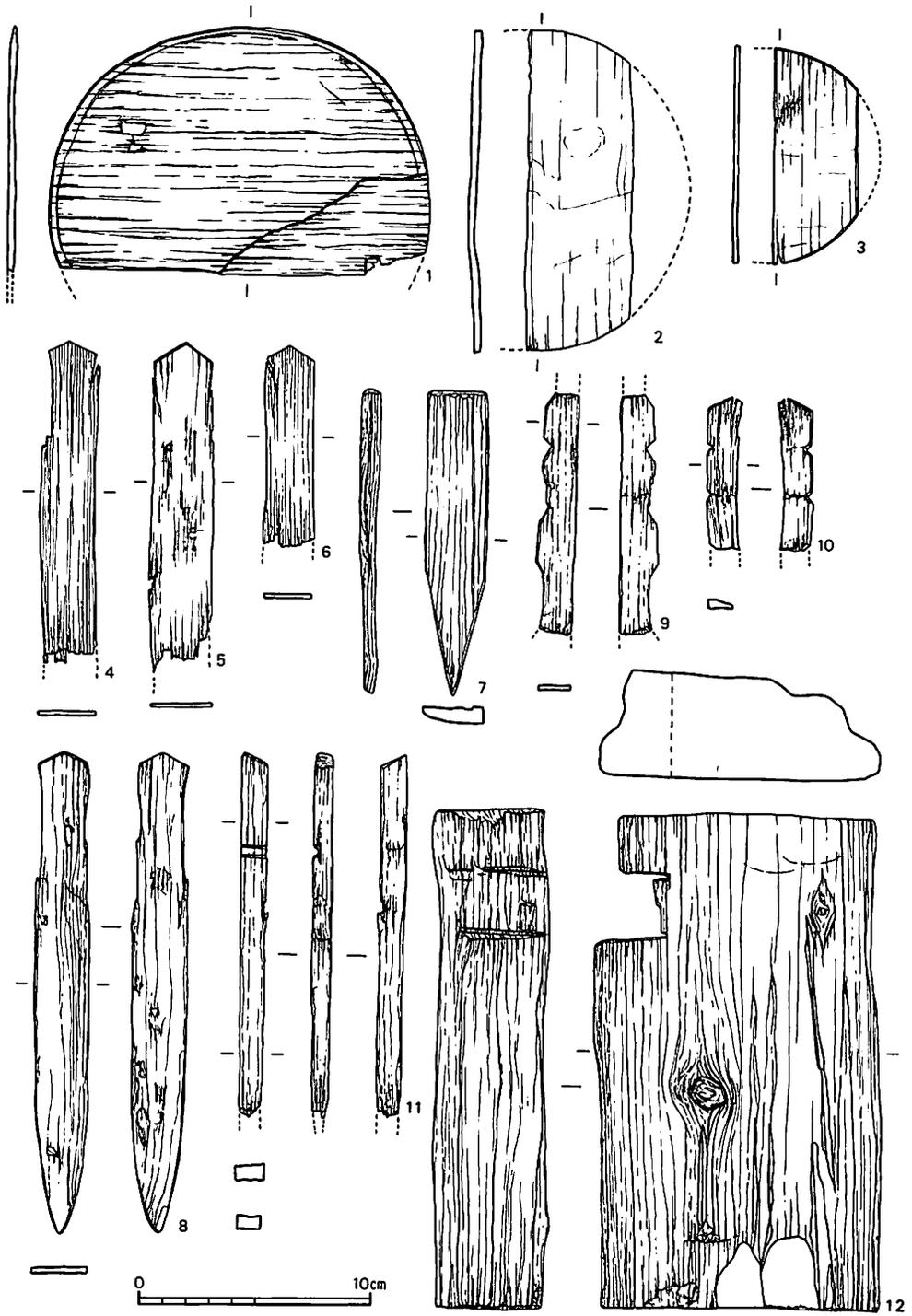
7は一端が焦げていて、火付け棒に使用されたものと思われる。この種の火付け棒と思われるものはこの層からかなり出土している。



第23図 溝29暗灰色粘質土層出土遺物実測図(9) (縮尺：1/2)



第24図 溝29暗灰色粘質土層出土遺物実測図(10) (縮尺: 1/3)



第25図 溝29暗灰色粘質土層出土遺物実測図(1) (縮尺：1/3)

8・9は用途不明品。8は一側に大小の弧状のくり込みを2個入れ、かつそれらが丸味をもつように作出されている。9は一端が尖るように作出され、一側に鋸歯状の抉りを入れている。

10・11は漆が付着していて、第23図6のように漆塗りに使用されたものと思われる。

第25図1～3は曲物底片。

4～6は人形の頭部を作出する途中の未成品ないしは失敗品と思われる。

7・8は一端が尖るように整形された木製品で、あるいは木簡に使用するために作ったものか。

9・10は一側に間隔をおいて三角形の抉りを入れたもので、用途不明。11は半円状の抉りを入れた加工品。12はこの層の最下から出土した(出土状況は図版第6上左参照)大形の加工木材で、長辺の一側に幅3cmで鋸により方形に抉りを入れている。

なお、図版第54の右下は、棒状の木を半截し、その間に箒の身のようなものを挟んでいる。漆が付着しているので、刷毛として使用されたのかも知れない。

〔植物遺体〕この暗灰色粘質土層は、以上のように木製品の残りが良い土層であったので、植物遺体も多く採集することができた。植物遺体のうちでは、モモの種子が圧倒的に多かった。以下、鑑定しえた種子名を列記しておく。

モモ (*Prunus persica* Stokes)

スモモ (*Prunus salicina* Lindl.)

ウメ (*Prunus Mume* Sieb. et Zucc.)

オニグルミ (*Juglans ailanthifolia* Carr.)

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

ヒョウタン (*Lageraria leucantha* Rusby var. *Gourda* Makino)

マクワウリ (*Cucumis Melo* L. var. *Makuwa* Makino)

〔動物骨〕数量的には多くないが、若干の動物骨が出土している(図版第5下参照)。以下、種と部位を示しておく。

ウマ (*Equus Przewalskii*) 下顎骨, 歯, 寛骨, 中手骨, 指骨, 肢骨

ウシ (*Bos taurus*) 中足骨

シカ (*Cervus nippon*) 脛骨

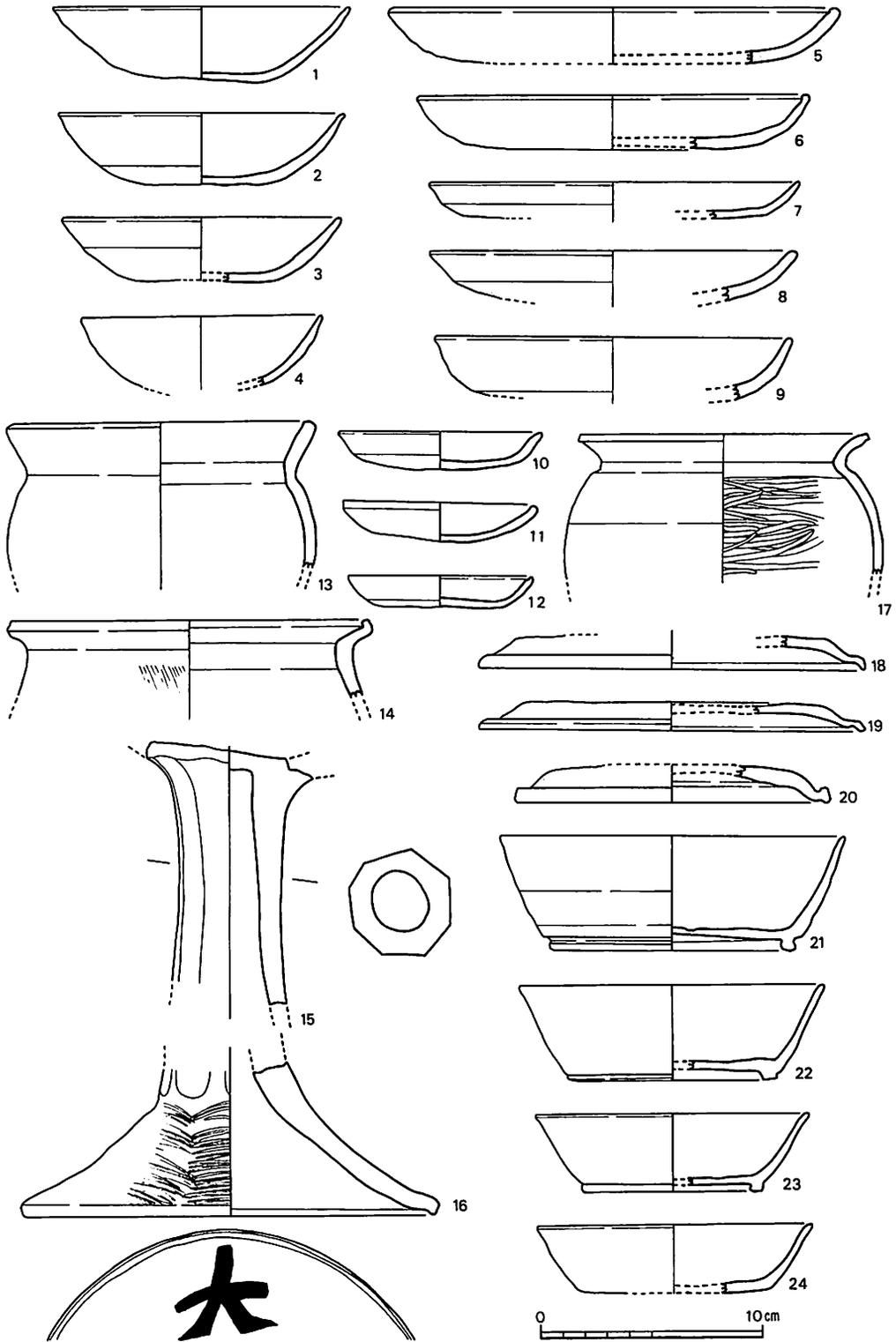
イノシシ (*Sus scrofa*) 中足骨(成獣と未成獣の2種有り)

イヌ (*Canis familiaris*) 下顎骨

その他に、魚骨も若干出土している。

(d)黄褐色砂層出土遺物(第26図)

〔土師器〕第26図1～4は杯。調整は、内面と口縁部外面にヨコナデを施す。2は底部外面未調整。3は底部外面未調整であるが、非常に粗いミガキを若干施す。1・4は底部外面にヘラケズリを施し、1は底部外面の外周と体部外面にヘラによる筋状の線が全周する。また、1・2の内面には漆が付着し、2の内面には漆をつけたハケの痕が明瞭に認められる。2の底部外



第26図 溝29黄褐色砂層出土遺物実測図（縮尺：1/3）

面にも漆が付着する。

5・6は口縁端部が内側に肥厚する大形の皿で、7～9もやや大形の皿。10～12は、口径8.5～9.2cmの小形の皿。調整は、内面と口縁部外面にヨコナデを施すが、7・9・10・12は底部外面未調整で、5・6・8は底部外面にヘラケズリを施す。

13・14は甕。

15・16は高杯脚片で、15はケズリにより8面をとる。16は脚底部内面にヨコナデを施し、外面に細かなミガキを施す。内面に「大」の墨書がある。

〔黒色土器〕第26図17は甕で、黒色土器A。内外面ともミガキを施す。

〔須恵器〕第26図18～20は杯蓋。

21～23は高台付の杯。24は無高台の杯で、焼成は甘い。

(e)暗灰緑色砂質土層出土遺物(第27図～第33図, 第34図10, 第35図, 図版第49・51)

〔土師器〕第27図1～10は杯(9の出土状況は図版第6上右参照)。1は、口径17.2cm, 器高3.5cmの大形品。2～10は、口径13.0～15.0cm前後のもので、器高は3.0cm前後。調整は、内面と口縁部外面にヨコナデを施すが、1は底部外面から口縁部にかけてヘラケズリを施し、2～10は底部外面未調整。11・12は高台付の杯。

第27図13～27・第28図1～10は皿。第27図13～27の調整は、内面と口縁部外面にヨコナデを施すが、20・21は底部外面にヘラケズリを施し、他は底部外面未調整。23は底部外面に「小」の墨書がある。26は薄手の「手」字状口縁に近いものである。第28図1～10は小形の皿で、1～3は口縁部が大きく外反する。4・5はやや深めの皿。6～9は、口径8.5cm前後、器高1.4cm前後の皿。10は厚手の「手」字状口縁の皿で、混入か。

第28図11～18は甕。11～16・18は口縁端部が内側に肥厚する。12にはタタキが施されている。16は胴の張らないもので、17は口縁端部が尖る。

第29図1は羽釜。

〔黒色土器〕第29図2～10は杯で、すべて黒色土器A。内外面ともミガキ。3は内面側面に螺旋暗文を施す。

11～15は高台付の皿で、すべて黒色土器A。

16・17は口縁部が若干内湾する口径16.0cm前後の鉢、18は口径6.2cmの小形の鉢で、すべて黒色土器A。

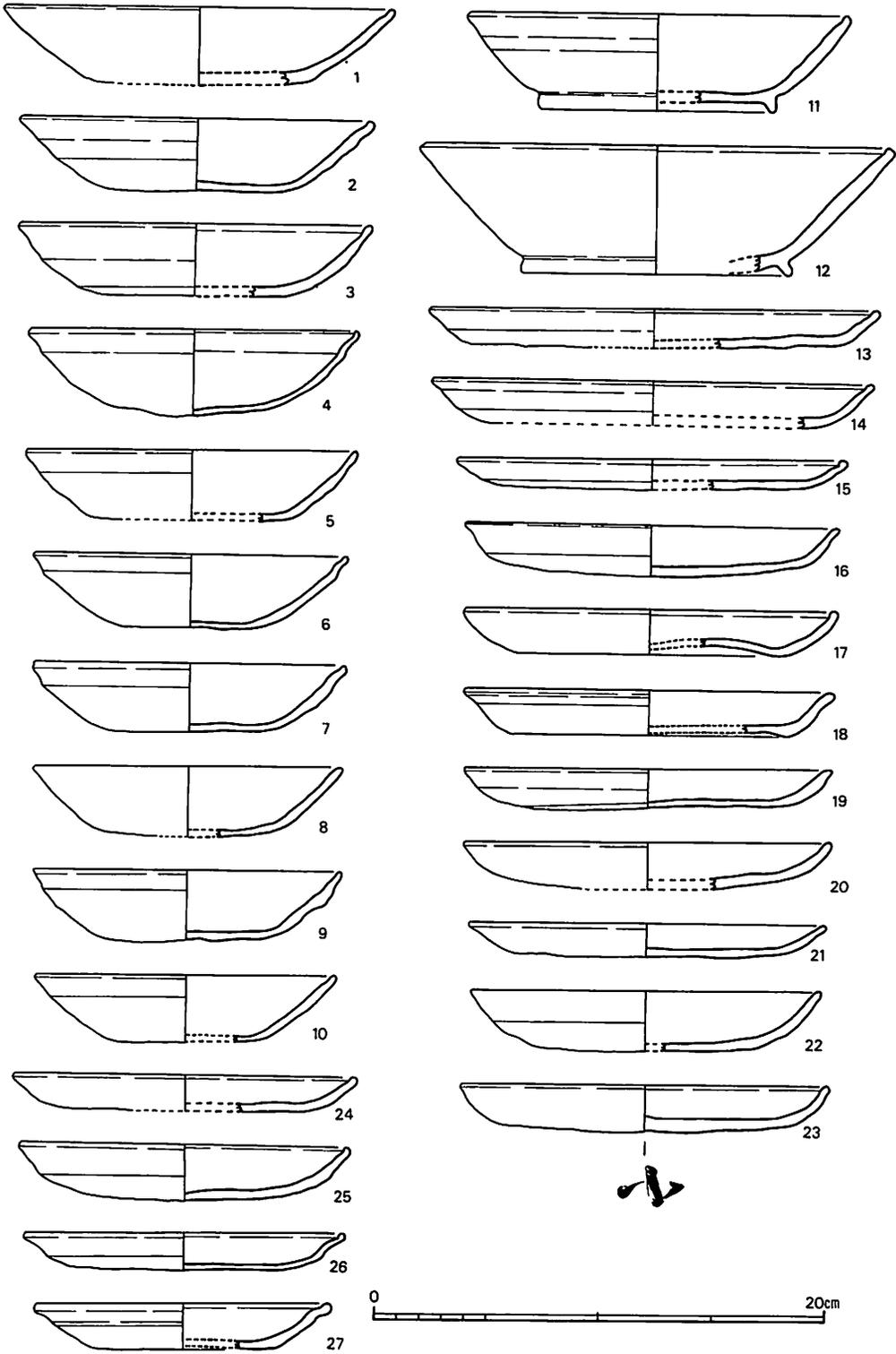
19は甕で、これも黒色土器A。

20は底部内面にヘラ先で「×」字を入れたもので、底部外面にもその「×」字の半分が認められる。また、内面には螺旋暗文の一部が認められる。

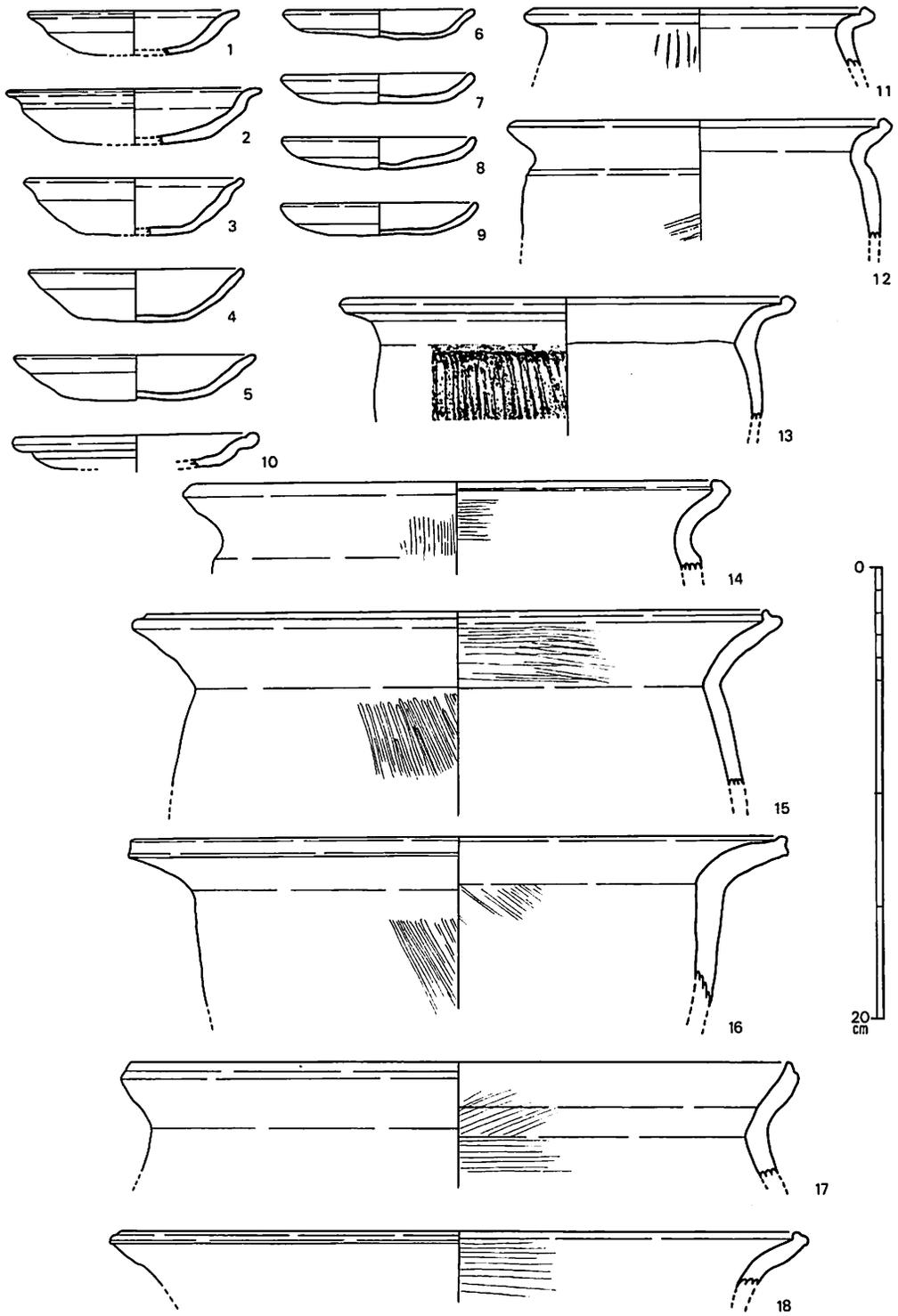
〔須恵器〕第30図1～6は杯蓋。口径は、1が18.0cm, 2・3が16.0cm, 4～6が13.0cm前後である。7は壺類の蓋になると思われる。

8～13は高台付の杯。16～20は無高台の杯で、焼成は甘い。

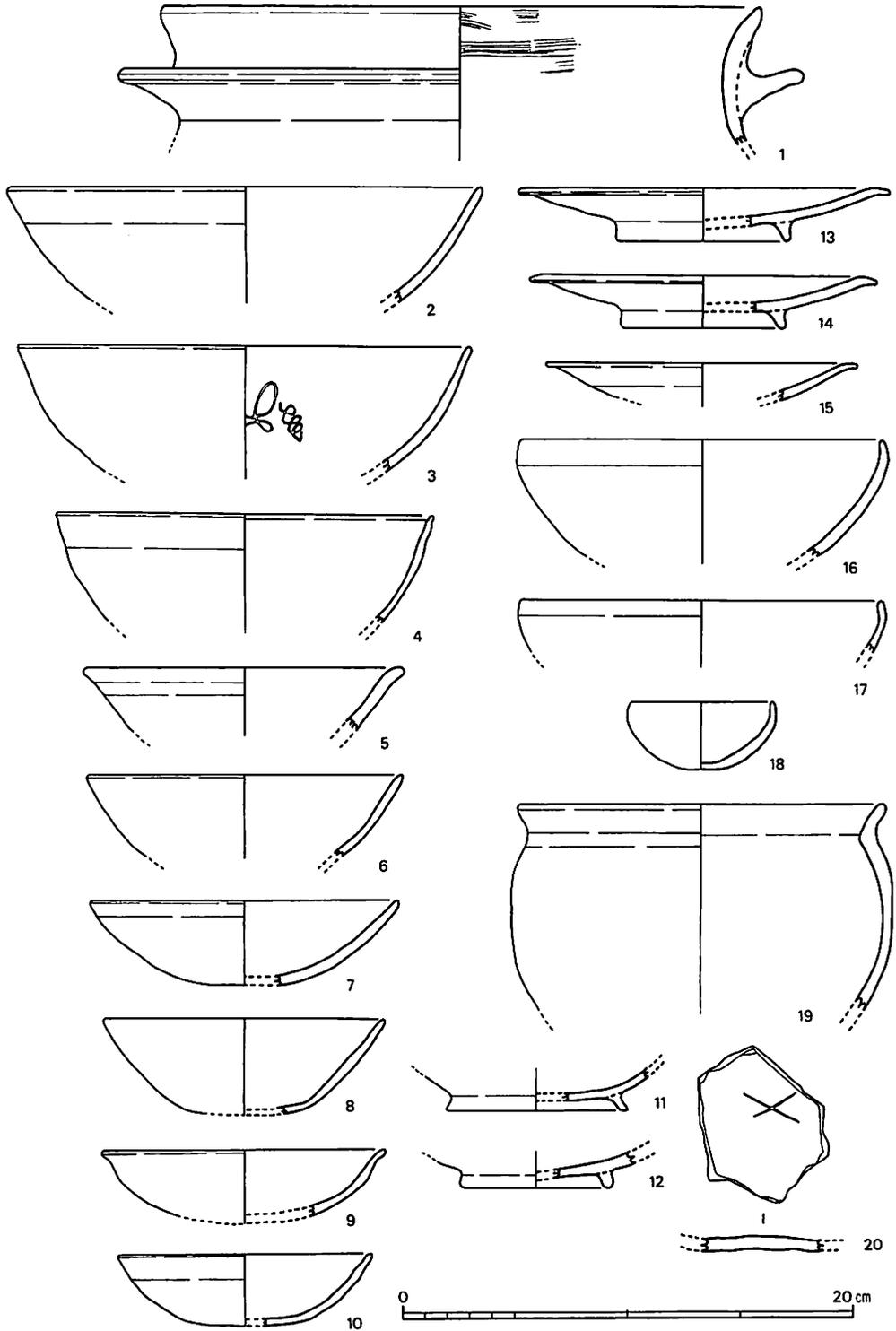
21～25は皿で、これも焼成が甘い。26は浅い皿状を呈するが、底部に高台か脚が付きそうで



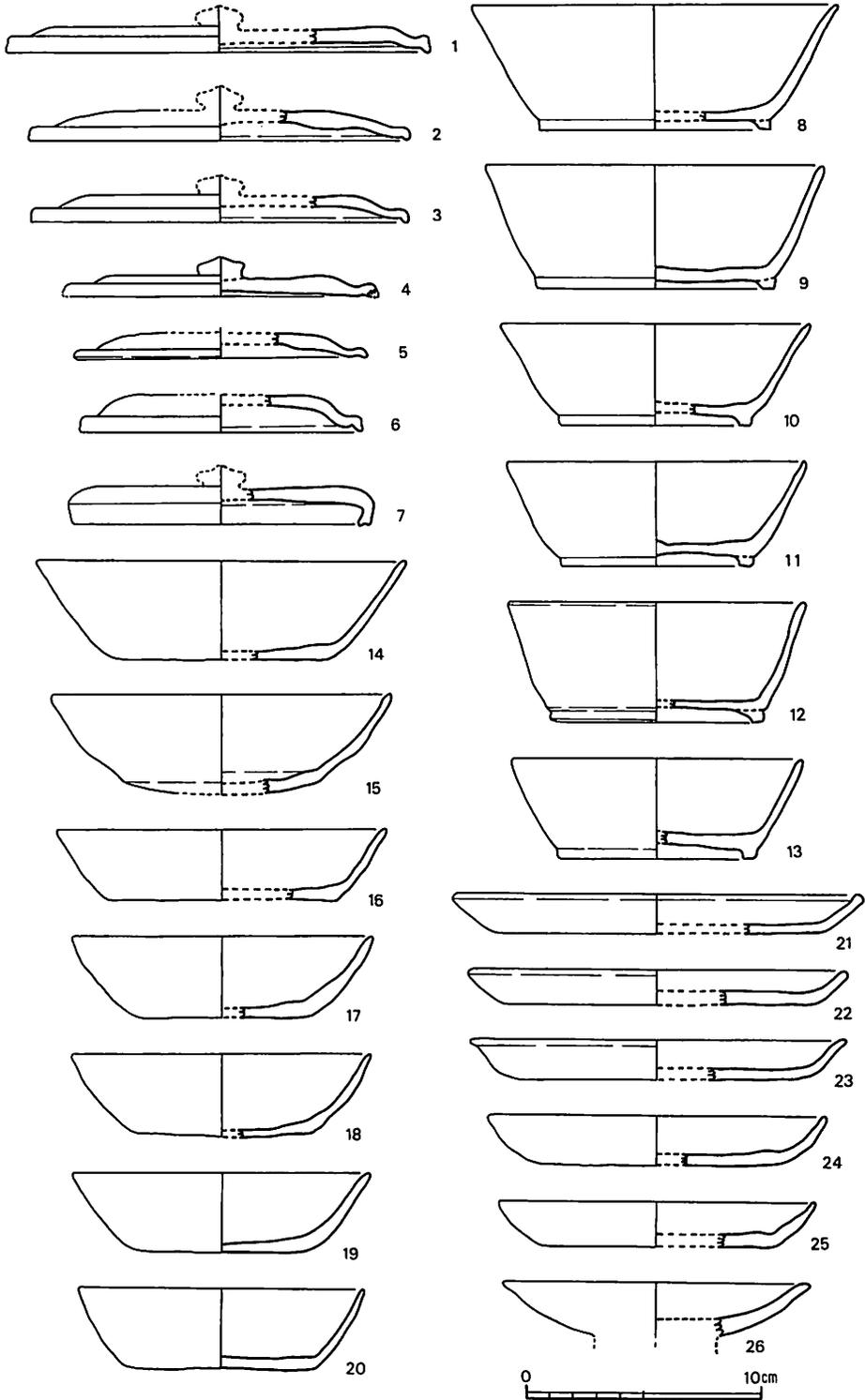
第27図 溝29暗灰綠色砂質土層出土遺物実測図(1) (縮尺: 1/3)



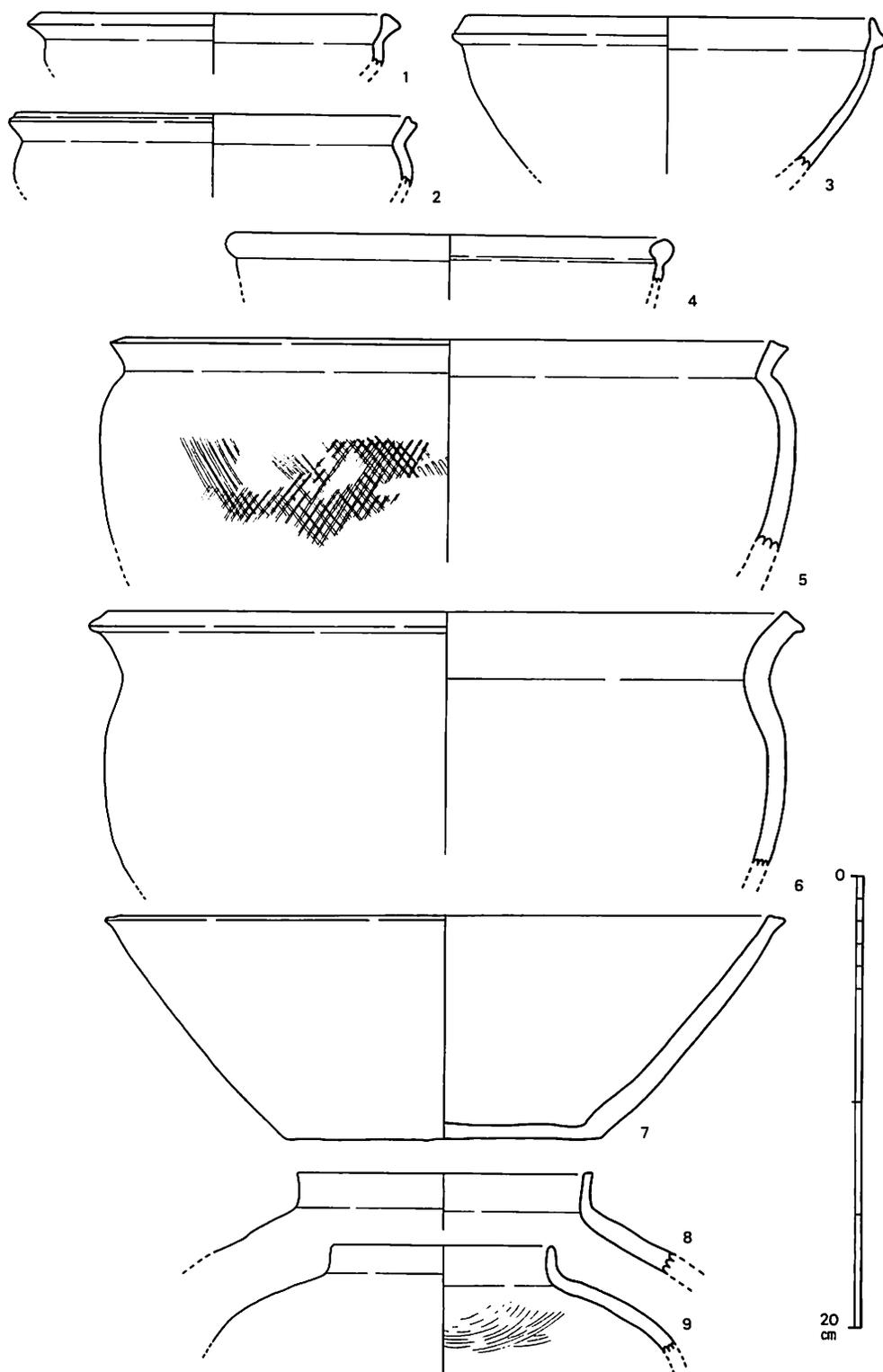
第28図 溝29暗灰綠色砂質土層出土遺物実測図(2) (縮尺：1/3)



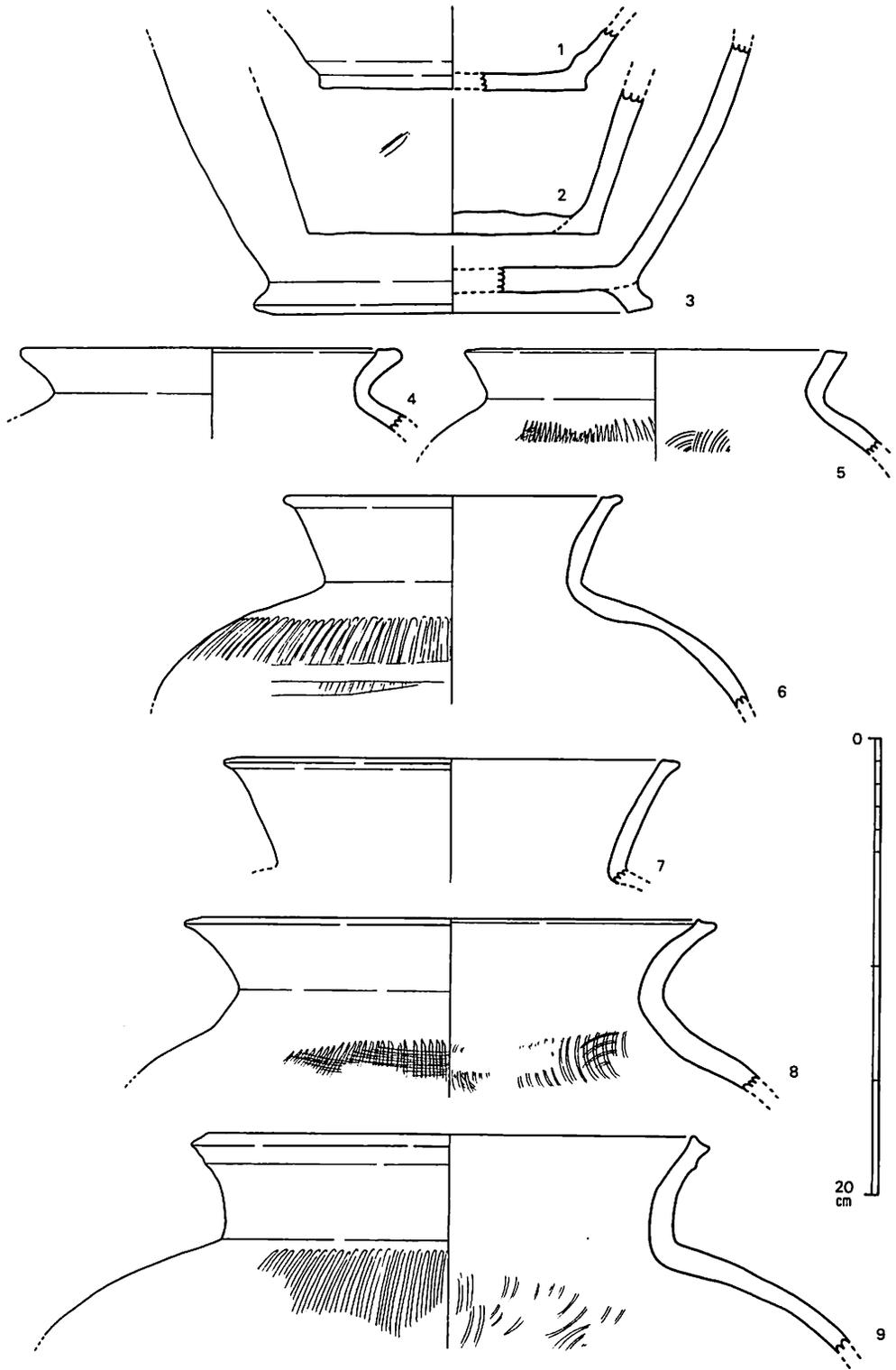
第29図 溝29暗灰綠色砂質土層出土遺物実測図(3) (縮尺：1/3)



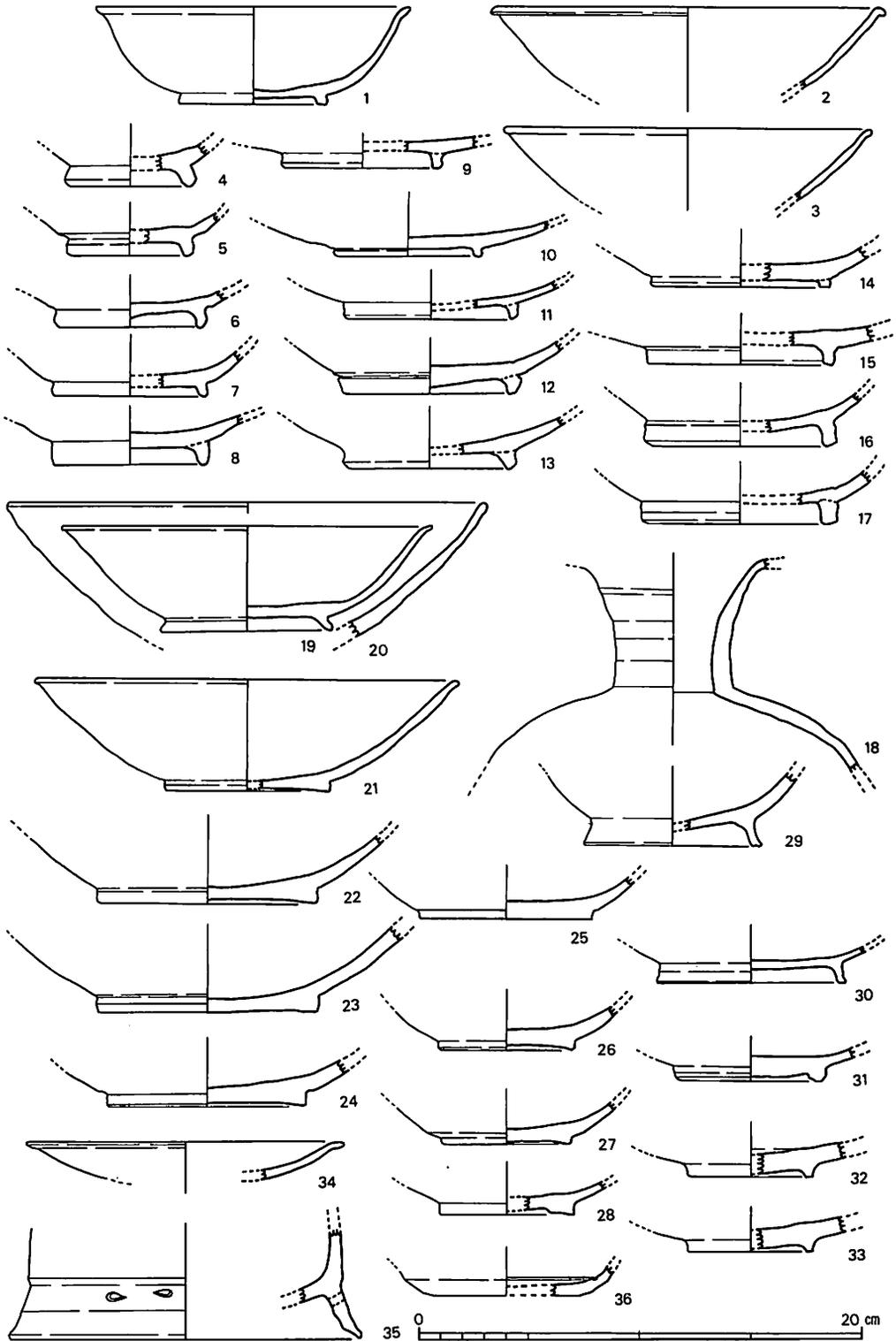
第30図 溝29暗灰綠色砂質土層出土遺物実測図(4) (縮尺: 1/3)



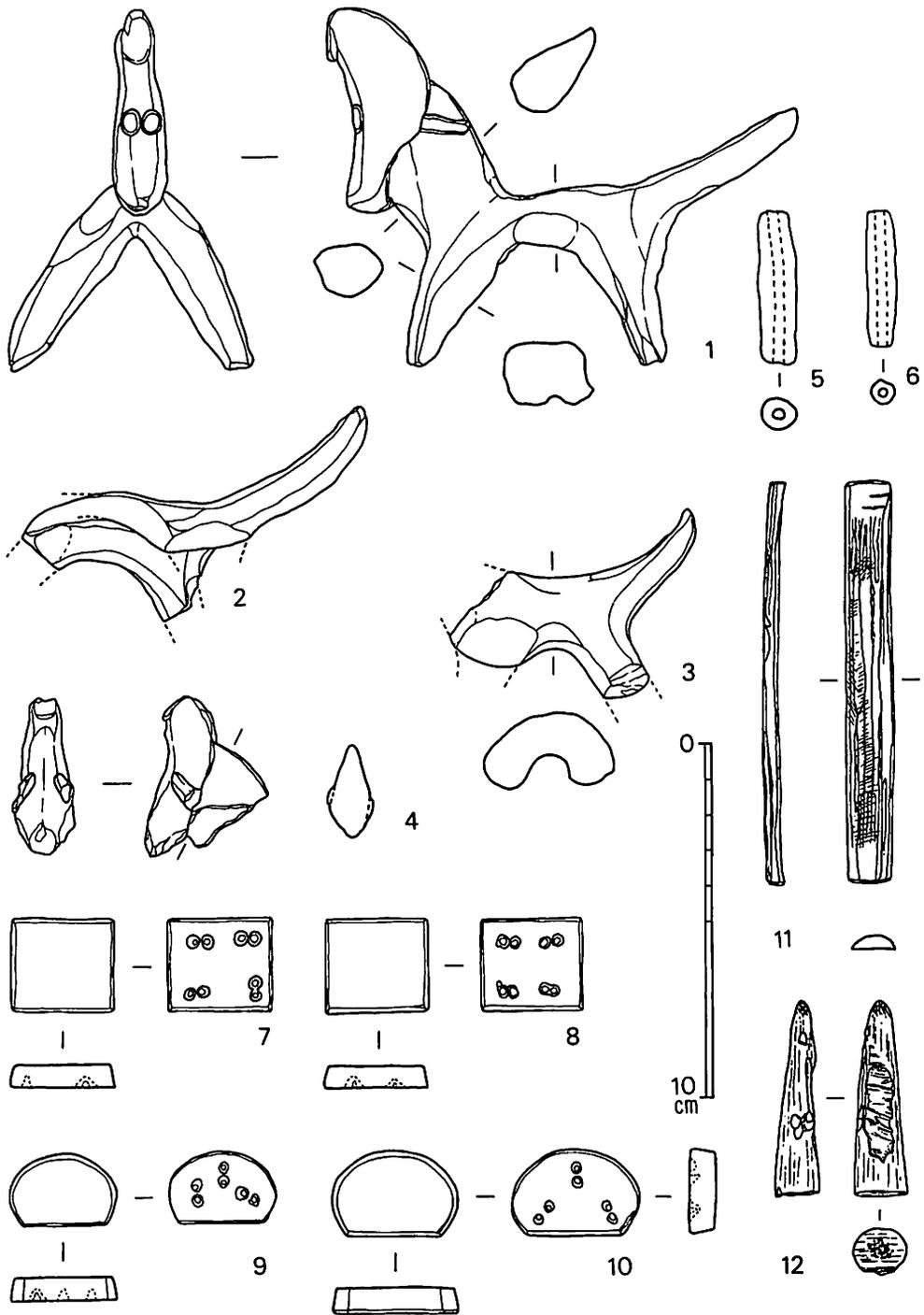
第31圖 溝29暗灰綠色砂質土層出土遺物実測図(5) (縮尺: 1/3)



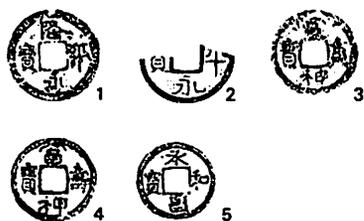
第32図 溝29暗灰綠色砂質土層出土遺物実測図(6) (縮尺：1/3)



第33図 溝29暗灰綠色砂質土層出土遺物実測図(7) (縮尺: 1/3)



第34図 溝29出土土製品・石製品・骨製品実測図 (縮尺: 1/2)



	古銭名	初 鑄 (西暦)	出 土 層
1	隆平永宝	延暦十五年(796)	暗青灰砂質
2	隆平永宝	〃 (〃)	〃
3	富壽神宝	弘仁九年(818)	暗灰緑砂質
4	〃	〃 (〃)	暗青灰砂質
5	承和昌宝	承和二年(835)	〃

第35図 溝29出土古銭拓影・一覧 (縮尺: 1/2)

ある。

第31図1～4は鉢で、すべて焼成は甘い。それぞれに口縁端部の形態が異なっている。5・6は大形の鉢で、5は胴部にタタキを施し、6の胴部にはヘラケズリを施す。7は口径30.0cm、器高9.9cmの摺鉢。

8・9は短頸壺。両者とも口縁部外面から肩部にかけて自然釉が付着し、9の内面には当て具の痕がナデ消されているが、若干残る。

第32図1～2は壺類の底部片と思われる。1・2は無高台、3は高台が付く。

4～9は甕で、胴部外面にタタキを施しているが、6はタタキの後に粗く横方向にヘラケズリを施し、8はタタキの後にハケ調整を若干施している。

〔灰釉陶器〕第33図1は、ほぼ完形の椀で、F7の暗青灰色砂質土層から出土(出土状況は図版第6下左参照)。口径14.1cm、器高4.5cmで、内面全面に灰釉を施すが、外面には施していない。2・3は椀の口縁部片で、両者とも口縁部内外面に施釉するのみで、他の部分には施釉していない。2は東濃系。

4～17は底部片であり、ほとんどが椀と思われるが、11は皿の底部か。また、これらのほとんどは猿投産のものであるが、4は東濃系と思われる。

18は長頸瓶で、東濃系。

〔緑釉陶器〕第33図19はほぼ完形に近い椀で、この層の最下面より出土(出土状況は図版第6下右参照)。口径16.5cm、器高4.2cmで、内外面全面に施釉し、黄緑色に発色している。20・21は口縁部まで残存しているもの。

22～33は底部片で、ほとんどが椀になると思われるが、30は皿の底部になるかもしれない。30と32は尾張北部の篠岡産と思われ、他は京都周辺で焼かれたものと思われる。28は、釉がかかっておらず、緑釉を施さない素地のままのものと思われる。

34は皿の口縁部片。

35は香炉で、復原底径は15.8cm。罌状の小孔を2個あけていて、鳴海産と思われる。

〔中国陶磁〕第33図6は皿になると思われ、釉は灰色に発色している。

〔石製品〕第34図10は石帯で、石材は暗灰色粘質土層出土のものよりやや大きい。丸柄で、大きさは3.6×2.4cm、厚さ7mm。暗灰色粘質土層出土のものよりやや大きい。裏面には、3ヶ所に孔を穿っていて、孔の中に緑青が認められるので、銅製の針金で帯に付け

たものと思われる。

〔古銭〕判読可能なものが5枚出土していて、それもこの溝の東寄りに集中していた。第35図に拓本と一覧を示しておく。

〔動物骨〕この層からも、暗灰色粘質土層よりはるかに少ないが、動物骨が出土している。以下、種と部位を示しておく。

ウマ (*Equus Prezewalskii*) 肢骨・歯

ウサギ (*Lepus Brachyurus*) 下顎骨

2) 溝24と出土遺物

(1) 遺構 (第36図, 図版第4下)

I地区北半とIII地区で検出した、ほぼ東西方向に連なる溝である。I地区北半中央の燃料タンク跡の断面より、その周辺が浅い落ち込みになる可能性は確認していたが、灰色砂礫層上面まで下げた時点で、この落ち込みが東西に連続したので、溝と判断した。

溝の幅は、I地区北半では7～9mと一定していないが、平均8m前後のものである。III地区では6.5mとやや狭まるようである。溝の肩は兩岸とも極めて曖昧なもので、上場は25.90～26.00mにあり、溝29の南側上場のレベルとほぼ同一である。深さは10～20cmほどの浅いものである。断面は、弓状にゆるやかに凹み、下場は確認できない。底レベルは、I地区北半の中央よりやや北で最も低い25.64mを測るが、全体に5～10cmの幅で上下があり、一定していない。ただ、検出した東端で25.83m、西端で25.75mを測り、当地の地形からみても、東から西へ極めてゆるやかに流れていたものと思われる。あるいは、常時流れていたのではないかもしれない。埋土は、平安時代の包含層と同じ灰緑色砂質土で、東側では溝29と同様、青灰色に変わっている部分があった。

この溝24は、新京都センタービル地の中区西側中央(G29・30)にみられる浅い落ち込みの続きではないかと思われる。ただし、第1次調査では、東への続きは確認されておらず、これは東の方が削平された可能性が考えられよう。

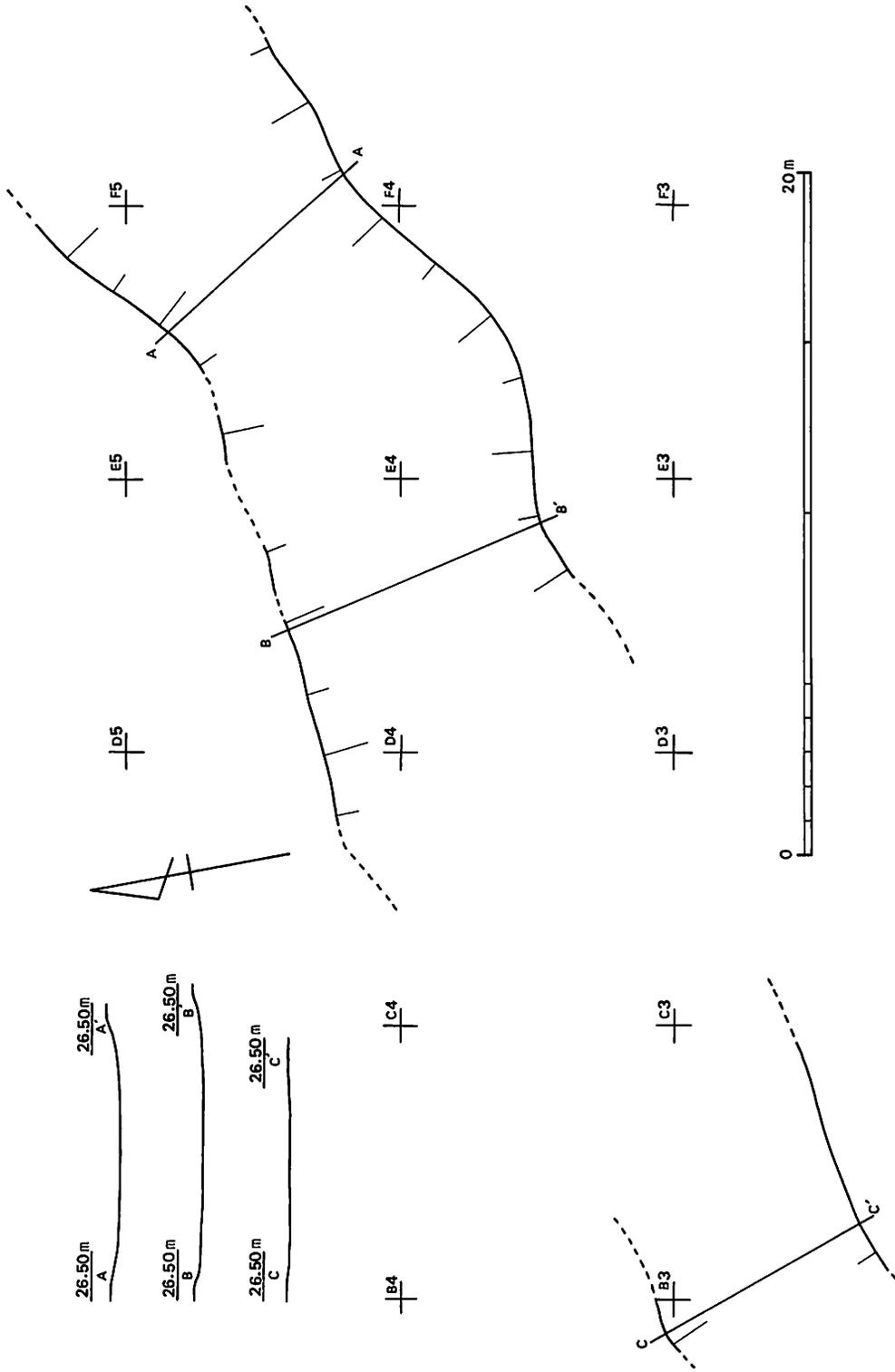
この溝は、前述の溝29から南へ約15m離れ、ほぼ同方向に流れている。そして、出土遺物がほぼ10～11世紀代を中心としているので、溝29の暗灰緑色砂質土層の時期とほぼ併行する時期から、それよりも新しい時期にかけて流れていたものととらえられる。したがって、溝29と一時共存し、溝29が埋った後も一定期間存続していたと考えられよう。

また、溝29と同様、人工掘削によるものではなく、自然流路と解されるが、この溝24からは土馬等が出土しておらず、必ずしも河川として認識されていなかったと思われる。

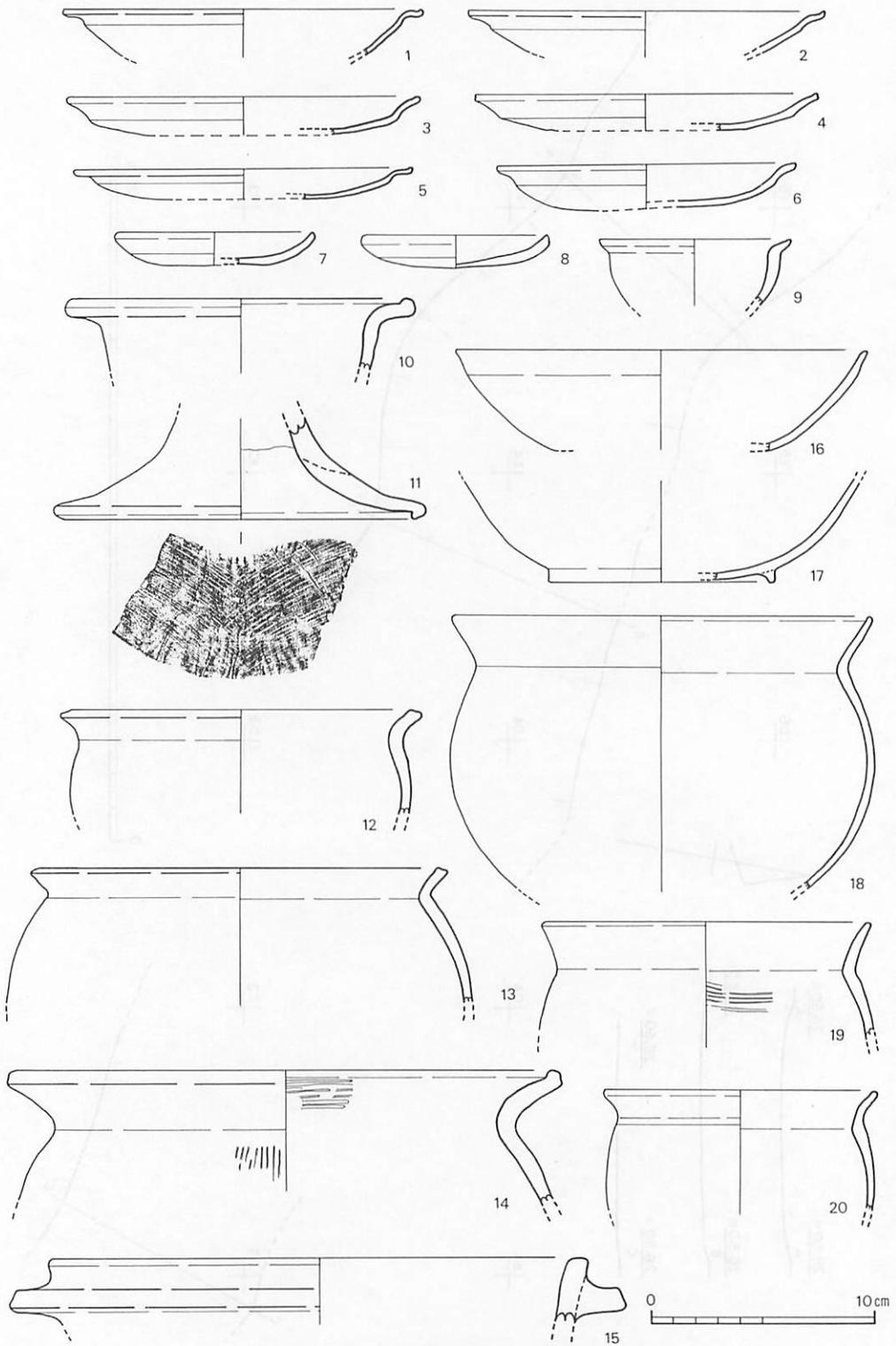
(2) 遺物 (第37～39図)

〔土師器〕第37図1～8は、薄手の『手』字状口縁の皿。1・2は口径16.0cm前後のやや深めの大型の皿。3～5は口径15.0～16.0cm、器高1.5cm前後の浅い皿。6は口径13.4cm、器高2.0cm。7・8は口径8.5cm前後、器高1.5cm前後の小皿。

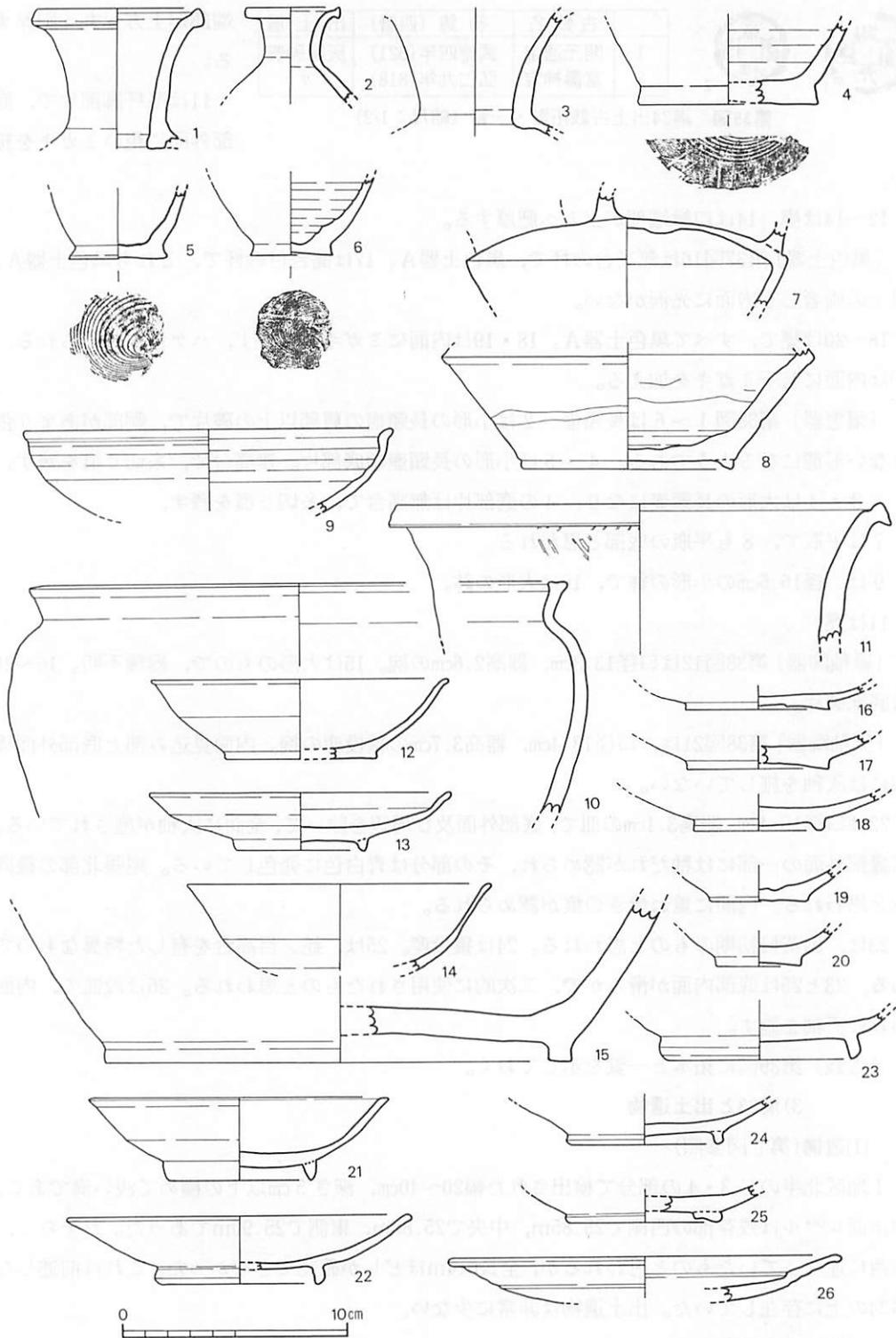
9は口径8.4cmの小形の鉢。10も鉢になると思われ、口径15.0cm。口縁部が大きく外反して、



第36図 溝24実測図 (縮尺: 1/200)



第37図 溝24出土遺物実測図(1) (縮尺：1/3)



第38図 溝24出土遺物実測図(2) (縮尺: 1/3)



第39図 溝24出土古銭拓影・一覧(縮尺:1/2)

	古銭名	初 鑄 (西暦)	出 土 層
1	開元通宝	武徳四年(621)	灰緑砂質
2	富壽神宝	弘仁九年(818)	〃

端部が上方へ丸く肥厚する。

11は高杯脚部片で、底部外面に粗いミガキを施

す。

12~14は甕。14は口縁端部が上方へ肥厚する。

〔黒色土器〕第37図16は無高台の杯で、黒色土器A。17は高台付の杯で、これも黒色土器A。以上の両者とも内面に光沢がない。

18~20は甕で、すべて黒色土器A。18・19は内面にミガキを施さず、ハケ目が認められる。20は内面に若干ミガキを加える。

〔須恵器〕第38図1~6は長頸壺。2は小形の長頸壺の肩部以上の破片で、胴部があまり張らない形態になるようである。4~5は小形の長頸壺の底部片。無高台で、糸切り痕を残す。

1・3・4は大形の長頸壺になり、4の底部片は無高台で、糸切り痕を残す。

7は平瓶で、8も平瓶の底部と思われる。

9は口径16.5cmの小形の鉢で、10は大形の鉢。

11は甕。

〔緑釉陶器〕第38図12は口径13.3cm、器高2.6cmの椀。15は大形のもので、器種不明。16~20は底部破片。

〔灰釉陶器〕第38図21は、口径13.4cm、器高3.7cmの猿投産の椀。内面見込み部と底部外面周辺には灰釉を施していない。

22は口径15.4cm、器高3.1cmの皿で、底部外面及び周辺を除いて、全面に灰釉が施されている。口縁部外面の一部には釉だれが認められ、その部分は青白色に発色している。尾張北部の篠岡産と思われる。内面に重ね焼きの痕が認められる。

23は、山茶椀初期のものと思われる。24は猿投産。25は、蛇ノ目高台を有した特異なものである。23と25は底部内面が滑らかで、二次的に使用されたものと思われる。26は段皿で、内面のみに灰釉を施す。

〔古銭〕第39図に拓本と一覧を示しておく。

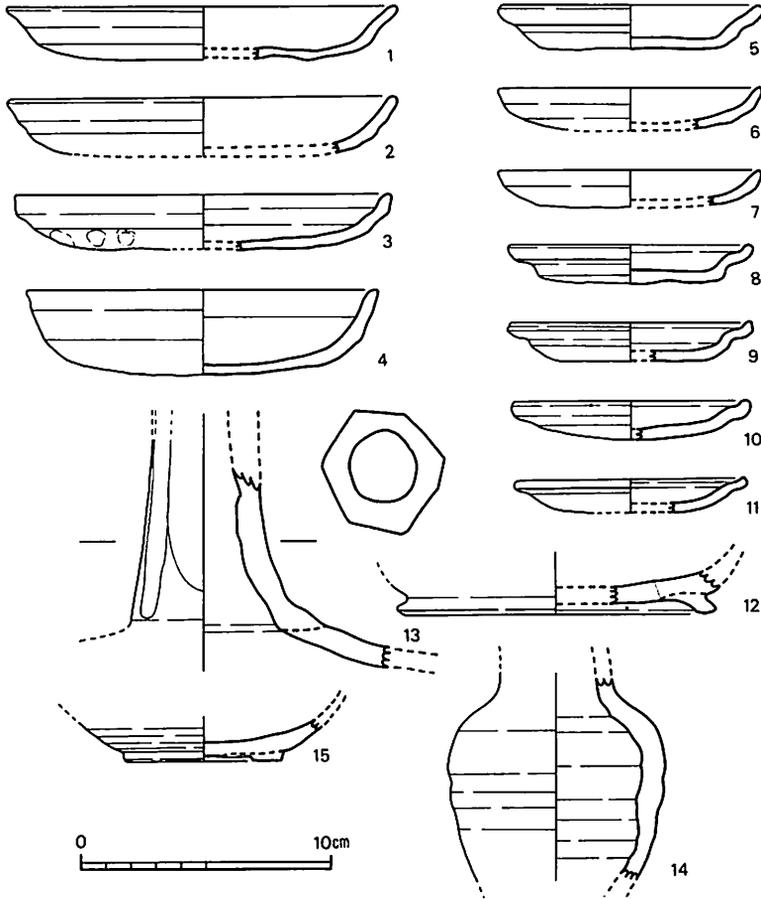
3) 溝23と出土遺物

(1) 遺構(第9図参照)

I地区北半のC3・4の部分で検出された幅20~40cm、深さ5cm以下の極めて浅い溝である。検出面レベルは残存部の西側で25.85m、中央で25.86m、東側で25.90mであった。おそらく、東西に連なっていたものと思われるが、全長6.4mほどしか確認できなかった。これは前述した溝24の上に存在していた。出土遺物は非常に少ない。

(2) 遺物(第40図)

〔土師器〕第40図1~11は皿。1~3は口径15.0~15.5cm、器高2.0~2.3cmで、2段ナデを



第40図 溝23出土遺物実測図 (縮尺: 1/3)

施す。4は口径14.0cm, 器高3.3cmの深い皿で, 2段ナデを施す。5~7は口径10.5cm前後, 器高1.7cm前後の小形の皿。8~11は厚手の「手」字状口縁の小皿で, 口径9.5cm前後, 器高1.5cm前後。12は高台付きの大形の椀になるか。

13は高杯脚部片で, 底部が大きく外へ開く。底部は内外面とも非常に粗いヨコナデで, 未調整に近いと言っても良い程である。ケズリで7面をとっているが, そのうち一面は幅が狭い。

〔須恵器〕第40図14は壺類になると思われ, 焼成は瓦質である。

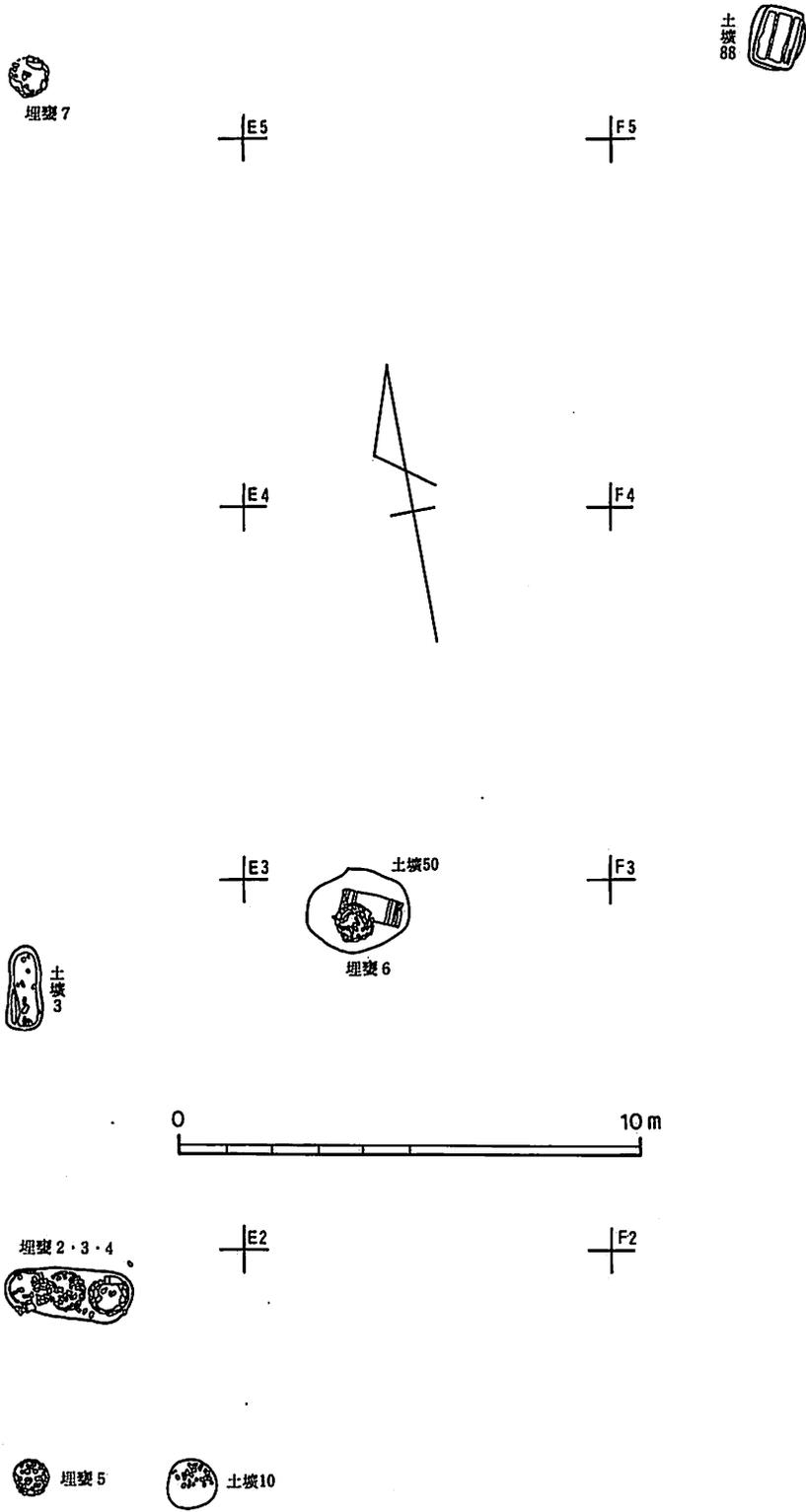
〔緑釉陶器〕第40図15は, 椀の底部片で, 底部外面には釉を施していない。

3. 墓と出土遺物

1) 概要(第41図)

今回の調査では, 発掘区域の主に南半部で, 墓と思われる遺構を10基ほど検出した。

墓の形態を分けてみると, (1)塋棺墓, (2)木棺墓, (3)土塚墓の3つに分けることができる。ただ, 土塚墓のうちには木棺を入れたものもありそうであるが, ここでは完全に木質の残っているものを木棺墓として扱うことにした。遺構名は, 調査中に付した名称をそのまま使用するこ



第41図 墓分布図 (縮尺: 1/160)

とし、甕棺墓は『埋甕』、木棺墓・土壙墓は『土壙』として扱っている。

甕棺墓は、本来は日用貯蔵容器である東播系須恵器ないしは常滑の大甕を、棺または蔵骨容器として用いるものである。埋甕2～7がこれに相当すると考えられる。屍体をそのまま入れて土葬にしたのか、火葬骨を入れたのか、骨が腐蝕してほとんど残っていないため、判然としない。しかし、後述するように、埋甕7に関しては土葬の可能性が高いものと思われる。以上は、調査中の所見等により墓と断定したものであるが、この他に甕棺墓であったものが破壊されたような状況が認められる土壙42がある。また、埋甕1に関しては、調査中の所見では墓と断定できなかったが、墓の可能性も否定できない面もあり、その点に関しては、『その他の遺構と遺物』の項で触れることにする。これらの甕棺墓は、I地区南半に4基(土壙42を入れると5基)あり、I地区北半を越えて、II地区南辺に1基分布しており、分布にある程度の偏在性が認められる。

木棺墓としては、土壙50と土壙88が挙げられる。土壙88は、特殊な構造をしており、一種の組合式木棺と考えても良いと思われる。

土壙墓としては、土壙3と土壙10が挙げられる。土壙3は、釘・木質残片が認められたことから、木棺墓の可能性が高い。土壙10は、小礫つまり骨片が出土したことから、墓と断定した。その他に、III地区東辺で小礫のつまった小土壙を数基検出したが、墓と断定するには至らなかった。

2) 甕棺墓

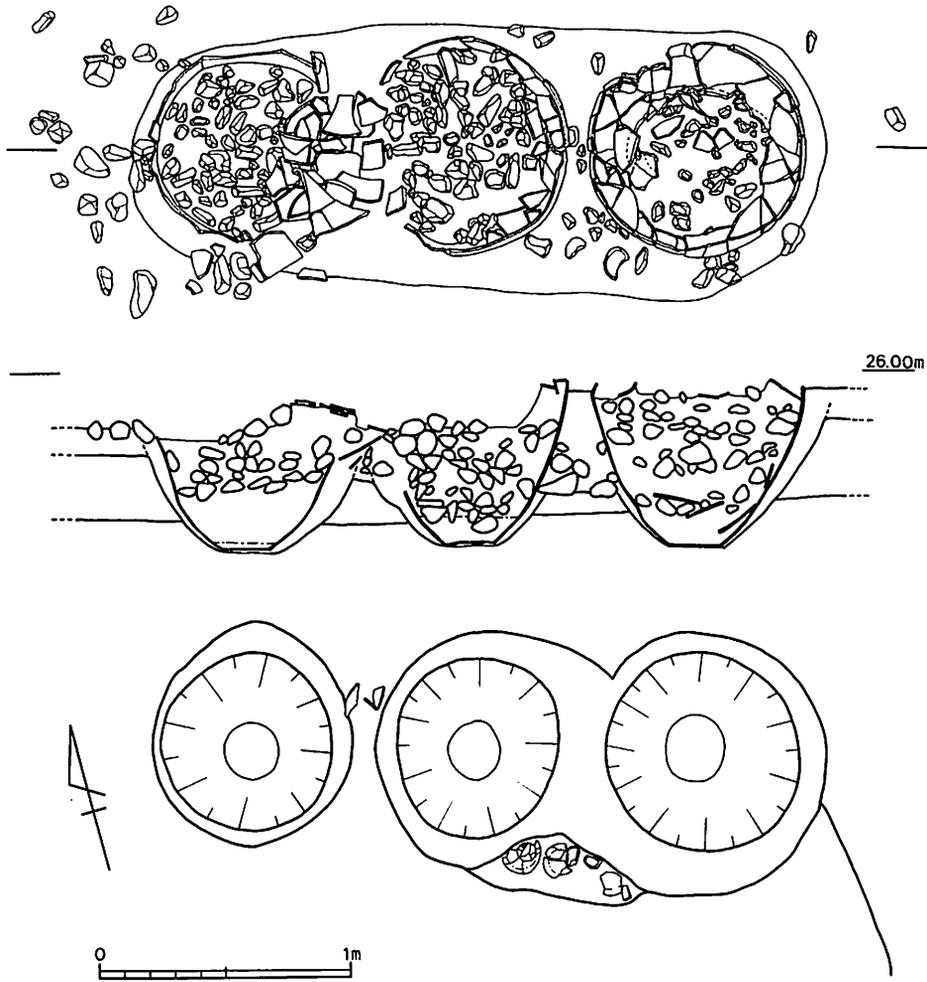
(1) 埋甕2・3・4と出土遺物

(a) 遺構(第42図, 図版第7・8)

I地区南半のD1北辺において、暗褐色砂質土層を少し下げた時点で、ほぼ東西方向に隣接して並ぶ常滑大甕3基を検出し、これを西の方から埋甕2・3・4とした。検出面レベルは、西側で25.78m、東側で25.93mであった。

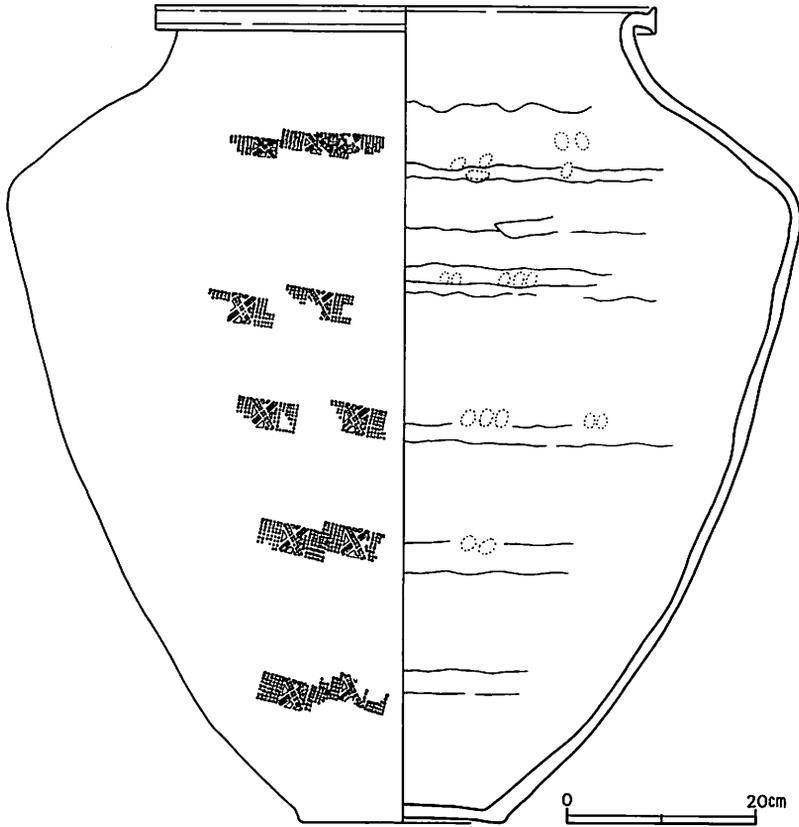
埋甕2は胴部中央以上が破損していた。埋甕3も西側部が同じように破損していたが、東側部は肩部以上が内部に陥没する状況を呈している。埋甕4は、残存状態が一番良く、肩部以上が内部に陥没する状況を呈しているが、口縁部片の残存は極端に少ない。埋甕2と3との間には、主に埋甕2の胴部片が集中していたが、この上に埋甕3の口縁部が載っていた。この埋甕3の口縁部は外に倒れこんだ状況ではなく、口縁端を本体の埋甕3の方向に向けている。また、埋甕2の胴部片も倒れこんだ状況とは思われない。断面図をみても分かるように、埋甕2と3の西側部の検出面は、埋甕4の検出面より15cmほど低い。以上のことから、埋甕2と埋甕3の西側部は上部がかなり削平されたものと思われ、破片はその際に捨て置かれたものと考えられる。一方、埋甕3の東側部と埋甕4の内部陥没状況は、土圧により崩壊したことを示しているが、口縁部片が少ないことは、上面がある程度削平されたことを示していると考えて良からう。

これら埋甕の掘方は、検出面では埋甕3・4の北側付近でわりと明瞭に認められたが、全体に不明瞭で、はじめは短辺が丸くなる長方形の一連の掘方と考えていた。さらに、この時点で

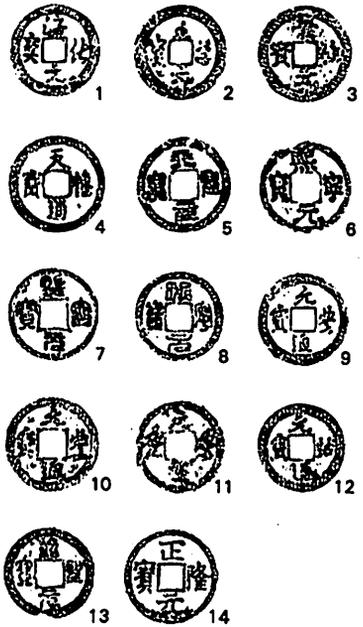


第42図 埋壙2・3・4実測図(縮尺:1/30)

は、土師皿群、集石遺構1(井戸8上層)との切り合い関係も不明であった。壙本体を取り上げるために、周囲を15cm前後下げて、やっと掘方と他の2遺構との関係を知ることができた。埋壙3・4はそれぞれ円形に壙の形状に合わせてスリ鉢状に掘り窪めているが、その掘方が一部重複し、双円状を呈している。そして、断面図をみると、その接点では灰色砂礫層を掘り込み、その上に石でもって両壙を固定している状況がみられる。また、底のレベルが両者とも25.31mとほぼ同じことから、両者は同時に掘り込まれたものと思われる。一方、埋壙2は、埋壙3とは10cmほど隔って存在していて、80~90cmの偏円形スリ鉢状の掘方である。底のレベルは25.29mと僅かではあるが前2者より低い。以上は、本来の掘方ではなく、かなり下げた時点での所見なので、このことから埋壙2の掘方が時期を異にして別途に掘られたと言うことはできない。むしろ、整美に東西方向に一列に並んでいること、壙の形態が良く似ていること、底部レベルがほぼ等しいことから、この3基は同時に掘り込まれ、同時に壙が埋設されたものと解釈した方が良いでしょう。なお、土師皿群と集石遺構1との関係も、集石遺構1→土師皿群(土墳?)

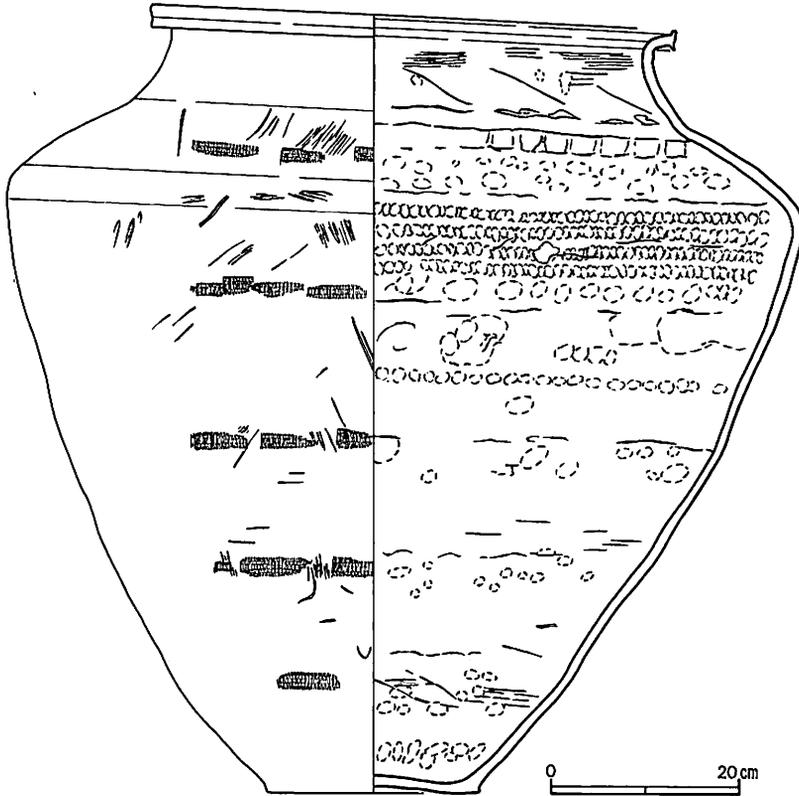


第43図 埋甕2 出土遺物実測図 (縮尺：1/8)

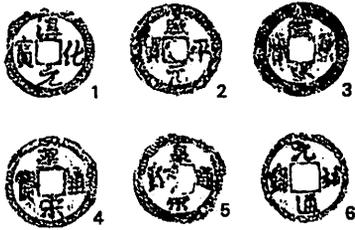


	古銭名	初 鑄 (西曆)	出土状況
1	淳化元宝	淳化元年(990)	底部
2	至道元宝	至道元年(995)	〃
3	景德元宝	景德元年(1004)	〃
4	天禧通宝	天禧年間(1017~1021)	〃
5	天聖元宝	天聖元年(1023)	〃
6	照寧元宝	照寧元年(1068)	埋土中
7	〃	〃 (〃)	底部
8	〃	〃 (〃)	
9	元豐通宝	元豐元年(1078)	底部
10	〃	〃 (〃)	〃
11	〃	〃 (〃)	埋土中
12	元祐通宝	元祐年間(1086~1093)	底部
13	紹聖元宝	紹聖年間(1094~1097)	底部
14	正隆元宝	正隆三年(1158)	埋土中

第44図 埋甕2 出土古銭拓影・一覧 (縮尺：1/2)



第45図 埋甕3 出土遺物実測図 (縮尺: 1/8)



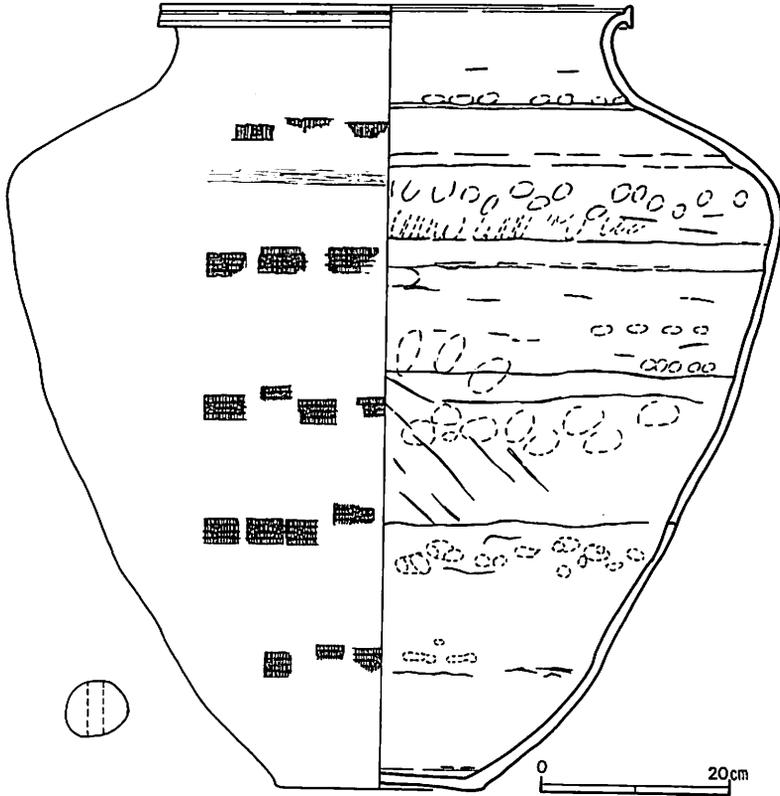
	古銭名	初 鑄 (西暦)	出土状況
1	淳化元宝	淳化元年(990)	埋土中
2	咸平元宝	咸平元年(998)	埋土水洗
3	元豊通宝	元豊元年(1078)	底部付着
4	皇宋通宝	宝元二年(1039)	埋土水洗
5	〃	〃 (〃)	〃
6	元祐通宝	元祐年間(1086~1093)	〃

第46図 埋甕3 出土古銭拓影・一覧 (縮尺: 1/2)

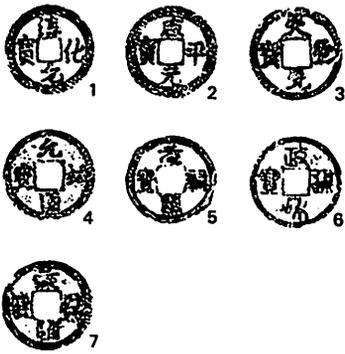
→埋甕2・3・4の切り合い順になることも判明した。

このように甕を入れるだけの墳を掘った後、器高約85.0cm、胴部最大径約84.0cmほどの常滑大甕を設置し、その隙間に黄褐色および黒褐色粘土を入れ、一部には甕の固定のために石を据え置いている。

甕の内部には、3基とも拳大の河原石が多量に詰っていたが、その河原石の存在する範囲は、埋甕2は底部上20cmまで、埋甕3・4は底部上ほぼ10cmのところまでである。各甕内からは、腐蝕の甚しい骨片と古銭が出土しており、埋甕2からは木材片も出土している。古銭は、甕内埋土の上部と河原石のつまった範囲の下部ないしはその下、それに底部付近甕内面に密着した状況で出土した。これらは六文銭と解することができる。また、埋甕2で検出された木片は火



第47図 埋甕4出土遺物実測図(縮尺:1は1/8, 2は1/1)



	古銭名	初 鑄 (西暦)	出土状況
1	淳化元宝	淳化元年(990)	埋土中
2	咸平元宝	咸平元年(998)	上層
3	天聖元宝	天聖元年(1023)	底部付着
4	元祐通宝	元祐年間(1086~1093)	〃
5	〃	〃 (〃)	埋土中
6	政和通宝	政和元年(1111)	〃
7	元〇通宝		〃

第48図 埋甕4出土古銭拓影・一覧(縮尺:1/2)

葬骨を納める木箱であった可能性も考えられる。したがって、墓と断定したわけであるが、火葬骨を入れた蔵骨器としてこれら大甕が使用された可能性の方が高い。また、河原石は人為的に入れられたものと解するより、後述する埋甕5のように、口に木蓋をし、その上に河原石を積んでいた可能性が高いと思われる。

出土遺物は古銭・骨片・木材片であったが、内部の土をすべて採集して水洗選別を行った結果、埋甕4から小玉が検出され、他には土師器等の細片が少量検出されたのみであった。

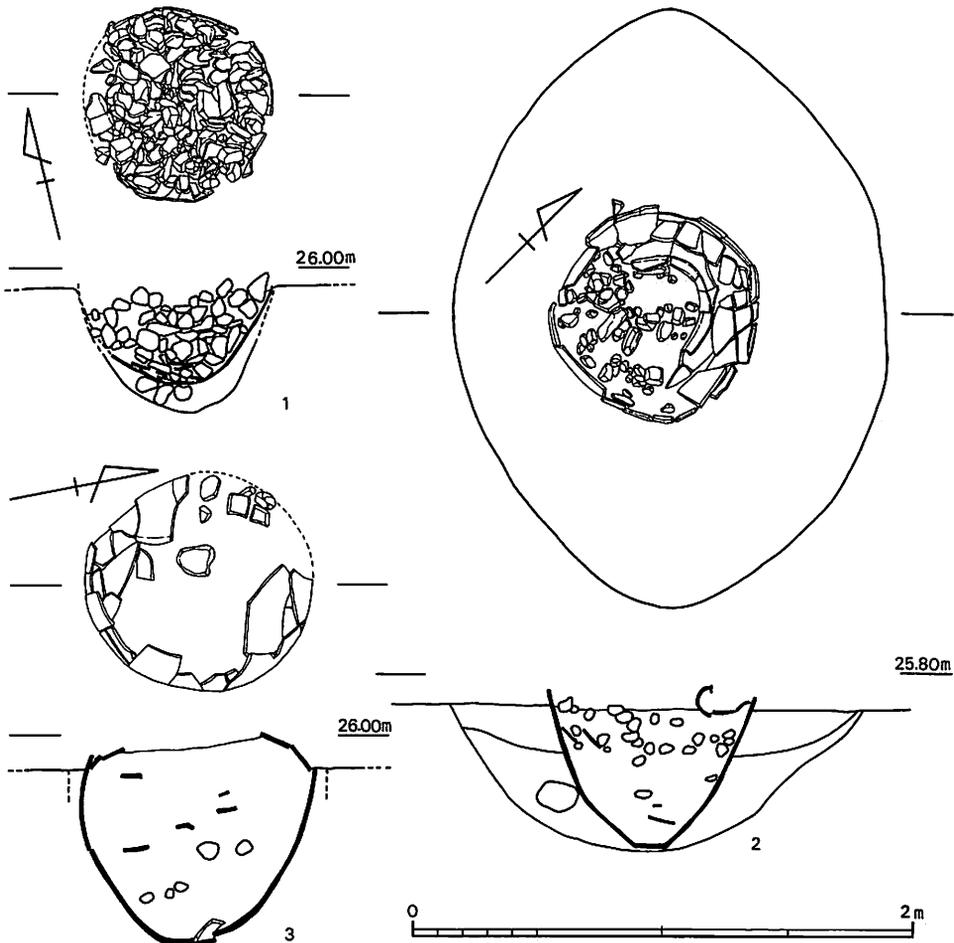
(b)遺物(第43~48図, 図版第56右・57)

〔埋甕 2 出土遺物〕 第43図は埋設主体である常滑大甕である。器高86.2cm，口径53.4cm，胴部最大径84.4cm，底径22.0cm。外面は暗小豆色を呈する。しかし，半分は明るい小豆色を呈し，その部分への火の当りが悪かったことを示している。内面は小豆色を呈する。肩部の焼きの良い部分には自然釉がゴマ状にかかっている。口縁部は上下に若干拡張していて，幅2.7cmの縁帯を形成しているが，下方への拡張は顕著なものではない。肩部が大きく張り，肩部から胴部にかけて5ヶ所に押印がある。底部は若干上げ底気味になっている。

この甕内部から古銭が14枚出土していて，第44図に拓本と一覽を示しておく。

〔埋甕 3 出土遺物〕 第45図は埋設主体である常滑大甕である。器高83.3cm，口径56.2cm，胴部最大径84.8cm，底径23.0cm。外面は暗灰色を呈するが，下半部は暗小豆色を呈する。内面は小豆色。肩部に自然釉がゴマ状にかかっている。口縁部は上下に若干拡張していて，幅2.4cmの縁帯を形成しているが，下方への拡張は顕著なものではない。肩部が大きく張り，肩部から胴部にかけて5ヶ所に押印がある。底部は若干上げ底気味になっている。

この甕内部から古銭が6枚出土していて，第46図に拓本と一覽を示しておく。



第49図 埋甕 5・6・7 実測図 (縮尺: 1/30) 1. 埋甕5, 2. 埋甕6, 3. 埋甕7

〔埋甕4出土遺物〕第47図1は埋設主体である常滑大甕である。器高83.8cm，口径50.3cm，胴部最大径82.3cm，底径22.5cm。外面は暗灰色を呈し，内面は暗小豆色である。前2者よりも焼成はかなり良い。肩部に自然釉がゴマ状にかかっている。口縁部は上下に若干拡張して、幅2.5cmの縁帯を形成しているが，下方への拡張は顕著なものではない。肩部が大きく張り，肩部から胴部にかけて5ヶ所に押印がある。底部は若干上げ底気味になっている。

第47図2は，埋土水洗選別より出土した石灰岩製小玉で，半分は欠失している。白黄色を呈し，8.3×7mmのほぼ球形をしていて，図の上方より孔を穿ったものと思われる。

この甕内部から古銭が7枚出土していて，第48図に拓本と一覧を示しておく。

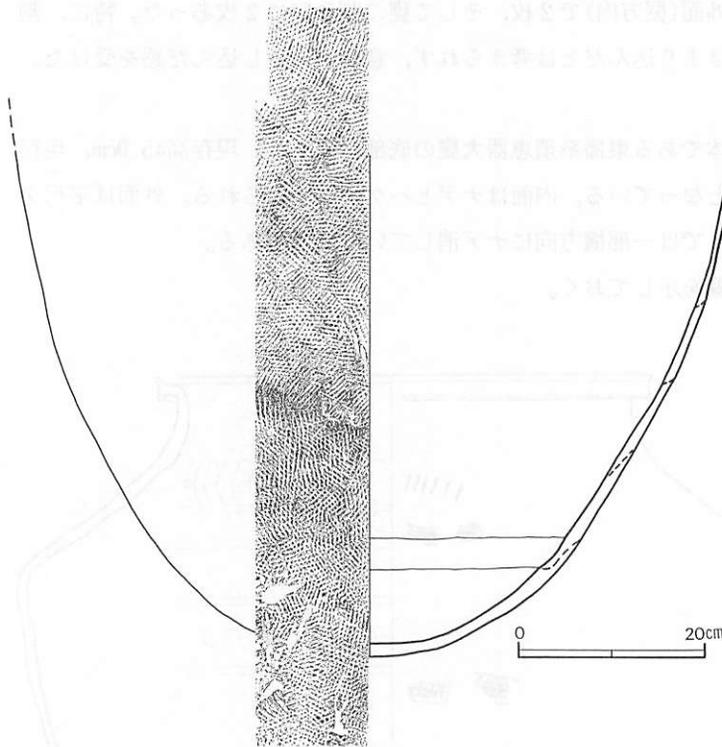
(2)埋甕5と出土遺物

(a)遺構(第49図1,図

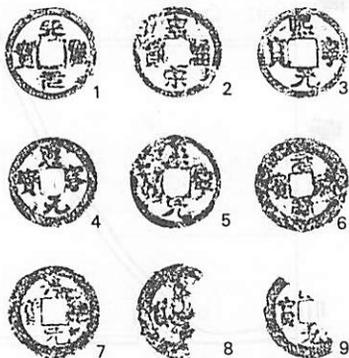
版第9)

I地区南半の南壁寄り，D1のほぼ中央部で，拳大の河原石が多量につまった東播系須恵器大甕の下半部を検出した。埋甕2・3・4の南方約4mのところ、検出面レベルは埋甕4の検出面のそれとほぼ同じである。甕の上半は，完全に削平を受け，西側部では底部付近まで甕片はなかった。

掘方は検出面では分からなかったが，甕本体を取り上げた時点での所見では，甕の直径ぎりぎりの掘方で



第50図 埋甕5出土遺物実測図(縮尺:1/8)



	古銭名	初 鑄 (西曆)	出土状況
1	天聖元宝	天聖元年(1023)	埋土中
2	皇宋通宝	宝元二年(1039)	甕外面
3	熙寧元宝	熙寧元年(1068)	掘方
4	〃	〃 (〃)	埋土中
5	〃	〃 (〃)	甕外面
6	元〇通宝		甕割れ口
7	淳〇元宝		付近
8	〇〇元宝		埋土中
9	〇〇元宝		甕割れ口

第51図 埋甕5出土古銭拓影・一覧(縮尺:1/2)

はなかったかと思われる。掘方は、丸底状に掘り込み、底レベルは25.43mである。そして、拳大の河原石を主に西側に3、4個置き、その上に東播系須恵器の大甕を埋設している。掘方の底にあった河原石は、この甕が丸底のため、固定石の役目を果たしていたと思われる。

内部は、前述したように、拳大の河原石が充満していて、埋甕2・3・4よりその密度は高い。甕底部内面近くにはこの甕本体の破片が若干存在し、小木材片が甕内面にへばりつくように多く出土している。それ故、もし甕の下半部だけを使用したのではないとすれば、この甕は火葬骨か屍体を入れ、口に木蓋をし、その上に河原石を積んでいた可能性が高いと思われる。

内部から、腐蝕した細骨片や古銭が出土していることから、墓と断定した。古銭は、甕内面にへばり付くように2枚、甕外面(掘方内)で2枚、そして甕の割れ口に2枚あった。特に、割れ口にあったものは、自然にはまり込んだとは考えられず、意図的にさし込んだ感を受けた。

(b)遺物(第50・51図)

〔須恵器〕第50図は埋設主体である東播系須恵器大甕の底部片である。現存高45.0cm、現存最大幅74.4cmで、底部は丸底となっている。内面はナデとハケメが認められる。外面は平行タタキが重複していて、底部近くでは一部横方向にナデ消している部分がある。

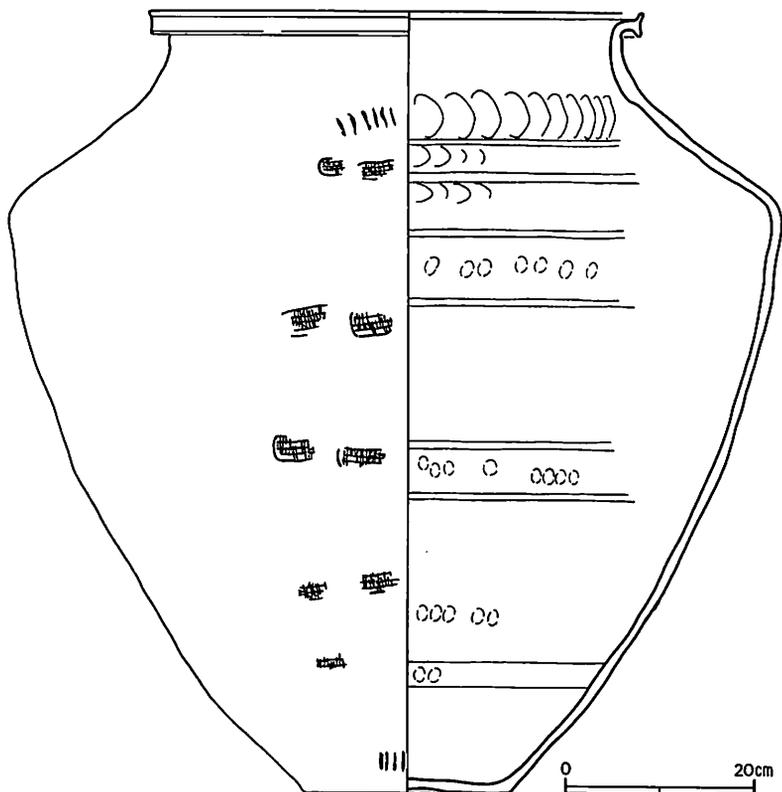
〔古銭〕第51図に拓本と一覧を示しておく。

(3)埋甕6と出土遺物

(a)遺構(第49

図2, 図版第10)

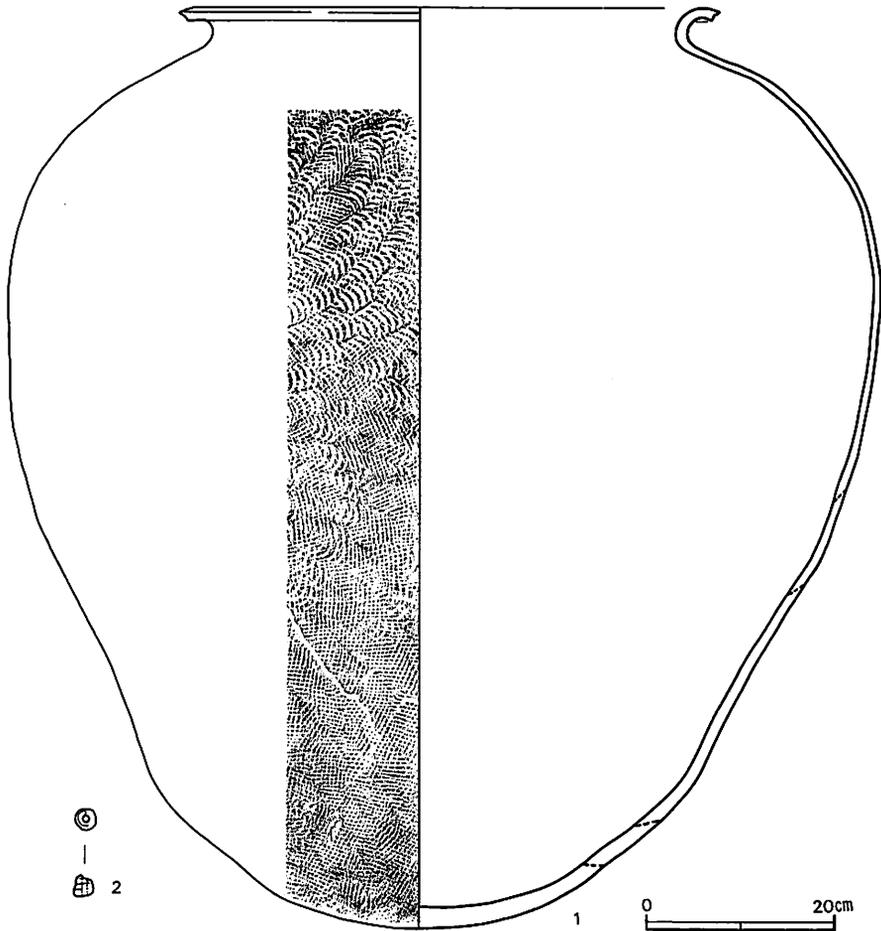
I 地区南半のE3北東隅で検出した常滑大甕である。検出面レベルは25.75mで、埋甕2～5よりも20cm弱下がってからであった。肩部以上が内部に陥没した状態を呈し、上面では口縁部の北半分が残っていた。口縁部の南半分は、甕内部の、口縁部北半分レベルよりかなり下で、これも陥没した状態で検出された。したがって、南側が先に



第52図 埋甕6出土遺物実測図(縮尺:1/8)

土圧により崩壊したものと考えられる。また、内部の埋土をあげると、東側の胴部が破損して
いて、この部分の外側に板材が数枚密着して立っていた。この板材は土壙50との関連性は薄い
ようで、甕を巡るように、それも破損部のみに存在していたので、破損部の当てに使われたと
考えられる。

この埋甕6は土壙50とほぼ同じ掘方であり、土壙50との関係は調査中も判然とはしなかつた
が、何らかの関連性はあるものと考えておいた方が良いかもしれない。掘方は1.75×2.45mの楕
円形を呈し、底レベルは25.10mである。あるいはこの大きな掘方内に別途の掘方があったのか
もしれないが、調査中においては分からなかった。ただ、この埋甕が掘方のほぼ中央部にある
ことは、この掘方が埋甕のそれであったことを示唆するものと言えよう。また、南側では河原
石を胴部にかませて固定している状況が認められた。



第53図 埋甕7出土遺物実測図 (縮尺：1は1/8, 2は1/1)



	古銭名	初 鑄 (西曆)	出土状況
1	咸平元寶	咸平元年 (998)	掘方
2	照寧元寶	照寧元年 (1068)	埋土中
3	不 明		上層

第54図 埋甕7出土古銭拓影・一覧 (縮尺：1/2)

内部には、小さな河原石が混じってはいるものの、埋甕2～5のような詰まり方ではなく、まばらで、大きさも小さく、わりと上方に集中する傾向があった。

内部からは、骨片・古銭等は出土しておらず、土師器・中国陶磁等が出土しているのみで、墓と断定する材料に乏しい。しかし、これが、固形物ではなく、液体の貯蔵容器であれば、前述したように胴部が破損してははその用をなさないわけで、かつ土壙50との関連から墓と断定した。

(b)遺物(第52図, 図版第58左)

第52図は埋設主体の常滑大甕である。器高83.2cm, 口径52.9cm, 胴部最大径82.5cm, 底径22.4cm。外面は暗灰色を呈するが、胴部破損部周辺は焼成が甘く、黄白色を呈している。内面は暗灰色を呈する。自然釉はかかかっていず、全体に焼成が甘い。口縁部は上下に若干拡張して、幅2.6cmの縁帯を形成しているが、下方への拡張は顕著なものではない。頸部下には、粘土を左方向にのぼしたために生じた不規則な段状もりあがり全周している。肩部が大きく張り、肩部から胴部にかけて5ヶ所に押印がある。底部から立ち上がる部分にはへら先による筋が全周する。底部は若干上げ底気味になっている。

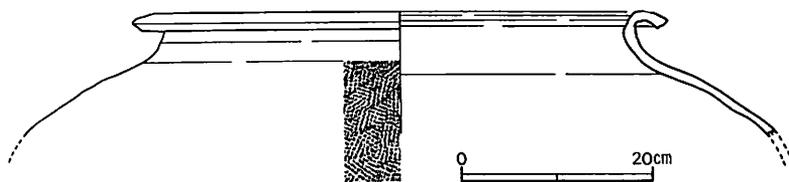
(4)埋甕7と出土遺物

(a)遺構(第49図3, 図版第11)

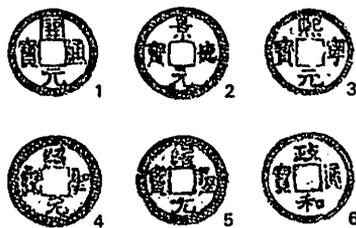
埋甕2～6の5基はI地区南半で検出されたが、この埋甕7はI地区北半を飛び越して、II地区南側、D5南辺で、単独で検出された。検出面レベルは26.00cmであった。東播系須恵器大甕で、口縁部は欠失して、周辺に散乱していたものの、肩部以下が残存していた。北東部分は、胴部まで破損して、これは土圧により内部に崩壊したものと思われる。

掘方は検出面でも分からず、甕本体を取り上げた後でも分からなかった。おそらく甕の胴径ぎりぎりの円形の掘方であったろうと思われる。甕の底部レベルは25.16mであった。

甕内部には、河原石はほとんど詰まっていなかった。底部には、10×20cmの長方形の穴が穿た



第55図 土壙42出土遺物実測図 (縮尺: 1/8)



	古銭名	初 鑄 (西暦)
1	開元通宝	武 德 四 年 (621)
2	景德元宝	景 德 元 年 (1004)
3	熙寧元宝	熙 寧 元 年 (1068)
4	紹聖元宝	紹聖年間 (1094~1097)
5	〃	〃 (〃)
6	政和通宝	政 和 元 年 (1111)

第56図 土壙42出土古銭拓影・一覧 (縮尺: 1/2)

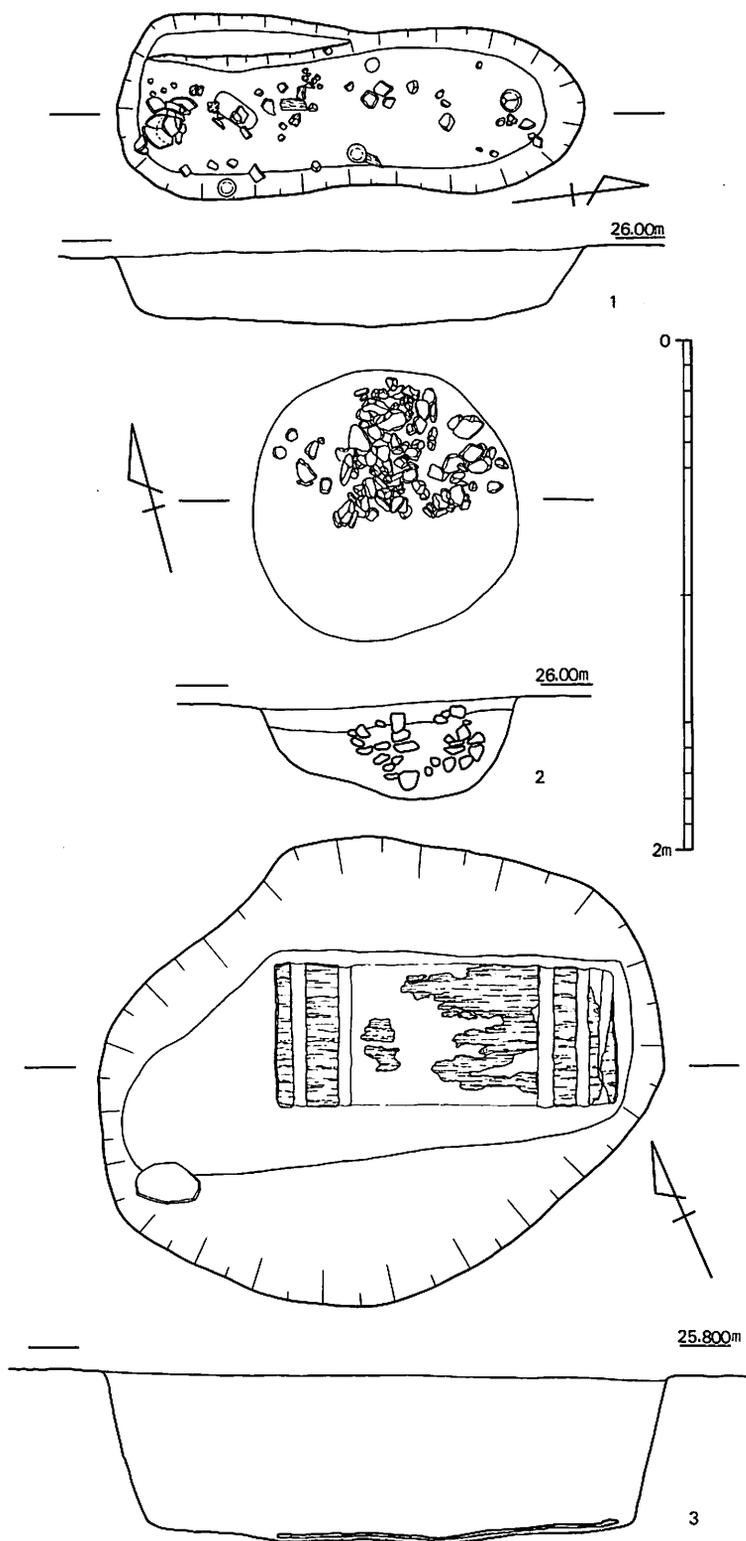
れており、その破片と思われるものが底部外面に存在していた。

内部からは、底部付近で板材片が出土している他、古銭が内部から2枚、掘方より1枚出土している。骨片は発見されなかったが、古銭が出土していることから墓と断定した。また、底部穿孔を行っていることは、土葬の可能性の高さを示唆するものと考えられる。

(b)遺物(第53・54図, 図版第58右)

〔須恵器〕第53図1は埋設主体である東播系須恵器大甕である。器高は97.0cm, 口径57.6cm, 胴部最大径93.0cmで、丸底となっている。口縁部はU字形に大きく外反し、端部が若干凹んでいる。内面には粗いナデが認められる。外面は胴部上半に綾杉状タタキ、胴部下半に重複した平行タタキが認められる。

〔ガラス製品〕青色を呈した、長さ2mm, 直径3mmほどの小玉で、中心に孔をあけて



第57図 土壙3・10・50実測図(縮尺: 1/30)1.土壙3, 2.土壙10, 3.土壙50

66 3. 墓と出土遺物

いる。棒状のものにまきつけて製作したようである。

〔古銭〕第54図に拓本と一覽を示しておく。

(5)土壇42と出土遺物

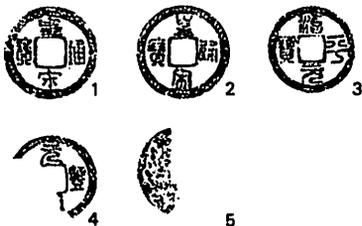
(a)遺構

I 地区南半, E 2 中央の西寄りのところで検出した。直径1.3mほどの円形の土壇で, 埋甕6の南方, 約4mほどのところにある。東播系須恵器大甕片その他の土器片と共に古銭6枚が出土し, うち3枚は甕内面に付着していた。したがって, この土壇はもとは甕棺を埋設していたのではないかも考えられるし, 他の場所にあったものを破壊して破片をこの土壇に投げ捨てたとも考えられ, 一応墓の破壊されたものと判断した。

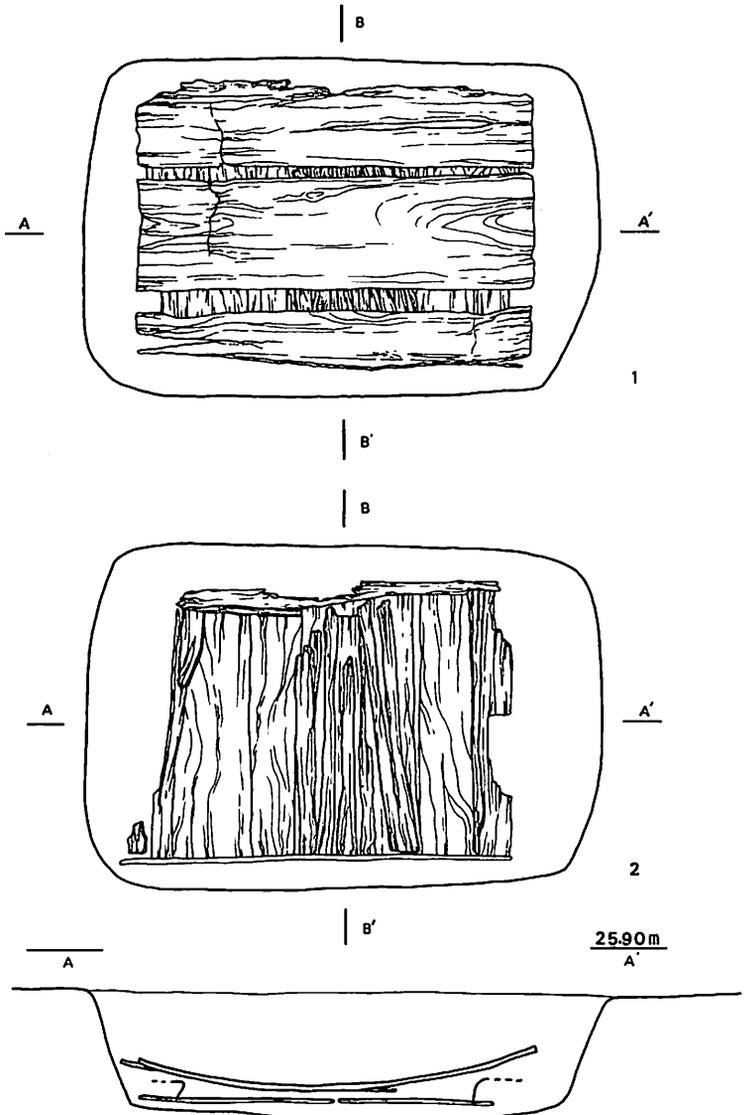
(b)遺物(第55・56

図)

〔須恵器〕第55図は東播系須恵器大甕の口縁部片で, 復原口径56.0cm。暗灰色を呈し, 口縁部内面から胴部外面にかけて自然釉がかかっている。口縁部はU字形に屈曲し, 下方へ垂れて

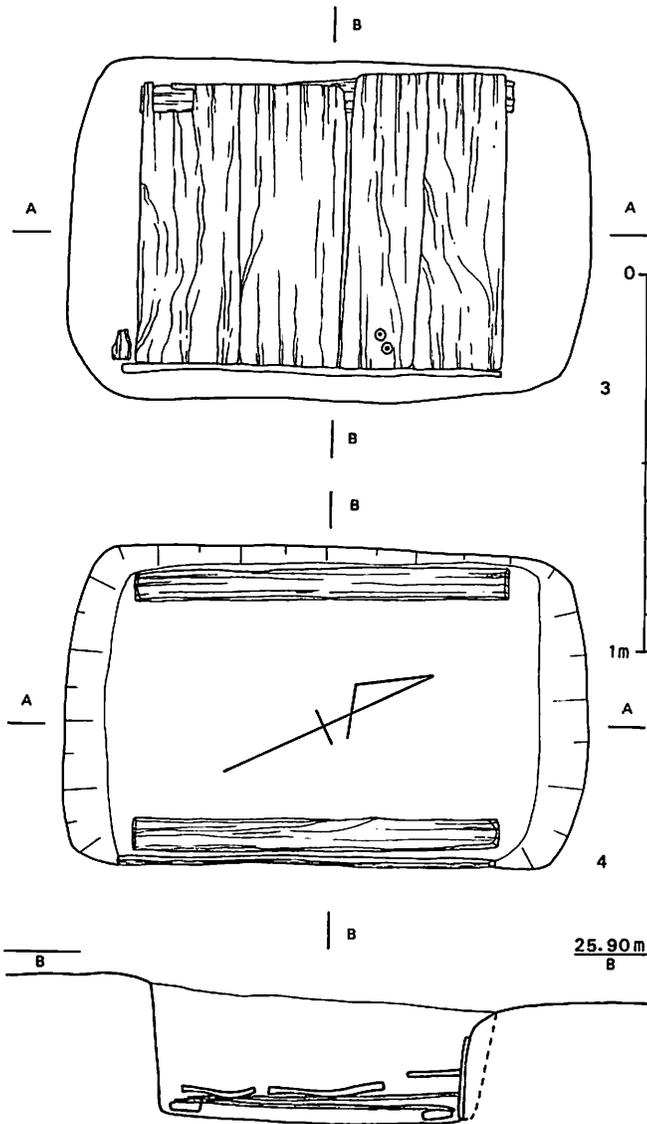


第59図 土壇88出土古銭拓影・一覽 (縮尺: 1/2)



第58図 土壇88実測図 (縮尺: 1/20)

	古銭名	初 鑄 (西曆)	出土状況
1	皇宋通宝	宝元二年 (1039)	東側
2	〃	〃 (〃)	底板の下
3	治平元宝	治平元年 (1064)	〃
4	元豊園園	元豊元年 (1078)	東側
5	不 明		〃
6	紛 失		〃



いて、端部は若干凹んでいる。肩部以下には平行タタキを重複して施している。

〔古銭〕第56図に拓本と一覧を示しておいた。

3) 木棺墓

(1) 土壌50 (第57図3, 図版第16上)

埋甕6を取り上げた後に検出した。掘方は埋甕6とほぼ同じであり、埋甕6と何らかの関連性はあるものと思われるが、調査中の所見でもどのような関連があるのか分からなかった。

底板と思われるものが、土壌底に水平に置かれていたが、腐蝕が甚しかった。底板は、55×135cmの板材で、短辺に平行に、西北側では端から7, 25cmのところに幅5cmの浅い溝をきり、東南側では端より10, 25cmのところに同じく幅5cmの浅い溝をきっている。底のレベルは25.05~25.10mにある。

骨、古銭等の出土はなかったが、木棺墓の可能性が高いと判断した。時期は、出土遺物が少なく決し難

いが、埋甕6とほぼ同じ時期と考えて良いかもしれない。

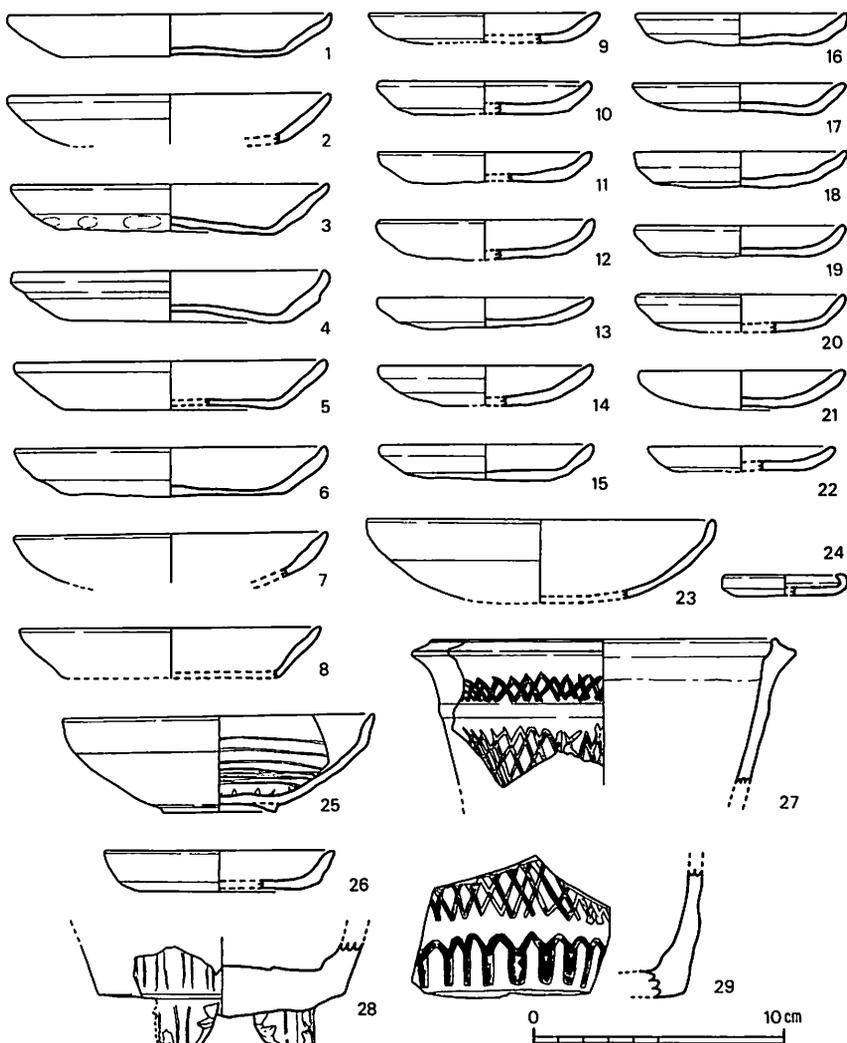
(2) 土壌88

(a) 遺構 (第58図, 図版第12~15)

II地区のF5南辺で検出した特殊な木棺墓で、検出面レベルは25.80m前後であった。

この墓を構築順に説明していくと、まず、長辺をほぼ南北方向に置く90×137cmの隅丸長方形の土壌を掘り込む。底のレベルは25.45mである。

そして、細長い板材を東西両長辺沿いに置いている。これは、両者とも長さ103cm、幅7~9cm、厚さ1.5cmのもので、それぞれ両端に直径5mm前後の孔があいていて、何らかの廃材を利用したものと思われる。



第60図 土壙3出土遺物実測図(縮尺:1/3)

この上に、底板と側板、小口板を構成するわけで、その順序は不明であったが、おそらく底板が先ではなかったかと思われる。

底板には、厚さ3mm前後の正目板を使用しており、北側が78×42cm、南側は75×53cmの不揃いの2枚を使用しているが、各々はまた2枚の正目板を組み合わせていて、実際には正目板は4枚となる。各板材には、端近くに2個単位の孔が認められ、長辺の一方の端は斜めに整形されている。また、南側底板の桜皮によるとじの部分の下には、このとじによって別の正目板材が付いていた。

側板は、底板の外側になるように設置されている。西側板は腐蝕が甚かったが、東側板は残存状況が良く、21×100cmの板材を立てていた。小口板は、側板と異なり、底板の上に載せられている。両者とも腐蝕が甚しく、どのような形状かは判然としなかったが、桜皮によるとじが認められ、かつ薄かったので、曲物の類を利用していたと思われる。

以上のように、一種の組合式木棺のようにした後、中央部北寄りに曲物材をのばしたものを東西方向に集中して入れている。そして、最後に南北方向に蓋板3枚をわたしている。蓋板も残存状況はあまり良くなかったが、中央の残りの良いもので30×105cmであった。

内部からの出土遺物は、のばした曲物材と古銭6枚のみであった。古銭は曲物材の下、底板に密着して2枚、底板と東側板との隙間下に2枚、そして底板の下から2枚の計6枚が出土した。

人骨は検出できなかったが、古銭6枚が出土し、かつ小形であるので、火葬骨を収納した墓と断定した。

(b)遺物(第59図)

古銭が6枚出土していて、第59図に拓本と一覧を示しておいた。

4)土墳墓

(1)土壇3と出土遺物

(a)遺構(第57図1, 図版第116下)

I地区南半, D2で検出した。検出面レベルは25.95mであった。

長辺がほぼ南北方向に向いた, 65×185cm前後の細長い土壇で、底レベルは25.65mである。

埋土は、上部に20cmほど黄褐色砂質土が入っており、その下に炭の層がほぼ全体にやや厚く認められた。底近くではこの炭はほとんどみられなかった。

底近くで腐蝕した骨片と板材片が若干検出され、釘も認められたので、古銭は出土していないが、木棺墓の可能性の高い墓と断定した。土器類は、破片は全体にまんべんなく存在していたが、土師皿の完形に近いものは南側に集中していた。

(b)遺物(第60図, 図版第59)

〔土師器〕第60図1～22は褐色系の皿。1～8は大形の皿で、口径は12.0～13.0cmの間に、器高は1.7～2.1cmの間に収まるものである。底部から口縁部にかけての屈曲は明瞭である。9～21は小形の皿で、口径は8.2～9.3cmの間に、器高は1.2～1.6cmの間に収まる。22は前者よりもやや小さく、口径7.5cm, 器高1.0cm。

23・24は白色系の皿である。23は口径14.0cmの皿, 24は口径5.0cm, 器高0.8cmの小形の下皿。

〔瓦器〕第60図25は、口径12.4cm, 器高3.8cmの椀で、内面見込みにも暗文を施している。26は、口径9.2cm, 器高1.6cmの皿。

〔中国陶磁〕第60図27～29は同一個体と思われる青磁香炉で、復原口径13.7cm。外面全面から口縁部内面まで釉が施されているが、それ以下の内面は施釉されておらず、黄褐色を呈し、照りが認められる。口縁部は、端部が若干凹んでいる。外面には、斜格子文を施していて、底部周辺にはジグザグ文の下に、縦方向の凹線文を全周に巡らす。底部には獣足様の脚が付いていて、おそらく3個付いていたものと思われる。

(3)土壇10

(a)遺構(第57図2, 図版等17上)

I 地区南半, E 1 西側で検出した。検出面レベルは25.93mである。位置的には埋甕5の東側約3mのところにある。

直径1.05m前後の円形の土壌で、丸底状に掘り込まれ、底レベルは25.50mである。内部には拳大かそれ以下の河原石が詰まっていた。この河原石の上には黄褐色砂質土がのっていた。

第57図2は半截し南側のみ先に調査した時点のもので、その際、骨片が検出されたので、古銭は出土していないものの、墓と断定した。

出土遺物は少なかったが、上層の黄褐色砂質土から半分が欠失した丸柄の石帯(瑠璃製)、埋土水洗選別からガラス製小玉が出土している。

4. 井戸と出土遺物

1) 概要(第61・62図, 第1表, 図版第18~37)

今回の調査では、井戸を50基前後(うち、現代5基)検出した。新京都センタービル地では91基を検出しており、発掘面積は今回の方が少ないものの、単純な密度比率の問題でいえば、66基前後の存在が想定されよう。しかし実際には、現代井戸を除いて、その想定を20基ほど下回っている。このことは、新京都センタービル地でも、南西部にいくと井戸の数が減ることと関連し、また今回もI・III地区で井戸の検出が少なかったこととも関連しよう。

分布でいえば、圧倒的に発掘区の北半、それも7ラインを中心にして、溝29内・周辺に集中する傾向を指摘しよう。

また、井戸のうち、28と32、37と38、そして36は重複ないしは二重になっていて、これらに關しては各項で説明したい。

井戸の分類に関しては、前報告に順ずることとする。今回、素掘曲物式井戸、方形横板式井戸、方形木組式井戸、方形隅柱横棧式井戸、方形横棧式井戸、多角形豎板側式井戸、石組側式井戸は検出されたが、円形樋側式井戸と瓦側式井戸は検出されておらず、新たに漆喰側式井戸と素掘式井戸を追加することとする。新たに加えた井戸以外、各形式の井戸の規定については何ら変わるところがないので、前報告の叙述をそのまま引用することとする。なお、各井戸の諸要素は第1表に、井戸出土古銭は第62図にまとめた。

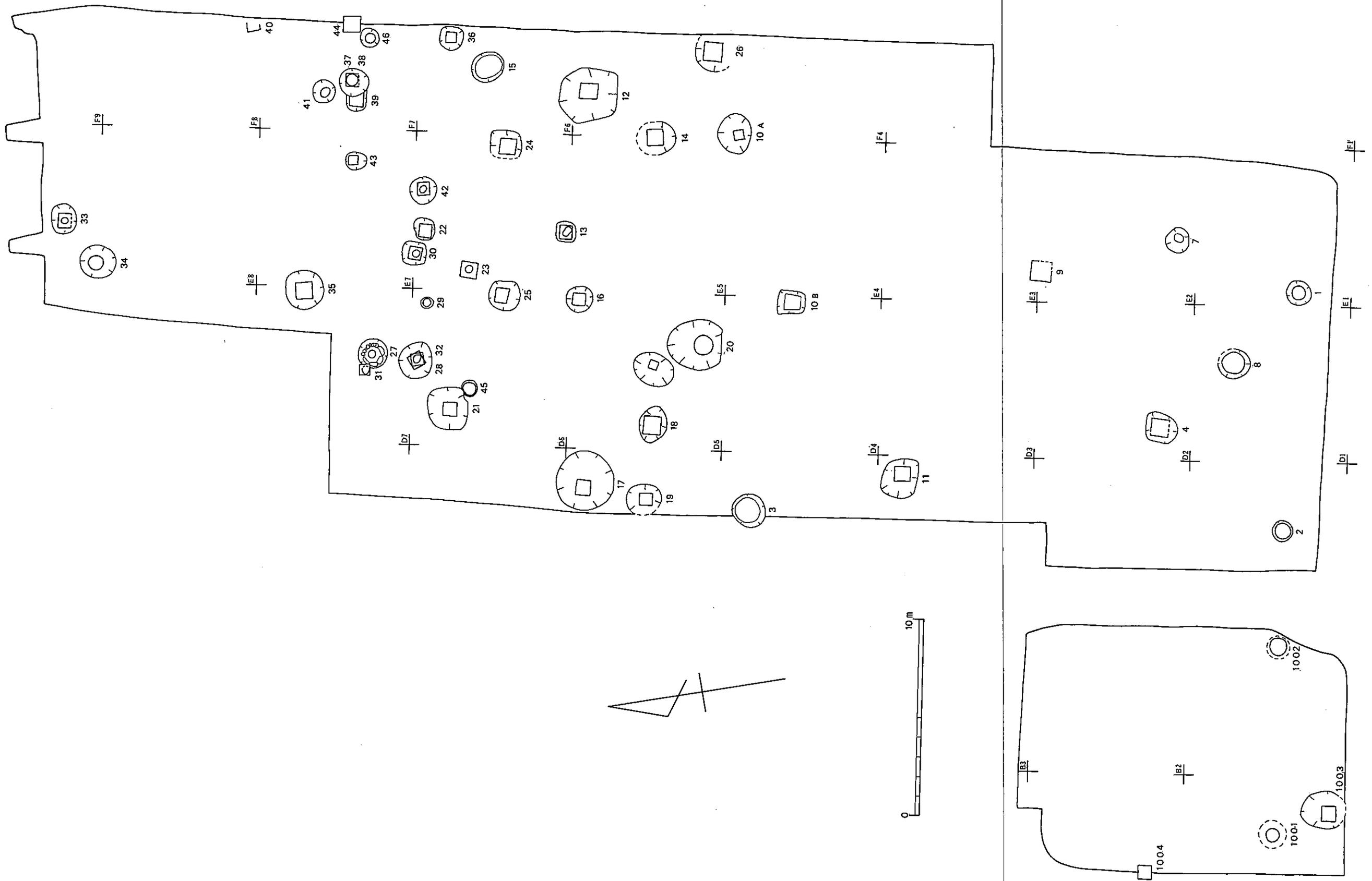
2) 素掘曲物式井戸と出土遺物

(1) 遺構(第63図)

『井戸枠を欠き、曲物のみからなる井戸。素掘曲物式とは、本来、井戸枠を設けず、底板を欠く曲物を土中に埋置した井戸の形式をいうが、……造井時の枠が消失し井筒の曲物のみ遺存するものを含むかもしれない。しかし、双方を分離しがたいので、一括しておくことにした。』

今回の調査では、井戸8(第63図1, 図版第18下)・29(第63図2, 図版第27下)・34(図版第30上)・41・45・46(第63図3, 図版第35下)の6基がこの形式に属する。

井戸8の上部は、拳大以下の礫が集中しており、この部分は曲物を確認するまでは集石遺構1として把握していた(図版第7参照)。



第61図 井戸分布図 (縮尺: 1/200)

第1表 井戸一覧表

井戸名	類別	筒	規模cm	底高m	時期	26	方形横棧?		90×92	25.20	平安末
井戸1	漆喰		76	25.30	現代	27	石組	曲	70	25.24	室町?
2	〃		76	24.70	〃	28	方形木組	曲	62×63	25.38	?
3	索掘		125	25.25	〃	29	索掘曲物		46	25.46	平安末
4	方形横棧		90×90	24.96	平安末	30	方形横棧	曲	65×68	25.16	〃
5	} 土塀					31	方形木組	曲	54×57	25.28	〃
6						32	〃		65×66	25.33	〃
7	索掘曲物?		?	25.04	平安末	33	方形横棧	曲	69×72	25.19	〃
8	索掘曲物		40	25.37	平安	34	索掘曲物		71×73	25.07	〃
9	方形横棧		102×104	24.82	鎌倉	35	方形横棧		83×85	25.47	?
10A	方形横板		42×49	24.97	〃	36内	〃		46×46	25.27	鎌倉
10B	方形横棧?		?	25.54	平安	36外	〃		58×58	25.25	〃
11	方形横棧		74×77	25.05	鎌倉	37	多角形豎板		64	25.40	室町
12	〃		61×85	25.91	〃	38	方形隅柱横棧		56×58	25.18	〃
13	方形木組	曲	66×69	25.43	平安	39	方形横棧			25.21	平安末
14	方形横棧		80×81	25.06	鎌倉	40	〃			25.63	〃
15	索掘		130	24.99	平安末	41	索掘曲物		50	25.20	〃
16	方形横棧		60×64	24.97	鎌倉	42	方形木組	曲	61×63	25.10	〃
17	〃		77×78	24.77	?	43	方形木組?		45×47	24.95	鎌倉
18	〃		80×81	24.69	鎌倉	44	方形横棧		72×77	25.29	〃
19	方形木組		57×66	24.91	平安	45	索掘曲物		73	25.41	平安末
20	多角形豎板		93	24.35	鎌倉	46	〃		48	25.37	〃
21	方形横棧		67×71	25.16	平安末	1001	漆喰		70	24.71	現代
22	〃		64×64	25.14	〃	1002	〃		90	?	現代
23	〃	曲	76×83	25.00	〃	1003	方形横棧		71×71	24.83	平安末
24	〃		78×79	25.18	〃	1004	〃		?	?	平安末
25	?		?	24.90	〃	土塀114	方形横板		78×78	24.83	鎌倉

(2)井戸 8 出土遺物(第64図)

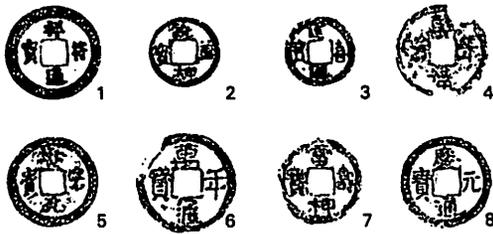
〔須恵器〕第64図1は東播系の摺鉢。口径32.0cm, 器高11.5cm。口縁端部が内側に若干肥厚している。外面から口縁部内面にかけてヨコナデを施し, 内面はハケ調整を行っている。底部外面には, 丸棒状のものによる窯記号と思われるものがある。2も1と同じく東播系の摺鉢。復原口径29.0cm, 器高9.0cm。焼成は甘い。調整は1と同じである。

〔灰釉陶器〕第64図3は復原高台径7.7cmの椀底部片。灰釉は内面見込みには施されず, 外面の底部と高台には施されていない。

3) 方形横板式井戸(第65図)

「幅広の板を方形に組み, その方形木組みを上下に重ねて, やとい柄で水平動を固定した形式の井戸。」

今回の調査では, 井戸10Aと土塀114の2基だけであった。



	古銭名	初 鑄 (西暦)	出土遺構
1	祥符通宝	祥 符 元 年(1008)	井戸10A
2	饒益神宝	貞 観 元 年(859)	〃 11
3	延喜通宝	延 喜 七 年(907)	〃 32
4	萬年通宝	天 平 宝 字 四 年(760)	〃 37
5	□宗元宝		〃 38
6	萬年通宝	天 平 宝 字 四 年(760)	〃 39
7	富壽神宝	弘 仁 九 年(818)	〃 45
8	慶元通宝	慶 元 元 年(1195)	土壙114

第62図 井戸出土古銭拓影・一覧 (縮尺：1/2)

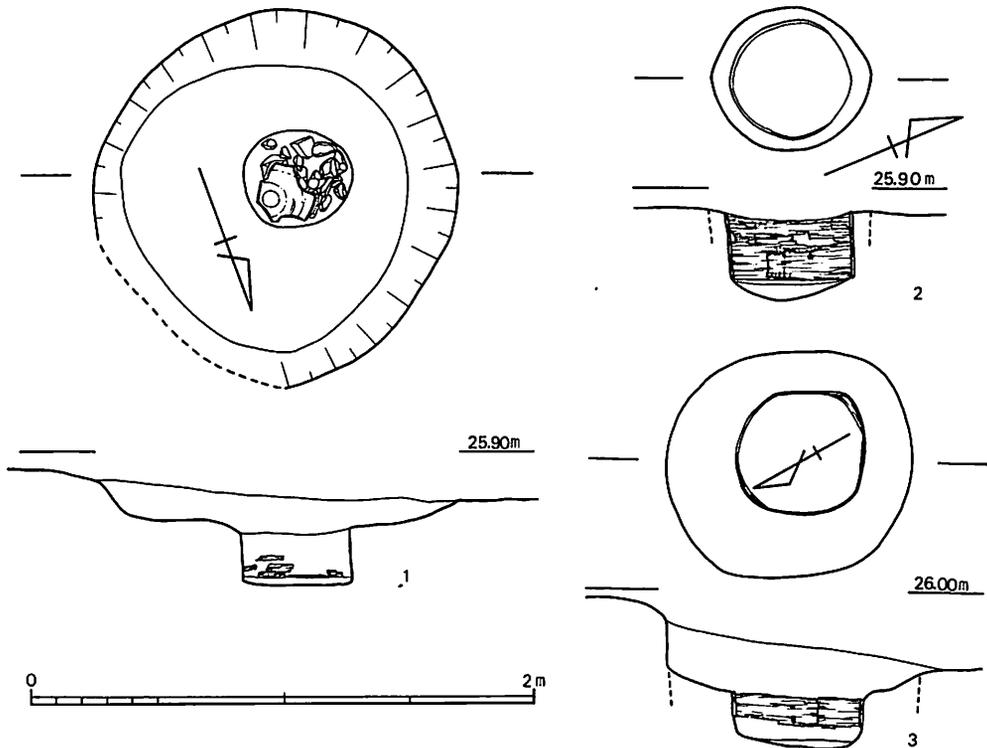
まるのか、上部に木または石の枠をさらに設けていたのか、明らかにしえない。井筒を有するものと、欠くものがある。井筒はことごとく曲物である。」

井戸10A(第65図1, 図版第19下)は, 東西側板に25×55cmの板を使用し, その内に25×50cmの板を南北側板として設置して、柄や釘を使用した痕跡はなかった。井戸枠上面近くで、廃棄時の空気抜きに使用されたとされる竹片を検出したが、残存状態は非常に悪かった。また、ここからはハシ等の木製品がかなり出土している。

土壙114(第65図2, 図版第23下)は、残存状態は悪かったが、組み方は、やとい柄を使用し、各板材端の柄を切っていない部分から組み合わせた部分に釘を打って固定している。

4) 方形木組式井戸(第66図)

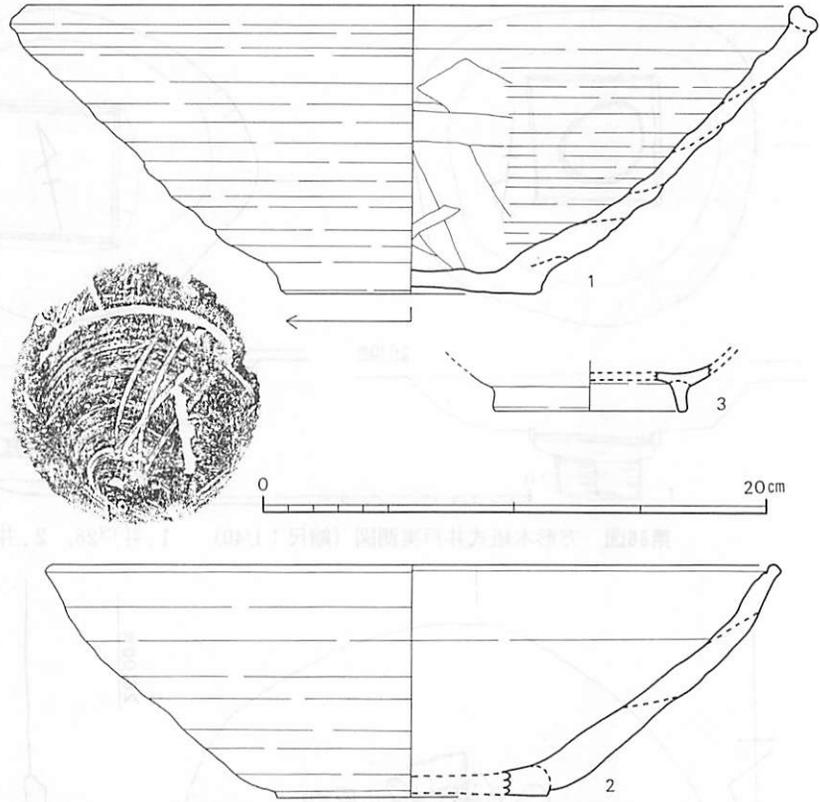
「4本の角材からなる方形の木組みをもつ形式。素掘り坑の最下部に木組みをすえるにとど



第63図 素掘り曲物式井戸実測図 (縮尺：1/30) 1. 井戸8, 2. 井戸29, 3. 井戸46

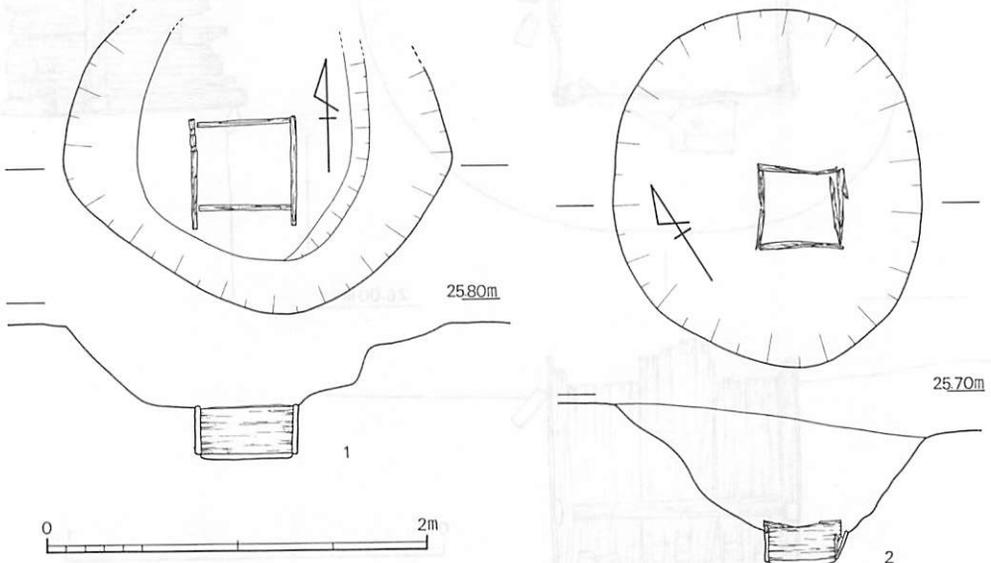
今回の調査では、井戸13(図版第21上), 19, 28, 31(図版第28下), 32, 42(図版第35上), 43の計7基を検出した。ただし、井戸19・43には側板があった可能性もあるかもしれない。

井戸28(第66図1, 図版第27上)と32(第66図2, 図版第29上)は全く同一の位置にあり、作りかえの可能性もある。その場合、井戸32が先に作ら

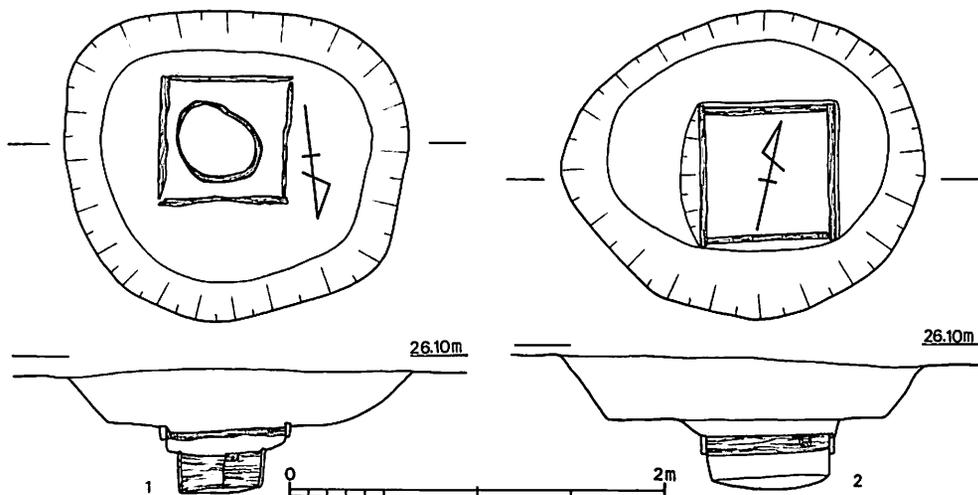


第64図 井戸8出土遺物実測図(縮尺:1/3)

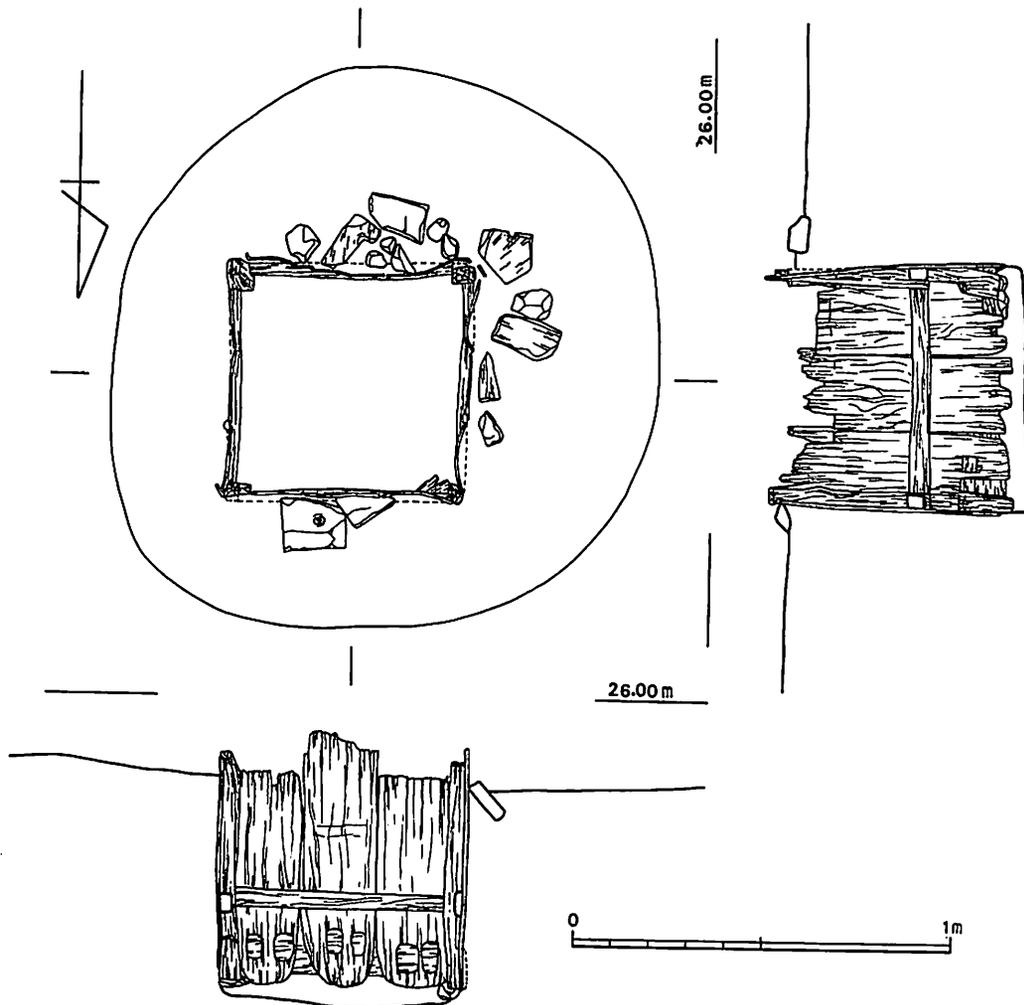
れたことになる。井戸32の北側板は、孔があげられていて、廃材を利用したものと思われる。井戸32の方形木組上端は25.63mで、井戸28の方形木組下端は25.68mなので、井戸28は約5cm上



第65図 方形横板式井戸実測図(縮尺:1/40) 1.井戸10A, 2.土壙114



第66図 方形木組式井戸実測図（縮尺：1/40） 1.井戸28, 2.井戸32



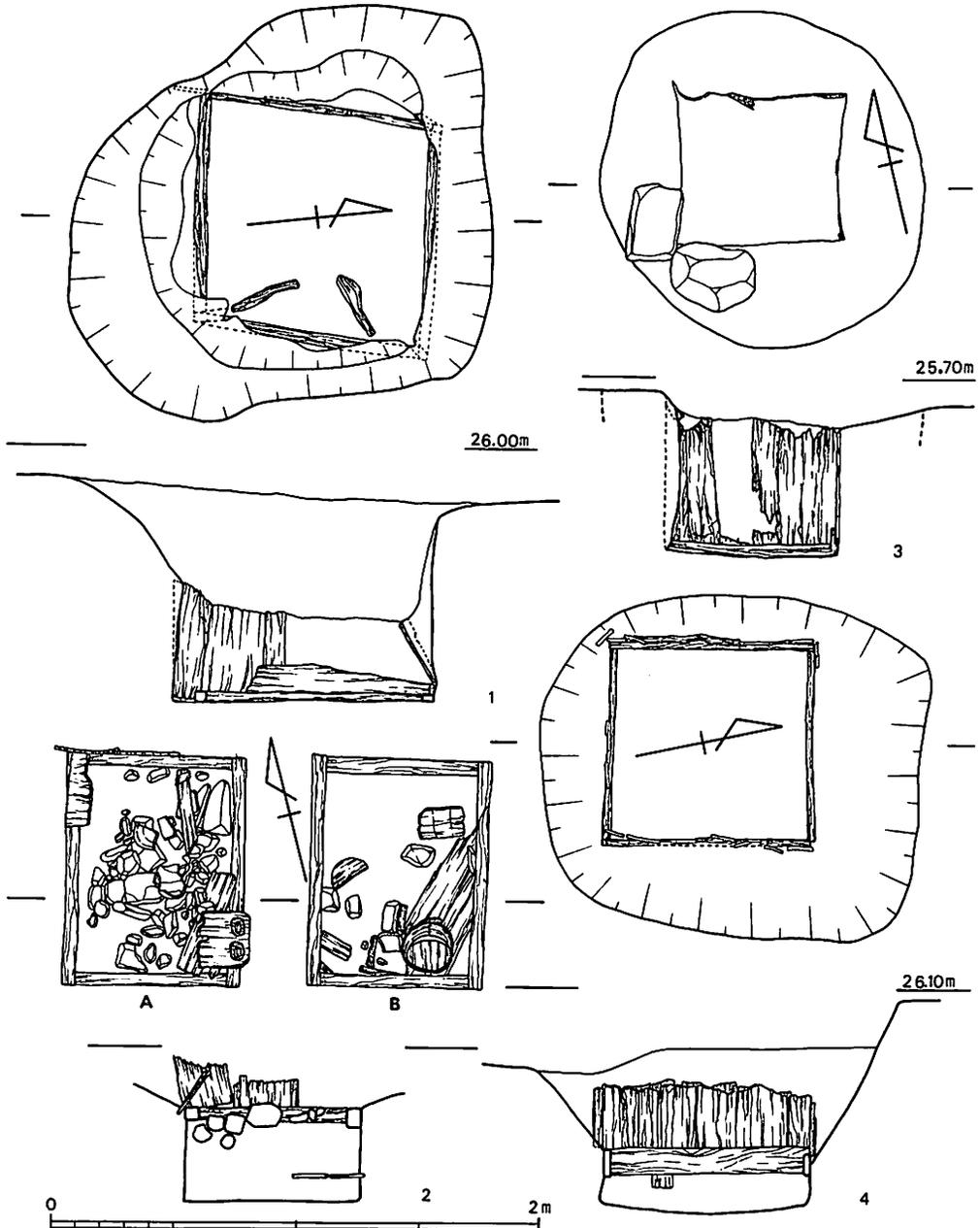
第67図 方形隅柱横棧式井戸実測図（縮尺：1/20） 井戸38

にあることになる。そして、井戸28の井筒は井戸32の井戸枠内に入っていて、その底レベルは井戸32とほぼ同じであった。

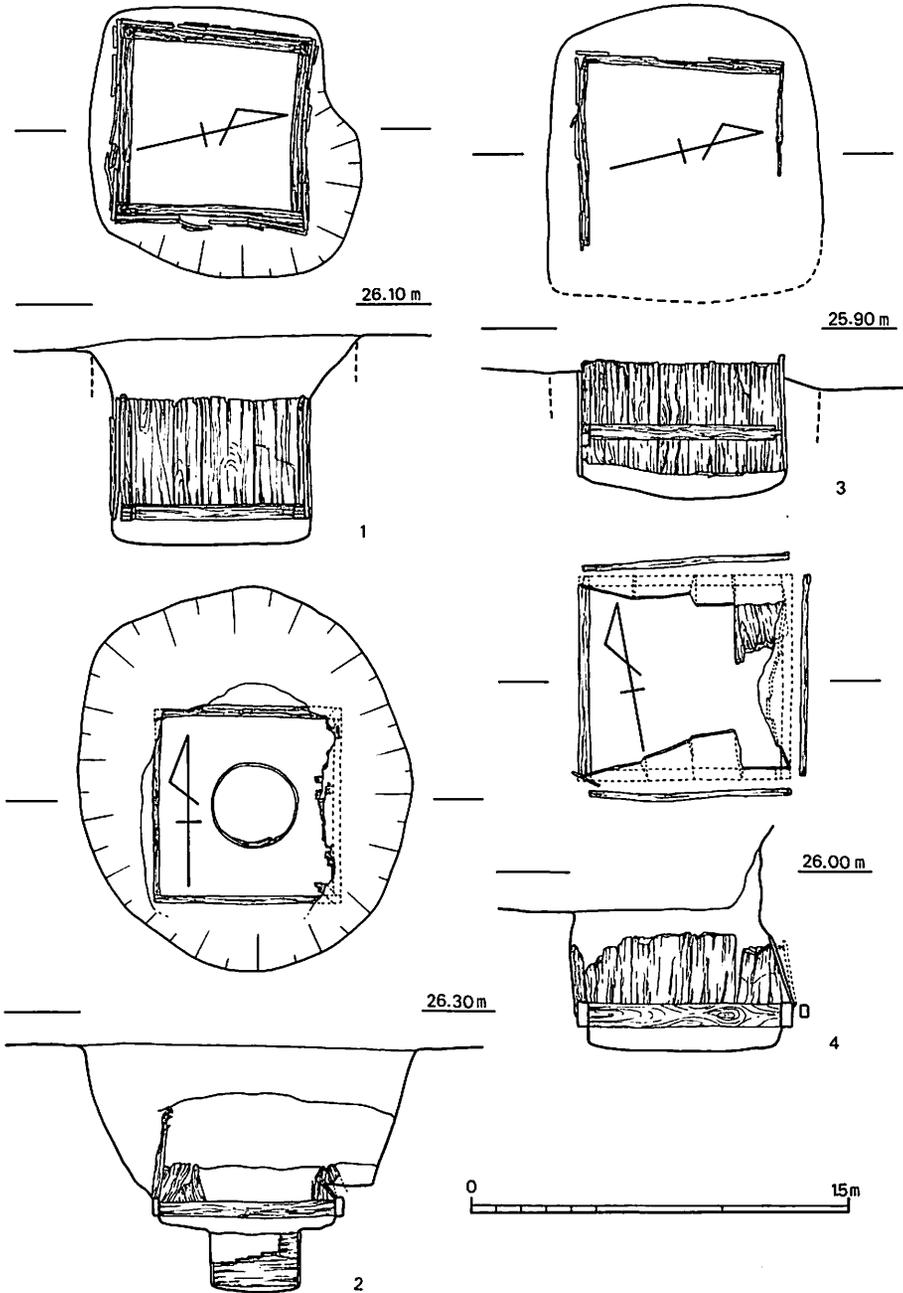
5) 方形隅柱横棧式井戸(第67図)

『板をならべて側板とし、角材の隅柱をたて、柱に柄穴を穿って横棧をわたす形式。漏水を防ぐために、側板の背後にさらに裏板を添えたものがある。』

今回の調査では、井戸38の1基のみがこの形式に属する。

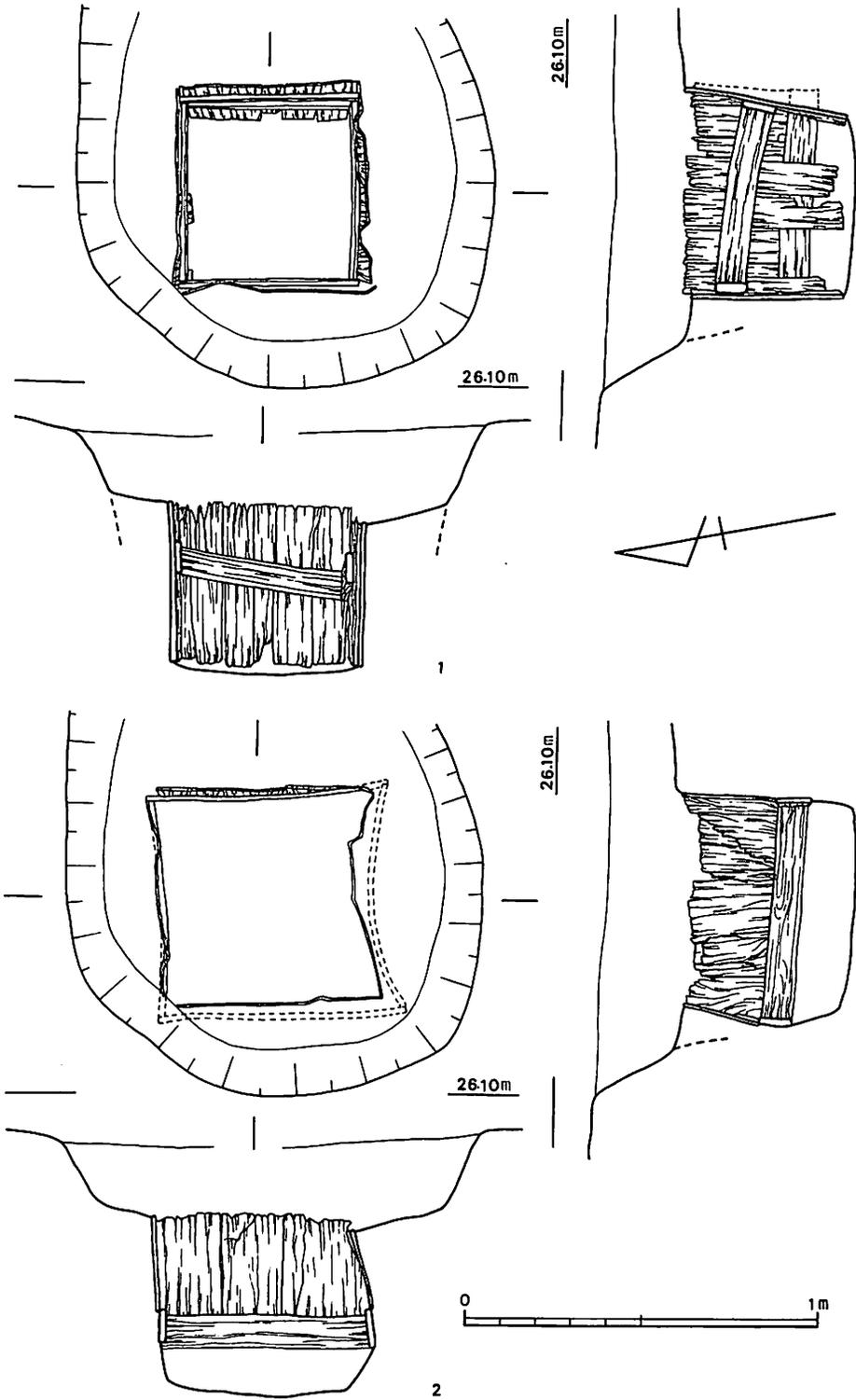


第68図 方形横棧式井戸実測図(1) (縮尺: 1/30) 1. 井戸4, 2. 井戸12, 3. 井戸16, 4. 井戸24



第69図 方形横棧式井戸実測図(2)(縮尺：1/30) 1. 井戸22, 2. 井戸33, 3. 井戸39, 4. 井戸44

井戸38(第67図, 図版第34)は井戸37と同一の位置にあり, 井戸38の方が先に作られている。規模は55×60cmである。側板は幅20cmで, 下端を丸く加工し, かつ2つの孔を並列して穿った板材を各方向3枚ずつ使用している。隅柱と横棧の組み方はやや複雑で, 隅柱の内面に柄穴をあけ, 横棧を組み合わせているが, 隅柱柄穴部位の下にも切り込みを入れている。そして, 側板の裏側には, 下部の側板の穴のあいた部分を隠すように, 幅15cm前後の板を横にし, その上



第70図 方形横棧式井戸実測図(3) (縮尺: 1/20) 1. 井戸36内側, 2. 井戸36外側

に、今度は、各側板の接する部分の裏に幅5cmほどの板をのせて、裏板としている。

6) 方形横棧式井戸と出土遺物

(1) 遺構(第68～70図)

『下底に角材で方形の木組みをし、側板をたてならべて、側板の崩壊を上部に設けた別の方形木組みで支える。そうして、隅には束木を配して上部の方形木組の落下をうける形式。』

今回の調査では、最も多い形式であり、計22基を検出した。

井戸4(第68図1, 図版第18上)は残存状況が非常に悪かったが、側板の一部は横方向に使用されていたのではないと思われる痕跡があった。この井戸4からは多量の土師皿が出土している。

井戸9(図版第19上)は、埋土除去中に崩壊していき、全体の構造は不明であったが、この形式に属すると思われる。そして、井戸4と同じく、側板の痕跡から、それを横に使用していたのではないかという所見を得た。

井戸22(第69図1, 図版第24・25上)は、裏板を各面ともにあてていた。

井戸36(第70図, 図版第30下・31)は、二重構造と言うべき形態をしている。『外側』と『内側』に時期差があるのかどうかは不明であるが、外側の南側板と西側板が内方に倒れ込むような状況を示しているので、崩壊前に、その内側に補強の意味を兼ねて更に井戸枠を設置した可能性が高い。『外側』の東西側板は、幅広の板材を3枚ずつ使用しているが、南北側板は東西より幅の狭い板材5～7枚ほど使用している。『内側』は、横棧の位置が底よりかなり上にあり、各側板は6枚前後で構成され、中には廃材利用のものがある。なお、北側では、下部の方に横棧がもう一枚あり、3枚が、この横棧から内方に出るように構成されている。ここからは、土師皿の他、植物遺体(モモが主)がかなり多数出土している。

井戸44(第69図4, 図版第36)は、73×76cmの規模で、これは側板の外側に80×5cmの木を置いているが、西側ではそれは検出されなかった。このようなものは、形式は異なるが、第1次調査のG35W1にも認められる。

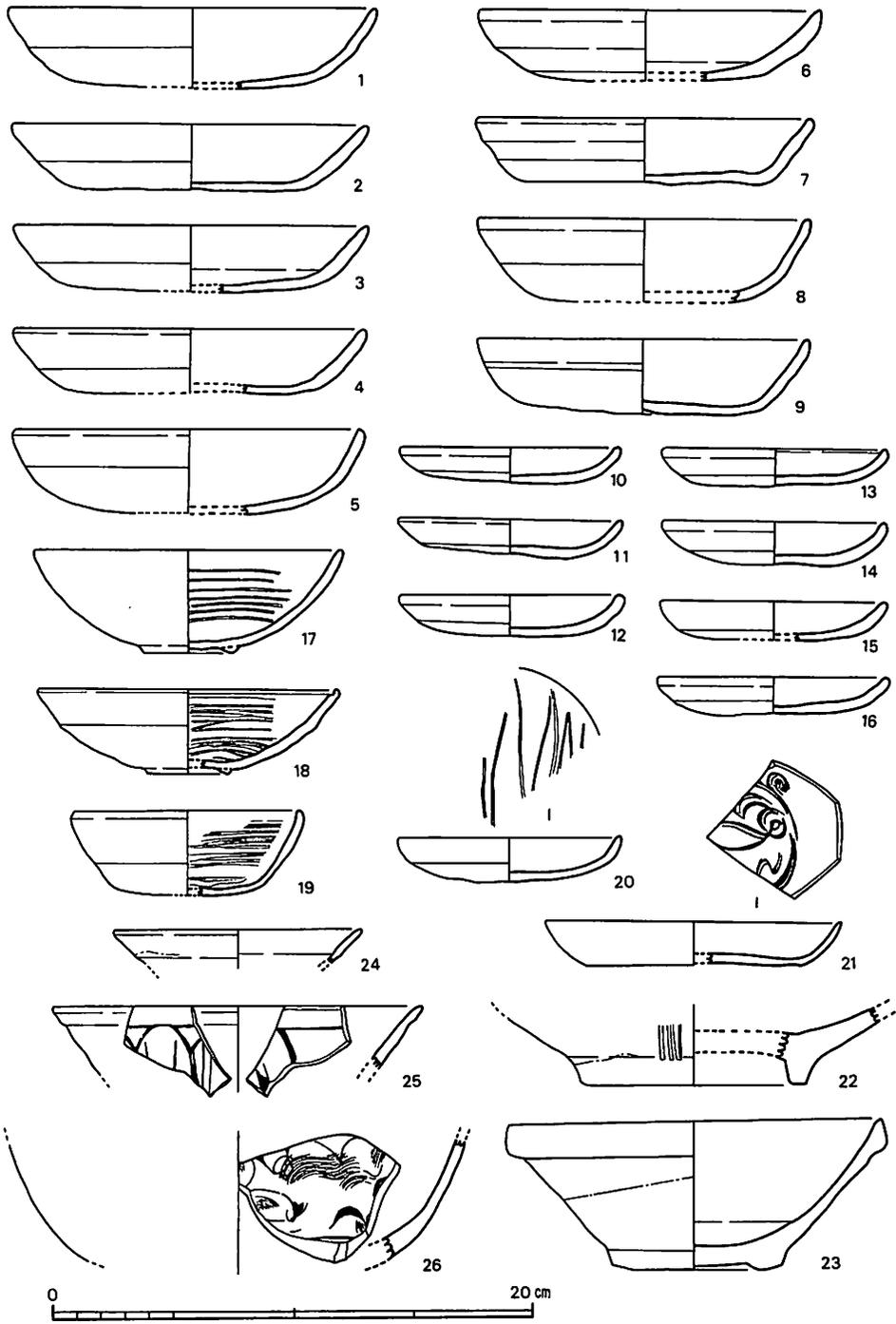
(2) 井戸4 出土遺物(第71図, 図版第57)

〔土師器〕第71図1～16は褐色系の皿。1～9は、口径が13.8～15.3cmの間に、器高が2.7～3.5cmの間に収まる大形の皿。底部から口縁部にかけて丸味をもって上っていくものが多く、またやや深目のものが多い。10～16は、口径が9.2～9.6cmの間に、器高が1.4～1.8cmの間に収まる小形の皿。

〔瓦器〕第71図17は、口径12.8cm, 器高4.2cmの椀。18は口径12.5cm, 器高3.5cmの椀。

19は、口径9.4cm, 器高3.4cmの杯状を呈する皿。20は、口径9.3cm, 器高1.9cmの皿で、内面見込みに暗文を施す。

〔中国陶磁〕第71図21は復原口径12.3cm, 器高1.9cmの定窯系白磁皿。内外面全面に釉を施しているが、口縁部内面の端部から2mmほどの間には釉がかかっていない。内面見込みには、手描きによる文様が描かれている。底部外面には、ケズリ出しによる擬高台が作出されている。



第71図 井戸4 出土遺物実測図 (縮尺: 1/3)

22は白磁で、器種不明。内面と高台を除いた外面に釉が施されている。外面に、3条の沈線が縦方向に走っている。23は、口径15.5cm、器高6.2cmで、玉縁の白磁碗。内面から口縁部外面にかけて釉が施されていて、それ以下には施されていない。内面見込みの一部には釉がかかっていない部分がある。釉はやや青味がかって発色している。内面には、底部近くに沈線が1条巡る。

24は復原口径10.3cmの青磁小皿。内面と口縁部外面には釉が施されているが、底部外面には施されていないようである。内面の底部近くに1条の沈線が巡る。25は蓮弁文青磁碗。内面にも文様が施されている。外面には蓮弁文を描き、その上に1条の沈線を巡らせている。26は、青磁碗で、内面に櫛描き文等を描いている。

なお、この他に特殊なものとしては、石帯の未成品(粘板岩製)が1点出土している。

(3)井戸9出土遺物(第72・73図)

〔土師器〕第72図1～6は褐色系の皿。1～3は、口径12.5cm前後、器高2.0cmの大形の皿。4～6は、口径が8.6～9.1cmの間に収まり、器高1.2cm前後の小形の皿。

7～14は白色系のやや厚手の皿。7～10は、口径が12.7～14.0cmの間に、器高が2.7～3.0cmの間に収まる大形の皿。11・12は、それぞれ口径10.4・11.4cm、器高2.7・3.0cmで、前者よりやや小形になる。13・14は、口径6.5cm前後、器高1.5cm前後の小形の下皿。

第73図1は復原口径30.6cmの鍋。

2は脚付羽釜。脚は3個付き、そこにはケズリを施す。

〔瓦器〕第72図15～21は碗。15は、口径14.0cm、器高4.3cm。内面見込みに暗文を施す。16～21は、口径が11.0～11.7cmの間に、器高が3.3～3.9cmの間に収まり、17～20までの内面見込みに暗文が施されている。

22～31は皿。22は、口径10.4cm、器高1.3cm。内面見込みに暗文を施している。23～31は、口径が8.5～9.9cmの間に、器高が1.2～2.0cmの間に収まる。

32は、口径5.6cm、器高0.6cmの下皿。

〔須恵器〕第73図3は復原口径31.2cmの東播系摺鉢。

〔陶器〕第73図4は常滑大甕の口縁部破片。口縁端部は、上方には拡張されているが、下方には拡張されていない。

5は完形品で、塩壺と思われる。口径7.0cm、器高7.5cmで、内外面に自然釉がかっている。

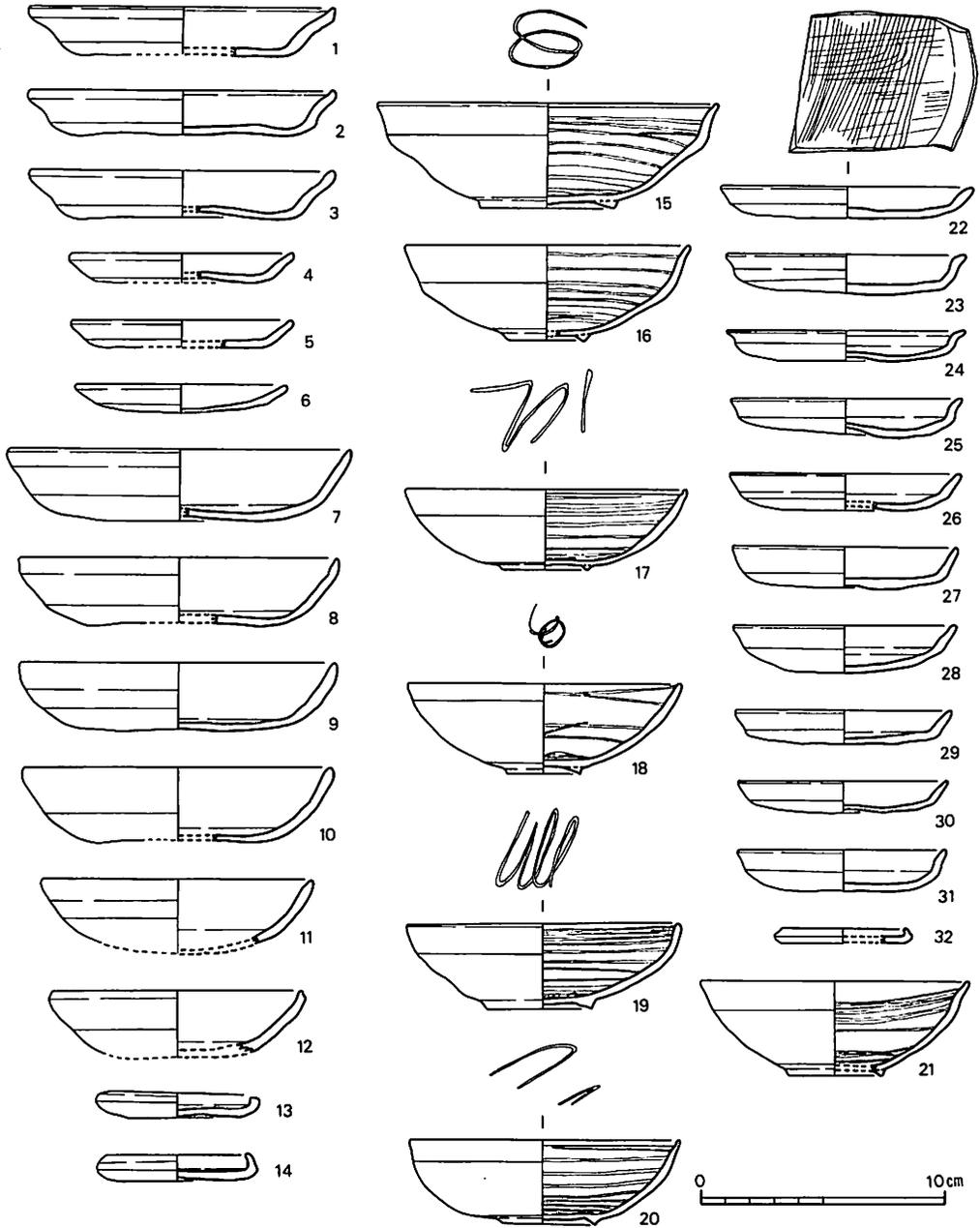
〔中国陶磁〕第73図6は青磁鉢。

7は胎土が磁器化しておらず、暗灰色を呈する。底部外面はヘラケズリにより若干上げ底状になる。内面に灰釉が施されている。中国産雑器の皿か。

8は、復原口径32.8cm、器高8.6cmの黄褐釉の盤。内面に唐草文様等の文様を描いている。

〔石製品〕第73図9は滑石製石鍋。復原口径14.5cm、復原器高7.5cmになる小形のものである。外面には規則的なノミ痕が認められ、内面には不規則なノミ痕が認められる。

(4)井戸12出土遺物(74・75図、図版第60)

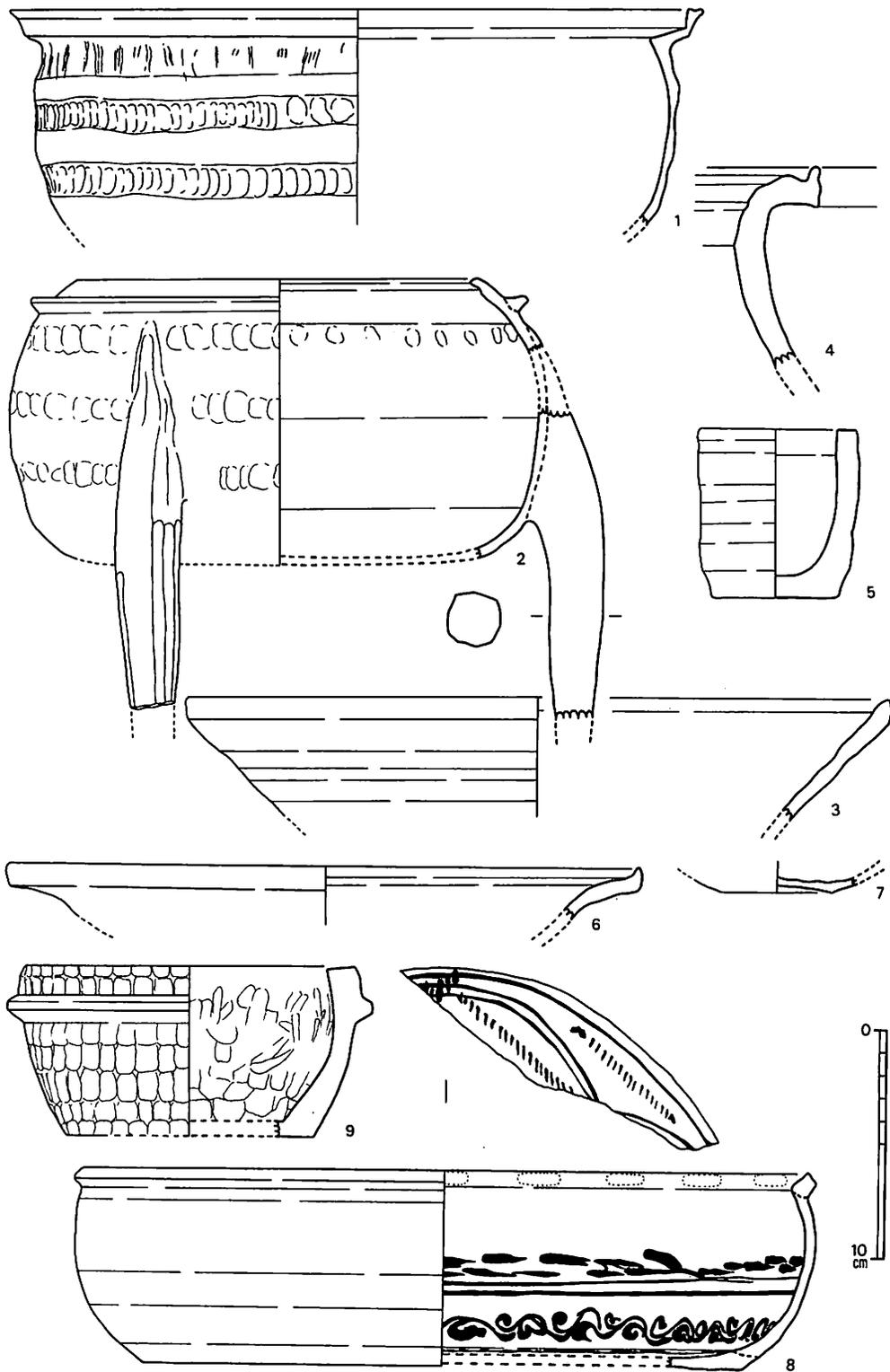


第72図 井戸9出土遺物実測図(1) (縮尺：1/3)

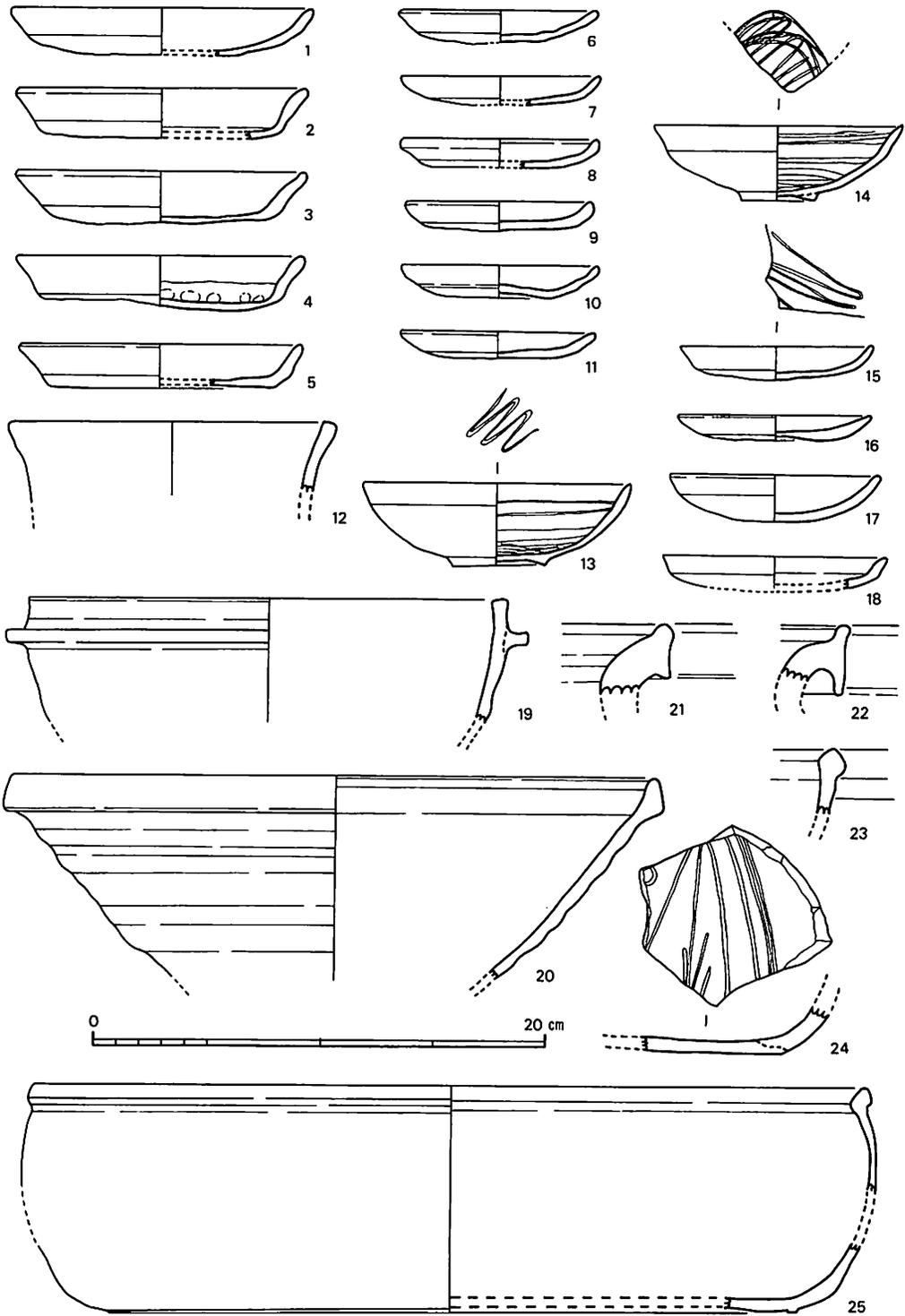
〔土師器〕第74図1～11は褐色系の皿。1～5は、口径が12.4～13.3cmの間に、器高が1.9～2.4cmの間に収まる大形の皿。6～11は、口径が8.3～8.9cmの間に、器高が1.3～1.5cmの間に収まる小形の皿。

12は硬質で、復原口径14.4cm。外面ヨコナデで、内面にはミガキも施している。鉢か。

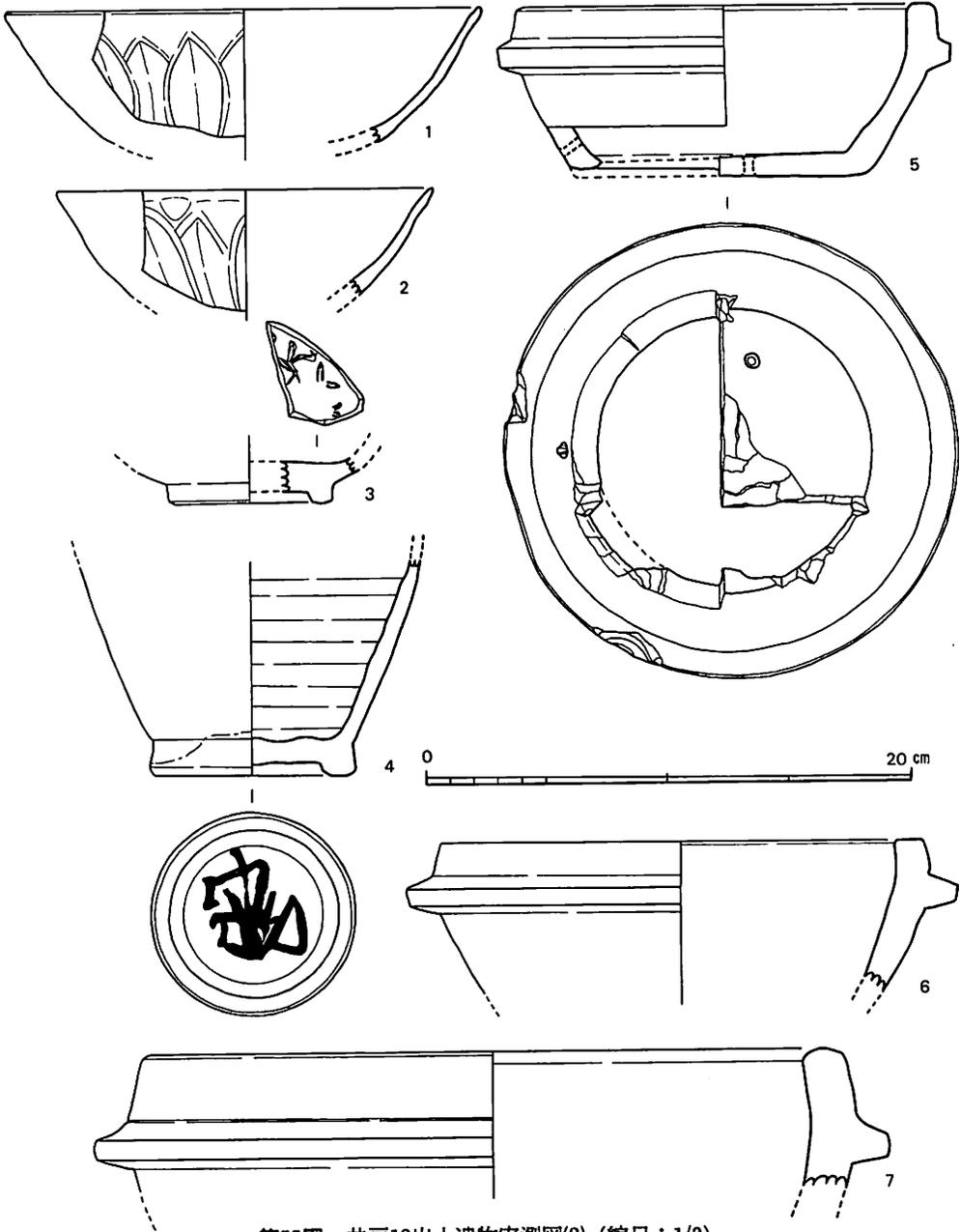
〔瓦器〕第74図13は、口径11.8cm、器高3.7cmの椀。14は、口径10.9cm、器高3.4cmの椀。以上の両者とも、内面見込みに暗文を施している。



第73図 井戸9出土遺物実測図(2) (縮尺: 1/3)



第74図 井戸12出土遺物実測図(1) (縮尺: 1/3)



第75図 井戸12出土遺物実測図(2) (縮尺：1/3)

15～18は皿。15の内面見込みには暗文を施している。

19は羽釜。

〔須恵器〕第74図20は、復原口径28.6cmの東播系摺鉢。口縁部がかなり肥厚している。

〔陶器〕第74図21・22は常滑大甕の口縁部片。21は口縁部の拡張がさほど顕著ではないが、22は幅3.0cmの縁帯を形成している。

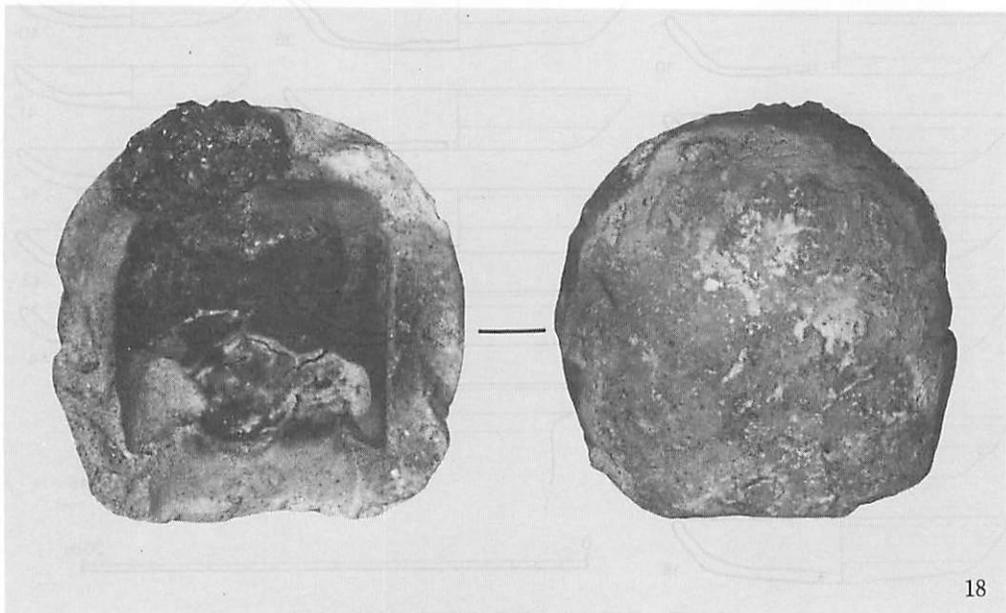
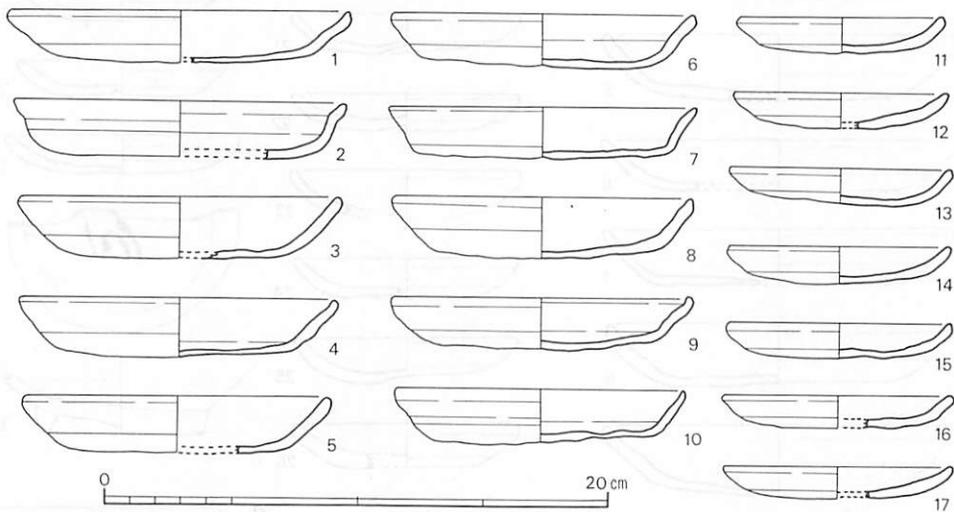
〔中国陶磁〕第74図23・24は同一個体と思われる緑釉盤。24は内面見込みに沈線による文様

を描いている。底部外面に釉を施していない。25は復原口径37.2cmの黄褐釉盤。内面から口縁部外面にかけて釉を施す。内面の釉が一部青白色に発色している部分がある。体部外面と底部外面には釉を施していない。底部に低い高台を付けている。

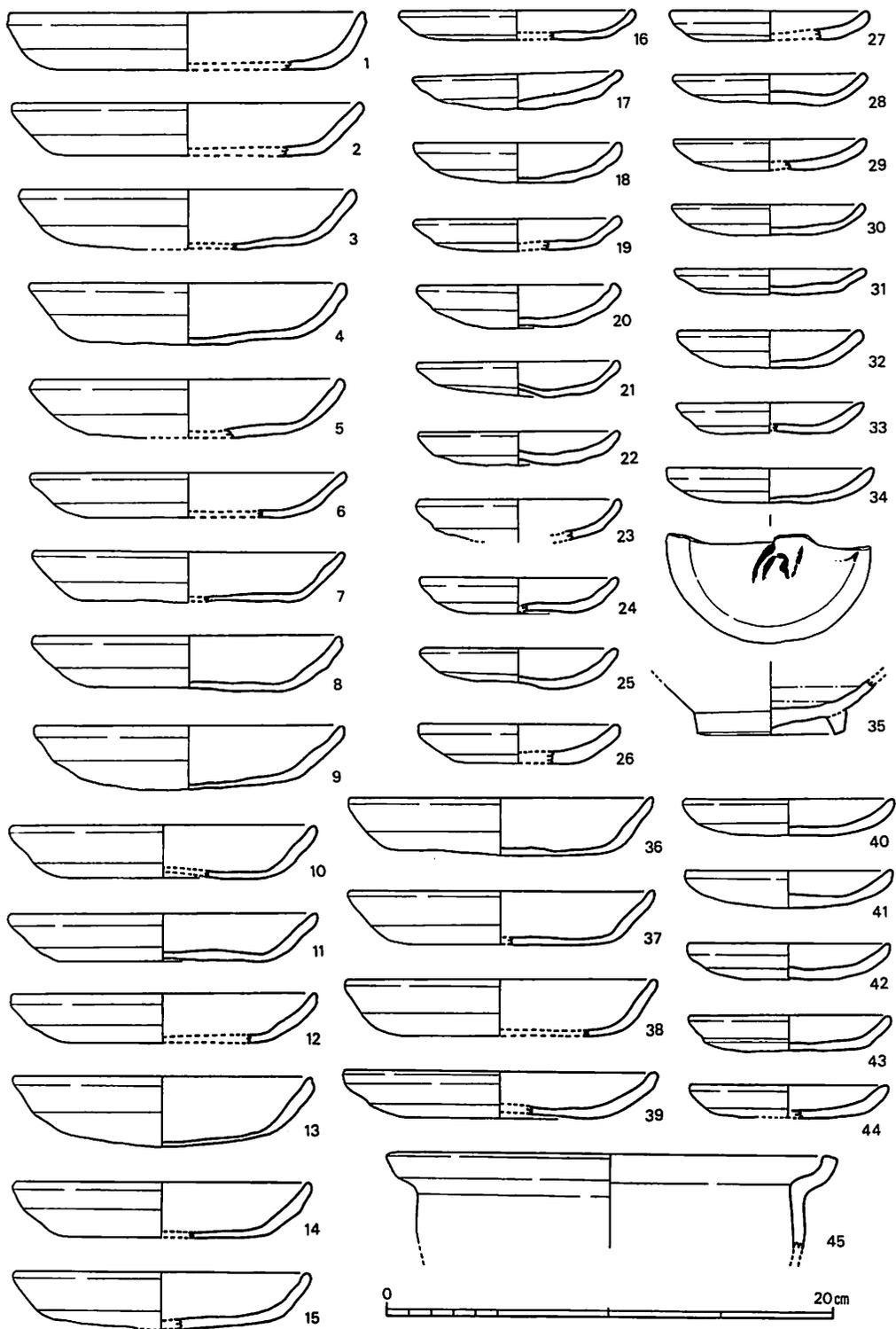
第75図1・2は蓮弁文青磁碗。1はやや緑がかって発色し、貫入が内外面に認められる。3は青磁碗の底部片。底部外面には釉は施されていない。内面には花文が陰刻されている。

4は白磁で、四耳壺になると思われる。体部外面には縦方向に筋が走り爪形をなし、貫入が若干認められる。高台から底部外面にかけては釉が施されていない。また底部外面には墨書の花押が認められる。

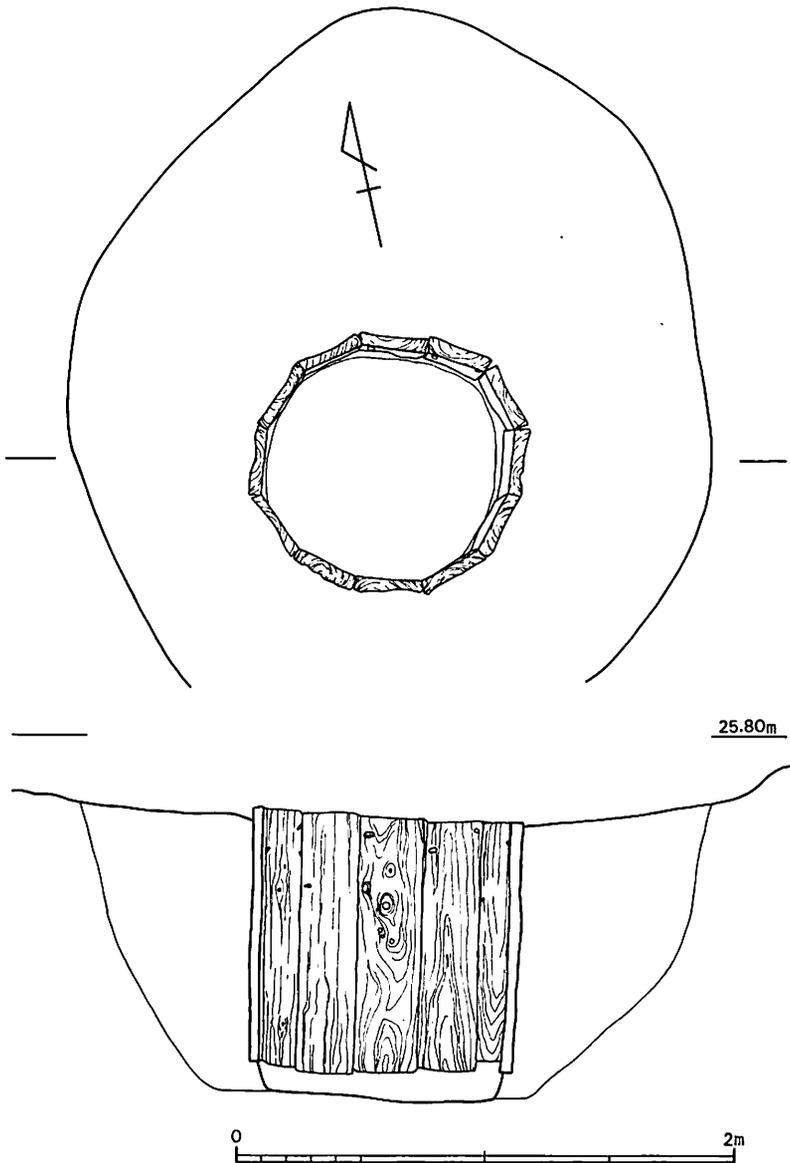
〔石製品〕第75図5は、口径17.2cm、器高7.1cmのほぼ完形に近い滑石製石鍋。内外面に煤が



第76図 井戸24出土遺物実測図・写真（縮尺：1/3、ただし18は実大）



第77図 井戸36出土遺物実測図 (縮尺: 1/3)

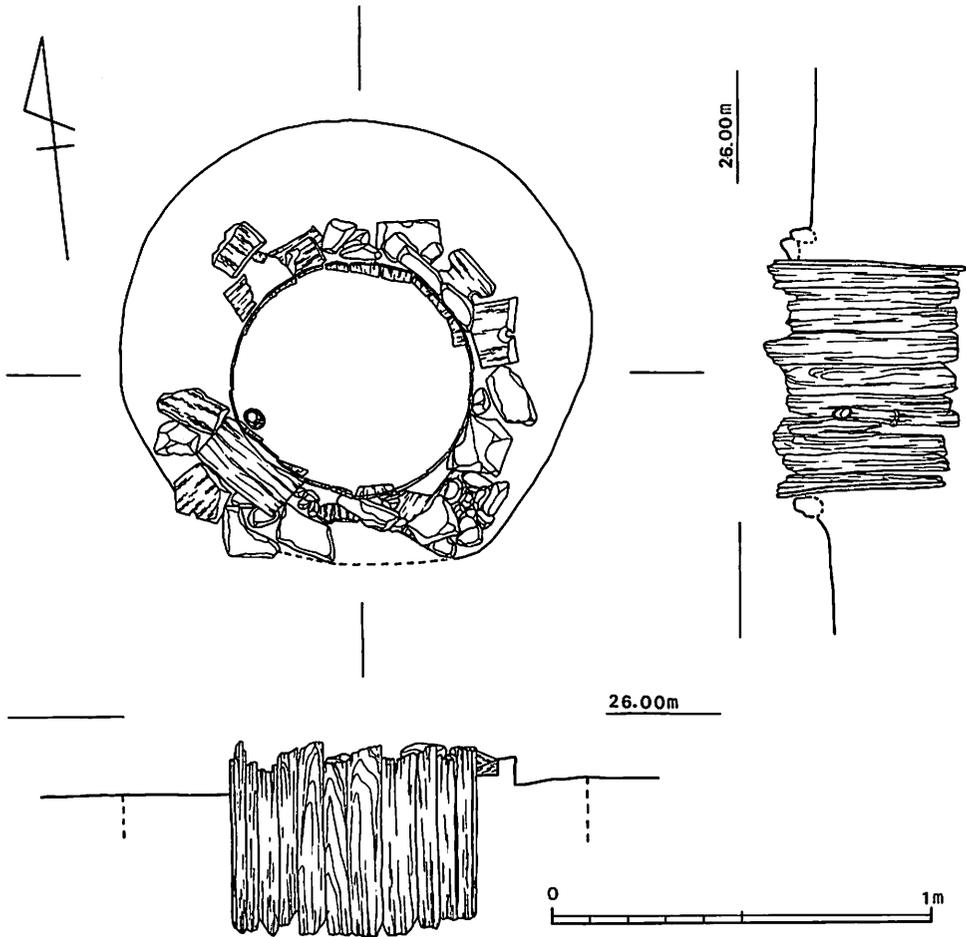


第76図 多角形豎板側式井戸実測図(1) (縮尺：1/30) 井戸20

多量に付着していて、かなり使用されたことを示している。この石鍋は、底部中央で人為的に半截されている。そして、底部に1孔、側部に1孔の計2孔が認められる。また半截されて、底部半分が欠失した部分の断面には、ニカワないしは漆が付着している。二次的に別の用途に使用されたのかもしれない。6・7も同じく滑石製石鍋。

(5)井戸24出土遺物(第76図)

〔土師器〕第76図はすべて褐色系の皿である。1～10は大形の皿。1～9は、口径が12.0～13.4cmの間に、器高が2.0～2.4cmの間に収まる。10は、口径11.5cm、器高2.1cm。11～17は小形の皿で、口径が8.0～9.0cmの間に、器高が1.3～1.5cmの間に収まる。



第79図 多角形豎板側式井戸実測図(2) (縮尺：1/20) 井戸37

なお、第1次調査では、刀装具鑄型が多数出土しているが、この井戸24から1点だけ(第76図18)この刀装具鑄型が出土している。兜金の鑄型である。縦5.7cm、横5.6cm、厚2.3cmで、残存状態の良いものである。型内は黒色を呈していて、上方に鉄錆が付着している。横には型合わせの目印がある。

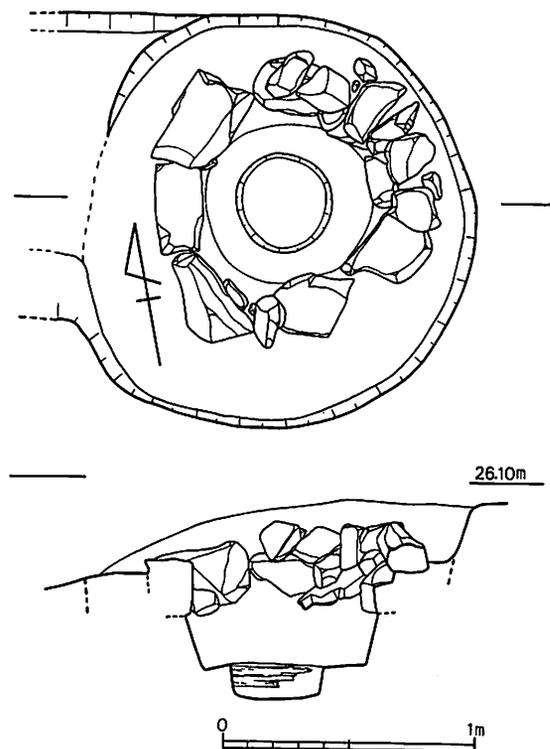
(6)井戸36出土遺物(第77図)

〔土師器〕第77図1～35は井戸枠内から、36～45は井戸枠上から出土した。

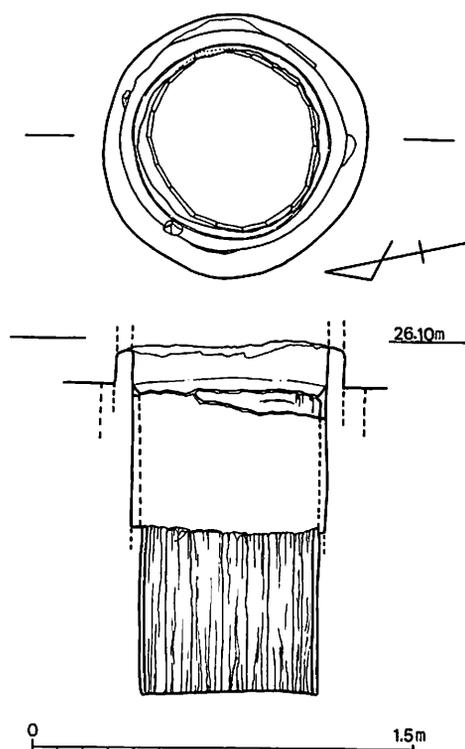
1～34は褐色系の皿。1～3は、口径15.0～15.8cm、器高2.5cm前後の大形の皿。4～15は、口径が13.2～14.1cmの間に、器高が2.0～3.1cmの間に収まる大形の皿。16～34は小形の皿。16は、口径10.6cm、器高1.3cmで、やや大きい。17～34は、口径が8.3～9.4cmの間、器高が1.2～1.7cmの間に収まる。34の底部外面には墨書が認められるが、薄くて、文字がどうか不明。

36～44も褐色系の皿。36～39は、口径が13.6～14.0cmの間に、器高が2.1～2.5cmの間に収まる大形の皿。40～44は、口径が8.7～9.4cmの間に、器高が1.5～1.7cmの間に収まる小形の皿。

〔瓦器〕第77図45は井戸枠上から出土した鍋。



第80図 石組側式井戸実測図(縮尺:1/30) 井戸27



第81図 漆喰側式井戸実測図(縮尺:1/30) 井戸1001

〔中国陶磁〕第77図35は井戸枠内から出土した。白磁碗の底部片で、内面にのみ釉が施されているが、幅1.5cmほどで円環状にかきとられている部分がある。

7) 多角形豎板側式井戸(第78・79図)

『側板を多角形に組んだ井戸。六角形、七角形、八角形、十角形の各種がある。』

今回の調査では、井戸20と井戸37の2基を検出した。

井戸20(第78図, 図版第22)は、十二角形をしており、各板材はほぼ30×100×5cmの厚く細長い板を使用している。上半は良好に残存していたが、下半は内部が腐蝕し空洞となっており、取り上げの際、ほとんどは上半しかとりあげられなかった。各板材は、すべてではないが、他の板材と接する側面をやや斜めに切り、全体として台形状にし、両側面の上と下に各々柄穴をあけて、小さな木製の板をそこにに入れて、つなぎ止めている。また一部、釘を外から打ち込んでいる。上端は凹凸のないようにして、一部、面を揃えるために、のこぎりで切って整えようとした痕跡が認められる。

井戸37(第79図, 図版第32・33上)は井戸38と同位置で、井戸38の方形木枠の中にきれいに収まっている。直径65cmで、25枚の板を使用している。これは、円形桶側式の可能性もあったが、下端が揃っていないので、この形式と考えた。井戸38の四隅にあたる所に石を置いて、井戸38との間隙を埋め固定する意味があったのであろう。そして、この井戸においては、廃棄時の状況が良く分かる。井戸枠いっぱいの巨石(力自慢の人2人で取り上げることができた重さ)

を入れ、西側には空気抜きと思われる竹が井戸枠に密着して立っていた。井戸37の外側になる井戸38はかなりしっかりした構造で、崩壊しているような状況は窺えなかった。したがって、他の理由、例えば水質の問題や流行の問題で、作りかえたものとも考えられよう。

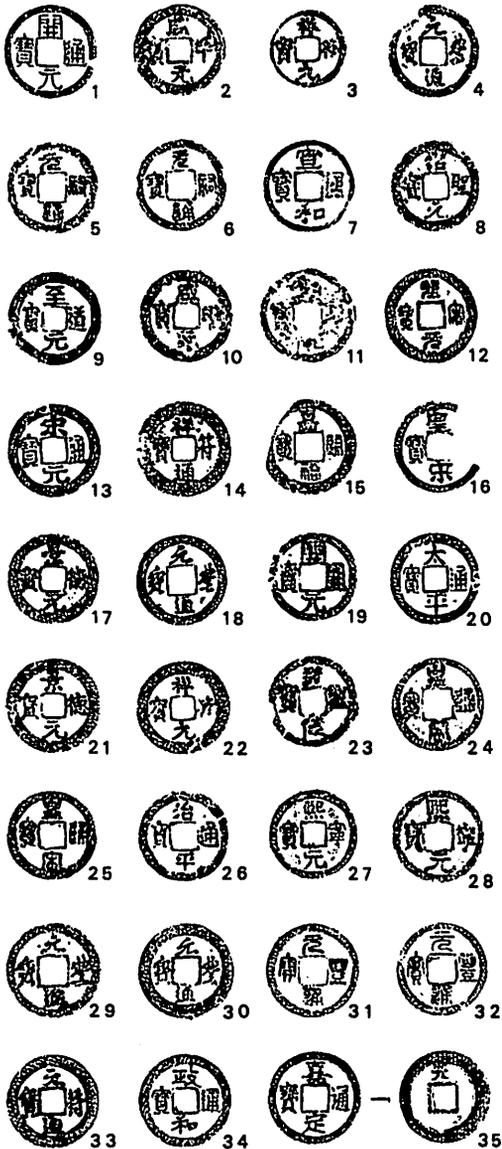
8) 石組側式井戸(第80図)

『側部を石組みした形式。下部に井筒をそなえ、井筒には桶などを利用している。』

井戸27(第80図, 図版第26下)の1基のみがこれに属する。井筒は曲物を使用している。

9) 漆喰側式井戸(第81図)

側部に漆喰製円管を使用し、何段か積み重ねた形式。これには2種有り、単に漆喰円管を使



	古銭名	初 鑄 (西暦)	出土遺構
1	開元通宝	武徳四年(621)	土壇6
2	咸平元宝	咸平元年(998)	〃
3	祥符元宝	祥符元年(1008)	〃
4	元豊通宝	元豊元年(1078)	〃
5	元祐通宝	元祐年間(1086~1093)	〃
6	〃	〃 (〃)	〃
7	宣和通宝	宣和元年(1119)	〃
8	紹聖元宝	紹聖年間(1094~1097)	土壇8
9	至道元宝	至道元年(995)	〃 9
10	咸平元宝	咸平元年(998)	〃 70
11	□□□宝		〃 93A・B
12	聖宋元宝	建中靖国元年(1101)	〃 127
13	宋通元宝	建隆元年(960)	土壇131
14	祥符通宝	祥符元年(1008)	〃
15	嘉祐通宝	嘉祐元年(1056)	〃
16	皇宋通宝	宝元二年(1039)	土壇189
17	景德元宝	景德元年(1004)	〃 251
18	元豊通宝	元豊元年(1078)	〃 1013
19	開元通宝	武徳四年(621)	土壇1051
20	太平通宝	太平興国元年(976)	〃
21	景德元宝	景德元年(1004)	〃
22	祥符元宝	祥符元年(1008)	〃
23	天聖元宝	天聖元年(1023)	〃
24	皇宋通宝	宝元二年(1039)	〃
25	〃	〃 (〃)	〃
26	治平通宝	治平元年(1064)	〃
27	熙寧元宝	熙寧元年(1068)	〃
28	〃	〃 (〃)	〃
29	元豊通宝	元豊元年(1078)	〃
30	〃	〃 (〃)	〃
31	〃	〃 (〃)	〃
32	〃	〃 (〃)	〃
33	元符通宝	元符元年(1098)	〃
34	政和通宝	政和元年(1111)	〃
35	嘉定通宝 (背文元)	嘉定年間(1208~1223)	〃

第82図 土壇出土古銭拓影・一覧 (縮尺: 1/2)

用したものと、その下部に円形桶を設置したのがある。前者は井戸2，後者は井戸1・1001(第81図)・1002である。時期はすべて、明治時代以降のものである。

10) 索堀式井戸

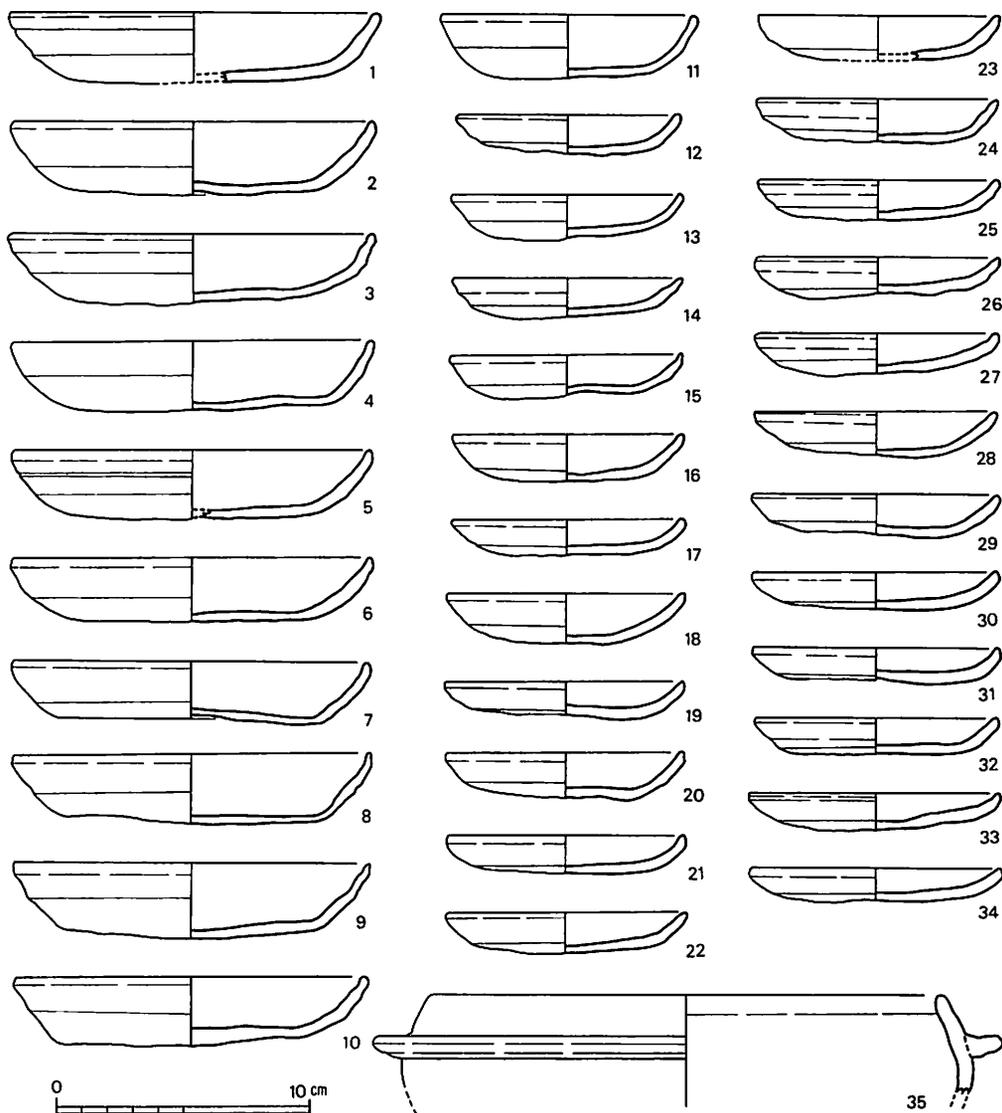
円形に掘り込んだのみで、井戸枠や井筒を一切設けないもの。

井戸3と15が相当し、前者は明治以降、後者は鎌倉時代のものである。

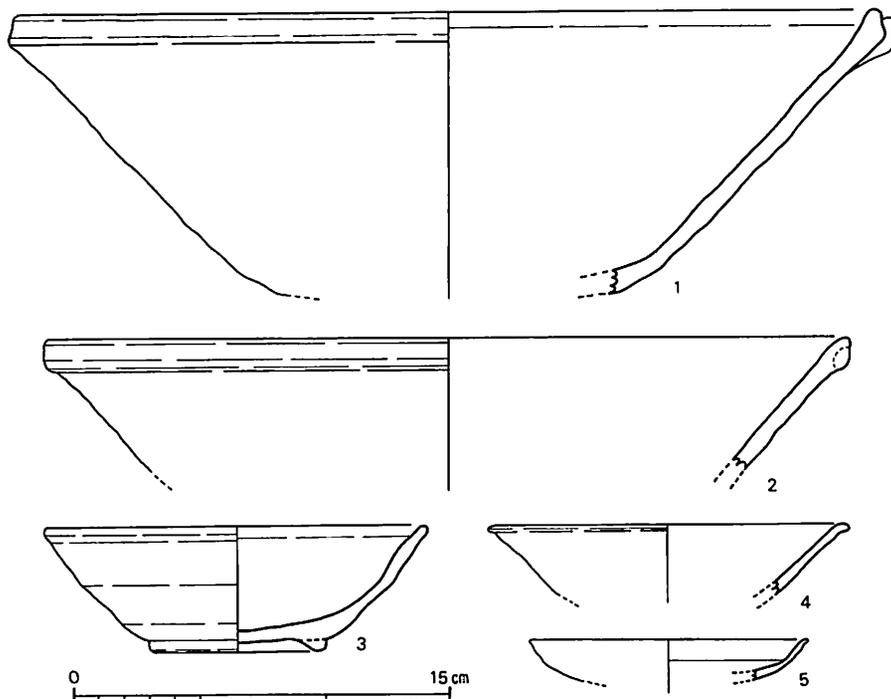
5. 土壇と出土遺物

1) 概要(第9図参照)

今回の第2次調査でも、かなりの数の土壇を検出した。そのほとんどが、平安時代後期から



第83図 土壇1出土遺物実測図(1) (縮尺：1/3)



第84図 土壙1出土遺物実測図(2) (縮尺：1/3)

鎌倉時代にかけてのものである。

本報告事で扱った土壙出土遺物は極めて限られている。しかし、その他の土壙出土遺物の中にも良好な資料となるものがある。例えば、土壙1051からは、土壙60と同じように、埴が多数出土しているが、土壙60出土埴よりも小形のもので両面が凹むものが多かったことが指摘される。また、この土壙1051からは漆器椀や木札と思われる木製品も出土したが、整理期間の都合で、古銭しか整理することができなかった。一方、土壙116(井戸42の上層)からは埴鍋や鑄型が出土した(図版第39下参照)が、これも時間の都合で扱うことができなかった。

次項以下で、土壙番号の若い順から、その出土遺物に関して述べていくことにする。なお、土壙出土古銭は第82図に拓本と一覧を示しておいた。

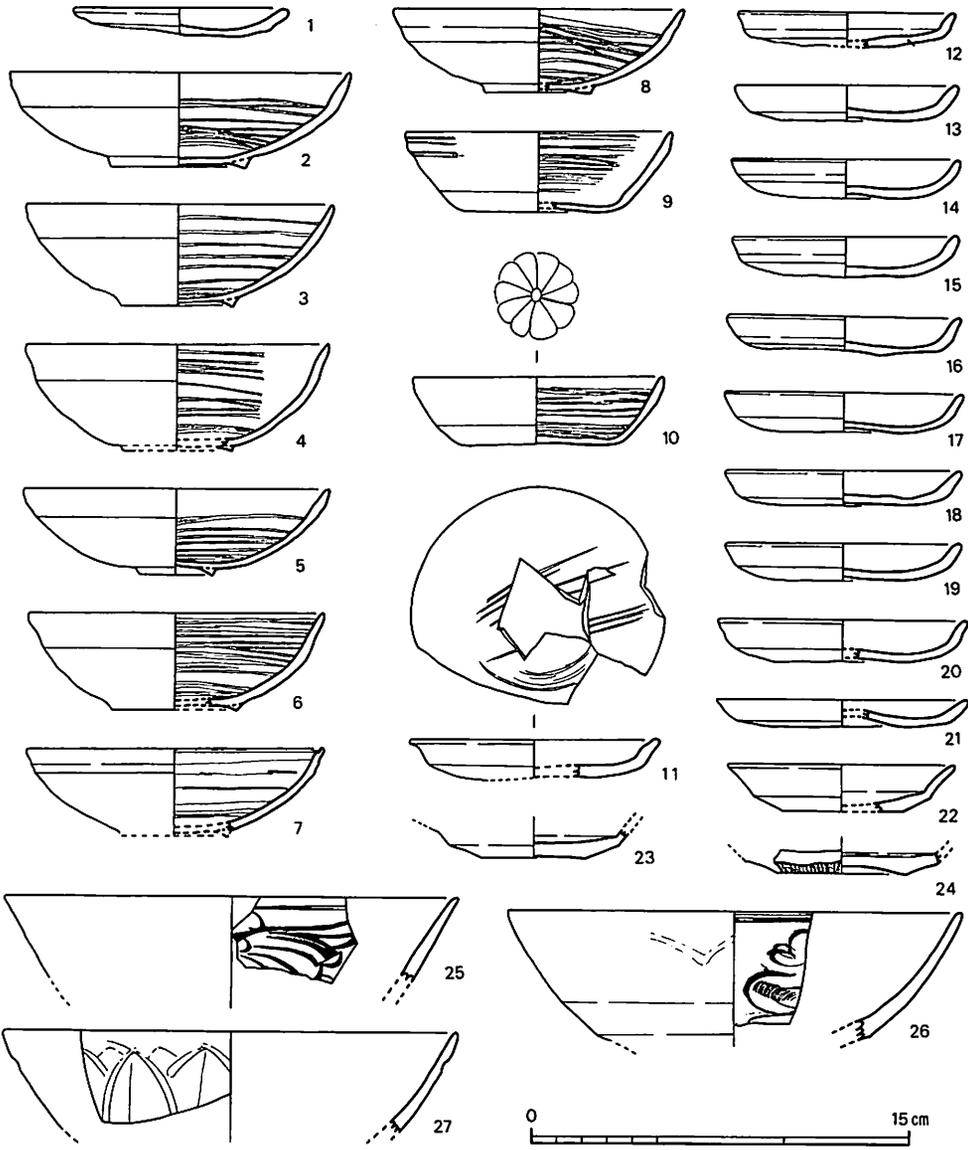
2) 土壙1と出土遺物

(1) 遺構(図版第38)

I地区南半, E1東側の発掘区東壁際で検出した。検出面レベルは25.89mで、完掘後の底部レベルは、25.73mであった。直径約1.5mのほぼ円形になる土壙で、深さは15cm前後である。この土壙には土師器が隙間なく密につまっていた、廃棄坑のような状況を呈していた。遺物はコンテナに4箱分ほど出土している。

(2) 遺物(第83・84図, 図版第61)

〔土師器〕第83図1~34はすべて褐色系の皿。1~10は、口径が14.0~14.7cmの間に、器高が2.5~3.0cmの間に収まる大形の皿。これらの中には2段ナデを施しているものもあるが、1



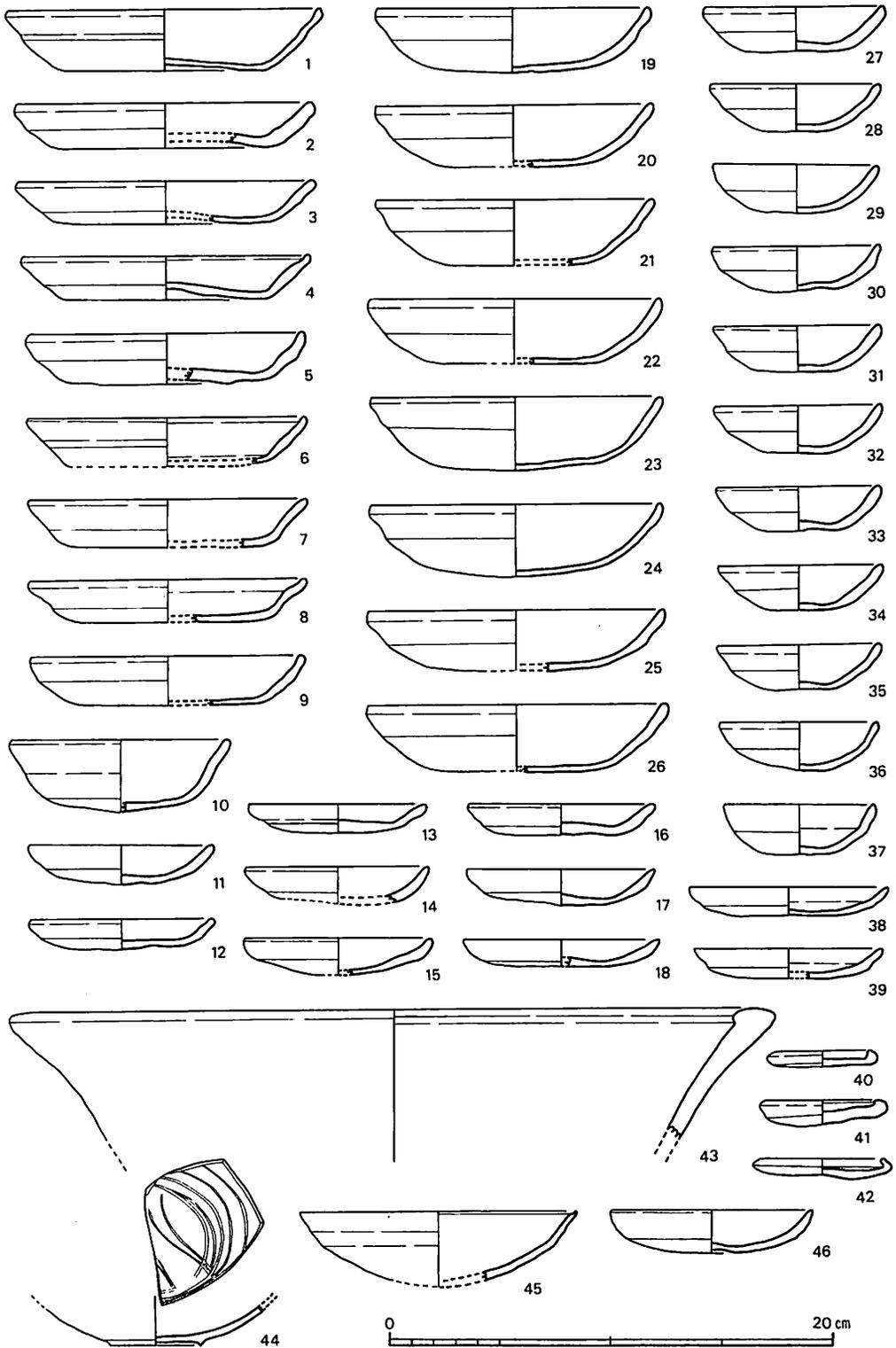
第85図 土壙2出土遺物実測図(縮尺:1/3)

段ナデが多い。11は、口径10.3cm、器高2.5cmの中形の皿。12~34は、口径が8.9~10.1cmの間に、器高が1.3~2.0cmの間に収まる小形の皿。

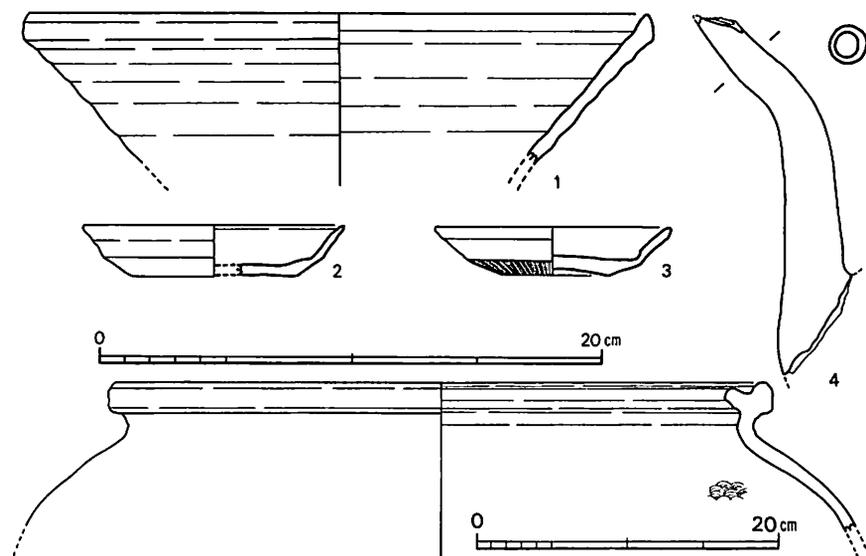
35は復原口径20.2cmの羽釜。

〔須恵器〕第84図1は復原口径34.5cm、器高11.5cmの東播系摺鉢で、片口部が若干残っている。2も同じく東播系の摺鉢。両者とも口縁端部が若干肥厚している。

〔山茶碗〕第84図3は口径15.2cm、器高5.0cmの山茶碗で、高台端に靱痕が認められる。知多半島に近い場所の窯で焼かれたものと考えられる。内面は滑らかになっていて、2次的に摺鉢の代用品として使用された可能性が高い。



第86図 土墳 8 出土遺物実測図(1) (縮尺：1/3)



第87図 土壌8出土遺物実測図(2) (縮尺：1/3, ただし5は1/5)

〔中国陶磁〕第84図4は復原口径14.4cmの白磁で、椀か。内外面に釉が施されている。口縁部は、端部が外方へ若干折れている。

5は復原口径11.0cmの同安窯系青磁皿。釉は内面と口縁部外面から底部外面の一部まで施されているが、底部外面には施されていなかったようである。釉はやや褐色気味に発色し、貫入がみられる。

3)土壌2と出土遺物

(1)遺構

検出面レベルは土壌1とほぼ同じであったが、調査中より瓦器が多数出土していたので、本来は土壌1より上場は高かったものと思われる。掘り方は不明瞭であったが、直径1.3×1.5mの偏円形になるものと思われる。

この土壌2からは、瓦器が多量に出土した。土壌1とは異なり、土師器は非常に少ない。これも、廃棄坑のような状況を呈していた。

(2)遺物(第85図, 図版第61)

〔土師器〕第85図1は褐色系の皿で、口径8.5cm, 器高1.1cmの小形の皿。

〔瓦器〕第85図2は、口径13.5cm, 器高3.8cmの大形の椀。3～8は、口径が11.5～12.1cmの間に、器高が3.4～4.2cmの間に収まり、2よりはやや小さめの椀。

9・10は、口径10.6・10.0cm, 器高3.0・2.7cmの杯状の皿。10の内面見込みには菊花の暗文を施している。

11～21は皿。口径は8.6～10.0cmの間に、器高は1.1～1.7cmの間に収まる。11の内面見込みには暗文を施している。また、中には底部が上げ底状になるものもある。

〔中国陶磁〕第85図22は、復原口径8.9cm, 器高1.9cmの同安窯系青磁皿。釉は内面から口縁

部外面に施されているが、底部外面には施されていない。23も同安窯系青磁皿。内面と口縁部外面に釉を施し、底部外面には釉を施していない。貫入がみられる。24も前2者と同じく同安窯系青磁皿。内面から口縁部外面に釉を施し、底部外面には釉を施していない。底部外面付近には細かな筋が全周する。底部はヘラケズリにより上げ底になっている。

25～27は、龍泉窯系の青磁椀。25・26は内面側面に文様を描いている。27は蓮弁文椀で、釉は褐色がかかって発色している。

4) 土墳 8 と出土遺物

(1) 遺構(図版第39上)

I 地区北半のD 4 のほぼ中央部で検出した1.3×1.5mのほぼ楕円形の土墳である。検出面レベルは26.01mで、完掘後の底部レベルは25.70mであった。この土墳からも、土師器がかなり出土したが、土墳1・2と同様、廃棄坑のような状況を呈していた。

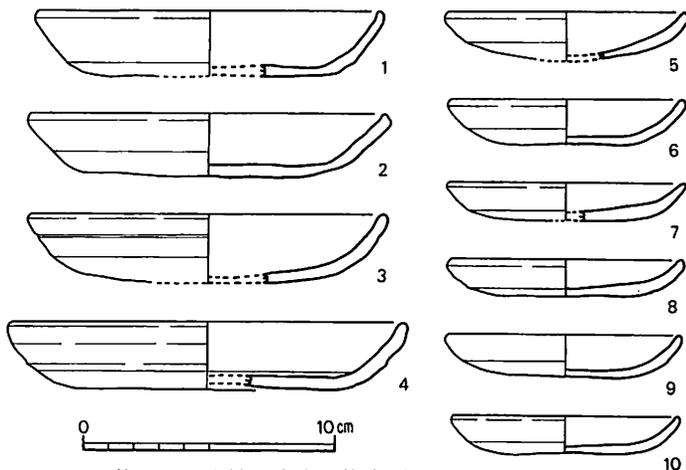
(2) 遺物(第86・87図, 図版第62)

〔土師器〕第86図1～18は褐色系の皿。1は、口径14.1cm, 器高2.8cmの大形の皿。2～9は、口径が12.2～13.4cmの間に、器高が1.9～2.3cmの間に収まる大形の皿。1～5は底部が若干上げ底になる。10は、口径9.9cm, 器高3.3cmの中形で、やや深めの皿。11～18は、口径が8.3～8.7cmの間に、器高が1.2～1.7cmの間に収まる小形の皿。

19～42は白色系の皿。19～21は、口径12.5cm前後、器高2.8～3.0cmの大形の皿。22～26は、口径が13.2～13.6cmの間に、器高が2.7～3.3cmの間に収まる大形の皿。以上の大形の皿は器壁の厚いものである。27～37は、口径が6.8～8.2cmの間に、器高が2.0～2.2cmの間に収まる小形の皿で、これらも器壁が厚いものである。ヘソ皿は認められなかった。38・39は、口径8.4～8.9cm, 器高1.3cm前後の前者よりも浅い小形の皿。ヨコナデが強く、その下部では段状となる。40～42は下皿。口径は40が4.9cm, 41が5.9cm, 42が6.2cmである。

43は火鉢。口縁端部が内側に若干肥厚する。

〔瓦器〕第86図44・45は椀。44の内面見込みには暗文が施されている。高台は低く、粗雑な



付け方である。45は、口縁端部内面に1条の凹線を巡らす。内面には暗文がみられない。

46は、口径9.0cm, 器高1.9cmの皿で、炭素の吸着が悪く、灰色を呈している。

〔須恵器〕第87図1は復原口径25.0cmの東播系摺鉢。

〔中国陶磁〕第87図2は口径10.3cm, 器高2.1cmの白磁口ハゲ皿。内外面全面に釉を施

第86図 土墳18出土遺物実測図(縮尺:1/3)

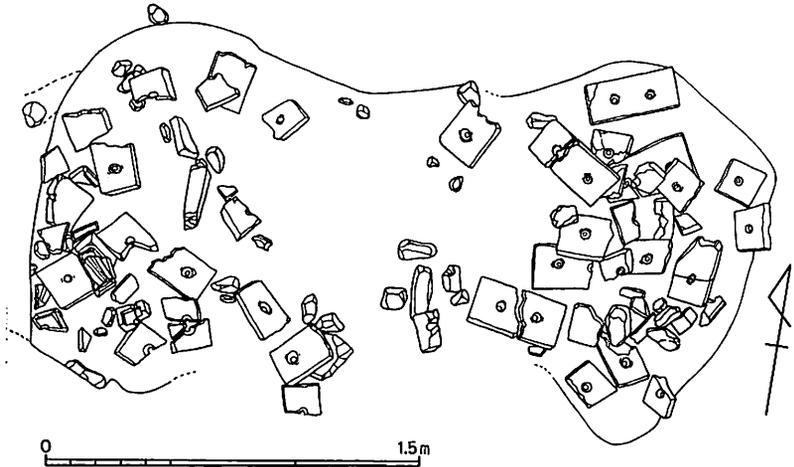
すが、口縁端部内面の3mmほどに釉がかかっていない。

3は口径9.4cm、器高1.9cmの完形の同安窯系青磁皿。内面から口縁部外面に釉を施し、底部外面には施釉していない。また、内面の中央部はほぼ方形に近く釉を欠き取っている。底部外面付近には、細かな筋が全周する。底部はヘラケズリにより、上げ底になっている。この皿に似たものは前述した土壌2からも出土している。

4は青磁水注の注口部。

〔陶器〕第87図

5は、復原口径43.0cmの甕。受け口状の口縁部を形成していて、胴部内面に青海波の当て具痕が残っている。内外面に淡黄緑色の釉がかかっている。



第89図 土壌60遺物出土状況実測図（縮尺：1/30）

5) 土壌18と出土遺物

(1) 遺構

I地区南半のD1西北部で検出した0.7×1.0mほどのほぼ楕円形の土壌である。検出面レベルは25.75mで、完掘後の底部レベルは25.70mであった。深さ5cmほどの浅い廃棄坑である。

(2) 遺物(第88図)

〔土師器〕第88図はすべて褐色系の皿。1～3は、口径が13.8～14.4cmの間に、器高が2.5～2.8cmの間に収まる大形の皿。4は、口径15.8cm、器高2.7cmの前者よりもやや大きめの皿で、2段ナデを施す。5～10は、口径が9.2～9.8cmの間に、器高が1.5～2.0cmの間に収まる小形の皿。

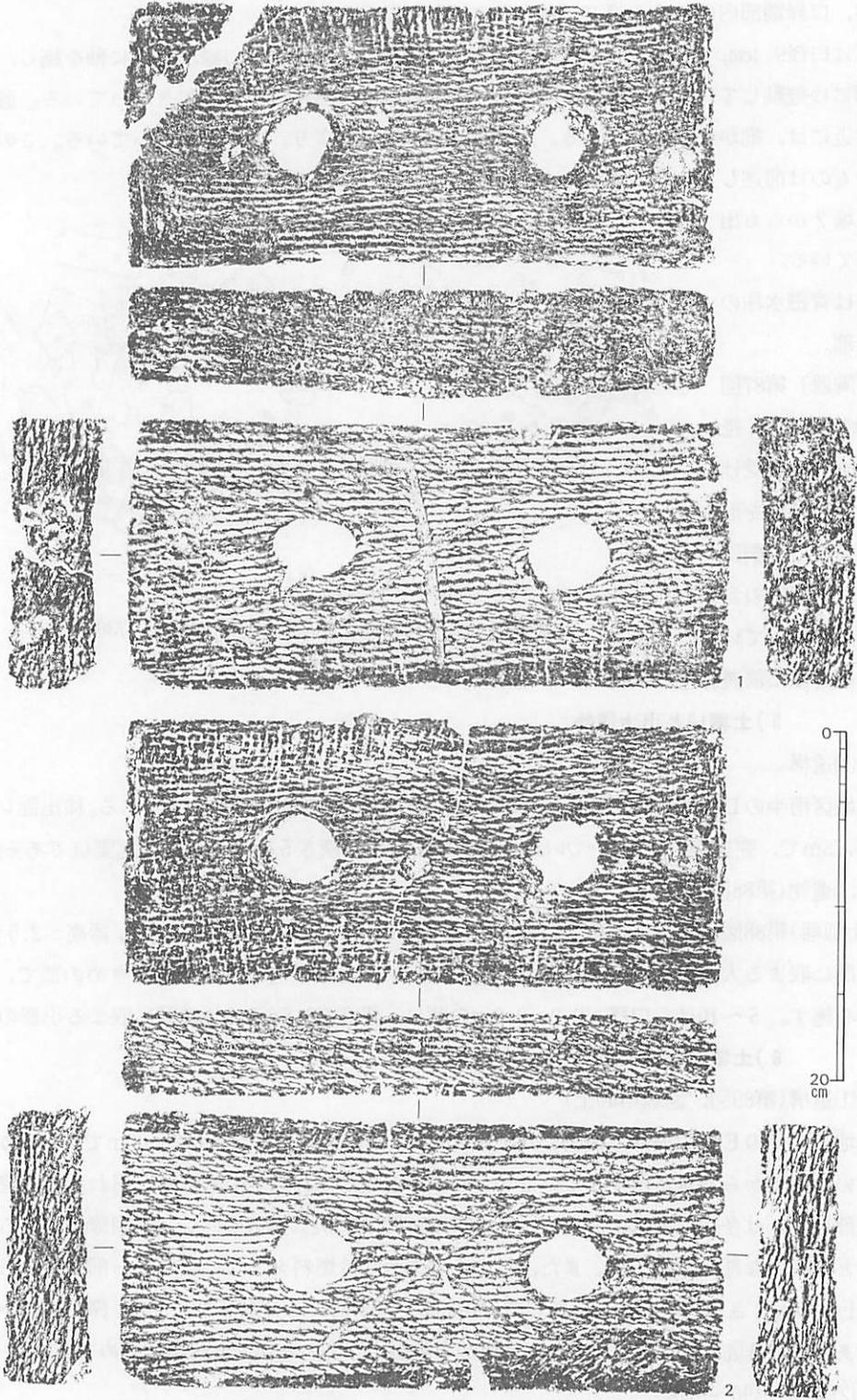
6) 土壌60と出土遺物

(1) 遺構(第89図、図版第40上)

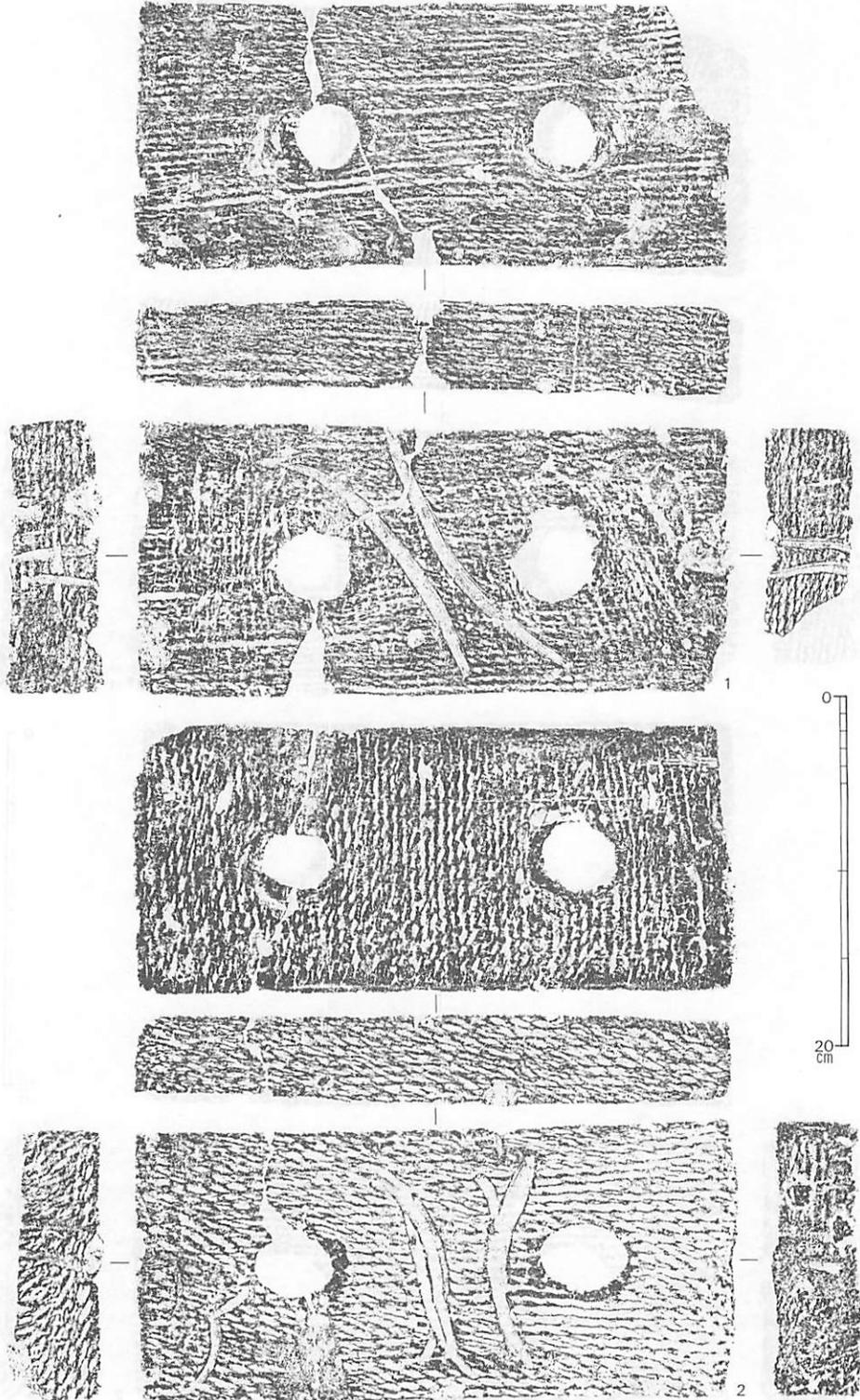
I地区北半のE4中央部で検出した土壌である。検出面レベルはほぼ26.00mであったが、その上のレベルからも埴が出土していたことから、上場はこれ以上であったと思われる。完掘後の底部レベルは多少の高低はあるが、平均25.85mであった。掘方ラインは、明瞭に認められる部分と不明瞭な部分があった。また、この土壌の西端は燃料タンクによって一部破壊されていた。土壌の大きさは約1.5×3.0mほどで、中央部で若干括れた分銅形を呈する。深さは15～20cm程である。廃棄坑と思われ、ここからは埴が多数出土しているが、土器類は極めて少なかった。

(2) 遺物(第90～92図)

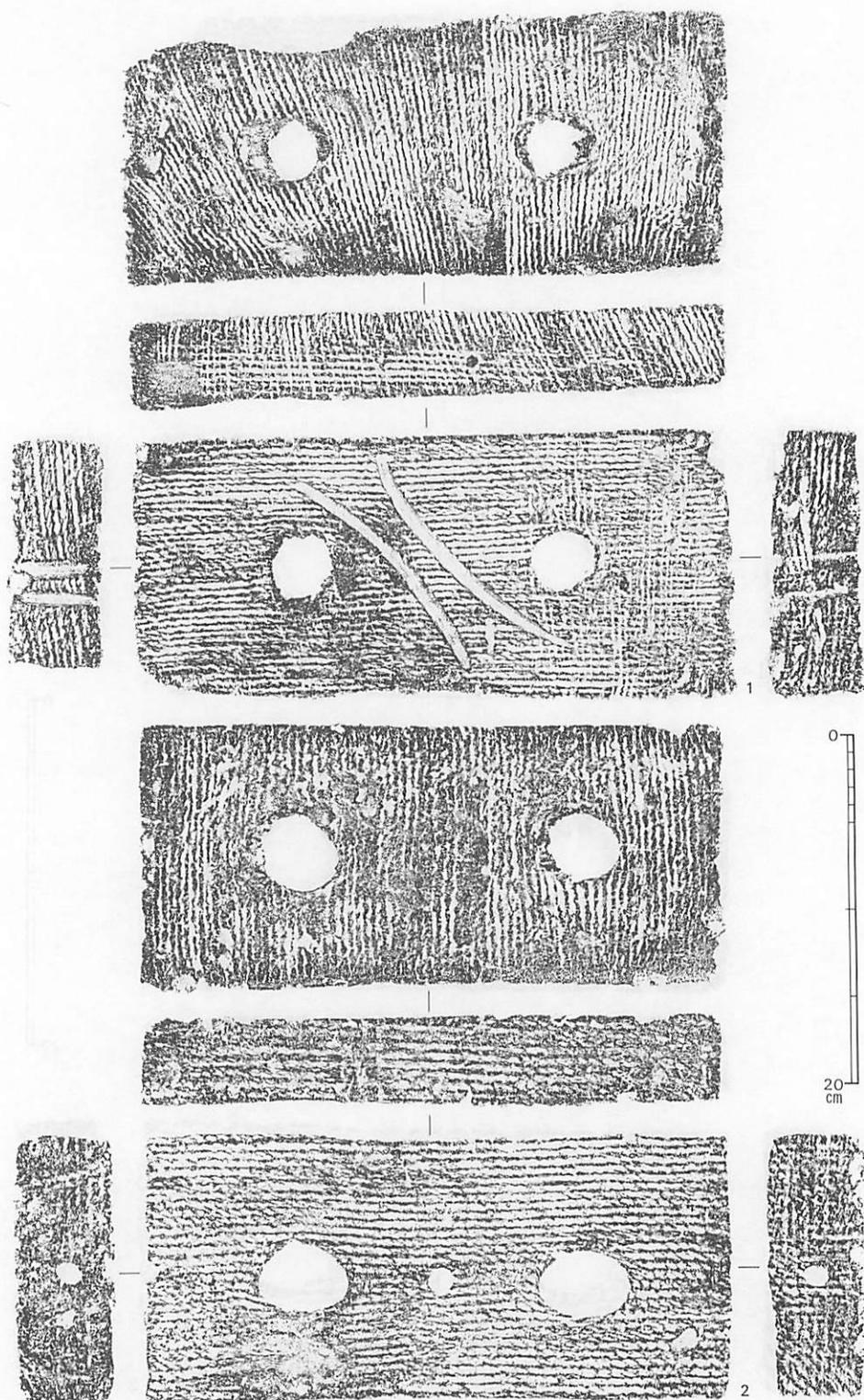
出土した埴のほとんどは、ほぼ34.0×15.0×5.0cmの直方体をなし、両面が凹んだものや、細



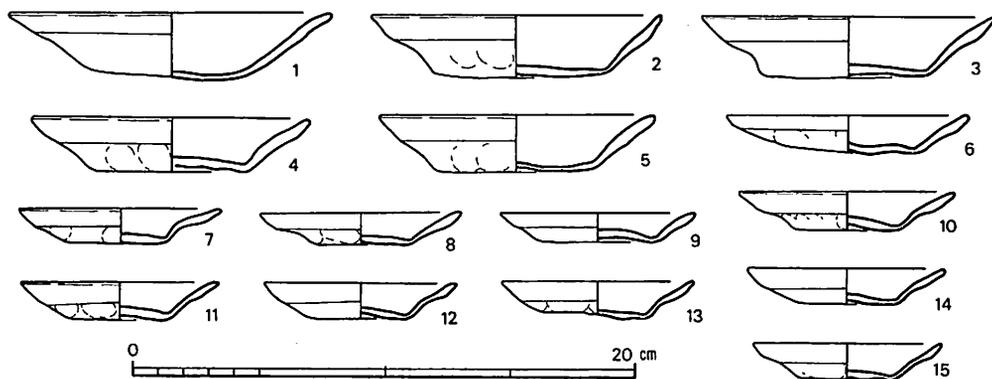
第90図 土壙60出土埴拓影(1) (縮尺: 1/4)



第91図 土壙60出土埴影(2) (縮尺：1/4)



第92図 土壙60出土磚拓影(3) (縮尺: 1/4)



第93図 土壌102出土遺物実測図(縮尺:1/3)

長方形のものは極めて少ない。

これらは外面全面に縄目が認められ、2ヶ所に孔があげられている。焼きはやや軟質のものと瓦質に近いもの等、まちまちであるが、やや軟質のものが多い。

第90図1・2は一面にX字の記号を付すもの。第91図1・2, 第92図1は一面に『X』状の記号を付し、両短側面にもその記号を付している。第92図2は小さな丸形の記号を押圧で付し、短側面にも付している。

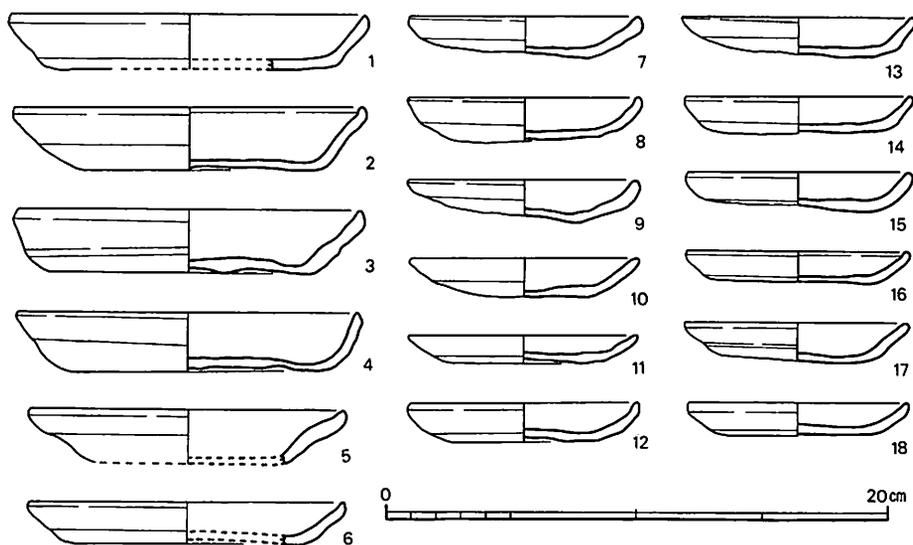
7)土壌102と出土遺物

(1)遺構

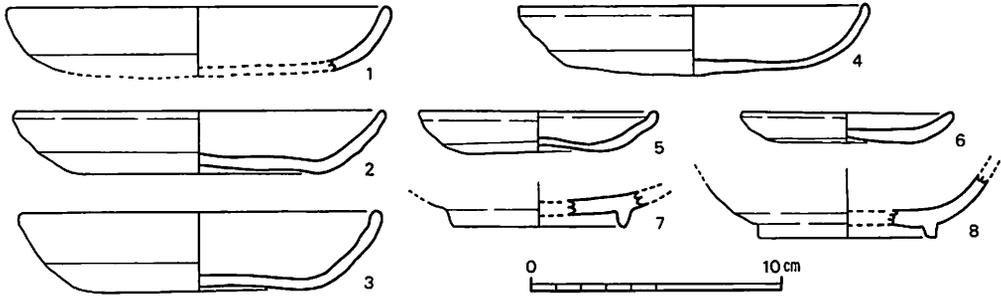
II地区D6で検出した1.7m四方のほぼ方形の土壌である。検出面レベルは26.20m前後で、完掘後の底部レベルは26.00mであった。深さ20cmほどの廃棄坑である。

(2)遺物(第93図)

〔土師器〕第93図はすべて褐色系の皿。1は、口径12.8cm, 器高2.6cmの大形の皿で、2～5



第94図 土壌104出土遺物実測図(縮尺:1/3)



第95図 土壌1015出土遺物実測図(縮尺:1/3)

のものとは形態が異なっている。2～5は、口径が11.0～11.6cmの間に、器高が2.2～2.5cmの間に収まる大形の皿で、口縁部周辺がやや厚くなり、体部外面下部には指おさえ痕が残る皿。6は、口径9.6cm、器高1.5cmの中形の皿。7～15は、口径が7.5～8.6cmの間に、器高が1.2～1.6cmの間に収まる小形の皿。以上の中・小形の皿も、その形態・手法は2～5の大形の皿と同じである。

8)土壌104と出土遺物

(1)遺構(図版第40下)

II地区D7の杭にかかって検出された1.10～1.75×2.70mのヒョウタン形をなした土壌である。検出面レベルは26.20m前後である。完掘後の底部レベルは25.67m前後であって、深さが約60cmほどある。廃棄坑と思われる。

(2)遺物(第94図)

〔土師器〕第94図はすべて褐色系の皿。1～4は、口径が13.7～14.2cmの間に、器高が2.2～2.5cmの間に収まる大形の皿。5・6は、前者よりやや小さく、口径12.6cm前後の大形の皿。7～18は、口径が8.7～9.4cmの間に、器高が1.2～1.7cmの間に収まる小形の皿。

9)土壌1015と出土遺物

(1)遺構

III地区のC1で検出した0.8×1.3mのほぼ長方形を呈する土壌である。検出面レベルは、25.82m前後であった。完掘後の底部レベルは25.50mで、深さ30cmほどの廃棄坑である。

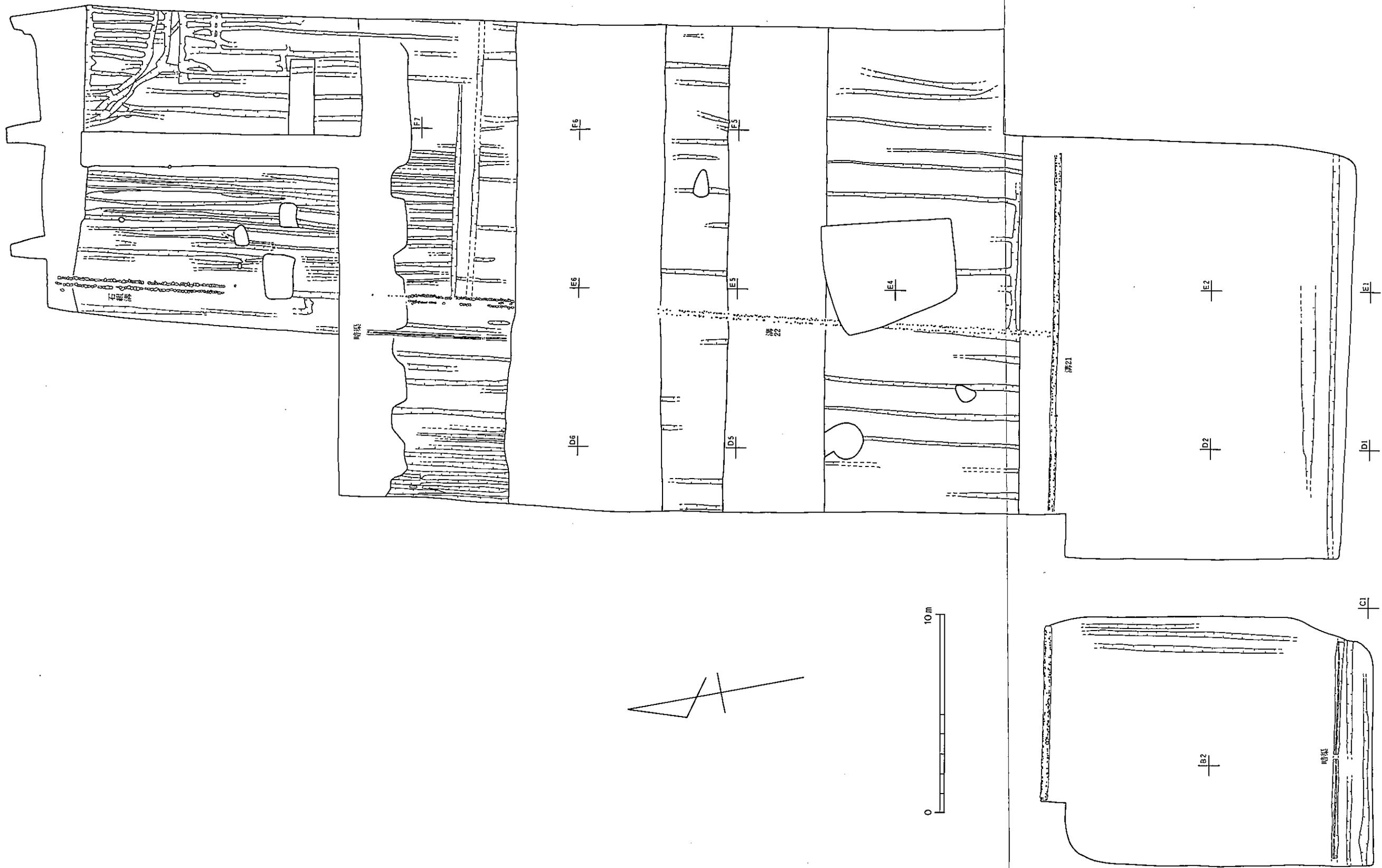
(2)遺物(第95図)

〔土師器〕第95図1～6はすべて褐色系の皿である。1～4は、口径が14.0～15.3cmの間に、器高が2.5～3.7cmの間に収まる大形の皿。2・3はやや上げ底気味になる。5は口径9.6cm、器高1.6cm、6は口径8.4cm、器高1.2cmの小形の皿で、これらもやや上げ底状となる。

〔灰釉陶器〕第95図7・8は椀の底部片。8は内面に釉が施されているが、外面には施されていない。

6. 江戸時代の遺構

1)概要(第96図)



第96図 江戸時代遺構全体図(縮尺:1/200)

層位の章でも述べたように、発掘区全域にわたって、江戸時代の包含層である黒褐色砂質土(耕作土)層が広がっている。この層の上面ないしは上面近くで、畝状遺構(畑)を一部検出しえた。

また、この畝状遺構に関連する用水路としての木柵溝・石組溝・暗渠も検出した。木柵溝は東西と南北方向の2条、石組溝は南北の1条、暗渠は東西と南北の2条である。暗渠と溝との前後関係は不明であるが、溝に関しては、木柵溝(溝22)→石組溝の前後関係はその重複状態で確認できた。

以下、各遺構ごとに説明を加えていくことにする。

2) 畝状遺構(第96図, 図版第41上)

畝状遺構を検出しえた所としえなかった所がある。

まず、I地区北半とII地区南側で、南北方向に走るまばらな畝状遺構を、I地区南半とIII地区では東西方向に走るこれもまばらな畝状遺構を検出した。

これらの埋土は黄褐色砂質土であったので、畑としての最終時のものと考えられる。

II地区北半では、おそらく石組溝と同じ頃と思われる畝状遺構を検出した。石組溝の東側では、畔と思われるものが東西に走り、溝と畔によって3分割される区画には、わりと密な畝状遺構を認めたが、これらの畝が一時期のものであるかは否かは不明である。

IV地区においても畝状遺構を検出したが、これも同一時期のものか不明で、かなりの重複があるようである。

3) 石組溝(第97図, 図版第41下)

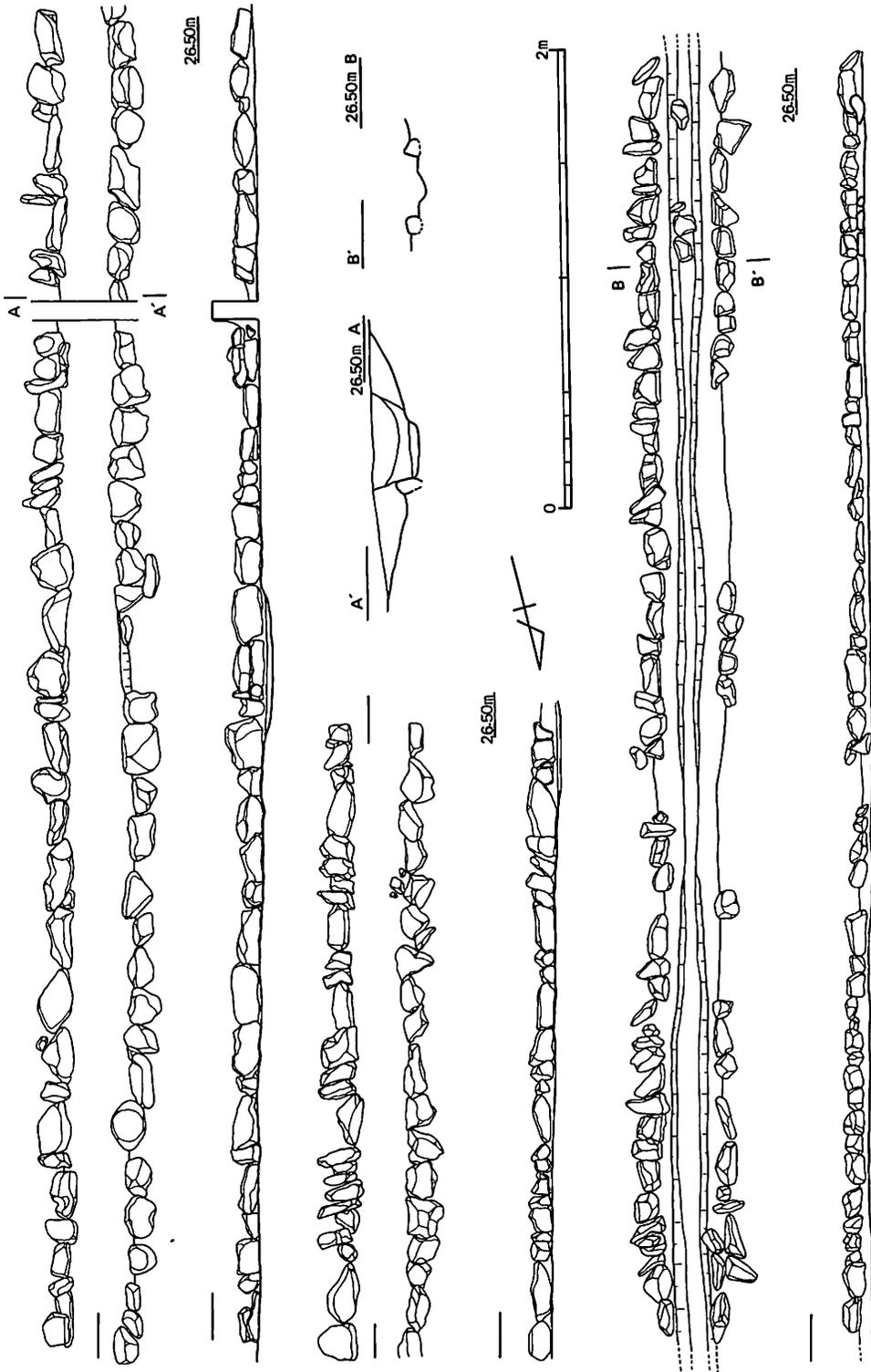
II地区北半よりIV地区にかけてほぼ南北方向に検出されたが、一部現代の攪乱で破壊を受けていた。IV地区の石組溝の南方には石組は存在していなかったが、II地区北半の石組溝と一連のものと考えられる。この溝はII地区南半より南には認められなかったので、II地区中央の攪乱部で止まっていたものと考えられる。

溝の幅は20~25cmで、拳大(10cm前後)から人頭大(30cm前後)の河原石ないしは割石を使用し、瓦も若干使用している。現存するのは1段だけであるが、断面図(第97図参照)をみる限り、2段以上あった可能性はないようで、深さは10~15cmほどの浅い溝であったと思われる。

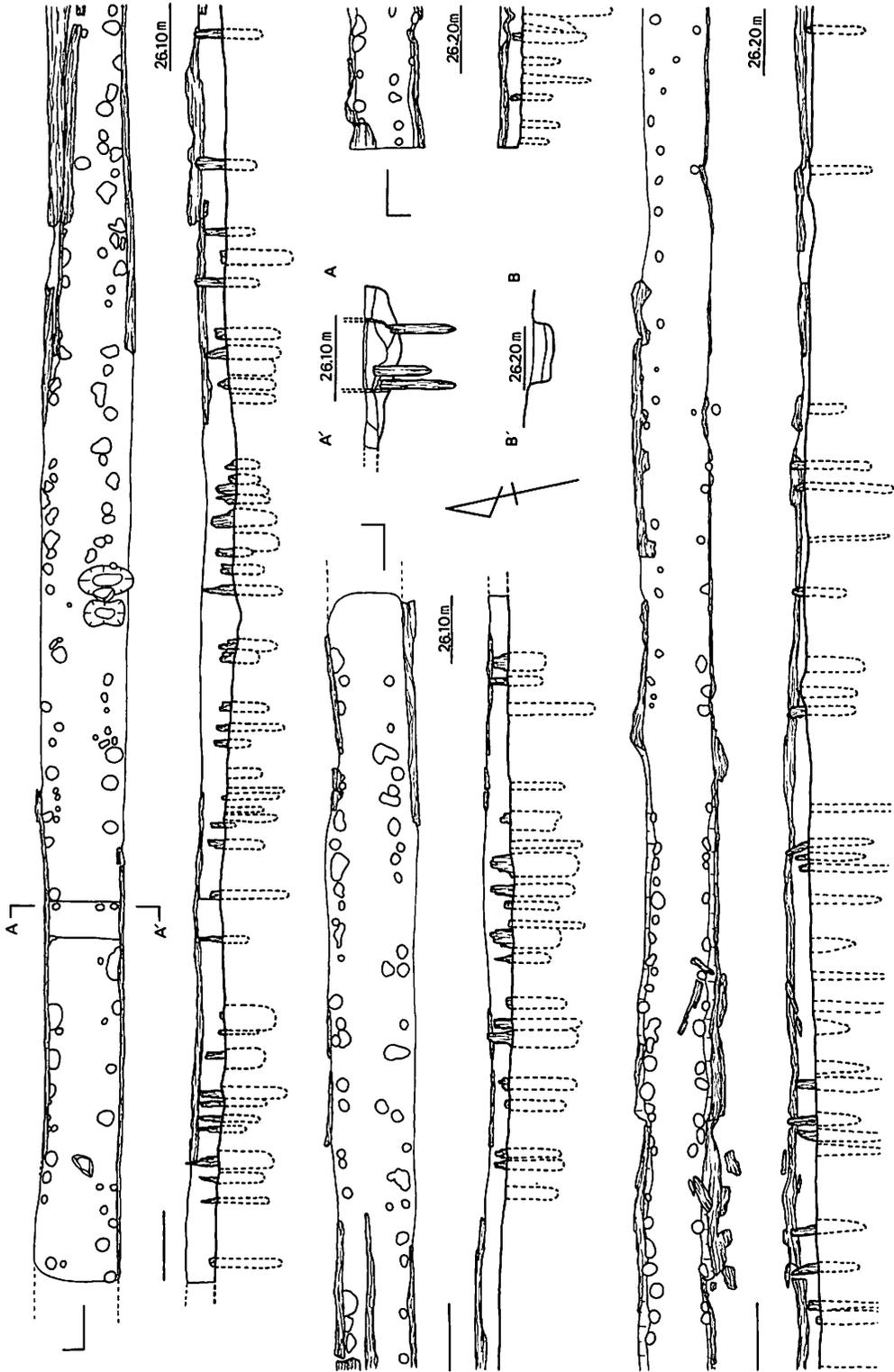
残存の北端でのレベルは26.30m、南端では26.20mを測るので、北から南へとゆるやかに流れていたものと思われ、また時には流れていなかったこともあったと思われる。

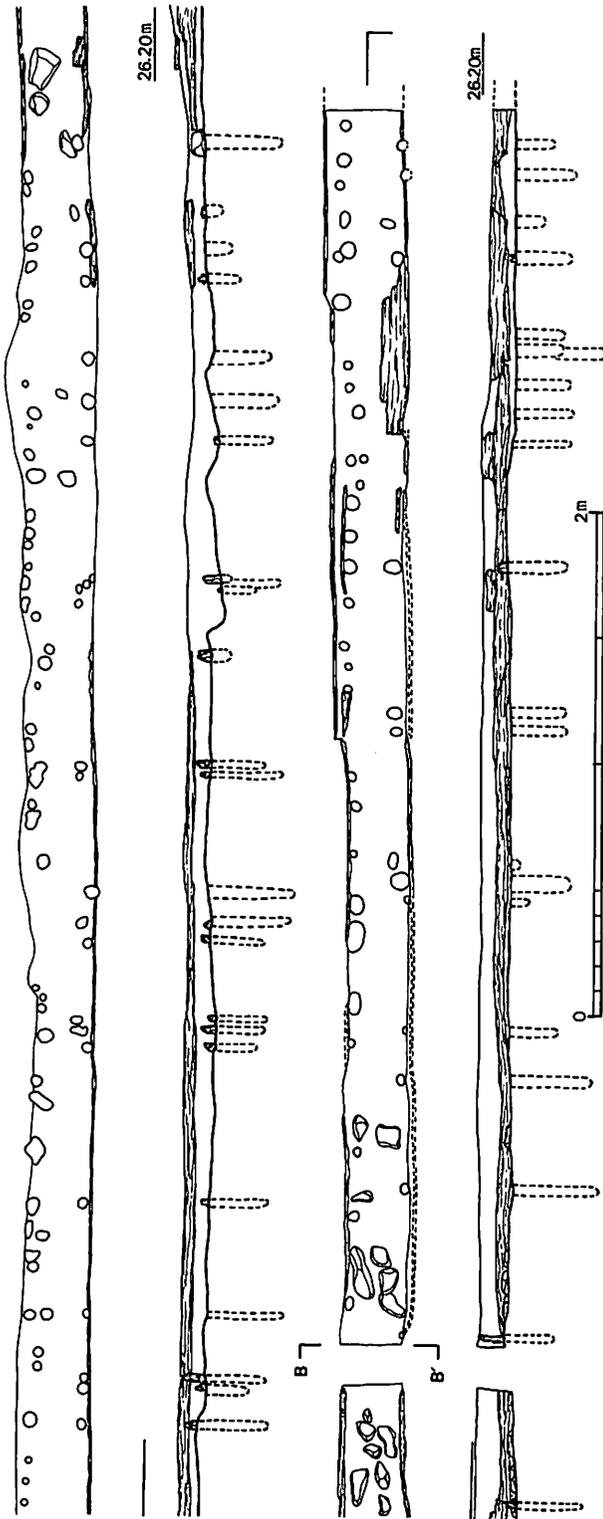
石の組み方は、IV地区の方は人頭大の河原石をわりと多く使用している傾向にあるが、II地区北半ではそれよりやや小振りの河原石を使用する傾向がある。また、II地区北半では、溝の中央部が幅10cmほどでU字形に凹んでいた。

なお、IV地区における溝断面図をみると、この石組溝の上にさらに黒褐色砂質土が堆積している。そして、この石組溝のほぼ直上に幅40cm、深さ10cmの浅い素堀りの溝らしきものがあり、この埋土は黄褐色砂質土であった。前述した畝状遺構の最終時のものと思われるものの埋土は黄褐色砂質土なので、これが溝とすると、最終時の畑の用水路は素堀り溝であった可能性が高



第97図 石組溝実測図 (縮尺: 1/30)





第99図 溝21実測図 (縮尺: 1/30)

い。この案堀り溝からは、断面をとった部分で鋳型等の鋳造関係遺物が集中的に出土している。

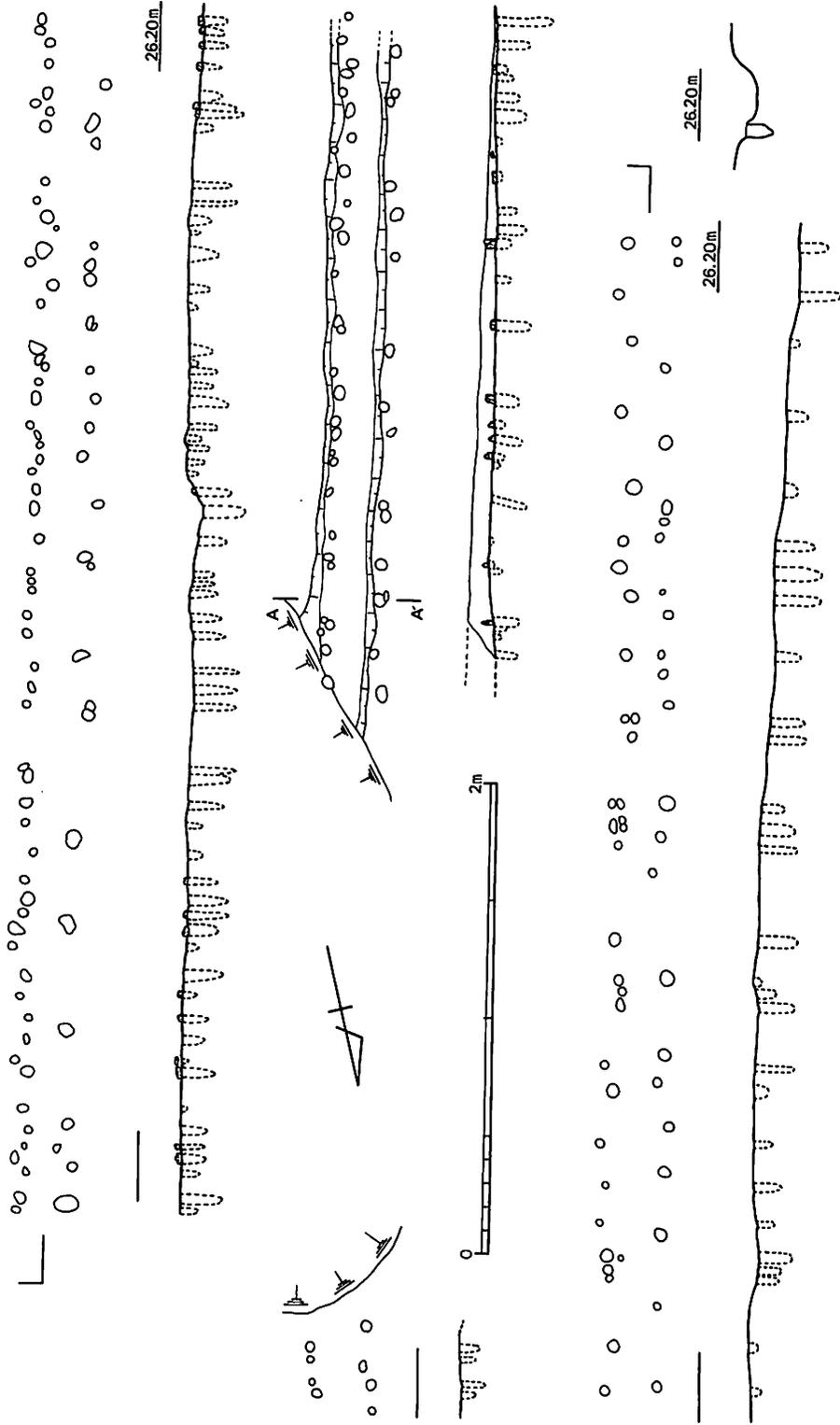
4) 木枠溝 (第98・99図, 図版第42~44)

東西方向に連なる溝21と、南北方向へ連なる溝22の2条を検出した。両者は、ほぼ直交するが、溝22は、溝21より南の方へは延びていなかった。

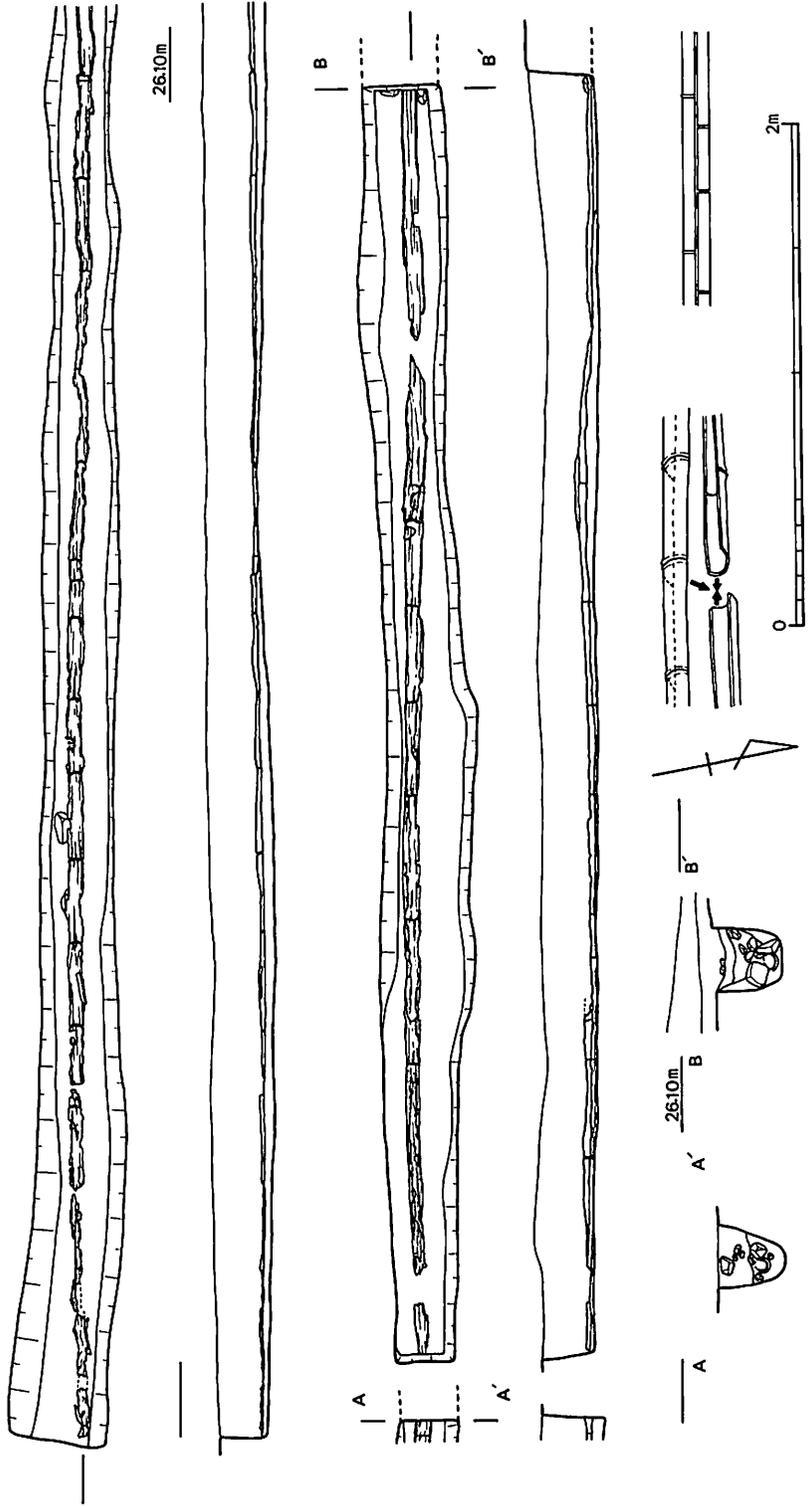
溝21は、ほぼ3ラインに沿って東西に延長約33mを検出した。幅は25~30cmのもので、両側に板材を横にし、その内側に杭を打ち込んで固定していたようである。側板や杭の残存状況は悪く、一番残りの良いところで高さ10cmほど側板が残っていたので、深さは最低10cm、おそらくそれ以上はあったかと思われる。杭は規則性がなく、密接して打ち込んだり、場所によっては60~100cmも間隔のあいているところもあった。また、西にいくにしたがい密に打ち込んでいる。杭の太さは4~10cmとまちまちで、その打ち込みにも深浅がある。杭の以上のような状況は、下の土層が礫をかなり多く含んでいることと関連があるものと思われる。

溝底のレベルは、最東端で26.07m、最西端で25.88mを測り、東から西へゆるやかに流れていたことを示している。この溝の西方には西洞院川が流れていて、そこに排水されていたと思われる。

溝22は、溝21に直交するように、



第99図 溝22実測図 (縮尺：1/30)



第100図 暗渠実測図 (縮尺: 1/30)

南北方向に約20m検出されたが、残存状況は非常に悪く、溝21のように側板は検出できず、杭の痕跡のみが検出された。

杭は溝21と似たようなものである。特に東側に密に打ち込んであり、深さもまちまちであるとは言え、溝21のそれに比して、ある程度一定している傾向をみせている。

第99図は、I地区北半だけの実測図であるが、II地区まで続いていた。IV地区では、杭の痕跡がなく、ここまで及んでいなかったのかもしれない。南の方では、溝21とどのような状態で接合するのかが不明であるが、溝21へ排水されたものと考えられる。

ただし、新京都市センタービル地での調査では、発掘区のほぼ中央に南北に走る杭列があり、これは東側と西側の段差をつけるための土留めの杭と考えられている。今回は、一応溝として把握したが、側板を検出しえなかったことや、杭が東側に密なことから土留め用の杭の可能性もある。

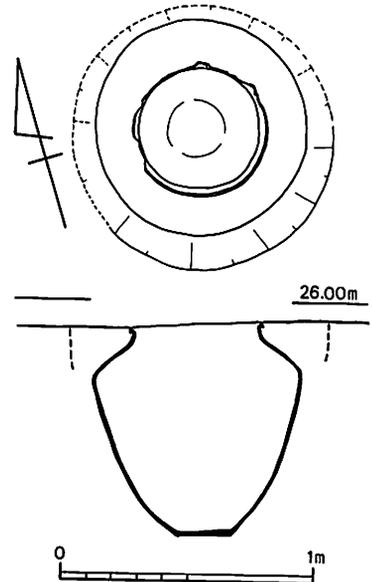
5) 暗渠(第100図, 図版第45・46)

竹を導管として使用したもので、南北、東西の2条を検出した。

II地区北側では南北方向の暗渠を検出した。これは、北側のIV地区にも延びていたと思われるが、II地区の南側やI地区では検出されなかったので、II地区中央の攪乱のところまでであったと思われる。III地区では東西方向に約11m検出した。これの東への続きは、I地区南半では検出されなかったが、そこでは南側未掘部分に延びている可能性がある。

南北方向の暗渠は残存状態が極めて悪い。構造は東西方向のものと同じと思われるので、東西方向のものを説明したい。

まず、U字形に幅25~30cm、深さ25cmほど掘り込み、長さ2m前後の半截した竹をつなぎ合わせて導管としている。竹のつなぎ方は第100図右下の模式図のようになっていて、半截した竹の内面を上に向けて下側を設置し、これに上側は継目が下側と交互になるように、内面を下にして、円筒形になるように合わせている。そして、この掘方内に小石や陶器・磁器片を入れ、上に粘質土をかぶせて密封している。東西方向の導管の底部レベルは、東端で25.77m、西端で25.71mなので、東から西へ流れ、溝21と同様、西洞院川に排水されていたものと思われる。なお、南北方向の暗渠の北端レベルは26.21m、南端レベルは26.19mで、北から南へ流れていたものと思われる。



7. その他の遺構と遺物

1) 概要

以上で述べてきた溝・墓・井戸・土壇の他に、これらに含まれない若干の遺構を検出している。

集石遺構 1 は、最終的には井戸 8 の上層として把握することができた。I 地区南半 E 2 東壁際で検出した集石遺構 3 は、拳大の河原石が多量に詰り、内部は粘質となっていた。出土遺物はほとんどなく、時期判定は難しいが、今回の調査では室町時代の遺物が極めて少ないことから、おそらく鎌倉時代に属するものであろう。

建物になるような遺構は検出しえなかったが、断片的に柱穴と考えられるものは検出している。I 地区北半の E 4 で検出した土壇 62 には柱痕が残っていた(図版第 47-3)が、これにつながるような同規模の柱穴はみあたらなかった。IV 地区の E 7 で検出した土壇 179 と 180 は、その内部に根石と思われる石が入っていた(図版第 47-4)が、これもこの部分のみであった。

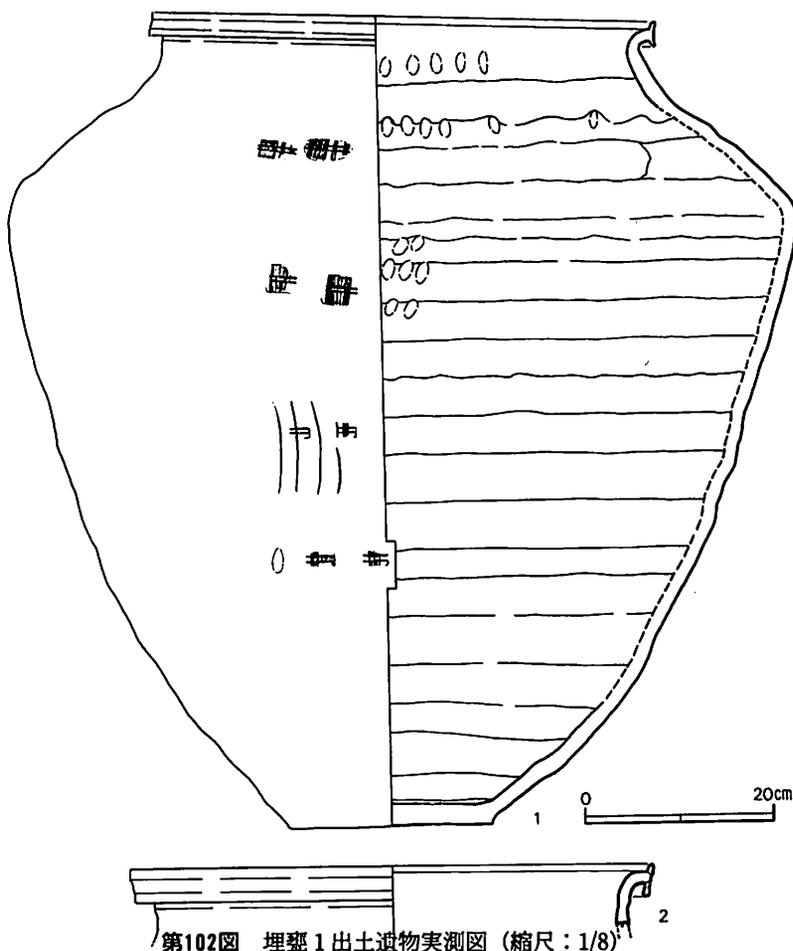
その他に、埋甕、土師皿群、柵列があり、以下順次述べていくことにする。

遺物では、瓦を一括してここで扱うこととした。

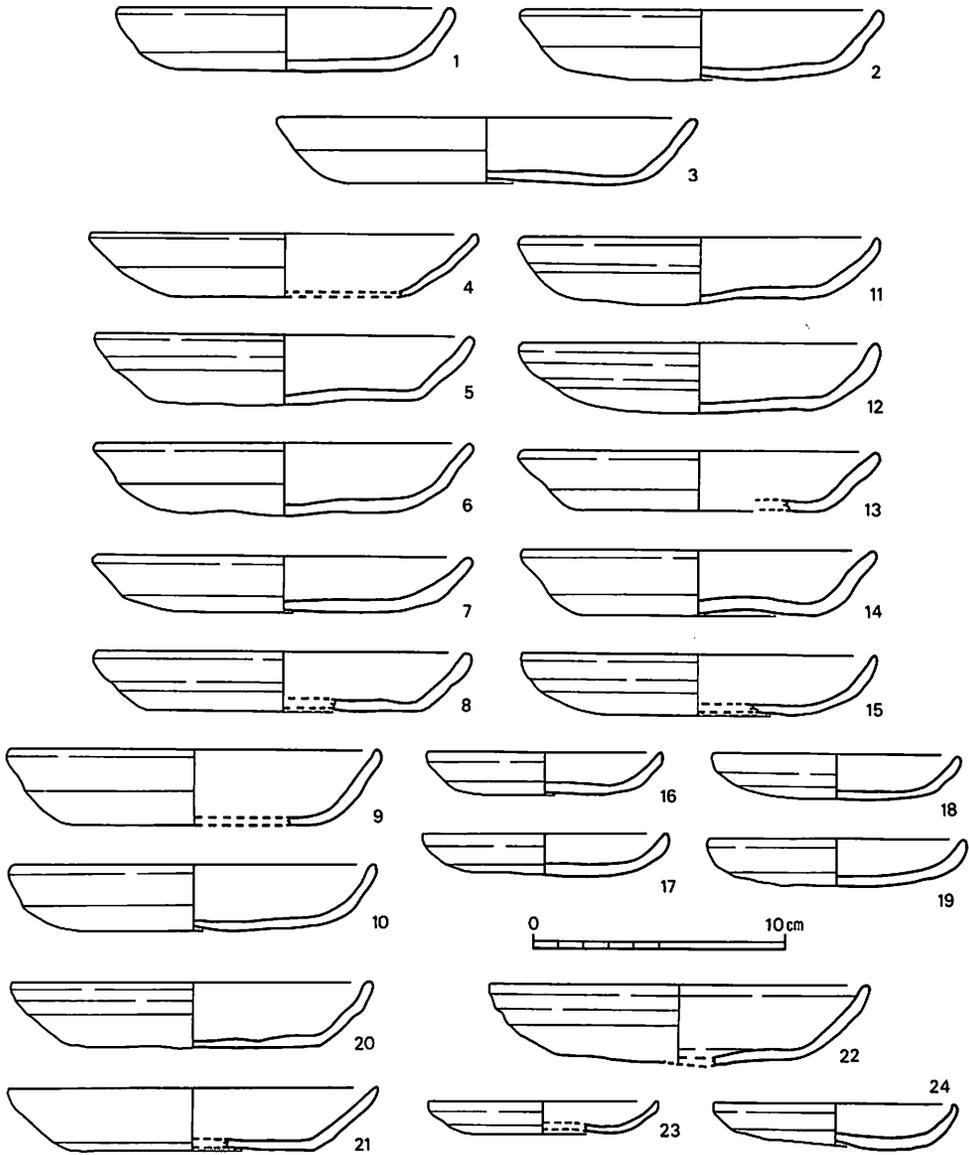
2) 埋甕 1 と出土遺物

(1) 遺構 (第 101 図, 図版第 47-1)

I 地区南半の西南隅 (C 1) で検出した常滑大甕を埋設した遺構で、口縁部の一部は欠失して



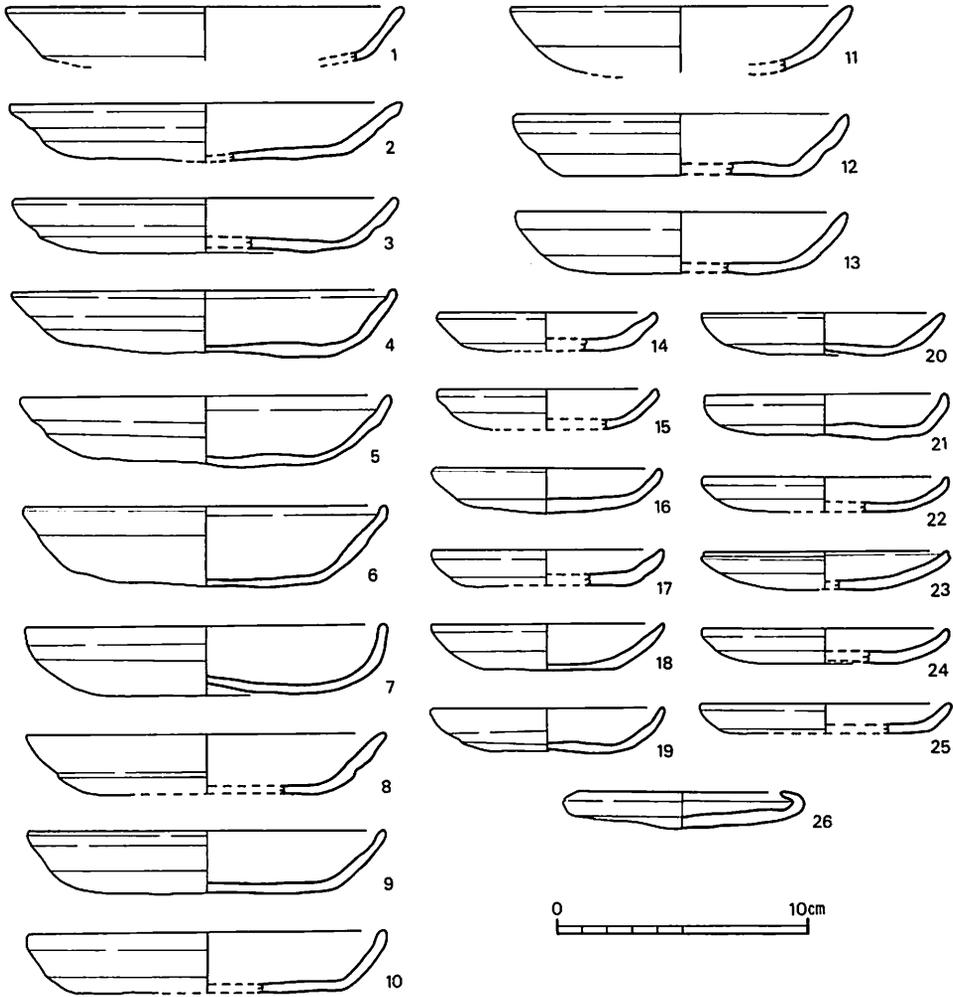
第102図 埋甕1出土遺物実測図 (縮尺: 1/8)



第103図 土師皿群出土遺物実測図(1) (縮尺：1/3)

いたものの、破損することなく、完存していた。検出面レベルは、25.90m前後であった。掘り方は明瞭ではなかったが、やや下げた時点で、南方でわりとはっきりと掘り方ラインが出た。それより推定すると、1.0m強ほどの円形の掘り方であったと思われる。

この埋壙内部には、埋壙2・3・4等のように礫がつまっておらず、古銭も出土していない。したがって墓とは断定し難い面が多かった。しかし、この埋壙を取り上げて、更に下げた時点で、この北に土壌9を検出し、この土壌を完掘すると、小ピット2個が検出された。この小ピットを埋壙の抜き取り痕とすれば、埋壙2・3・4のように、南北に大壙が3基並んでいた可能性もある。そうなると、埋壙2・3・4の状況から考えて、墓であった可能性が高いとも言える。ただ、その際にも、当初墓として埋設されたが、墓としての認識がなくなった時点で、



第104図 土師皿群出土遺物実測図(2) (縮尺：1/3)

何らかの別の用途に再利用したことも考えられる。いずれにせよ、調査中の所見では、墓と断定する判断材料に乏しかったことだけは確かである。

(2)遺物(第102図)

第102図1は、埋設主体の常滑大甕である。器高85.1cm、口径53.8cm、胴部最大径84.1cm、底径22.1cm。外面は暗灰色を呈するが、一部に暗小豆色を呈する部分がある。内面は暗小豆色を呈する。肩部に自然釉がゴマ状にかかり、焼成は非常に良い。口縁部は上下に若干拡張していて、幅2.6cmの縁帯を形成しているが、下方への拡張は顕著なものではない。肩部が大きく張り、肩部から胴部にかけて5ヶ所に押印がある。肩部にはヘラ先による縦方向の筋が全周している。

第102図2は埋壜内埋土から出土した同じく常滑大甕の口縁部片で、復原口径56.0cmで、口縁部の上下の拡張は前者より著しく、幅3.5cmの縁帯を形成している。

この他に、東播系須恵器摺鉢片、中国定窯系白磁皿片(型押の花文が内面に施されている)な

ど若干の遺物が出土している。

3) 土師皿群と出土遺物

(1) 遺構(図版第48)

これは、埋甕2・3・4の南側で検出した。当初、埋甕2・3・4に関連する遺構かと考えていたが、下げた時点で井戸8(この上層は集石遺構1になる)を切り、埋甕2・3・4によって切られている土壌と考えることができるのが判明した。土師皿は計4面にわたって出土している。この出土状況から単純な廃棄坑とは考えられないと思うが、どのような意味があるのかは不明である。

(2) 遺物(第103・104図)

〔土師器〕第103・104図はすべて褐色系の皿である。

第103図1～3は土師皿群4出土品。1・2はそれぞれ、口径13.5・14.5cm, 器高2.5・2.8cmの大形の皿。3も、口径16.7cm, 器高2.6cmの大形の皿。

第103図4～19は土師皿群3出土品。4～15は、口径が14.0～15.0cmの間に、器高が2.3～3.0cmの間に収まる大形の皿。中には、2段ナデを施したものもある。16～19は、口径が9.4～10.2cmの間に、器高が1.6～1.8cmの間に収まる小形の皿。

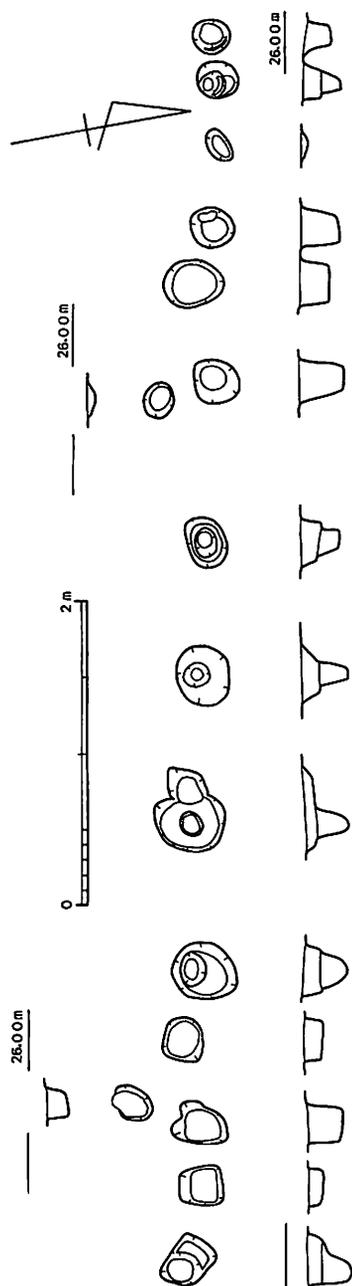
第103図20～24は、土師皿群2出土品。20～22は、口径が14.2～15.1cmの間に、器高が2.5～3.1cmの間に収まり、2段ナデを施した大皿。23・24はそれぞれ、口径9.2・9.6cm, 器高1.3・1.7cmの小形の皿で、口縁部がややつまみ上げ状になる。

第104図は土師皿群1出土品。1～13は、口径が14.2～15.8cmの間に、器高が2.4～3.2cmの間に収まる大形の皿。2段ナデを施すものが多い。14～25は、口径が8.9～10.0cmの間に、器高が1.2～1.9cmの間に収まる小形の皿。26は、口径8.0cm, 器高1.5cmの大形の下皿。

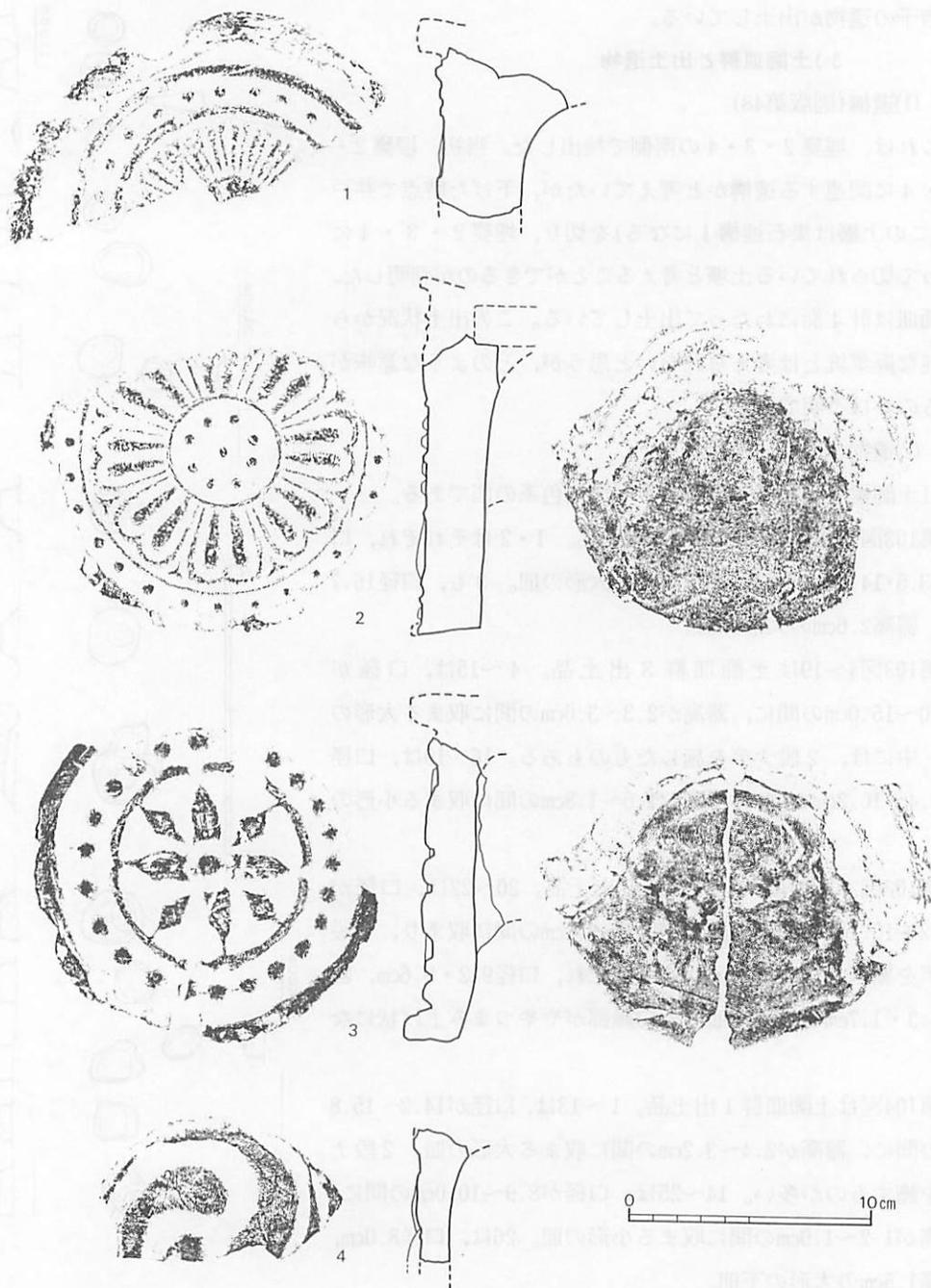
4) 柵列(第105図, 図版第47-2)

III地区のA2～B2の北辺で、全長8.3cmほどの間にほぼ東西に一直線にならぶ14個の柱穴と南辺に2個の浅い堀を検出した。これはI地区南半では検出されなかったので、C2の中央部から始まっているものと思われる。

検出面レベルは25.85～25.90mであった。間隔や形状はまちまちであり、深さは30cm前後のもの



第105図 柵列実測図(縮尺:1/50)

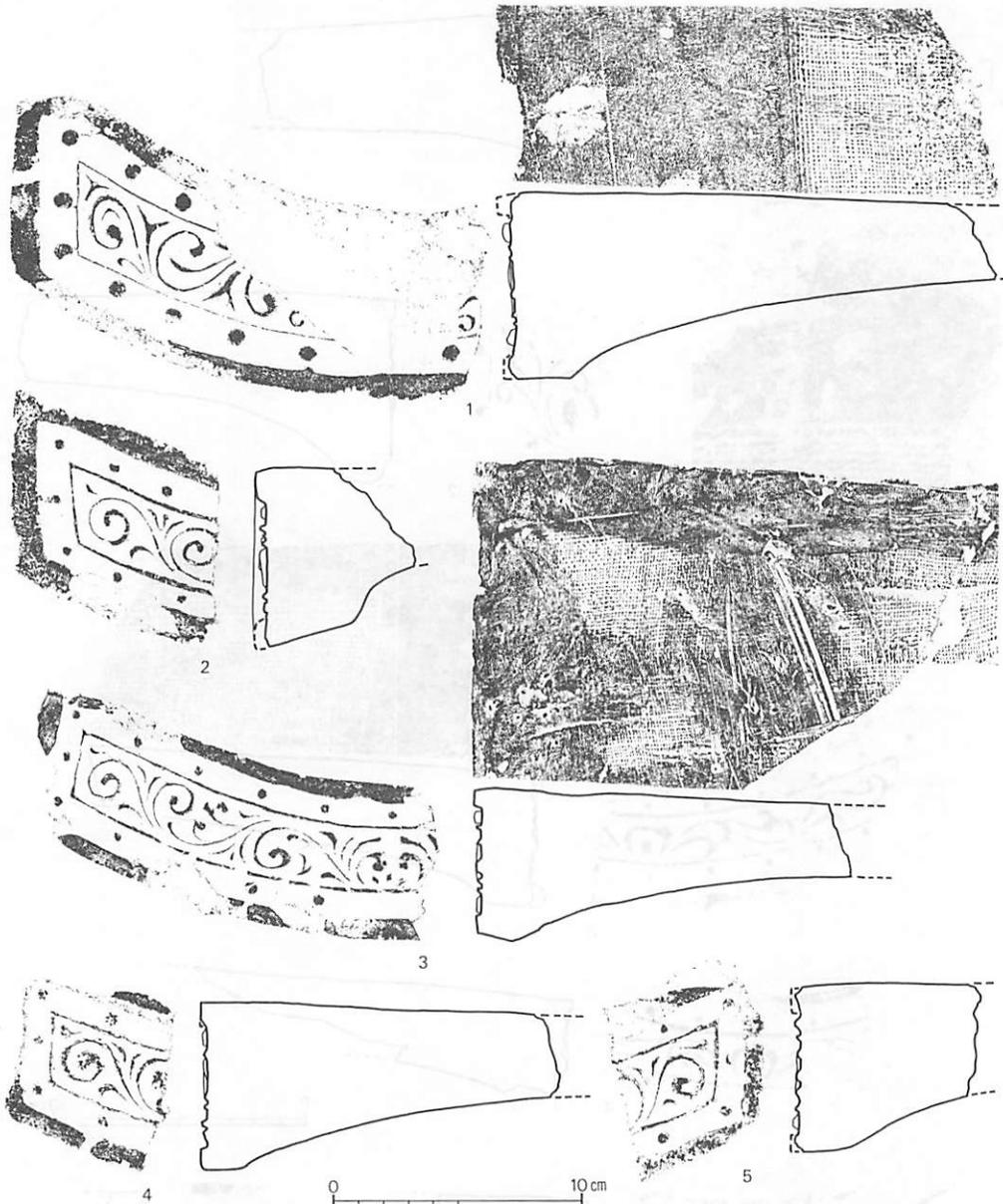


第106図 発掘区出土瓦実測図(1) (縮尺：1/3)

のが多い。溝24の上より掘られていた。

5) 発掘区出土瓦(第106～115図)

今回の調査で出土した古代の屋瓦類はあまり多くはなく、コンテナバットに8箱分ほどであり、このうち大半は溝24・29から出土した。瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、丸・平瓦、熨斗瓦およ



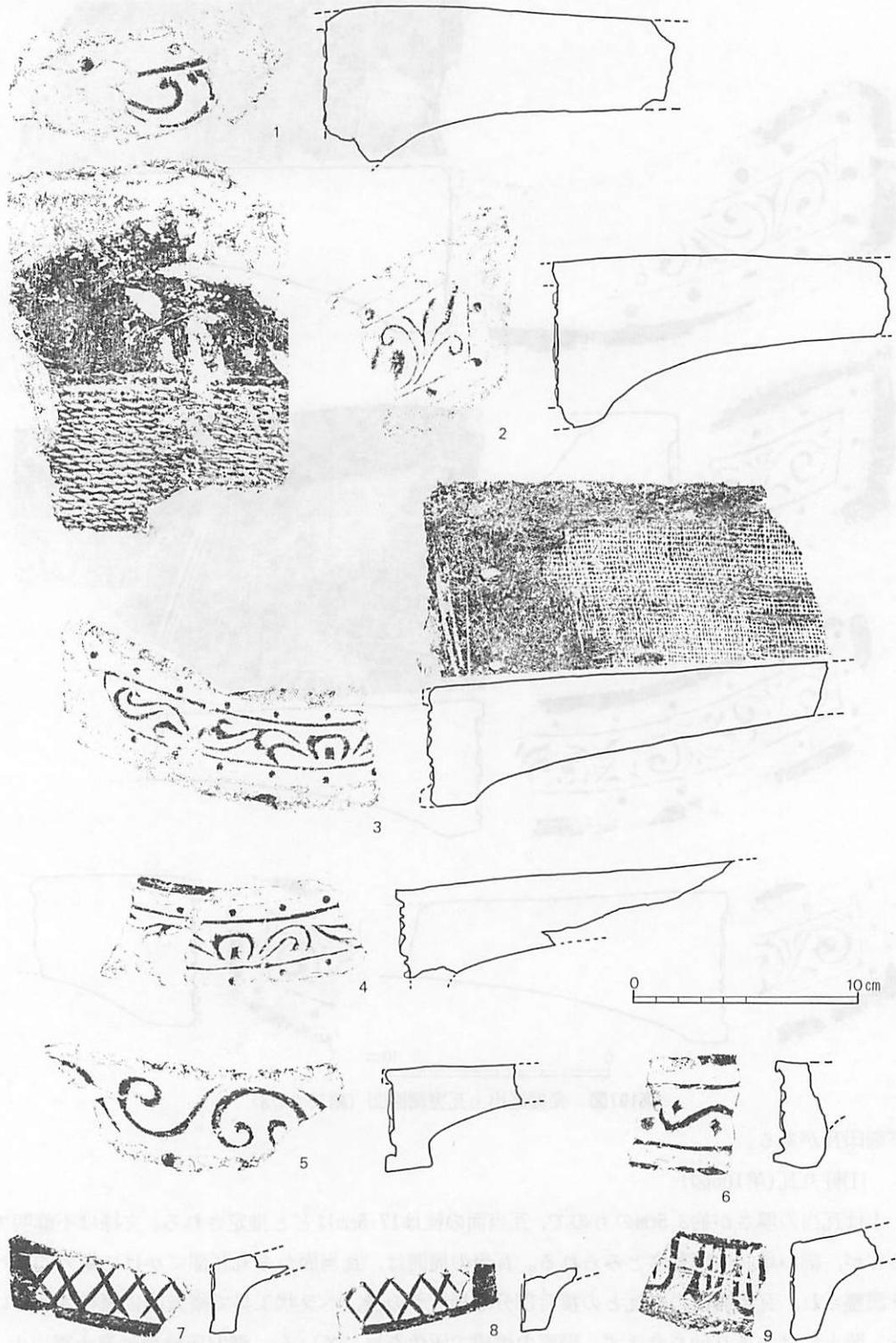
第107図 発掘区出土瓦実測図(2) (縮尺：1/3)

び刻印瓦がある。

(1)軒丸瓦(第106図)

1は瓦当の厚さが約3.5cmのもので、瓦当面の径は17.5cmほどと推定される。文様は不鮮明であるが、細い単弁の蓮華文とみられる。瓦当の周囲は、瓦当面から丸瓦部にかけて縦方向にヘラ調整され、瓦当裏面の丸瓦との接合部分も指ナデの後、ヘラ状工具で縦方向に調整されている。胎土にはあまり砂を含まず、硬質の焼成で灰色を呈している。溝24灰緑色砂質土層出土。

2は複弁八葉の蓮華文軒丸瓦で、周囲に幅の狭い珠文帯が巡り、やや密に珠文が配されてい



第108図 発掘区出土瓦実測図(3) (縮尺：1/3)

るが、その間隔には少しバラツキがある。瓦当裏面と周囲はヘラ状工具で主に横方向のナデが施されている。また、丸瓦部分は失われているが、丸瓦凹面の先端には×印状の接合用のキザミが入れられていたらしく、剝離した接合面にその痕跡が認められる。胎土には粗い砂粒も含むが、多くはない。硬質の焼成で灰色を呈している。C-5 暗褐色砂質土層出土。

3は宝相華文の軒丸瓦で、周囲に大粒の珠文を巡らしている。瓦当裏面と周囲は指ナデ調整がなされており、造瓦技法から播磨産の瓦と思われる。胎土にはほとんど砂を含まず、かなり硬質の焼成で全体に暗青灰色を呈しているが、暗赤褐色を呈する部分もある。同範例は法住寺殿跡からも出土している⁹⁾。井戸1004出土。

4は右巻きの三巴文軒丸瓦で、巴文の中心には小さな突起がある。珠文帯はなく、瓦当の径は11cmほどと推定される。胎土には砂粒を含み、やや軟質の焼成で淡灰褐色を呈している。土壙1016出土。

(2) 軒平瓦(第107・108図)

第107図1は、失われている右下の珠文帯に「西寺」を表わす小さな『西』字の入る唐草文軒平瓦で、同範例は西寺跡の他、平安宮跡でも多く出土している⁹⁾。凹面側は瓦当面寄り約12cmが横方向のヘラ調整で布目が消されており、凸面側も主に縦方向のヘラ調整がなされているが、部分的に布目が認められる。胎土には砂を多く含み、やや硬質の焼成で表面黒色、内部は灰色を呈しており、凹面の布目の残る部分は灰色である。土壙223出土。

2～5はいずれも同文の均整唐草文軒平瓦であるが、2～4は文様の細部に違いが認められ、それぞれ瓦範は異なったものである。またこの同文例は西寺跡からも多く出土しているが¹⁰⁾、それとも同範ではない。

2はやや硬質の焼成で、表面灰黒色、内部灰色を呈したもので、瓦当面の範傷などから左京八条三坊二町の調査で出土した瓦と同範であることがわかる¹¹⁾。溝29付近出土。

3はかなり硬質の焼成で、胎土はちょうど『墨ながし』のような、灰白色と青灰色の粘土の縞模様を呈している。凹面側は瓦当寄りが幅広く粗いヘラ調整がなされており、部分的に布目が残っている。凸面側も粗い縦方向のヘラ調整で、瓦当下端の一部に布目が認められる。溝24付近出土。

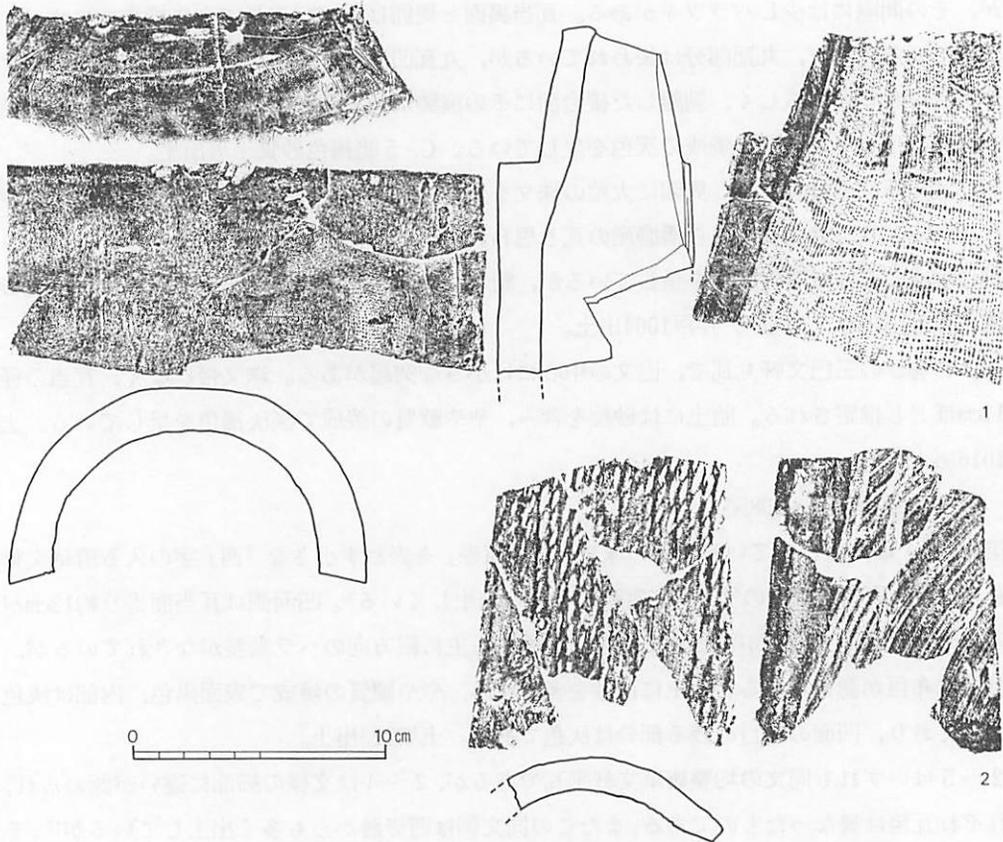
4の文様は3とほぼ同様であるが、上外区と脇区の界線の角度がわずかに異なるため、異範とした。焼成はやや軟質であるが、瓦当部分はやや硬質になっている。溝24出土。

5は、3か4の右端部になると思われるもので、焼成などは4に近い。溝24出土。

第108図1は長岡宮式の軒平瓦と思われるもので、平瓦部の凸面には横方向の縄目叩きがなされている。胎土には砂粒を多く含み、やや硬質の焼成で凸面は灰黒色、他は灰白色を呈している。土壙91出土。

2は大阪府吹田市の岸部瓦窯の製品である。胎土には細かい砂を多く含み、やや軟質の焼成で瓦当面は黒色、他は赤褐色を呈している。溝24出土。

3・4は同範の軒平瓦で、平安宮内裏跡からも同範例が出土している¹²⁾。3・4とも胎土には長



第109図 発掘区出土瓦実測図(4) (縮尺：1/3)

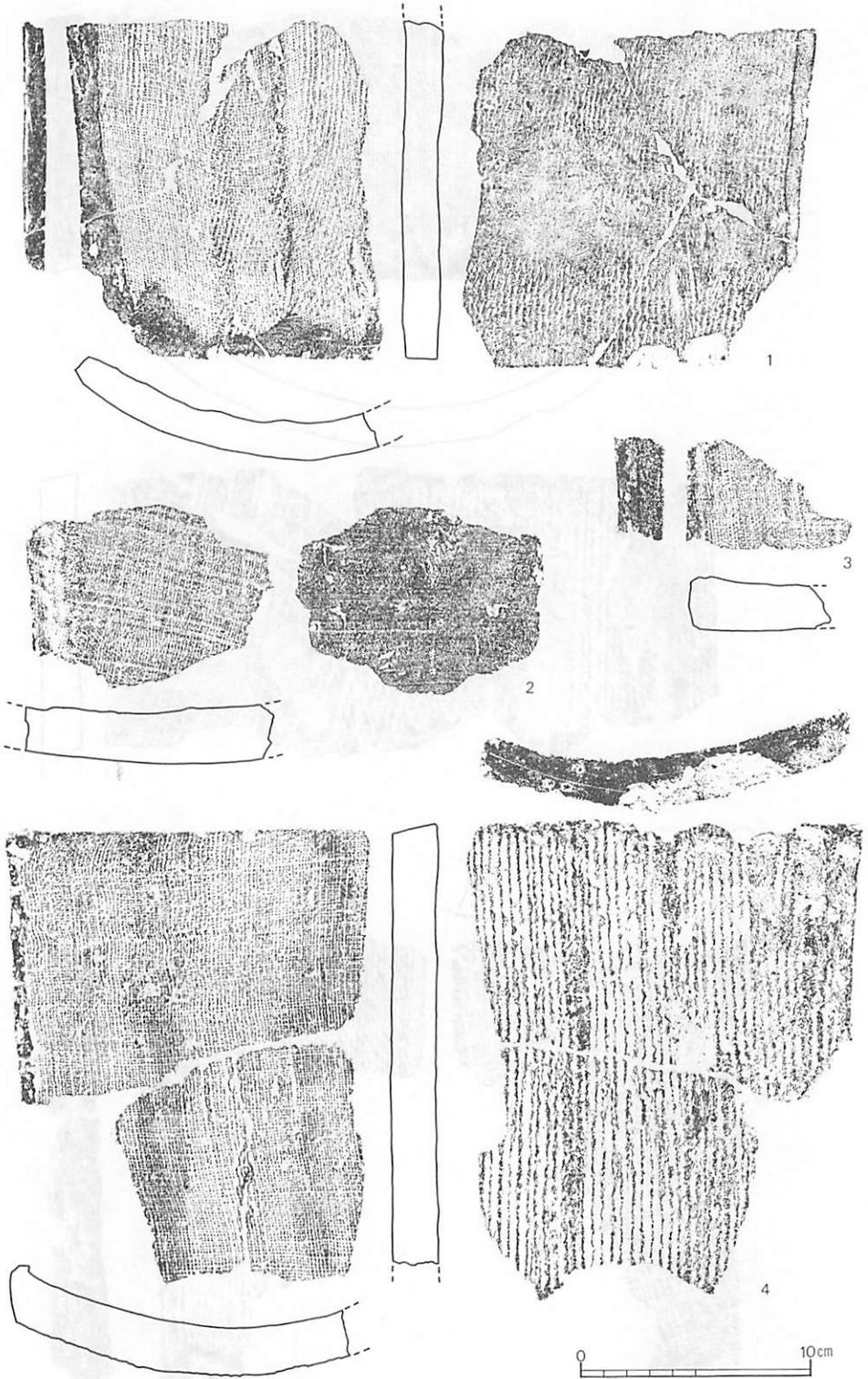
石粒の目立つ細かい砂を多く含み、やや軟質の焼成で凸面と瓦当面が黒色、他は褐色を呈している。溝29出土。

5・6は播磨産の軒平瓦で、瓦当部は「包み込み式」でつくられている。いずれも調整はナデを基調とし、硬質の焼成で灰色を呈している。5はE-1 灰緑色砂質土層、6は溝29出土。

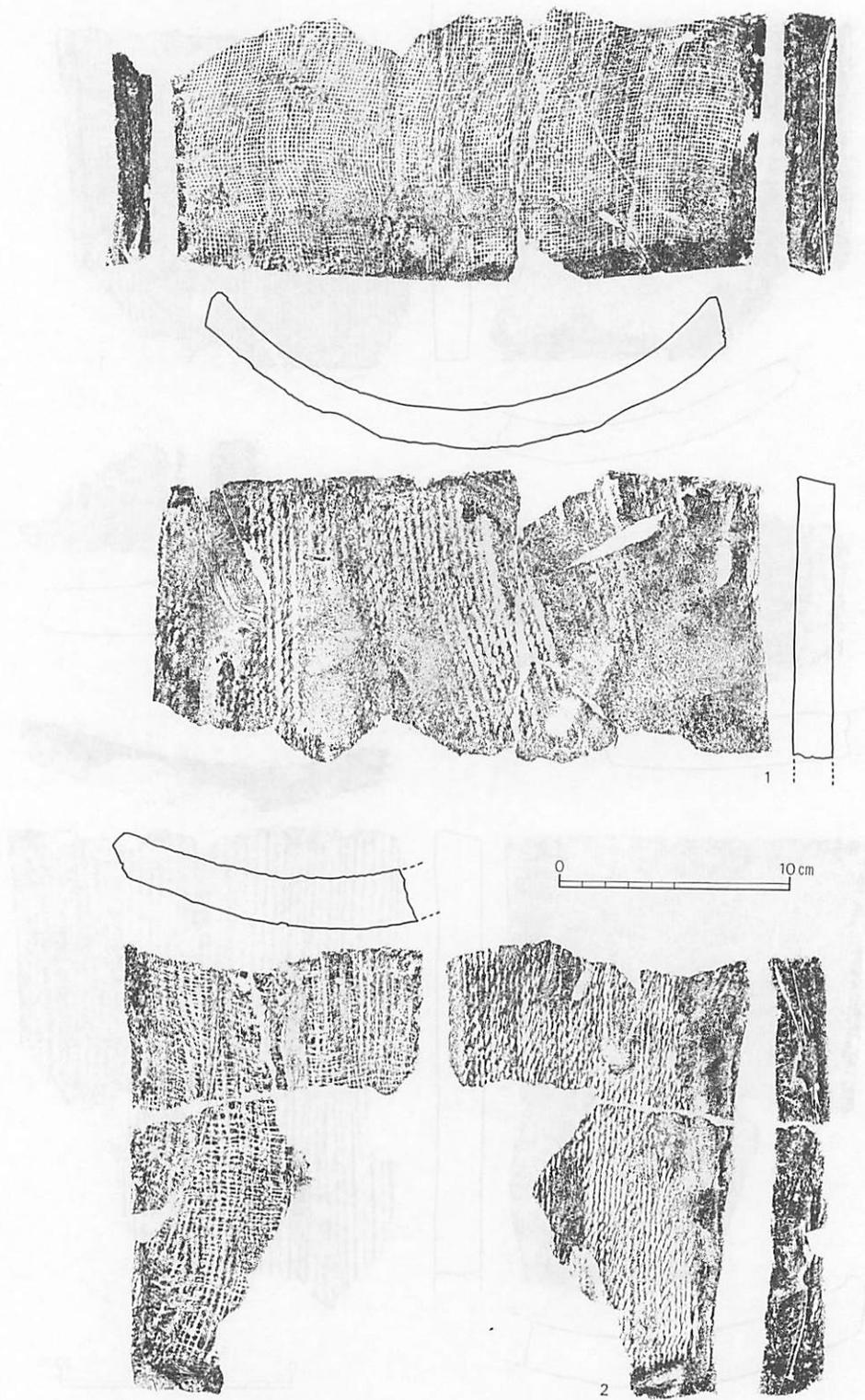
7～9は平安時代後期の小形の軒平瓦で、造瓦技法はいずれもほぼ同様である。凹面の布目は比較的細かい。顎部には縦方向に指押えがなされ、その後、横方向に指ナデされている。焼成はやや硬質で、灰～灰褐色を呈している。7は土壙90、8・9はC-5・6 灰緑色砂質土層出土。なお同様のつくりの軒平瓦は、井戸23から連巴文のものが出土し、土壙132からは剣頭文軒平瓦も出土している。

(3)丸瓦(第109図)

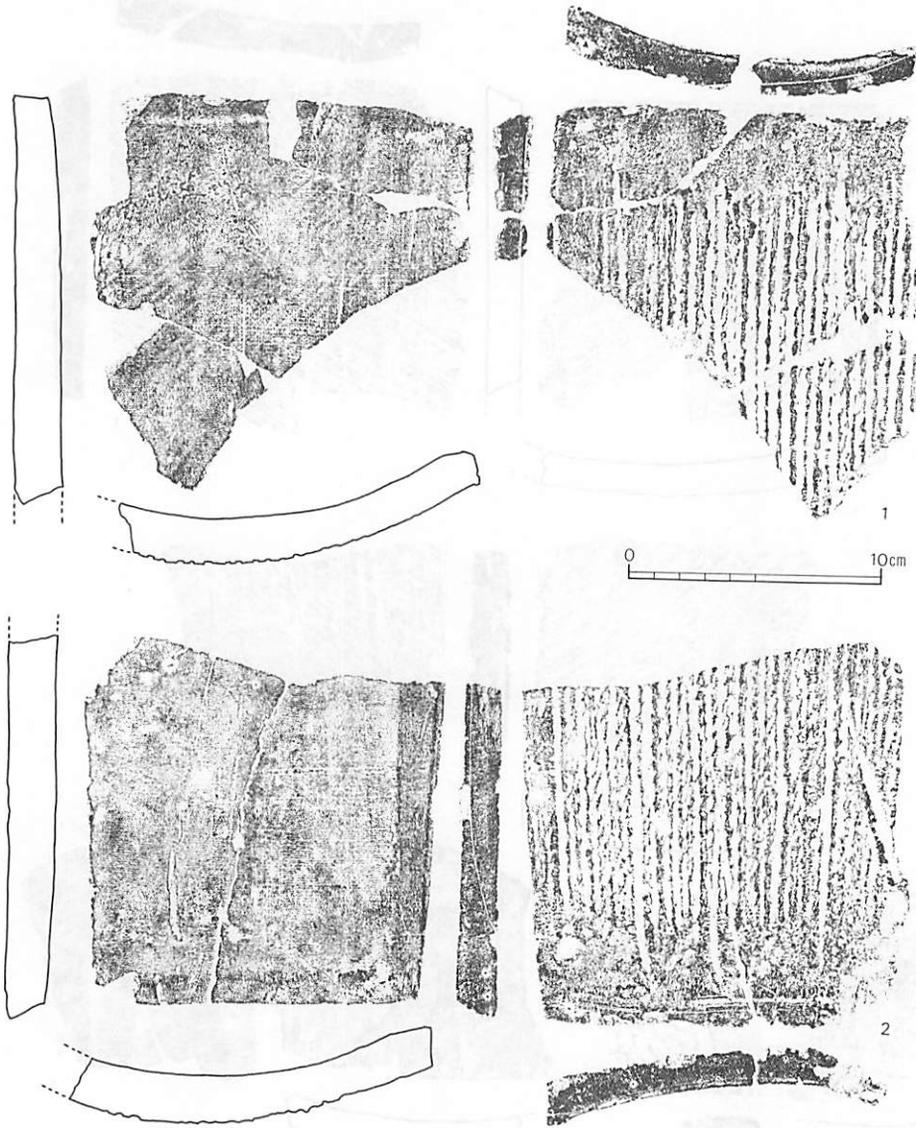
丸瓦は今回の調査では10数片出土したのみで、ここでは溝29の丸瓦で代表させる。第109図1は平安時代前期に属すると思われる丸瓦で、全体に丁寧なつくりのものである。凸面は主に横方向のナデがなされ、かすかに縄目叩きの痕跡が認められ、一部には布目も見える。焼成は硬質で灰色を呈している。焼成や色調は様々であるが、今回出土した丸瓦のほとんどはこの類と思われる。2は平安時代後期の丸瓦で、凸面には縄目叩き痕を残し、凹面には糸切り痕が顕著



第110図 発掘区出土瓦実測図(5) (縮尺：1/3)



第111図 発掘区出土瓦実測図(6) (縮尺：1/3)



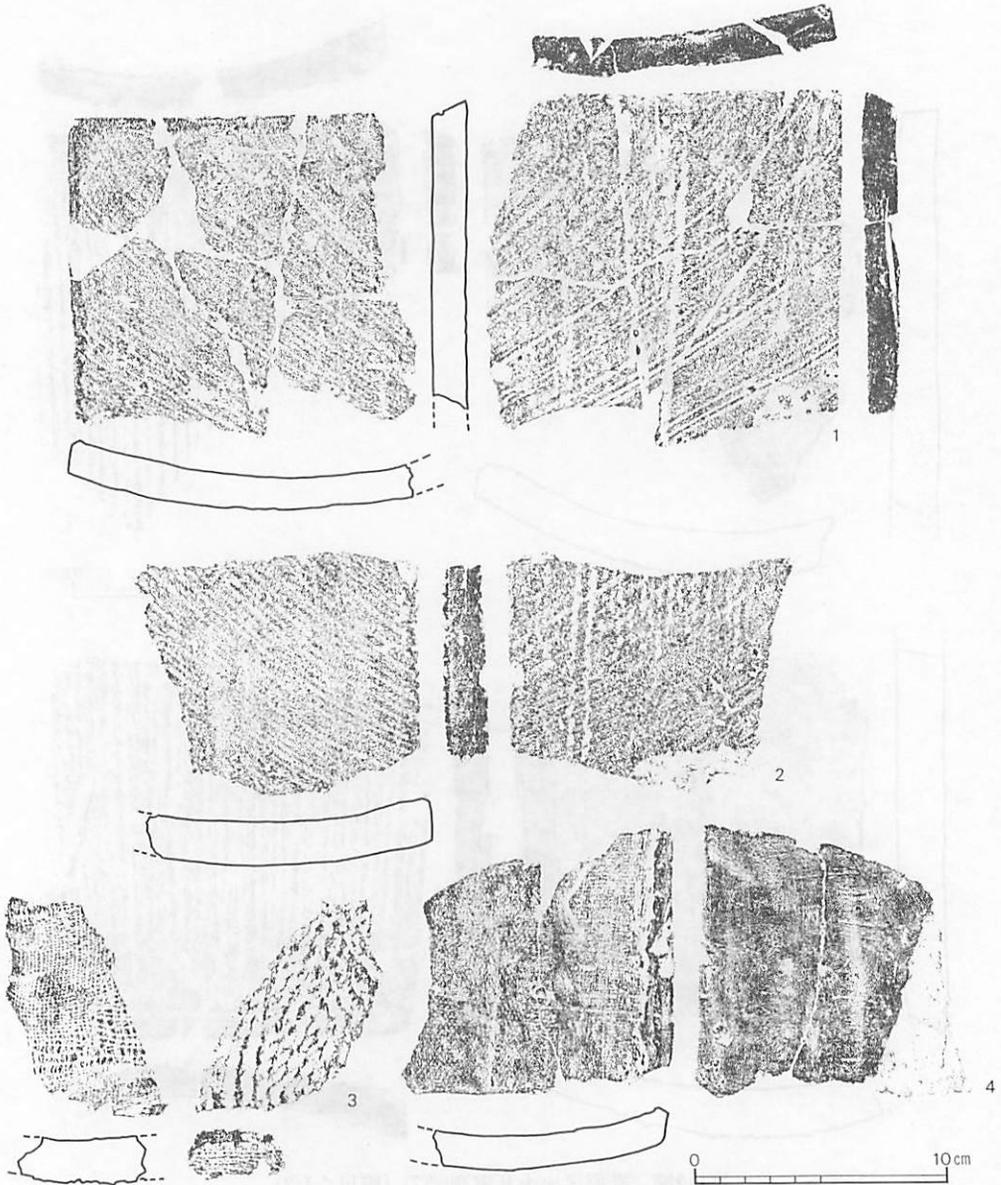
第112図 発掘区出土瓦実測図(7) (縮尺：1/3)

で、布目には一部に認められる程度である。やや硬質の焼成で灰白色を呈している。

(4)平瓦(第110～113図)

今回出土した平瓦には平安時代後期までのものがあり、平安時代前期から中期にかけての瓦が溝24・29から比較的まとまって出土している。ただし、前期頃と思われる瓦には平安京の主要な官窯である西賀茂瓦窯の製品と考えられるものは見当たらず、また平安時代以前と思われる平瓦も出土している。

第110図1～3は造瓦技法からあるいは奈良時代のものかと思われる。1は凸面に縄目叩きを施したもので、凹面には模骨痕が顕著であり、糸切り痕も残る。2・3も凹面に模骨痕が残る

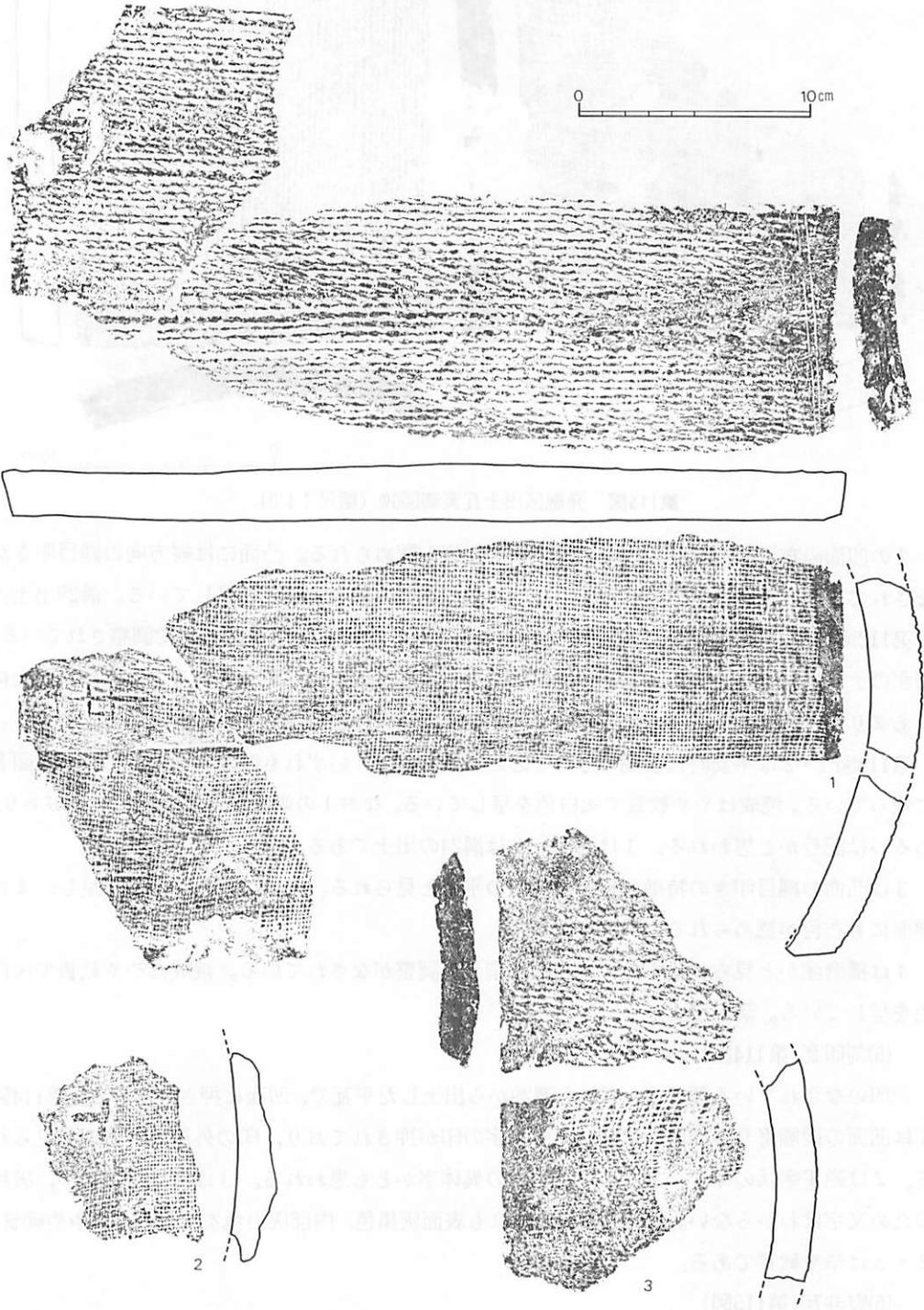


第113図 発掘区出土瓦実測図(8) (縮尺：1/3)

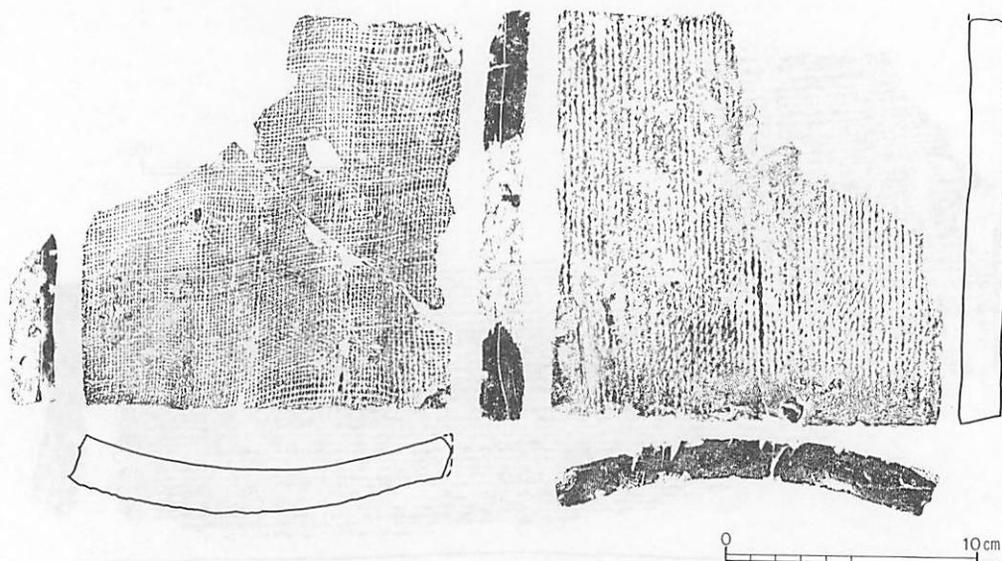
もので、凸面は横方向のナデ調整がなされ、叩き目は認められず、2の凸面には横方向に朱線がついている。焼成はいずれもやや軟質で灰色を呈している。溝29出土。

4は凸面にやや太い縄目の叩きを施した平瓦で、凸面には離れ砂が用いられている。やや軟質の焼成で灰色を呈している。溝29出土。

第111図1は凸面に離れ砂を用いて縄目叩きを施したものであるが、叩きは全面にはなされておらず、凹凸が目立つ。硬質の焼成で暗灰色を呈している。溝29出土。なお、溝29から出土した平瓦にはこの類が比較的多い。



第114図 発掘区出土瓦実測図(9) (縮尺: 1/3)



第115図 発掘区出土瓦実測図(10) (縮尺：1/3)

2の凹面の布目はかなり粗いもので、糸切り痕も認められる。凸面には縦方向の縄目叩きがなされており、離れ砂は用いられていない。やや硬質の焼成で灰色を呈している。溝29出土。

第112図は凸面にかなり粗い縄目叩きを施したもので、凹面は横方向のナデで調整されている。凹面のナデは全面におよぶが、部分的に細かな布目と糸切り痕も認められる。いずれも胎土にはあまり砂を含まず、硬質の焼成で表面灰黒色、内部灰白色を呈している。溝29出土。

第113図1・2は平安時代後期のものと思われるもので、いずれも凹凸両面に糸切り痕が顕著に残っている。焼成はやや軟質で灰白色を呈している。なお1の端面にはV字状の刻みがあり、あるいは記号かと思われる。1は溝29、2は溝24の出土である。

3は凸面の縄目叩きの特徴から、讃岐産の平瓦と見られる。硬質の焼成で灰色を呈し、また端面にも布目が認められる。溝29出土。

4は播磨産かと思われるもので、凸面は指ナデ調整がなされている。焼成はやや軟質で灰白色を呈している。溝24出土。

(5)刻印瓦(第114図)

刻印のなされている瓦は、いずれも溝29から出土した平瓦で、凹面に押されている。第114図1は凹面の両端寄りの3箇所と同じ『中』字の印が押されており、印の外形は長方形と見られる。2は逆T字状の印で、あるいは『土』の異体字かとも思われる。3は縦線が残るが、破片のため文字はわからない。なお色調はいずれも表面灰黒色、内部灰白色を呈し、1はやや硬質、2・3はやや軟質である。

(6)熨斗瓦(第115図)

熨斗瓦と識別できたものは1点のみであった。第115図は溝29から出土したもので、平瓦の中央に凹面側から分割裁線が入られ、焼成後分割されたものと思われる。焼成はやや硬質で表

面灰黒～灰白色，内部灰白色を呈している。なお全体のつくりは三條西殿跡から出土した熨斗瓦¹³⁾によく似ている。

IV. まとめ

1. 遺構・遺物のまとめ

1) 遺構・遺物の年代推定

溝29 この大溝に関しては、第1次調査報告書の中で検討されているので、詳しくはそれを参照していただきたいが、第1次調査報告書での年代観を簡略に要約すると、次のようになる。

「溝上層および下層の出土品には新旧がかなり混在するが、層位的に一括品として分離できた溝最下層出土土器を9世紀後葉に、最下層直上出土土器を10世紀前葉に比定しうる。そして、溝内埋土の暗灰色粘質土層は9～10世紀に相当し、灰色砂質土層は10～11世紀に相当する。」¹⁴⁾としている。ところで、今回の第2次調査では、溝内埋土を3層に分離した。しかし、これを大きくみると、上下の2層にまとめ直すことが可能である。すなわち、最下砂層・緑色砂層・暗灰色粘質土層・黄褐色砂層を一括して、溝29の下層としてとらえることができよう。この下層から出土した土器は、第1次調査での溝最下層出土土器に似ており、ほぼ9世紀代でとらえておくことができるものと考えられる。一方、暗灰緑色砂質土層・暗青灰色砂質(粘質)土層は、溝29の上層としてとらえることができよう。この上層からは、灰釉陶器が下層よりも多く出土している。これらの中にはK-14も若干含まれているが、K-90が多い¹⁵⁾。土師器では、「手」字状口縁の深い皿が出現していて、また下層からの系統の皿では、口縁端部が内面に肥厚するものが少なくなり、かつ薄手の作りになっていく傾向にある。したがって、この上層は、9世紀末～10世紀の年代を考慮しておきたい。11世紀末頃の厚手の「手」字状口縁の土師皿もあるが、混入品の可能性が高く、11世紀代にまでは下らないものと思われる。

溝24 この溝からは、薄手の「手」字状口縁の土師皿が出土していて、また灰釉陶器ではK-14・K-90・0-53・初期山茶碗が含まれている。したがって、10～11世紀の年代を考慮しておきたい。この溝24は、一時期、溝29と併存していたことが考えられよう。

溝23 この溝からは、厚手の「手」字状口縁の土師皿が出土していて、これは寛治五年(1091)銘須恵器と共伴した土師皿¹⁶⁾に近い形態をしている。したがって、11世紀末頃の年代が考えられる。

埋壘2・3・4 3者とも非常によく似た形態の常滑大甕で、同時代のものと考えて良からう。赤羽編年¹³⁾のⅢ期の古い時期に相当するものと思われ、13世紀後半の新しい時期の年代が考えられる。

埋壘5 東播系須恵器大甕の底部片であるが、おそらく鎌倉時代に属するものであろう。

埋壘6 埋壘2・3・4の常滑大甕と形態的によく似ているので、これも13世紀後半の新しい時期の年代が考えられる。

埋壘7 この東播系須恵器大甕は、外面に綾杉状タタキが使用されているので、12世紀中頃

の年代が考えられる¹⁰⁾。しかし、壘内埋土から出土した土器片は13世紀代のものがほとんどであった。このことは、大壘が、一定期間、本来の貯蔵用に使用され、後に転用された可能性もあることを考えさせるが、一方、陥没によって暗褐色砂質土層の土が入り込んだ可能性もある。

土壙50 出土遺物はほとんどないが、埋壘6との関連を考えれば、それとほぼ同時期の13世紀後半の新しい時期が考えられる。

土壙88 これも、内部から古銭が出土しているだけであるが、おそらく鎌倉時代に入るものであろう。

土壙3 白色系土師皿が出土している。これと褐色系土師皿を含めた土師器は、第1次調査のG4P19出土品に近い。したがって、13世紀中葉を前後する年代が考えられる。

土壙10 出土遺物が少なく、時期を決め難いが、おそらく鎌倉時代に入るものであろう。

井戸4 土師皿はすべて褐色系で、白色系を含んでいない。瓦器椀は、白石編年¹⁰⁾のⅢ-7に相当すると思われるので、13世紀前半の年代が考えられる。

井戸8 出土した東播系須恵器摺鉢は12世紀前半の所産と考えられる。

井戸9 瓦器椀が白石編年のⅢ-7に相当すると思われるので、13世紀前半の年代が考えられる。この井戸9には白色系土師皿が伴っているので、井戸4よりは新しい時期と考えられる。

井戸12 東播系須恵器摺鉢は13世紀後半の所産と思われ、また瓦器椀は井戸4・9よりも退化をみせているので、13世紀後半の年代を考えておきたい。

井戸24 土師皿の形態が井戸12に近いので、13世紀後半の年代が考えられる。

井戸36 土師皿の形態が土壙3に近いので、13世紀中葉を前後する年代が考えられる。

土壙1 土師皿には白色系が含まれていない。12世紀後半～13世紀初の年代を考えておきたい。

土壙2 瓦器椀は白石編年のⅢ-7に相当すると思われ、また全体に第1次調査のG4P19出土品の様相に近い。したがって、13世紀中葉を前後する年代が考えられる。

土壙8 白色系土師皿が多く出土しているが、ヘソ皿は認められない。第1次調査のG8P2(14世紀前半)よりも古い様相なので、13世紀後半の年代を考えておきたい。

土壙18・102・104・1015 土師皿の形態より土壙18・1015は12世紀後半、土壙104は13世紀後半、土壙102は14世紀代の年代を考えておきたい。

埋壘1 基本的には埋壘2・3・4・6と同じ形態なので、壘本体は13世紀後半の新しい時期が考えられる。ただし、壘内埋土から出土した同じく常滑大壘の口縁部片は、縁帯がこの本体よりも発達しているので、14世紀に入るものと思われる。

土師皿群 井戸8を切り、埋壘2・3・4によって切られているので、12世紀後半から13世紀前半のもの限定でき、土師皿の形態からみて12世紀後半と考えておきたい。

柵列 出土遺物は少ないが、鎌倉時代のものと考えられる。

2) 遺構・遺物に関する若干のまとめ

遺溝は、平安時代から鎌倉時代のものが多いが、室町時代から桃山時代のもものは極め

て少ない。したがって、江戸時代に室町時代の包含層が削平を受けたとしても、この室町時代から桃山時代には生活の場としてあまり利用されていなかったことも考えられよう。江戸時代に入って、次の文献学的考察でも触れるように、畑地として土地利用されていく。

遺溝の分布密度に関して言えば、南西に行くほど粗くなり、北西に行くほど密になることも指摘しうる。

平安時代の溝29からは多種多様の遺物が出土していて、特に前期(9世紀)に属する木簡が出土したことは一つの成果と言えるであろう。また、同時代の木製品類もかなり出土していて、当時の生活用具等を知るうえで重要な資料となろう。溝29と溝24との関連については、一時期併存していたことも考えられるが、溝29から溝24への位置に自然流路が移動したと考えても良いであろう。溝23に関しては、自然流路とは考え難く、人工掘削による溝の可能性が非常に高い。

鎌倉時代では、墓を検出しえたことが最大の収穫であったと考えられる。京都市埋蔵文化財研究所では、これら八条三坊の地の古墓を『東本願寺前古墓群』としてとらえていて、今回の調査で検出した墓もそれに入る可能性がある。しかし、墓のあり方が密集したものではなく、その分布の偏在性には何らかの意味があるとも考えられる。

江戸時代では、発掘区全面にわたって当時の耕作土を確認し、一部では畝状遺構を検出しえた。この畝状遺構はかなり重複していることが考えられる。また、東西方向の木柵溝、南北方向の木柵溝・石組溝によって、発掘区域内の畑地は3分されていたようで、これらのうちの東北部の畑地には東西に走る畔状のものが認められるので、さらに畑地が細分されていた可能性が高い。

以上、簡略にまとめを行ってみた。整理期間が極めて短かったために、十分な検討ができていない部分が多いと思われるが、今回の発掘成果が、平安京研究の一助になれば、幸甚である。

2. 文献学的考察

1

当該地の町名が東塩小路町であり、発掘地の南側が塩小路通となっている。この通り名は、平安時代に存在したことは確実であるが²⁰⁾、現在のそれとは場所的に異なっている事実が重要である。つまり、平安京の塩小路は、現行のそれより一筋北の現、木津屋(生酢屋)橋通に比定され、現、塩小路通は平安京の八条坊門小路に相当する²¹⁾。なお発掘当該地における木津屋橋と塩小路間は約80メートルしかなく、平安京の一町の120メートルよりは狭い。現在の塩小路通は、その南に位置する国鉄京都駅を中心として1.3キロメートル内外は北へ40メートル近く曲がっているが、その先の東(鴨川以東)と西(堀川以西)はまっすぐに伸びており、この部分が平安京の塩小路を踏襲していると見做される。それを当該地まで延長して、その点と木津屋橋通までの距離を計測すると120メートル内外の値を得ることができ、これは、まさに平安京の1町の長さに対応する。

平安時代末期から鎌倉時代にかけてのことである。鎌倉時代の商工業のことは後で述べることにして、次に当辺の居住者のことに触れておく。なお八条三坊内に限定して述べることにする。

3

そこでの居住者については断片的なものしか得られなかったし、文献のほとんどを『鎌倉遺文』に負っており、ゆえに鎌倉時代とりわけ13世紀の様相に終始している。そこにみられるもので1町に及ぶものはなく、1戸主前後が圧倒的で、多くとも数戸主程度である。

当該地にもっとも至近なものとしては、六町内の西南よりの土地であろう。それは西一、二行北五～八門に存した7戸主余の地で、建仁二年(1202)の時点で八条院から女房の二条局に賜わっている²⁶⁾。八条院(暁子内親王)といえ、両親である鳥羽天皇・美福門院(藤原得子)の遺領を伝領し、八条院領と称する莫大な所領を所持し、二条局に賜わったこの1處も「八条院御倉」とあるようにその一部であった。

同じ六町内の東南隈の地については、13世紀前半から後半にかけて数通の売券(1通は譲状)が残されている。そのうち年次のもっとも早いものは、延応元年(1239)四月五日付の売券であって、約3戸主分の土地を小野某が藤原某に沽却しており、5年後には平知村に転売されている²⁷⁾。さらに、宝治元年(1247)に知村は、その半分の地を太郎入道に売却している²⁸⁾。そのときの値が20貫文とそれまでの半値強であることは、土地の広さと関わって興味深い。この1.5戸主ほどの地が、建長六年(1254)の時点では僧西忍から女の弥乙女に譲与され、2年後には弥乙女から祖母の尼御前に売却されている²⁹⁾。そして文永十年(1273)の時点では、菅原宗時の所有となっていて、さらに他の人に売却されている³⁰⁾。その値は30貫文とあり、土地の面積は変わっていないから1.5倍の値上りは、17年間という時の経過に求めるべきであろう。それが10年後に熊女から掃部助に売却されたときに70貫文というから、この値上りは破格であり、それには何か特別の事情があったと考えるべきであろう。その地には5間の屋舎があり、南面して土門があった³¹⁾。

当該地と1町隔てた南の四町内の東北よりの場所に13世紀前半、右近将監平信正に関わる1.5戸主余の地が所在した。この地は三分割されていて、東西はいずれも10丈というから、この方は一行分であるが、7丈8尺ある南北は、ほぼ均等な区分けとなっている。そのうち北寄りの地は、信正の母の吉與氏が七郎房なるものより買得したものであるが、南寄りの信正の地と相博している。また、中央のそれは、信正が僧浄法より買得したものであり、南寄りの地も太郎房より買得したが、母の北寄りの地と相博し、母はこの地を信西の男である物部宗弘に売却し、宗弘は女子(信正妻)に譲与しているから、けっきょく、3處とも実質上、信正の所有に帰した³²⁾。

平信正は、このうち中央の1處を貞応三年(1224)に同姓の助朝に売却し、助朝は、その翌年、源国末に転売している³³⁾。さらに国末の死去後、これを譲られた嫡男の国友は、千手前(信正の女)に売却している³⁴⁾。いっぽう、北寄りの1處は、安貞元年(1227)に信正から嫡女の千手前に譲渡され、8年後にかの女は肥前御房に売却している³⁵⁾。また、南寄りの1處は、信正の嫡男の大炊允(名は不詳)から藤原氏、藤原氏から薩摩禪師へと転売されていった³⁶⁾。

四町に関して、わずか10年間の動向とはいえ、このように1處で明確な伝領形態が知られる

ものもめずらしい。このほか同じ四町内で寛喜三年(1231)に僧定円・丹波氏の伊夜女から肥前御房へ売却された5分の3戸主の地も知られる³⁷⁾。

当該地と至近の東北の八町については、西一行北四門の2分の1戸主強の地が、建治二年(1276)の時点で藤原氏の某女から藤井氏の某女に売却されている事実が知られる³⁸⁾。また、同町内の3分の1戸主強と2戸主弱の2ヶ處および西隣の一町内の6分の1戸主強の地が、南北朝時代に東寺領となっている³⁹⁾。

九町では、七条大路に面した場所で2分の1戸主強の地を平宗親が、建保六年(1218)に清原為國に売却している⁴⁰⁾。さらに翌年、宗親は、同じく七条に北面したほぼ同じ広さの別地を源友永に売却しており⁴¹⁾、半世紀後、この地は源氏の某女(友永の女か縁者)から僧浄忍に売却されている⁴²⁾。この2か處の地は、いずれも七条大路に面して広さも同程度でありながら、前者は28貫文、後者は40貫文と地代が異なるのは土地の良悪によるのであろうか。

十四町では、尼見西が安嘉門院(邦子内親王)との相博によって得た西南部の6戸主分の地を嘉禎四年(1238)に備前律師に売り渡していることが知られ⁴³⁾、相博という同様の経過をもつ伊藤尼の6戸主の地も同じ町に所在した可能性が強い。その地は、その後僧中厳、厳盛、厳伊らの手を得ている⁴⁴⁾。当辺には安嘉門院のまとまった所領があったようであり、八条坊門小路をはさんで北の十五町にも6戸主分の所領が存在した⁴⁵⁾。同じ十五町であるが、そこには、治承四年(1180)に焼亡した受領藤原為保の邸宅も所在した⁴⁶⁾。

以上が左京八条三坊の家地所領の概況であり、ここでは省略にゆだねた前稿で述べたことがらをも含めて解釈するならば、平安時代から鎌倉時代の13世紀後半ぐらいまでは居住区としての位置を保っていたと見做し得る。

4

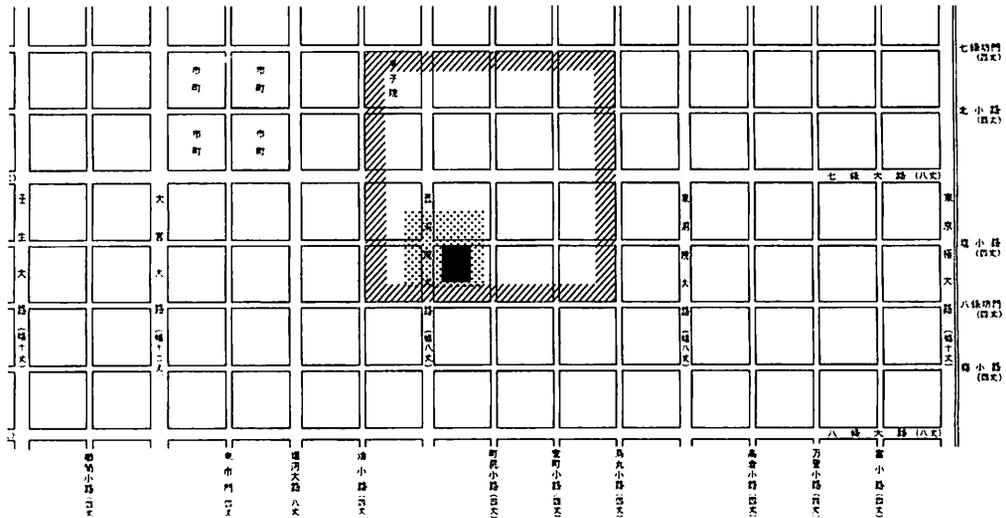
七条大路と町小路の交点とその周辺をも含みこんだ、いわゆる七条町の出現によって当辺が商工業地区として殷賑を極めるのは13世紀あたりからのことであるが、そのことを如実に物語っているのは次に掲げる記事である。

(a) 曉鐘之程、南方有火、即焔廬之後不滅、七条極東西三町許焼由、不燼聞、商賈之百強著於許史者欵、

(b) 一昨日火事実説、烏丸西、油小路東、七条坊門南、八条坊門北、私地焼亡、土倉不知員数、商賈充滿、海内之財貨只在其所云々、黄金之中務為其最、自翌日皆造作云々、商賈富有之同類相訪者如山岳積置、先隔大路各引幔居其中境、飯酒肴不可勝計、

(c) 夜半塩小路西洞院辺有炎上云々、至町焼失云々、件町頗潤屋云々、所謂号金源三某之者余流等居住此所云々、群盜圍来之處、不得其隙、相戦之間、空逐電之後放火□□尤可恐々々、此間炎上無隙、

上の(a)と(b)は『明月記』の文暦元年(1234)八月三・五両日条であり、(c)は『民経記』寛喜三年(1231)六月三日条である。いずれも焼亡の一件を記述するなかで街の様相に及んだものである。年紀上で早い(c)についてみると焼亡範囲がまさに当該地とその周辺ということになるが、



第117図 鎌倉時代初期の火災図

(黒塗は調査地。網部分は寛喜3年〔1231〕6月焼亡範囲。斜線内が、文暦元年〔1234〕8月焼亡範囲)

この地域が「潤屋」であったということは注目すべきことであり、それ故に群盗の対象とされたのであった。この地に居住する「金源三某」は、さしずめ七条以南の保長で「鍛冶・鋳物師并に銀金の細工」の上手といわれた『新猿蓑記』の金集百成を連想させるし、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』によれば、七条町には鋳物師や薄打といった金属細工師が住んだという。

このことを裏付けるかのように発掘現場から刀装具や仏具の鋳型および埴塙が出土しており、これらは、前回の調査地である東隣から多数出土している。時期的には12世紀後半から13世紀にかけてであり、平安時代後期から鎌倉時代、当辺に工房が存在したことを彷彿とさせる。

(a)と(b)は同じ火事のことを述べたものである。(c)から3年後に起きたその火災は、東西が烏丸と油小路、南北が八条と七条の各坊門小路間を焼亡範囲とするから、七条町を核として四方へ1坊分が被害に遭ったことになる。このうち南西部は、3年前に焼失した場所であり、その後、どのような状態におかれていたのか詳らかではないが、文暦元年の例でみると「翌日より皆造作」というような動きがみられる地区のことゆえ、すぐに再興されたものと察せられ、そうであったとすれば再度の災難ということになる。

「翌日造作」という事実は、それを可能にする財力の裏付けがあつてはじめてなし得ることであった。商賈が櫛比し、金銀、財貨に満ち溢れたこの界限は、平安京の中でも活況を呈する地区として注目され、そこに新時代の息吹を感じ取ることができたはずである。

「土倉、員数を知らず」という言葉は、平安京における商業の発展を語るさいに必ずといってよいほど例に引かれるものであり、13世紀前半の段階で当辺における金融業者の進出を裏付けている。同じく金融業者を指し、土倉の前段階の歴史的名辞として借上がある。この借上の七条における存在を示す次の史料は注目されてよい。

ちかごろ、七条わたりに借上する女あり。家富み、食ゆたかなるがゆへに、身こへ、肉あ

まりて、行歩たやすからず。

平安時代末から鎌倉時代初の成立とみられている『病草紙』の詞書部分であるが、この文をうけて、いかにも貪欲そうな肥満体の女性を描写している。この絵巻が七条町界隈の商工業、金融業の進展を背景にしていることを俟たない。

なお、商工業ということに関して二点のことがらに触れておきたい。その一は、大山崎住京神人のことである。大山崎の離宮八幡宮の保に所属し、住京の新加神人が、永和二年(1376)の時点で64名を数え、その大半は三条から六条大路間に所在するものの、七条大路以南については全3所とも八条三坊にある。それは、当該地の南の三町の兵衛四郎、東北の八町の右衛門三郎、十五町の三郎入道でほかに七条町の西北に孫六が住んでいた⁴⁷⁾。そして、かれらは「紺・紫・薄打・酒麴等諸業商売⁴⁸⁾」に関わっていたと見做されるのである。その二は、七条大路に沿う酒屋の存在であり、応永三十三年(1426)において堀川から東洞院大路間に6軒の店舗が知られる⁴⁹⁾。

今回の発掘調査地から人骨の入った常滑の大甕が3個(いずれも13世紀末から14世紀初)出土したことも当辺における富裕者の居住を暗示している。なお、当辺の歴史の広がりを見ると北小路西洞院周辺の傾城屋^{けいせいゑ}の存在も忘れてはならない⁵⁰⁾。

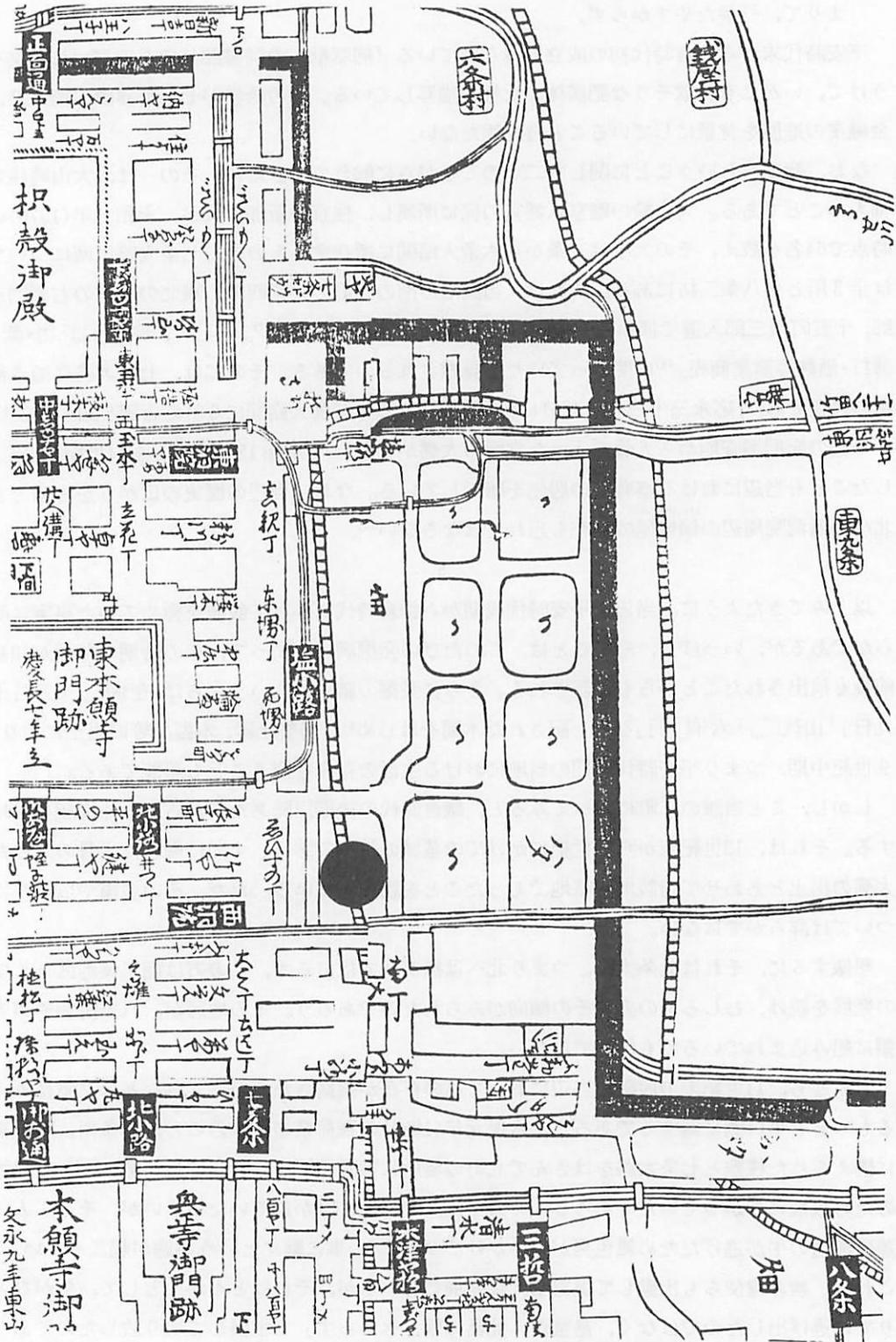
5

以上みてきたように、当辺が平安時代後期から鎌倉時代にかけて殷賑を極めていた事実は明らかであるが、いっぽう、そのことは、このたびの発掘調査によって、その時期の井戸が40基前後も検出されたことから傍証される。さらに発掘の結果からいうならば「在京□」「三月十九日」「山代□」「六年□月」などと記された木簡をはじめ⁵¹⁾、墨書土器、木製品等の出土により、9世紀中期、つまり平安時代前期の当地における生活の存在を窺うことも可能である。

しかし、こと当該の二町に限ってみると、鎌倉時代の後期以降あたりから著しく様相を異にする。それは、13世紀末から14世紀にかけての墓域の検出である。すでに触れた人骨の入った大甕の出土とあわせて当該地が墓地であったことを物語っている。ただ、その規模や広がりについては詳らかではない。

想像するに、それは七条大路、つまり北へは拡がってはならず、この方は商工業地区としての発展を続け、むしろ南の方にその傾向がみられたのであろう。その地区が、八条院領や東寺領に組み込まれているのも偶然ではない。

もっとも、11世紀末の段階で当辺において畠の存在が指摘されるが、これなどは文献にみえるもっとも早い例に属するであろう。永保元年(1081)の稻荷祭のときのこと、七条南、町尻東に構えられた棧敷と七条大路をはさんで北町の場所に参議藤原実政所有の畠があった。祭見物のため棧敷にあがっていたであろう人々の牛は、その畠に繋がれていたらしいが、その1人、藤原能遠の牛が逃げたため雑色男が追いかけてつかまえ、車に繋ぐという事態が起こっている。これは、検非違使らも出勤して傷害事件に発展しているが、それはともかくとして、牛がひとりでに逃げ出したのではなく、畠童が「此畠に繋ぐべからず」と主張して切り放したのであった。この畠は「荒畠」とあるから、余り耕作もないままに放置されていたのであろう⁵²⁾。牛を繋



第118図 江戸時代の調査地周辺図（黒丸は調査地）

ぐ場所に利用されたのも由なきことではなかったのである。

これは七条大路以北に所在した畠の一例であるが、宅地から畠地への変化の傾向は七条以南に著しく、威容を誇った八条院御所が、13世紀前半には築垣の一部が崩壊するなど荒廃の一途を辿り、部分的に畠化したことなどが大きな誘因となったことは確かである⁵³⁾。

時代は降るけれど、発掘調査の結果、江戸時代中期あたりまでさかのぼれる畠の遺構が検出されたことなどは、その延長と考える物的証拠であろう。そのことを裏付けるものは、17世紀の前半から中ごろにかけて描かれた2点の『洛中絵図』⁵⁴⁾である。その一つ、寛永十四年(1637)のそれには、七条以南で東洞院以西、西洞院以東の場所には単に「田」と記載するのみで邸宅は全くなく、西洞院以西についても八条坊門以南は同様である。これより少し降るもう一つの絵図も寛永十四年の実情を踏襲している。いっぽう、江戸時代後期の絵図からも、そのことが窺えるのである(第118図)。

以上のことから、少なくとも当該地の周辺とその以南の一带は、14世紀ころから田畠化した部分が多くなり、江戸時代には、完全に田畠となってしまっていたということがいえるのである。なお、この事実とも関わることであるが、京都市埋蔵文化財研究所の発掘調査の結果、現、塩小路通の地点において西洞院川の川幅が11メートル以上に及ぶというデータが得られている。西洞院川の存在は平安京以来のことであり、長承三年(1134)夏の大雨のときには増水により流死者がでたことがあった⁵⁵⁾。しかし、こういったことはむしろ例外であって、さほどの川ではなかった。

ところで川幅が11メートル以上ということは、平安京の規定での西洞院大路幅が溝ほかあわせて8丈、つまり約24メートルであるから、その半分に迫る広さである。これは、少なくとも平安京のときには考えられないことであろう。あり得るとすれば、塩小路通のあたり(南北の延長点は不詳)が田畠と化した近世以降のことではなかろうか。

18世紀における西洞院川の様相は、二条の南で深い溝にして人家の下を流し、四条坊門北で溝を頭にして人家をはさむ形で中に川を通し、往来の便には橋を架け、まさに「町の真中に川あらはるゝ」状態であった⁵⁶⁾。これからは川幅の具体的数値は知られないが、『若山家文書』に天和三年(1683)のこととして「西洞院川幅、魚之棚通(六条通に比定)より塩小路通橋迄川幅老丈壹尺、塩小路通橋より南御土居迄川幅老丈三尺」⁵⁷⁾とあることで4メートル近い川幅であったことがわかる。それにしても10メートルをうわまわる数値との間に隔たりがありすぎるが、いずれを是とするかは今後の調査に俟ちたい。

〔付記〕小論でも少し触れるところがあった木簡・墨書土器の解説については、奈良国立文化財研究所史料調査室(現、文化庁文化財保護部記念物課)の佐藤信氏の御教示を得たことを明記し、謝意を表します。

註

1) 下條信行・川西宏幸『平安京左京八條三坊二

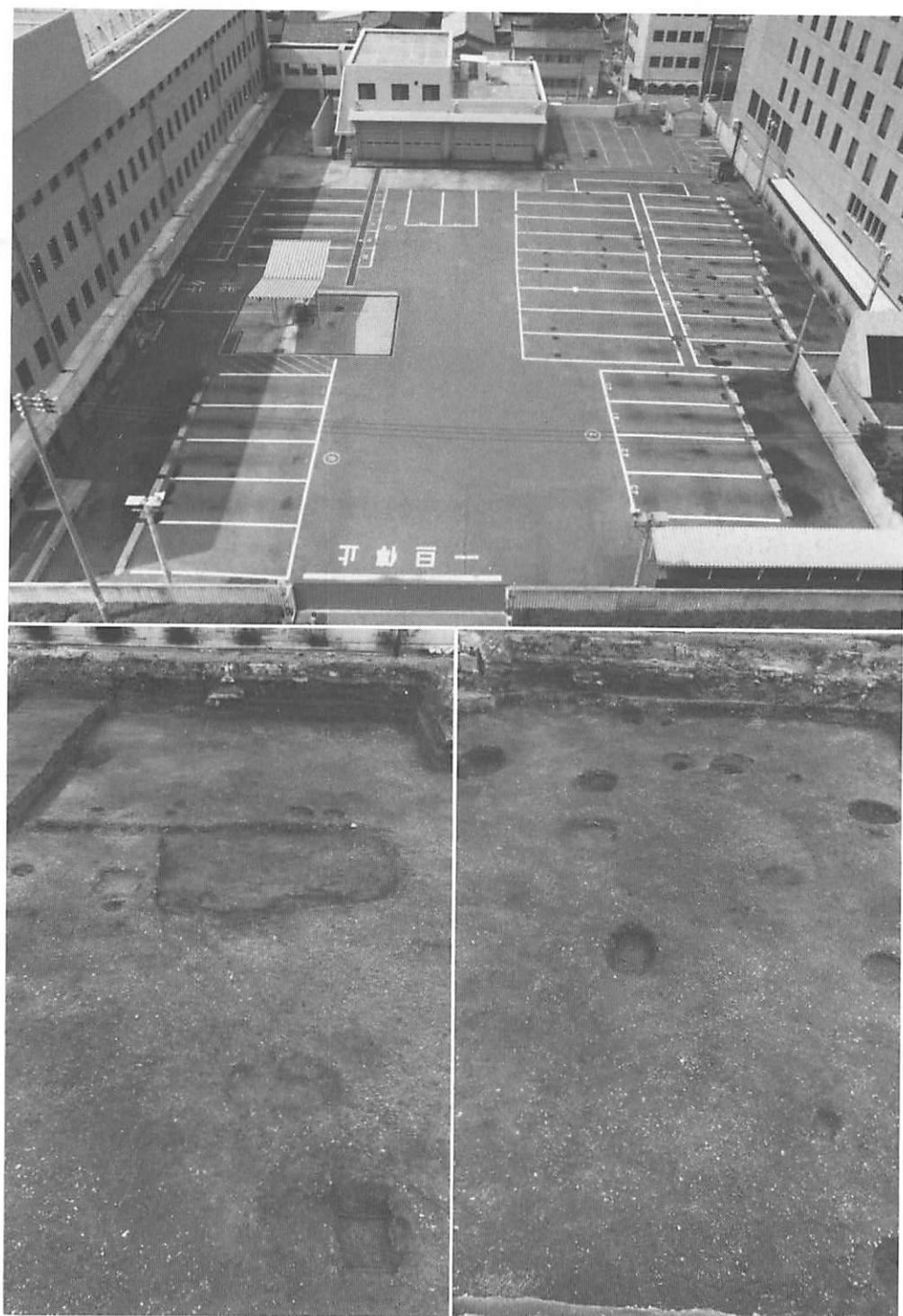
町』(『平安京跡研究調査報告』第6輯、京都、昭和58年)。

2) 京都市埋蔵文化財研究所・永田信一氏より、

- 同研究所が調査した当地周辺の資料・文献を提供して頂いた。この項の京都市埋蔵文化財研究所調査の内容に関しては、その提供して頂いた資料・文献によっている。
- 3) 浪貝毅・渡辺和子『平安京・左京八条三坊跡』（『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1978— I 所収，京都，昭和53年）。
 - 4) 調査を担当された京都市埋蔵文化財研究所・丸川義広氏の御教示による。
 - 5) 鈴木廣司・吉川義彦・永田信一・岡田文男『平安京左京八条三坊』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第6冊，京都，昭和57年）。
 - 6) 京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京八条三坊跡—京都第3タワーホテル新築に伴う埋蔵文化財発掘調査—』（京都，昭和53年）。
 - 7) 釈文には、当館の齧谷寿、奈良国立文化財研究所・佐藤信氏の御教示を受けた。
 - 8) 寺島孝一・片岡肇編『法住寺殿跡』（『平安京跡研究調査報告』第13輯，京都，昭和59年），第48図7。
 - 9) 平安博物館編『平安京古瓦図録』（東京，昭和52年），瓦番号305参照。
 - 10) 同上，瓦番号299～301。
 - 11) 下條・川西編『平安京左京八条三坊二町』（前掲），第58図7・第59図7。
 - 12) 平安博物館編『平安京古瓦図録』（前掲），瓦番号359。
 - 13) 下條信行・植山茂・定森秀夫編『三條西殿跡』（『平安京跡研究調査報告』第7輯，京都，昭和58年），第44図。
 - 14) 下條・川西編『左京八条三坊二町』（前掲）。
 - 15) 灰釉陶器に関しては、平出紀男・森田稔氏に御教示いただいた。
 - 16) 平安京調査会『平安京発掘調査報告—左京四条一坊—』（京都，昭和50年）。
 - 17) 赤羽一郎『常滑—知多半島古窯址群—』（『世界陶磁全集』第3巻所収，東京，昭和52年）。
 - 18) 森田稔氏に御教示いただいた。
 - 19) 白石太一郎『いわゆる互器に関する二・三の問題』（『古代学研究』第54号掲載，京都，昭和44年）。
 - 20) 『本朝世紀』仁平元年三月六日条，『山槐記』治承四年四月五日条など。
 - 21) 『角川日本地名大辞典』26『京都府』下には「塩小路通」の項に「江戸期から見える通り名。……名称は平安京の塩小路に由来し，もとは現在の生酢屋橋通を指した。平安京の八条坊門小路にあたり，八条坊門通，三哲通と旧称した」とある。なお白露の『京町鑑』（『京都叢書』第十所収）で生酢屋橋通を八条坊門通と見做しているのは誤解である。
 - 22) 左京八条三坊二町の約束半分については過去に調査が実施された。その詳細は『平安京左京八条三坊二町』（『平安京跡研究調査報告』第6輯，京都，昭和58年）にある。なお，その第7章第5節で文献を中心とした周辺の歴史を概略，述べるところがあった。地域的には同一町ということもあって重複は避け難いが，小論では，なるべくそれ以降に蒐集した文献を中心に当辺の歴史的情况について述べることにする。そういうことであるからして当該区の歴史に関しては，両編をもって一体とする。
 - 23) 『後清録記』（『清癡眼抄』（『群書類従』巻第百八所収）所引）治承四年四月一日条がもっとも詳しく，ほかに『吉記』『玉葉』『明月記』同日条にも火事のことが見える。
 - 24) 『玉葉』『後清録記』治承二年三月二十四日条。なお，同様に東西に広範囲に燃えた火事として正治二年（1200）十二月一日のそれがある。西は匣（櫛笥）小路から東は鴨川原，北は七条坊門から南は梅小路というからその範囲は頗る広大で「其間不残一字」といった有様で弘誓院東御堂や龍寿御前宅も被害をうけたことが記されている（『明月記』）。
 - 25) 例えば『春記』長久元年四月十九日条，『山槐記』永暦元年十二月十五日条ほか。
 - 26) 『鎌倉遺文』1326号文書。
 - 27) 『鎌倉遺文』5410・6350号文書。なお，6350号文書と同じ年月日をもつ6349号文書は，東西南北の丈尺を示していないものの同じ六町内で「参戸主」とあり，尼教聖が女の春日前に譲与したことを伝えている。6350号の関わりの有無は詳らかにし得ない。
 - 28) 『鎌倉遺文』6853号文書。
 - 29) 同上，7749・7961号文書。
 - 30) 同上，11434号文書。
 - 31) 同上，14955号文書。
 - 32) 同上，2789号文書。
 - 33) 同上，3245号・3384号文書。
 - 34) 同上，3970号文書。
 - 35) 同上，3702号・4838号文書。

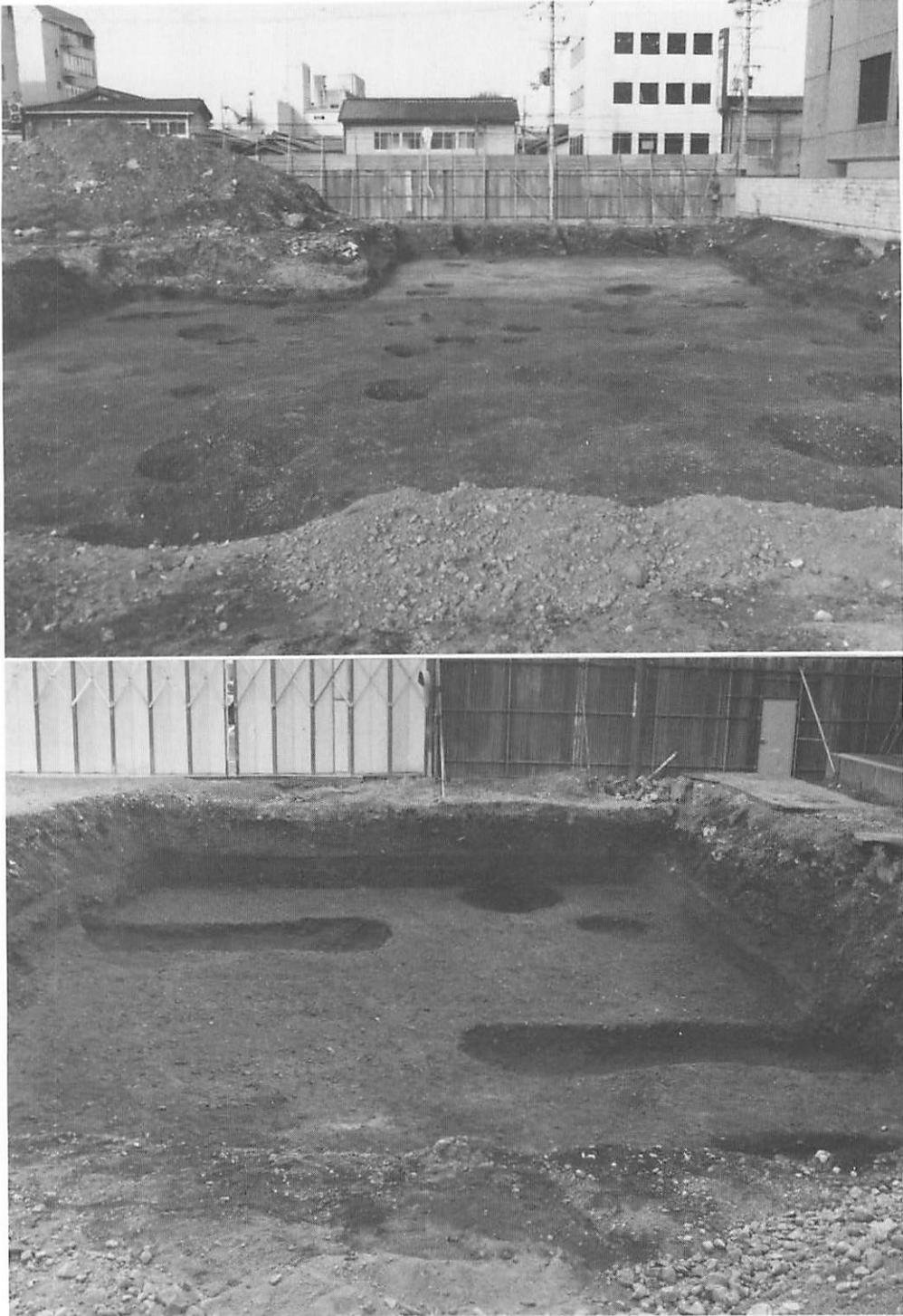
- 36) 同上, 3914号文書。これは寛喜元年(1229)のものであるが、天福二年(1234)四月二日付「藤原千手女家地売券案」(4644号文書)も同面積で藤原氏に関するものではあるけれど前者は薩摩禅師に売却されており、後者は肥前御房への売却であるから異所の可能性が強い。
- 37) 『鎌倉遺文』4092号文書。
- 38) 同上, 12514号文書。
- 39) 橋本初子『中世における東寺洛中散在所領の文書について』(『京都府立総合資料館紀要』第11号掲載, 京都, 昭和58年)。
- 40) 『鎌倉遺文』2389号文書。
- 41) 同上, 2503号文書。
- 42) 同上, 9300号文書。買得した浄忍房は15年後の弘安三年(1280)に僧円浄に譲与している(13858号文書)。
- 43) 同上, 5319号・5323号・5324号文書。
- 44) 同上, 15126号・16788号・16789号文書。
- 45) 同上, 3096号文書。なお西南の十一町, 東の四坊二町にも所在。
- 46) 『山槐記』治承四年四月五日条。
- 47) 『大山崎離宮八幡宮文書』永和二年十二月(京都市編『史料京都の歴史』4『市街・生業』所収, 京都, 昭和56年)。
- 48) 同上, 永和四年八月十三日(前掲)。
- 49) 『北野天満宮文書』応永三十三年二月十六日(京都市編『史料京都の歴史』4(前掲)所収)。
- 50) 『師守記』貞和三年二月二十四日条。
- 51) 今回の調査で出土した木簡に関しては別の機会に論じられるはずである。
- 52) 『帥記』永保元年四月十五日条。
- 53) 『明月記』嘉禄元年十一月十一日, 建暦元年十一月二十七日両条など。
- 54) 宮内庁書陵部編『洛中絵図』(寛永十四年七月二日)(東京, 昭和44年)および京都大学附属図書館蔵・中井家旧蔵『洛中絵図』(寛永後万治前)(京都, 昭和54年)。
- 55) 『中右記』長承三年五月十七日条。
- 56) 『山州名跡志』卷之十七および『京町鑑』(いずれも『京都叢書』所収)。
- 57) 高橋一男氏蔵『若山家文書』(京都市編『史料京都の歴史』12『下京区』所収, 京都, 昭和56年)。

圖 版

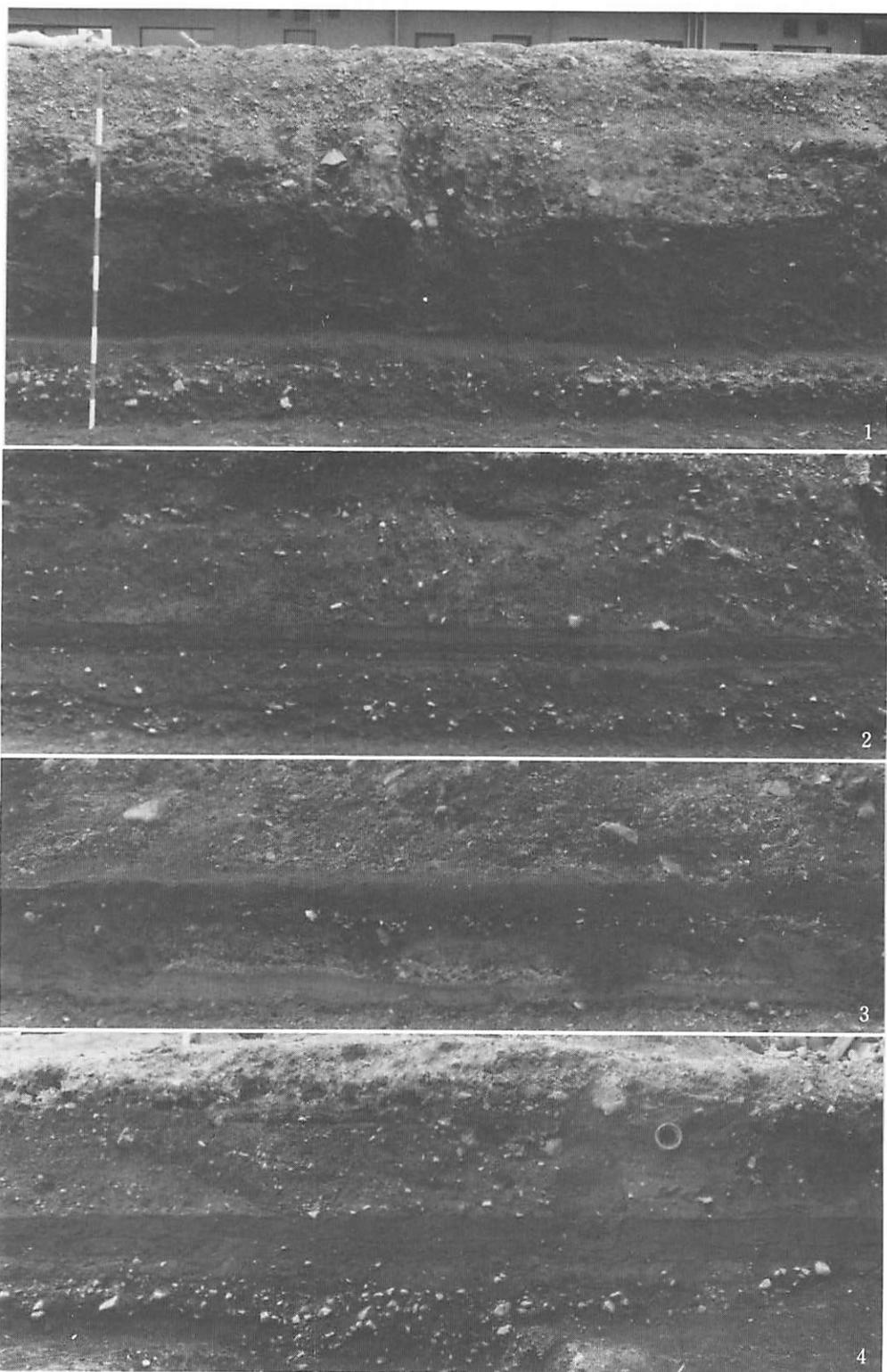


遺跡(1) 上：調査前状況(南より)，下左：I地区北半完掘状況(西より)，
下右：I地区南半完掘状況(西より)

図版第 2

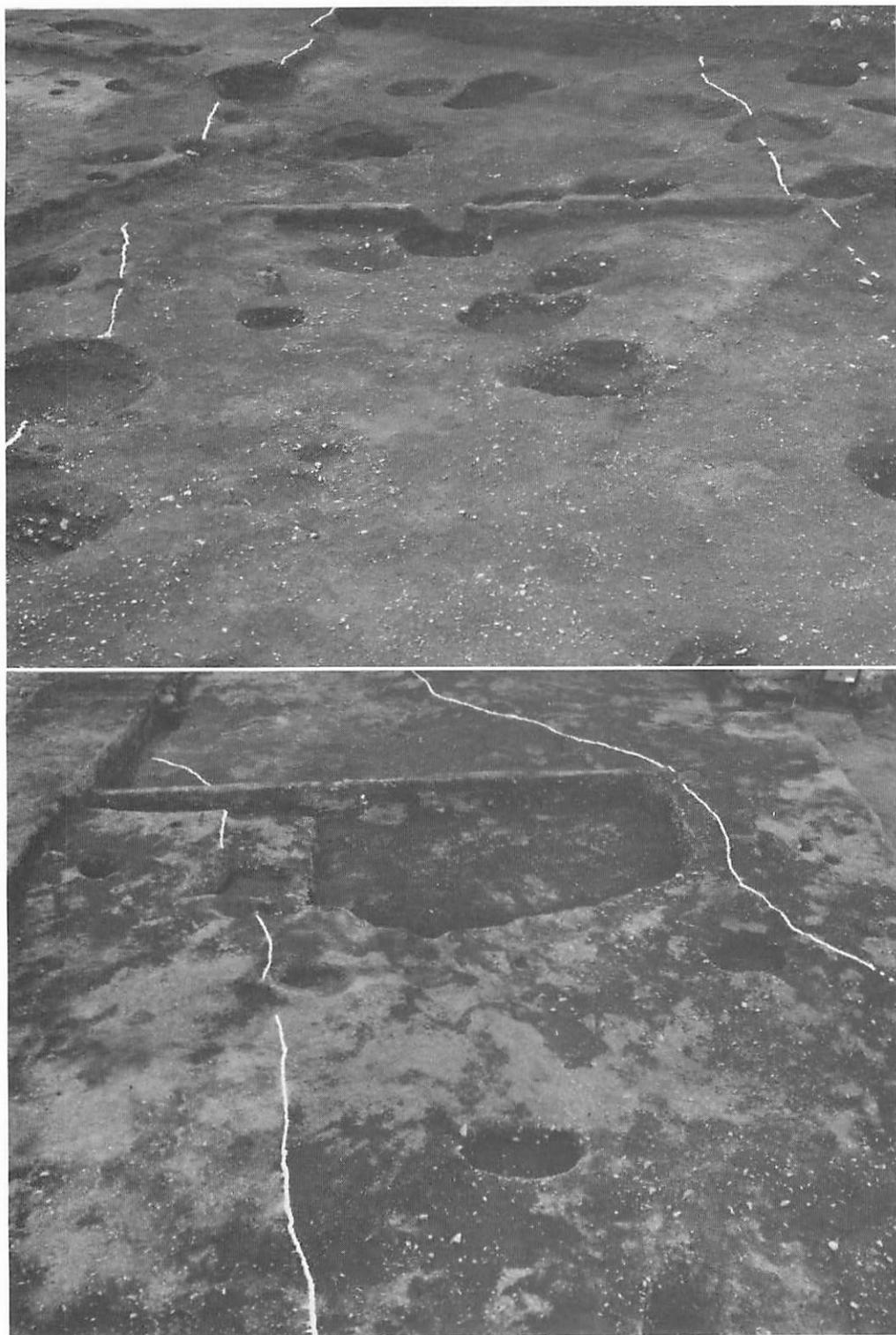


遺跡(2) 上：Ⅱ・Ⅳ地区完掘状況(南より)，下：Ⅲ地区完掘状況(北より)

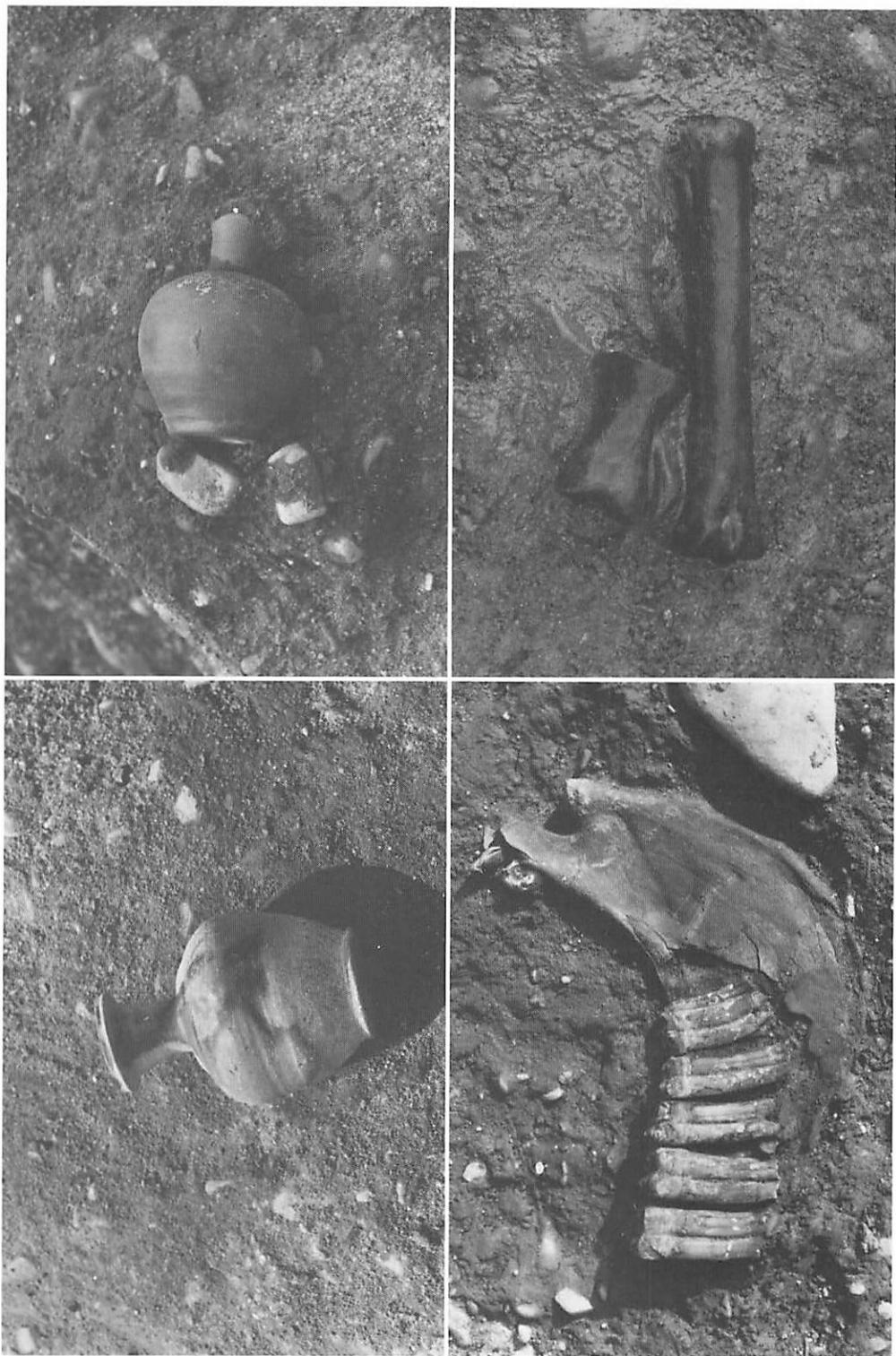


層位 1 : I 地区南半西壁断面部分, 2 : I 地区北半西壁断面部分,
3 : IV 地区西壁断面部分, 4 : III 地区南壁断面部分

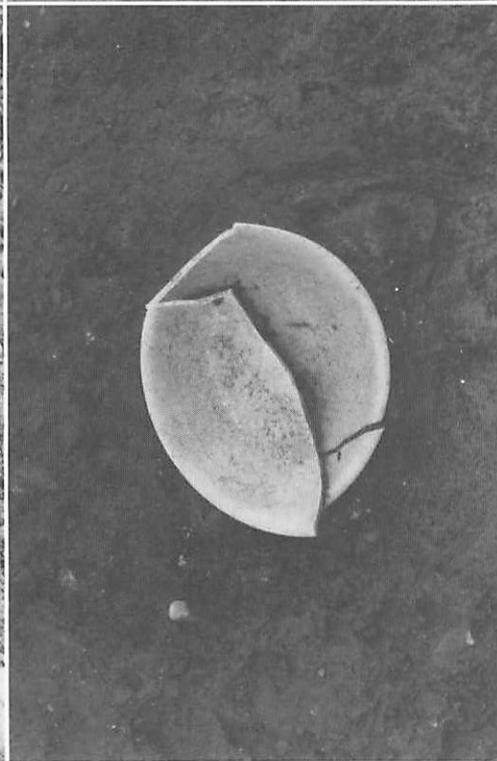
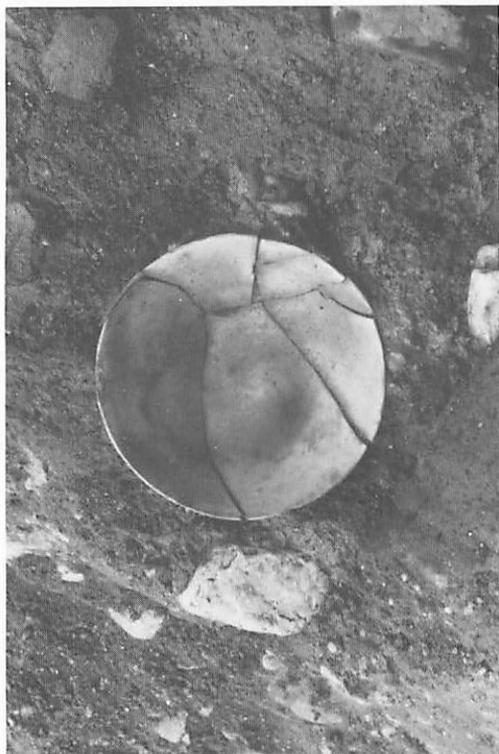
図版第 4



溝 上：溝29(西より), 下：溝24(西より)



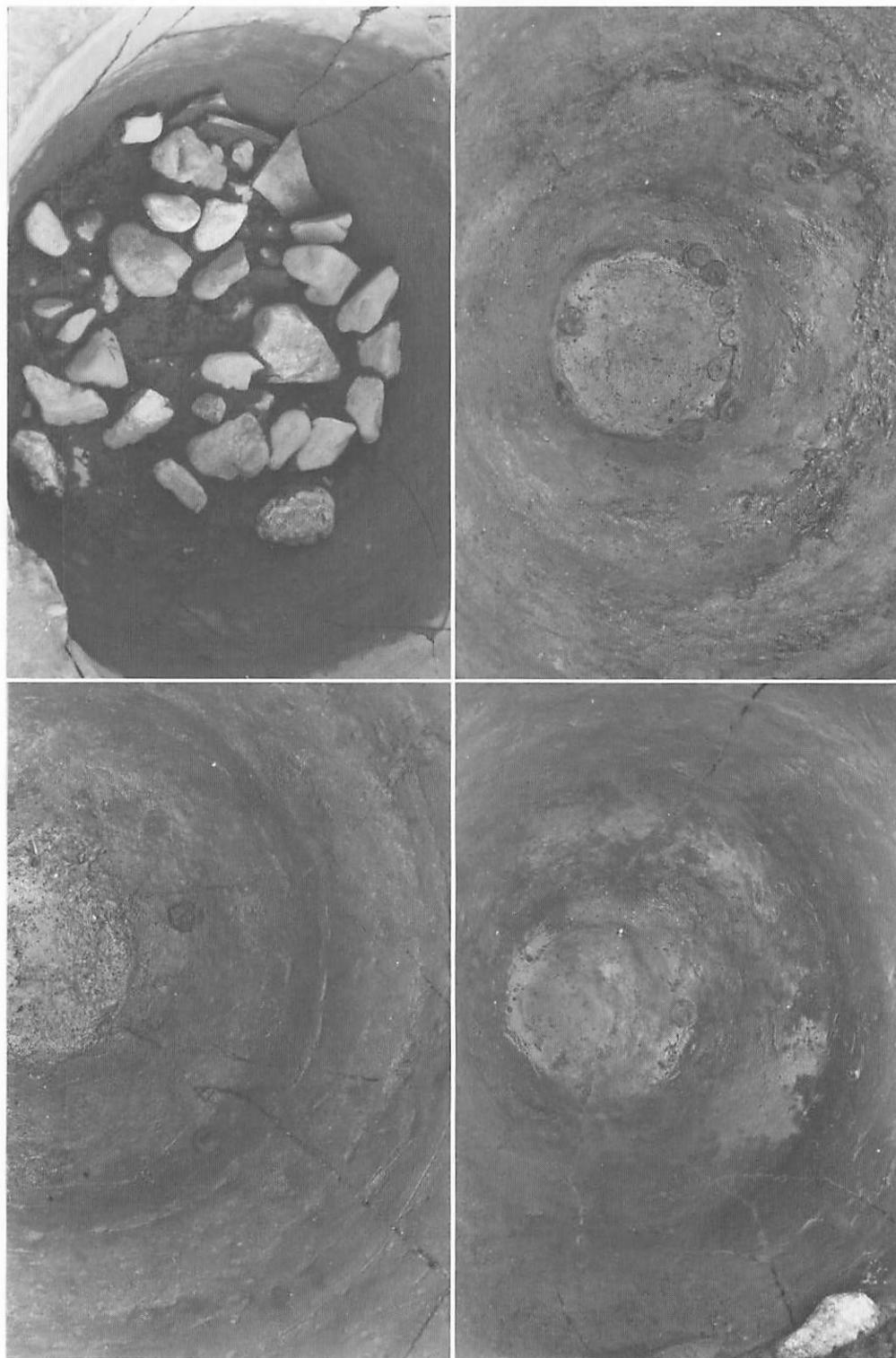
溝29遺物出土狀況(1) 上左：須惠器(綠色砂層)，上右：須惠器(暗灰色粘質土層)，
下：動物骨(暗灰色粘質土層)



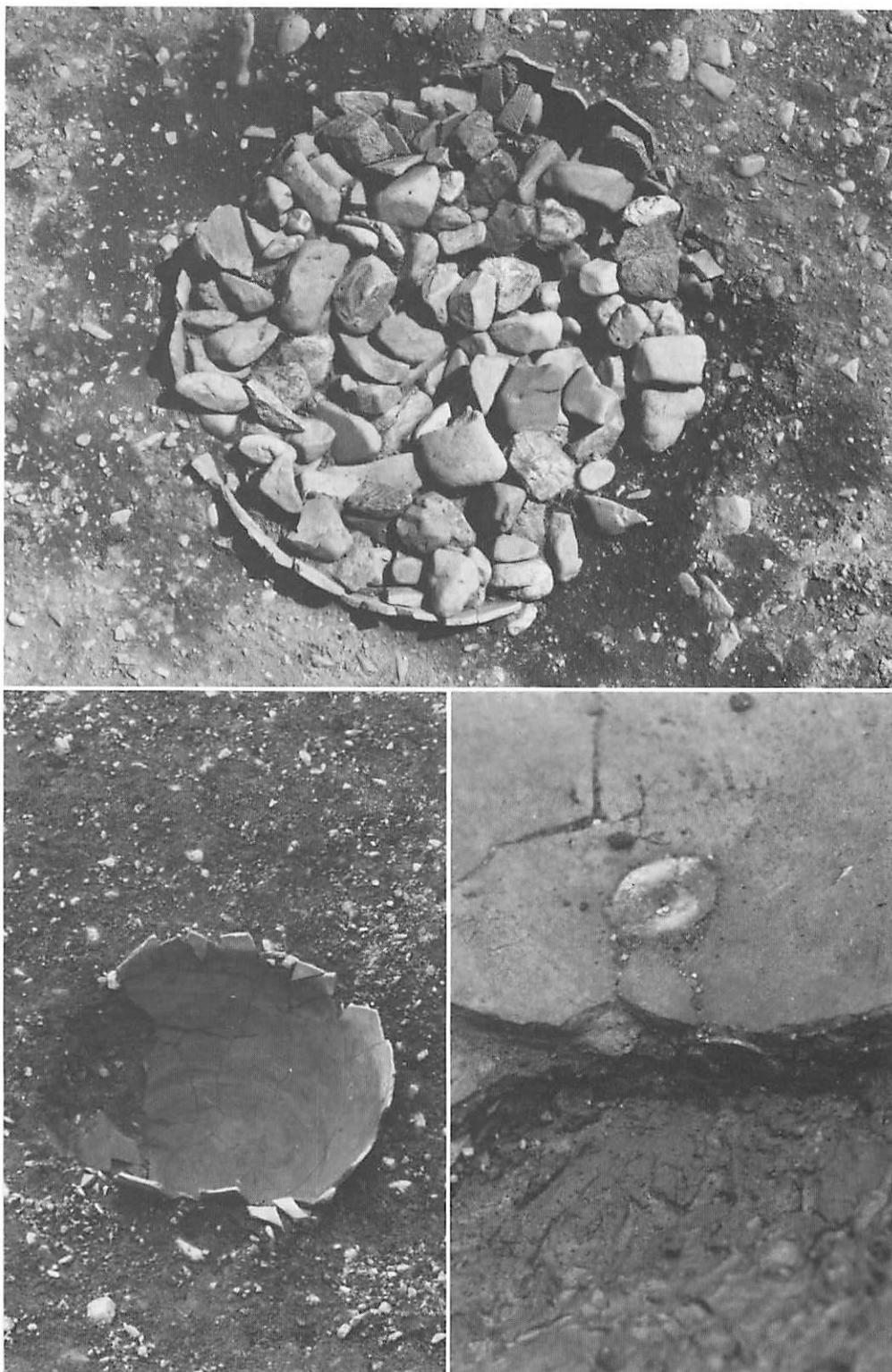
溝29遺物出土狀況(2)
上左：加工木材(暗灰色粘質土層)，上右：土師器(暗青灰色粘質土層)，
下左：灰釉陶器(暗青灰色砂質土層)，下右：綠釉陶器(暗灰綠色砂質土層)



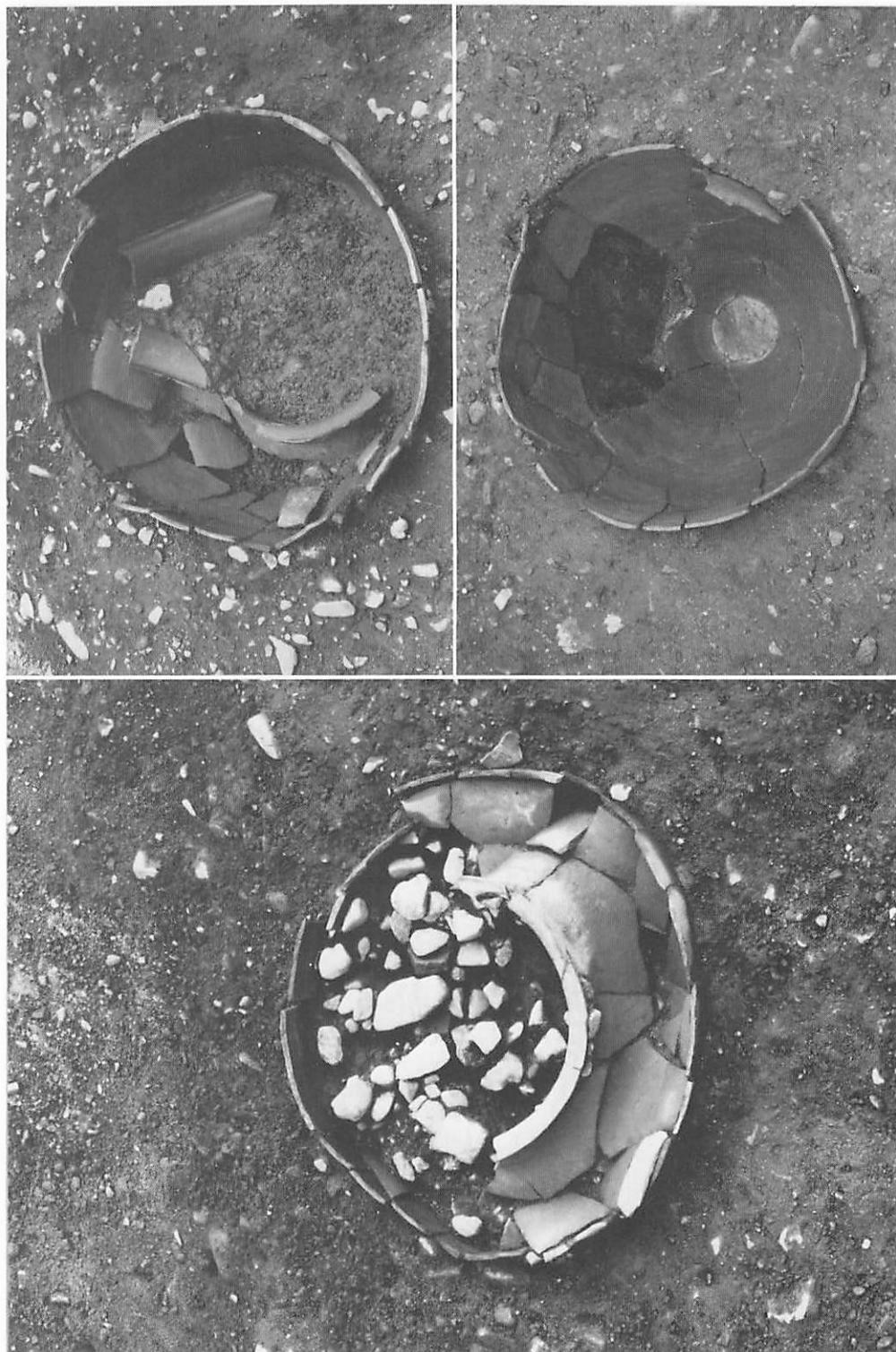
埋甕 2・3・4(1) 上：検出状況(北より。右から埋甕 2, 3, 4。上方は
集石遺構 1〔井戸 8 上層〕, 下：内部完掘状況(同)



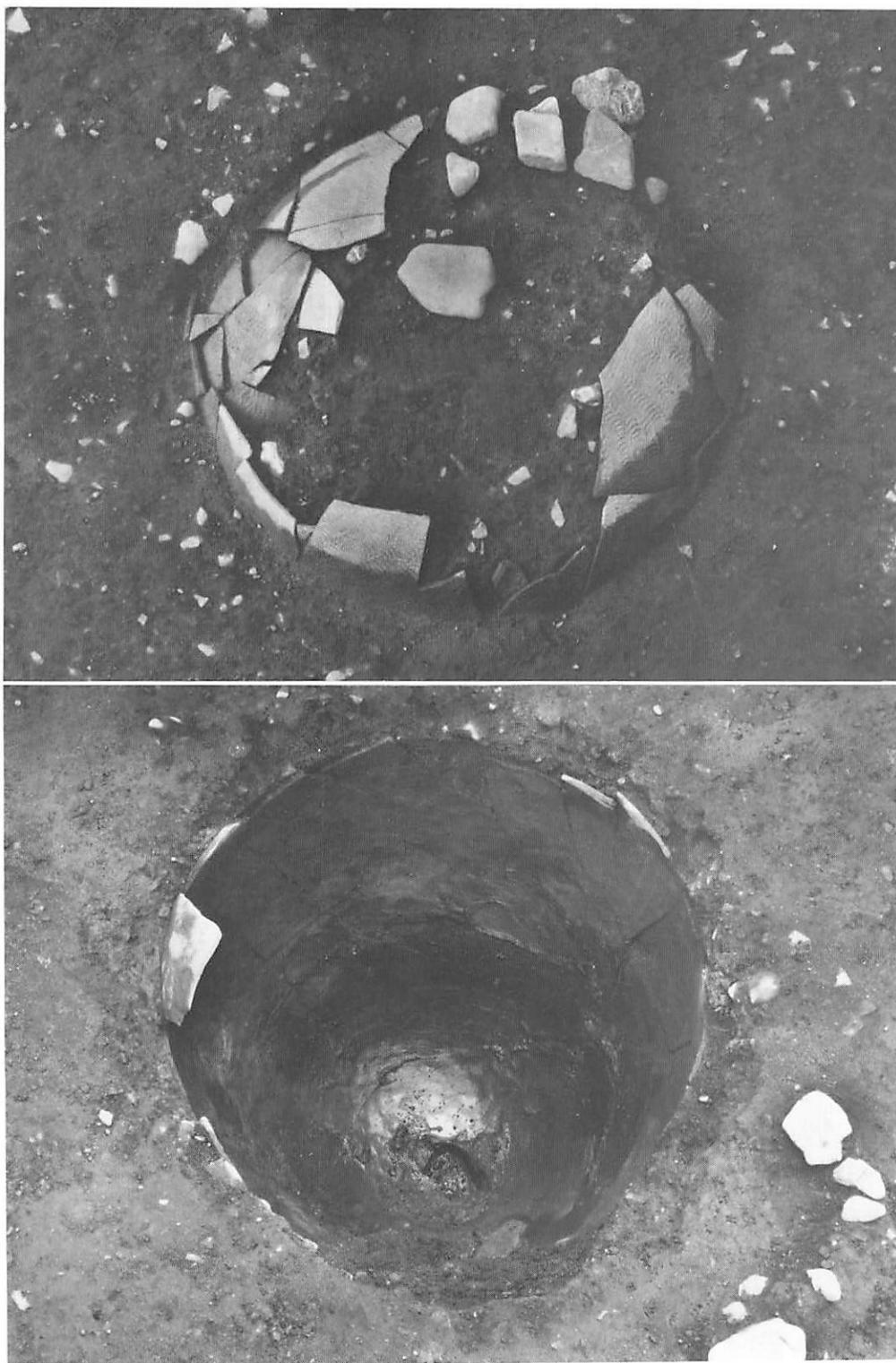
埋甕 2·3·4(2) 上左：埋甕 2 古錢出土狀況，上右：埋甕 3 古錢出土狀況，
下左：埋甕 4 內部礫狀況，下右：埋甕 4 古錢出土狀況



埋甕 5 上：検出状況(北より)，下左：内部完掘状況(南より)，下右：古銭出土状況



埋甕 6 左：検出状況(北より)，右上：口縁部陥没状況(同)，
右下：内部完掘状況(西より)



埋甕7 上：検出状況(東より)，下：内部完掘状況(北西より)



土城88(1) 上：検出状況(西より)，下：蓋板除去後状況(同)



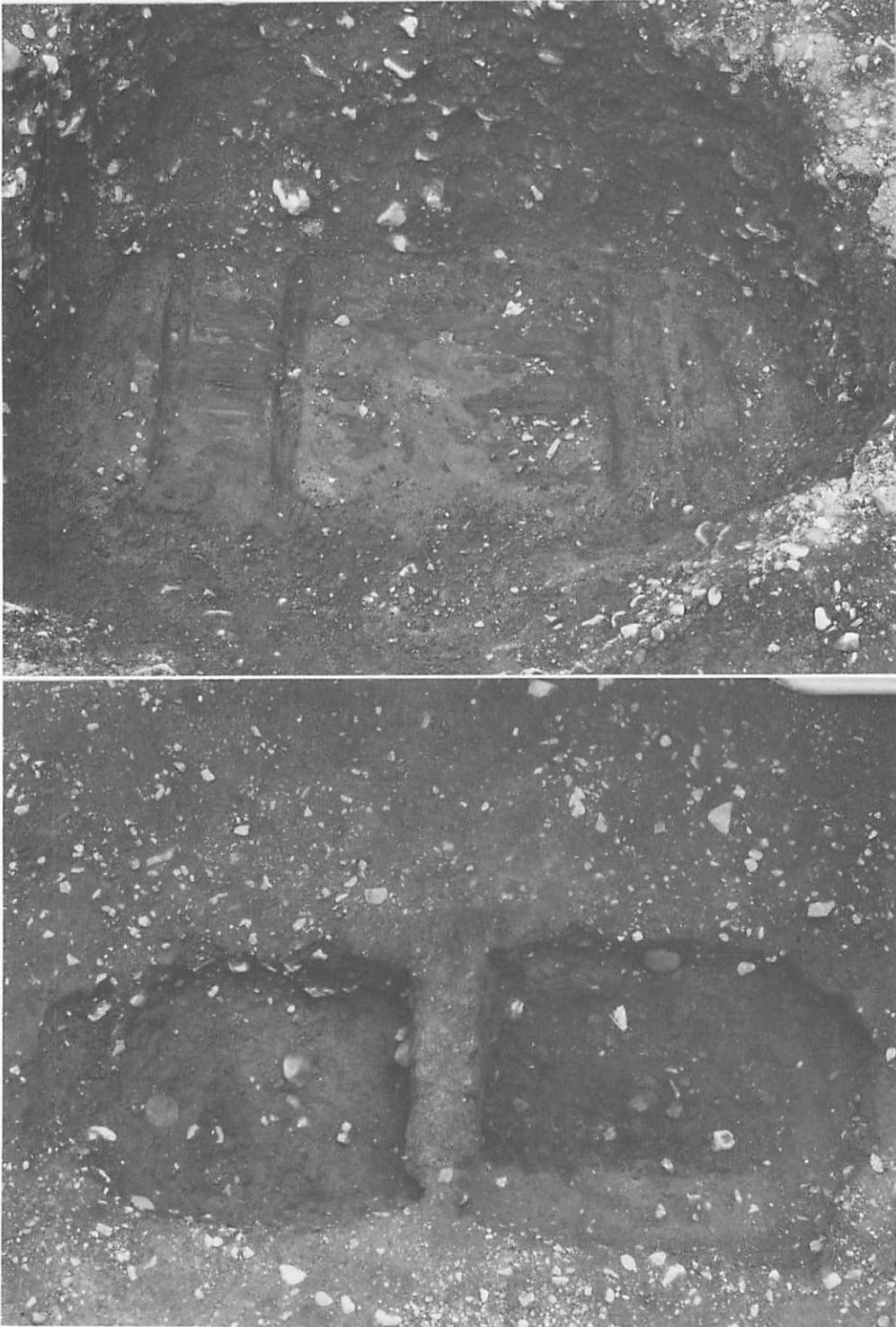
土城88(2) 上：内部曲物片除去後状況(西より)，下：西側板除去後状況(同)



土壙88(3) 上：南北側板除去後状況(西より)，下：北側底板除去後状況(同)



土壙88(4) 上：底板除去後状況(西より)，
下左：底板上古銭出土状況，下右：東側板付近古銭出土状況



上：土壙50(南より)，下：土壙3(西より)



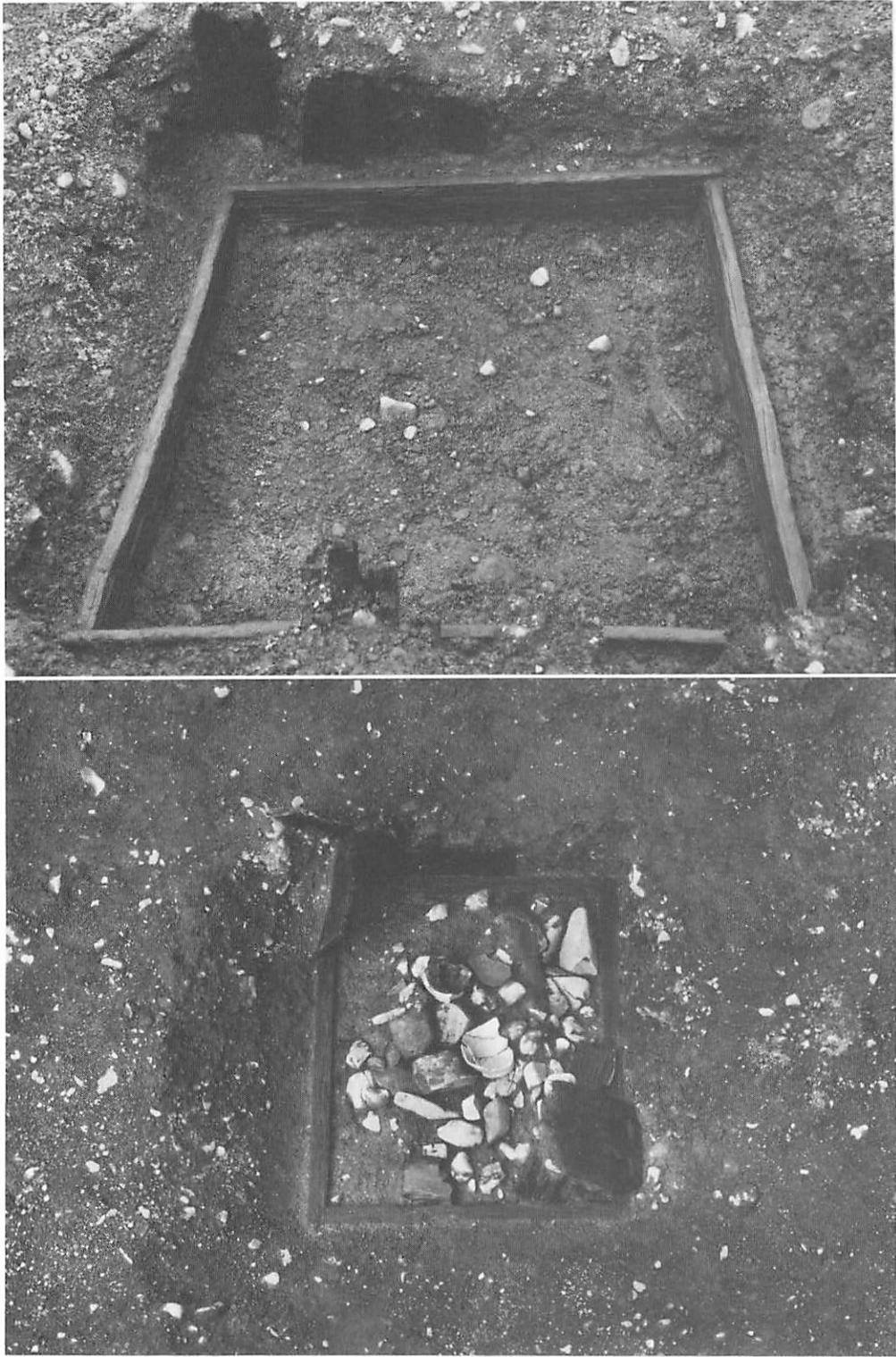
上：土壙10(南より)，下：埋壘2・3・4・5と土壙10の配置状況(北より)



上：井戸4 (東より)，下：井戸8 (東より)



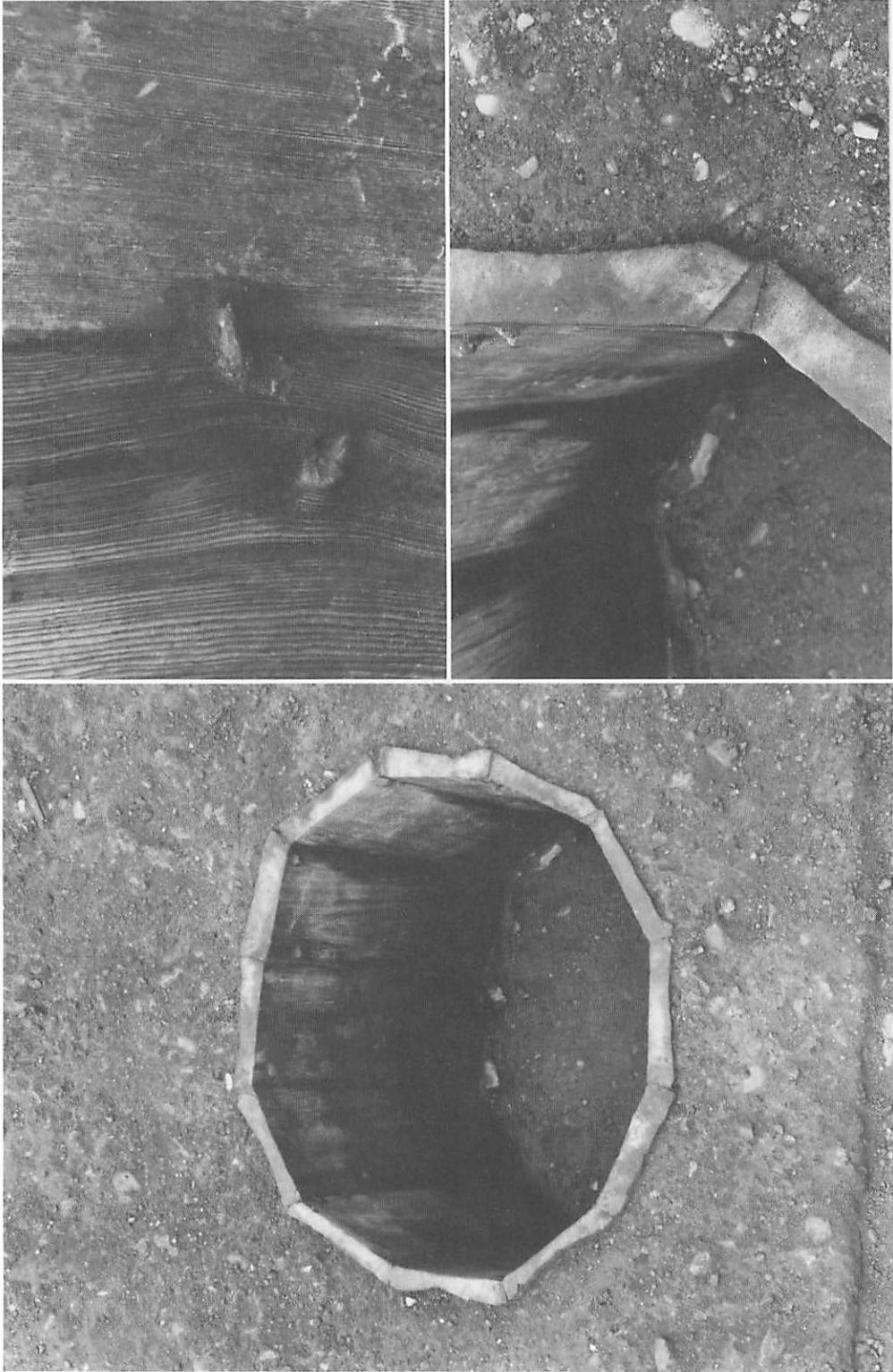
上：井戸9 (上部遺物出土状況, 南より), 下：井戸10A (南より)



上：井戸11(南より)，下：井戸12(上部遺物出土状況，南より)



上：井戸13(東より)、下：井戸18(西より)



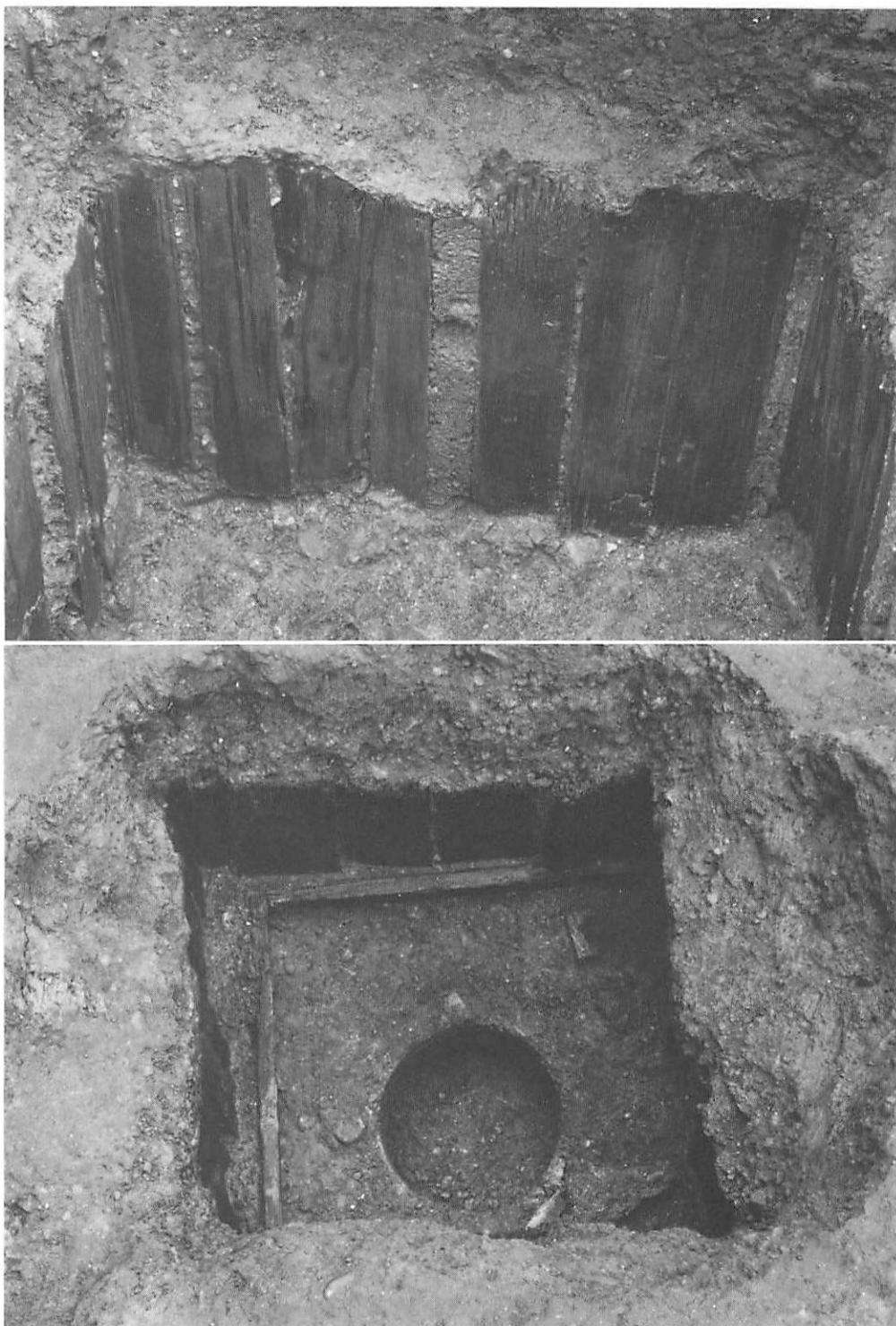
井戸20 左：全景(南より)，右上：内面につき出た釘，右下：上端合わせ切痕



上：井戸21(北より)，下：土壇114(南より)



井戸22(1) 上：全景(北より)，下：北側側板



上：井戸22(2)(東側裏板)，下：井戸23(北より)



上：井戸24(東より)，下：井戸27(南より)



上：井戸28(南より)，下：井戸29(東より)



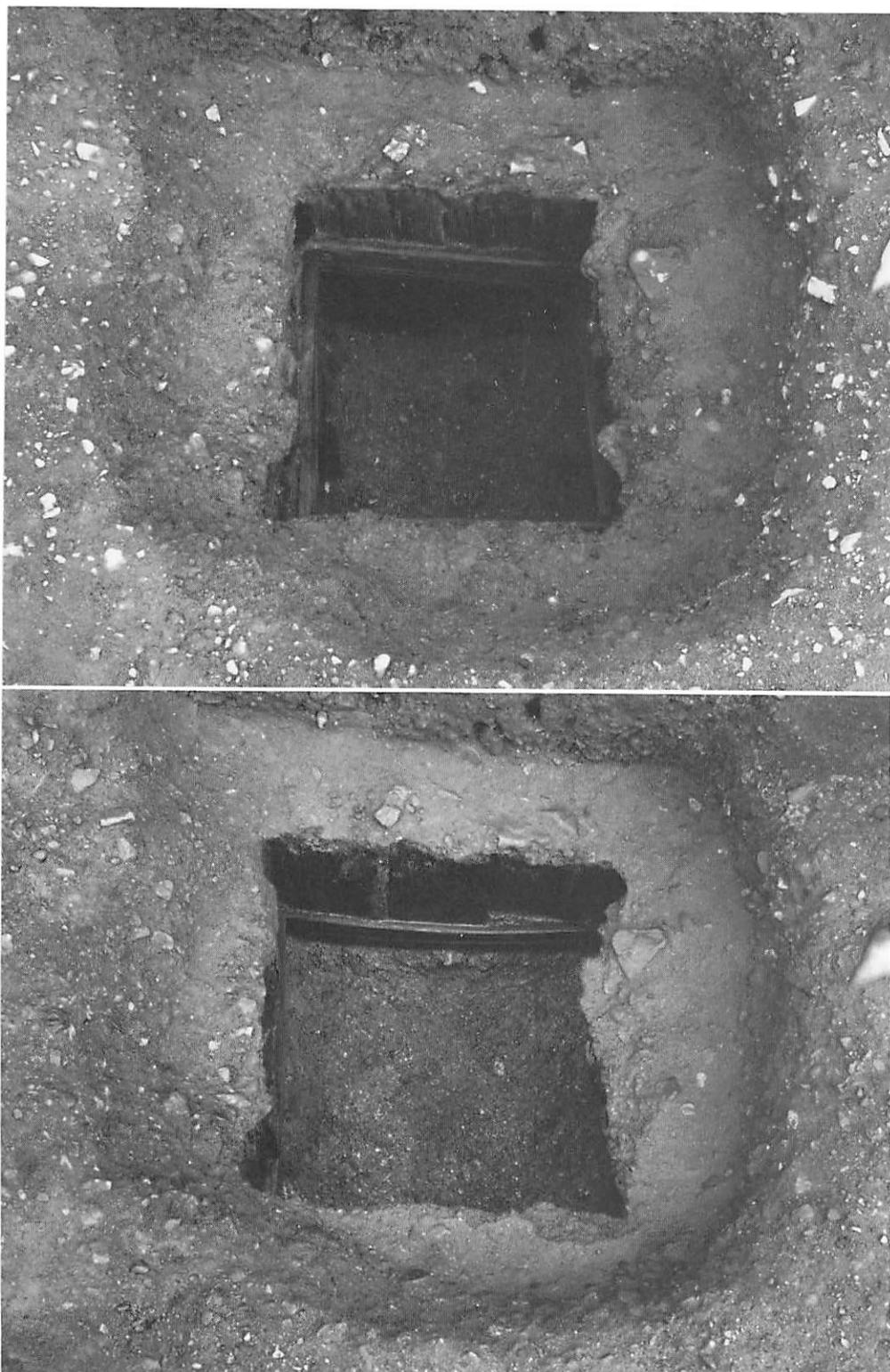
上：井戸30(北より)，下：井戸31(東より)



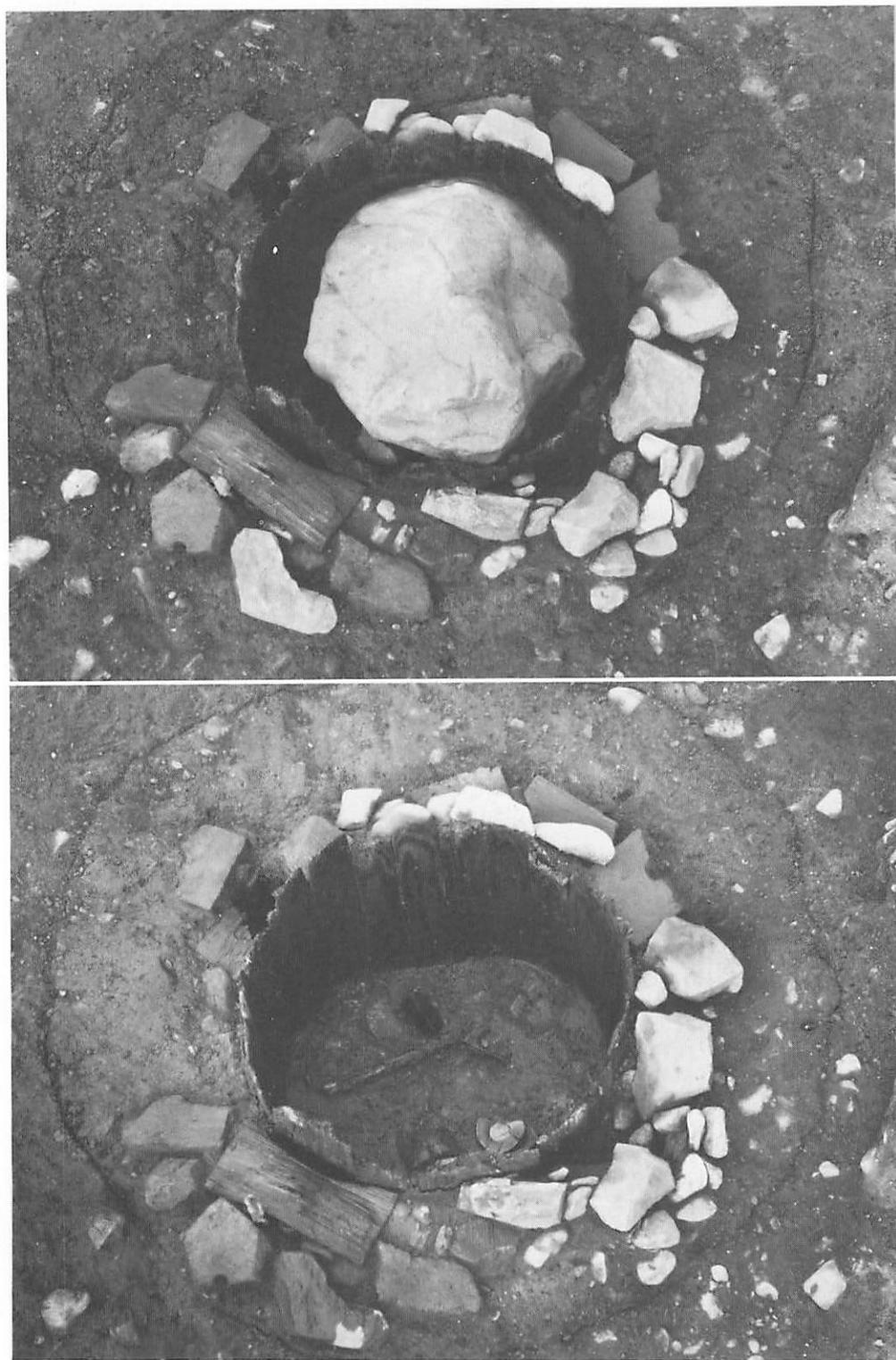
上：井戸32(南より)，下：井戸33(西より)



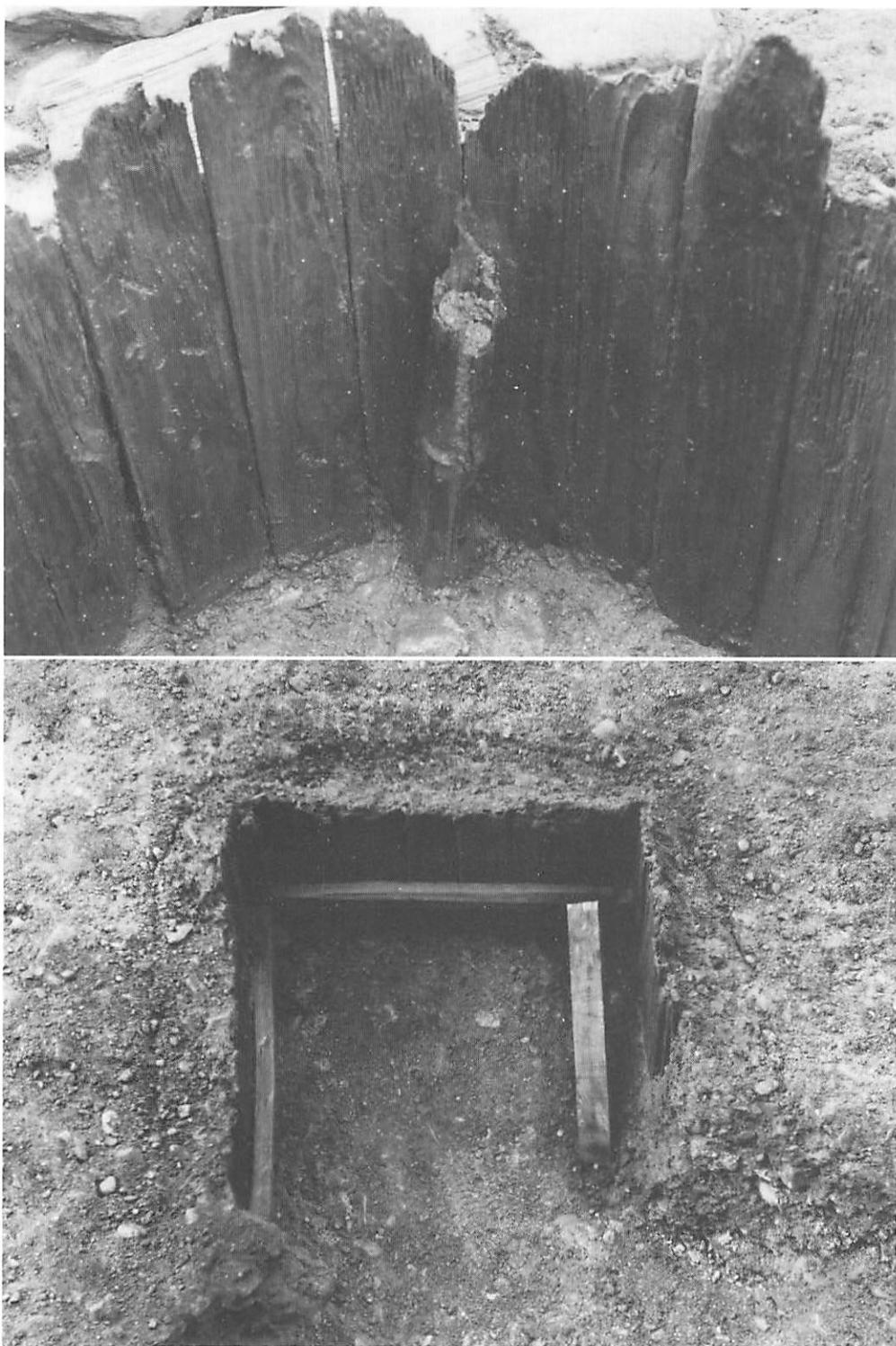
上：井戸34(南より)，下：井戸36(1)(上部遺物出土状況，南より)



井戸36(2) 上：内側(西より)，下：外側(同)



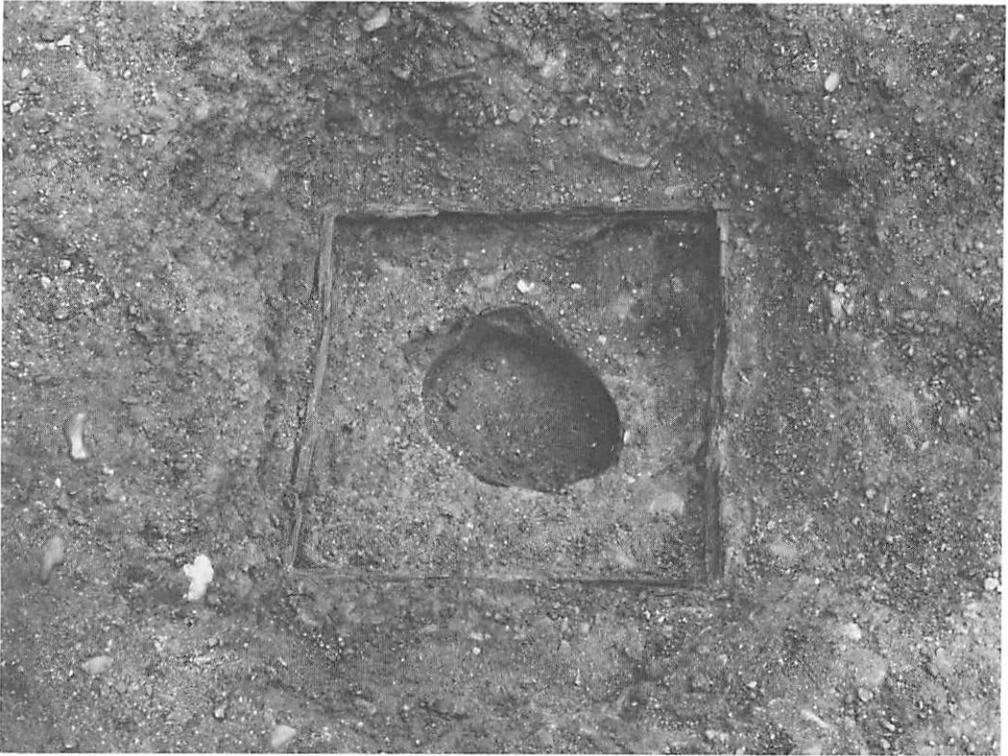
井戸37(1) 上：大石が入った状況(南より)，下：完掘状況(同)



上：井戸37(2)(竹が立っている状況)，下：井戸39(東より)



井戸38 上：全景(南より)，下：南側側板



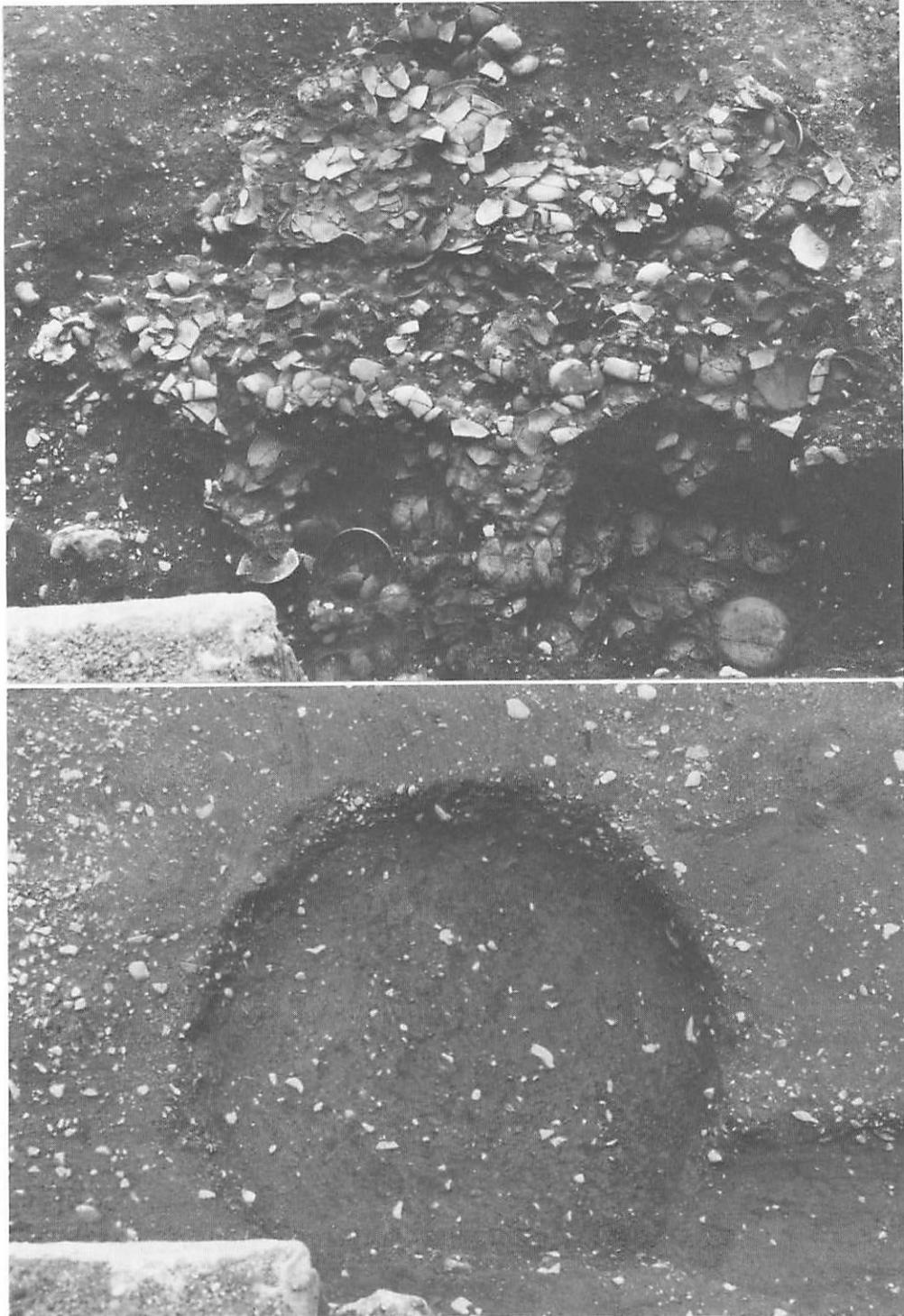
上：井戸42(北より)，下：井戸46(西より)



井戸44 上：全景(西より)，下：側板除去後状況(同)



上：井戸1003(東より)，下：井戸1004(同)



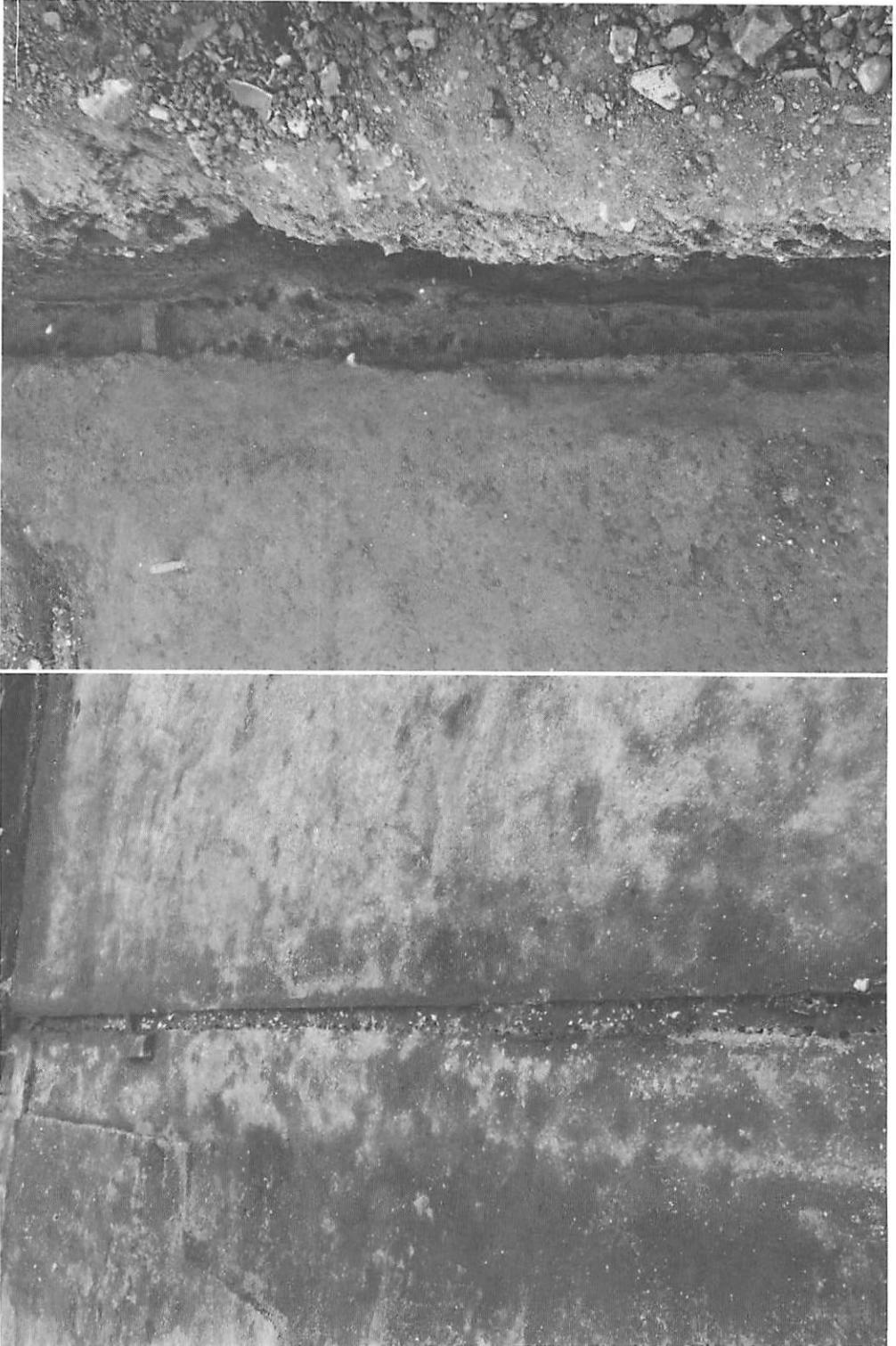
土城 1 上：遺物出土状況(東より)，下：完掘状況(同)



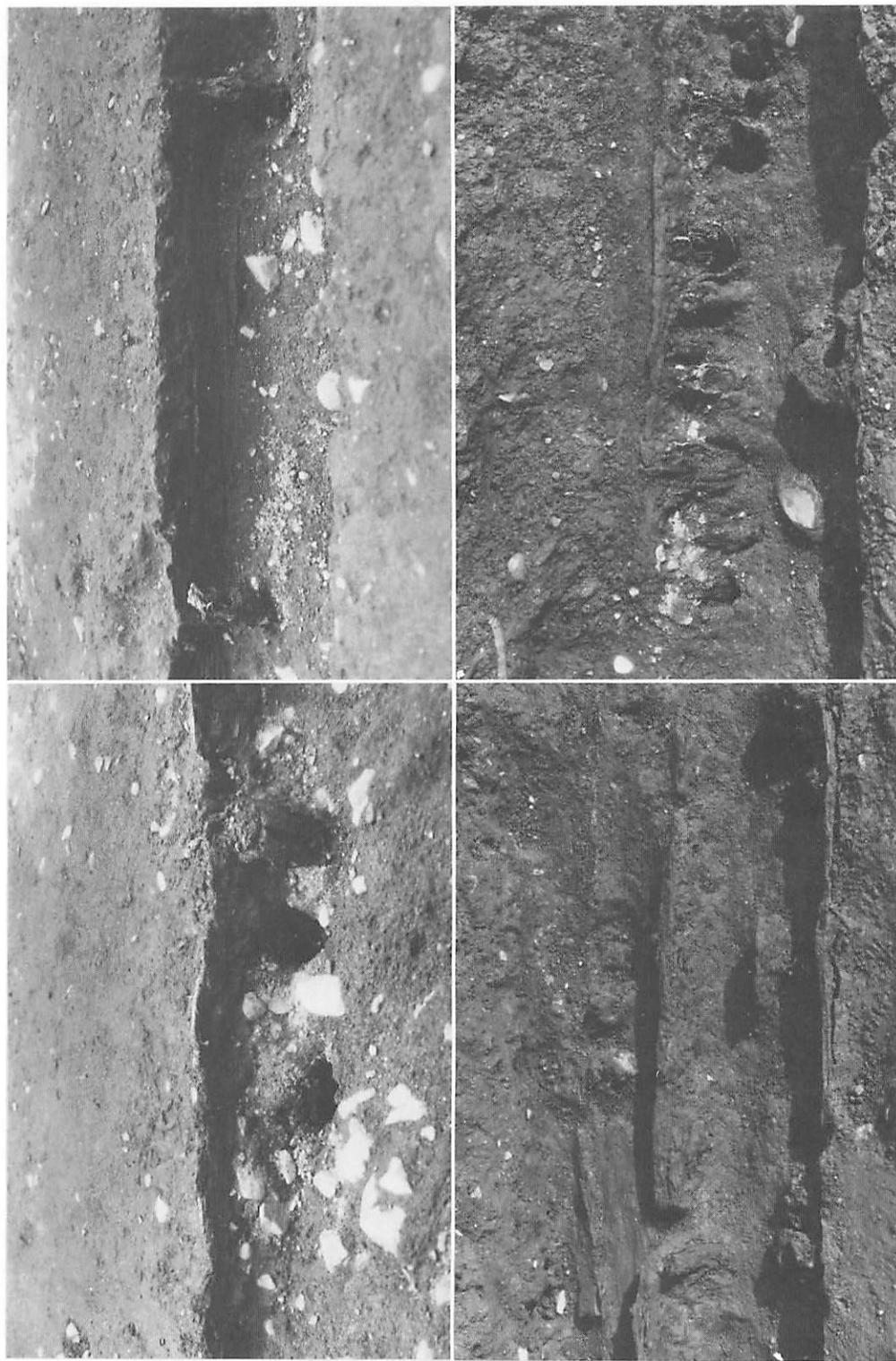
上：土壙8（遺物出土状況，北東より），下：土壙116〔井戸42上層〕（遺物出土状況，北より）



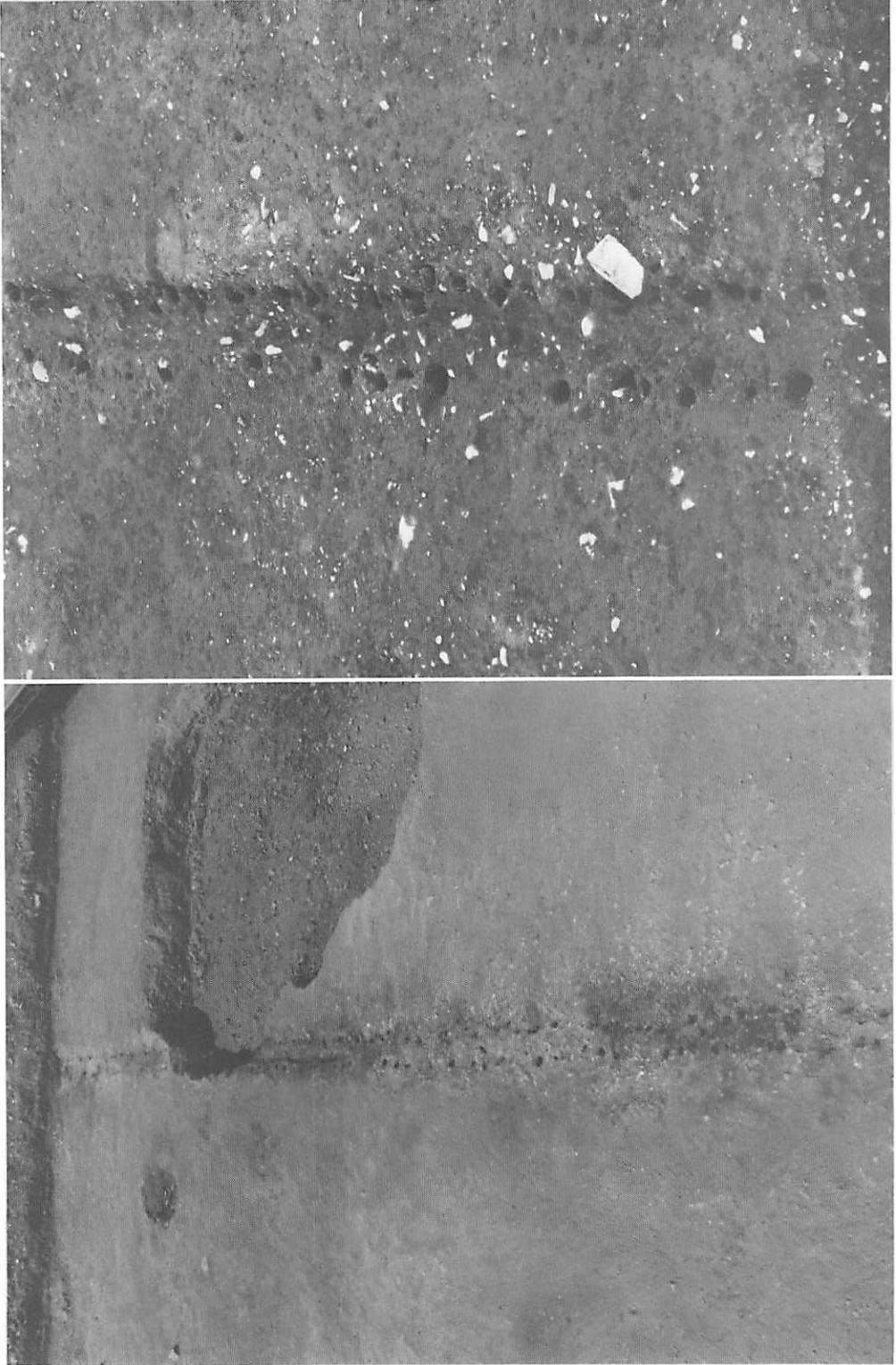
上：土壙60(遺物出土状況，北より)，下：土壙104(遺物出土状況，西より)



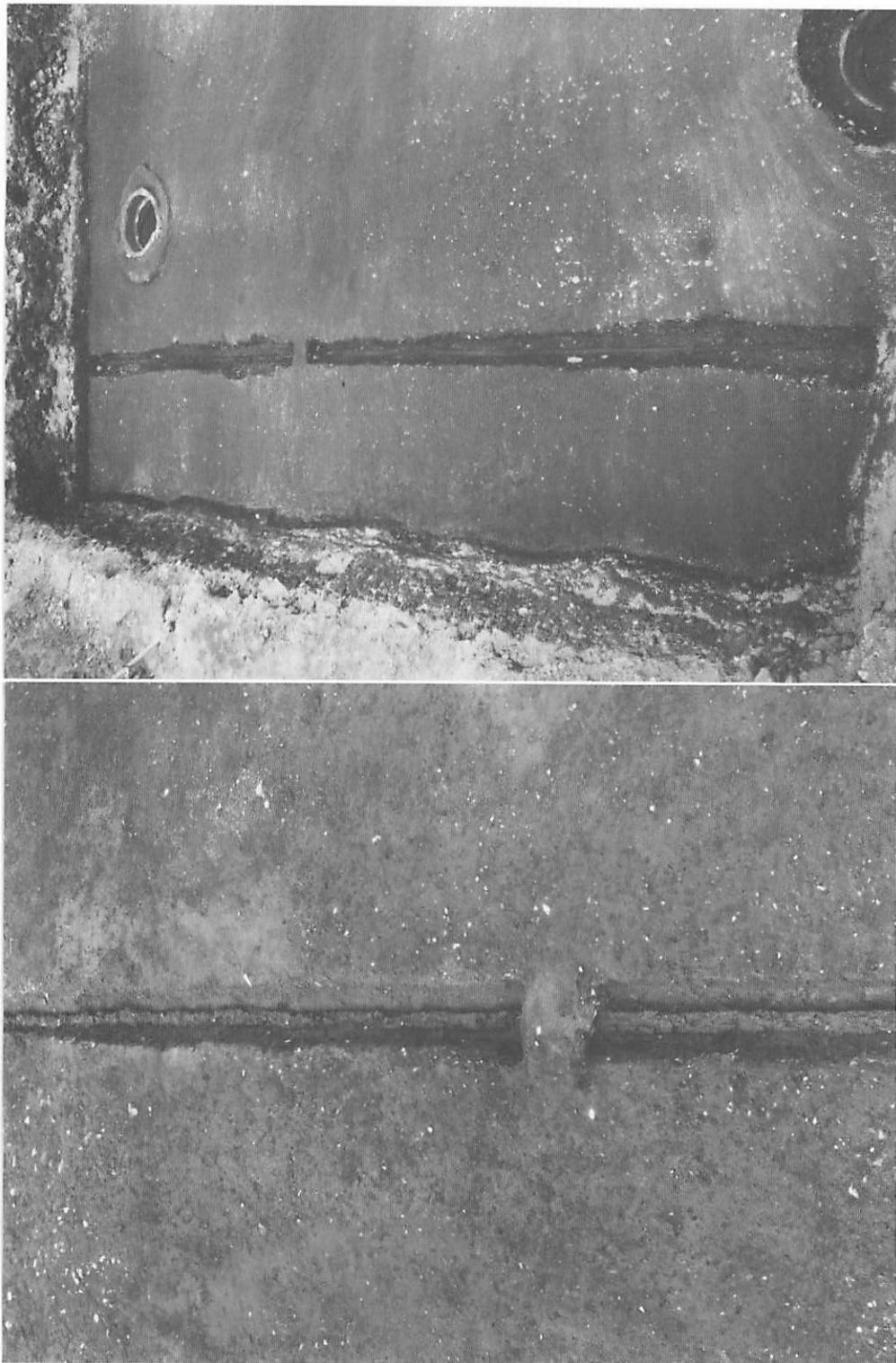
溝21(1) 左：I地区(西より)，右：III地区(東より)



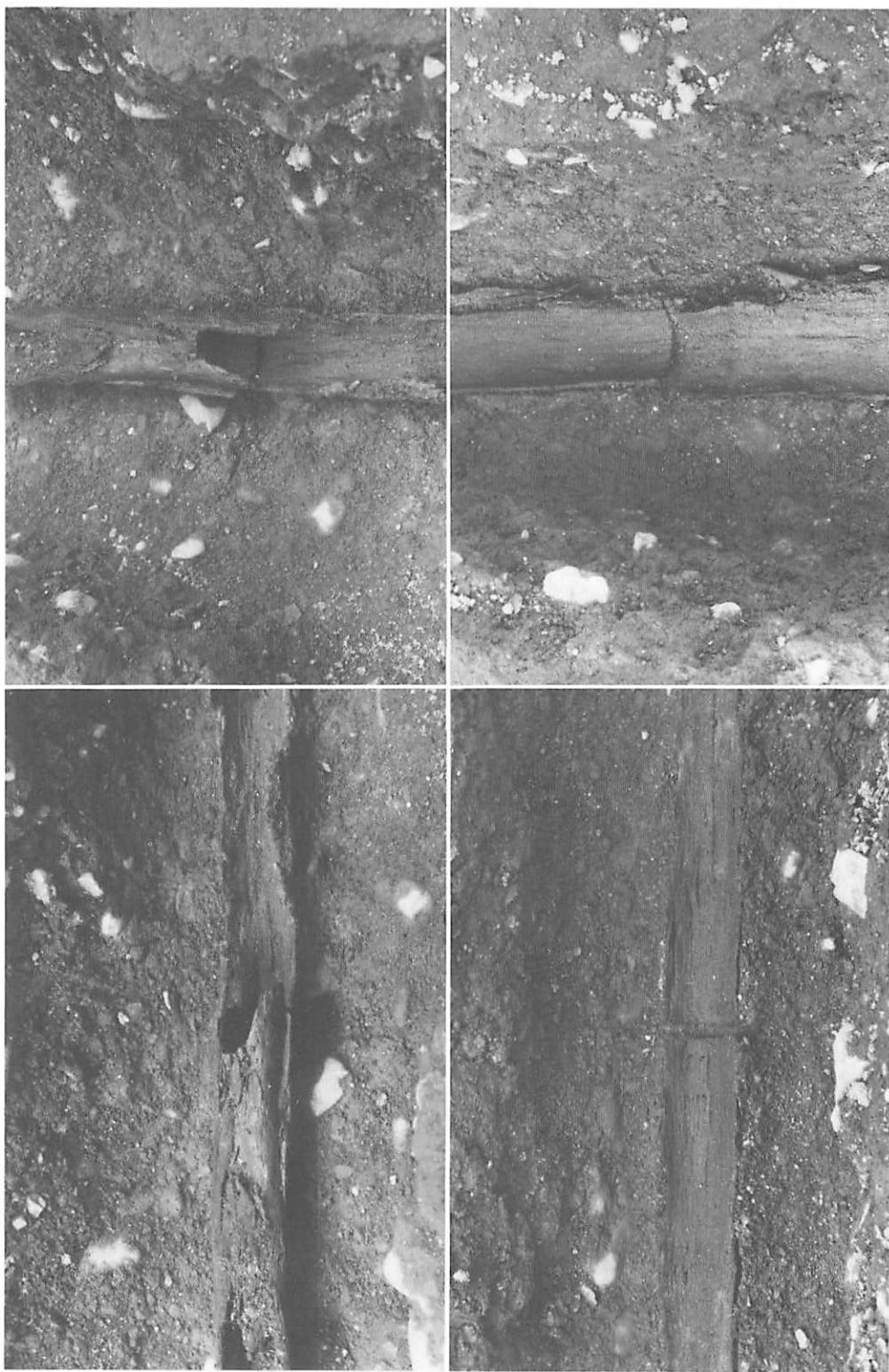
溝21(2) 上：細部(I地区)，下：同(Ⅲ地区)



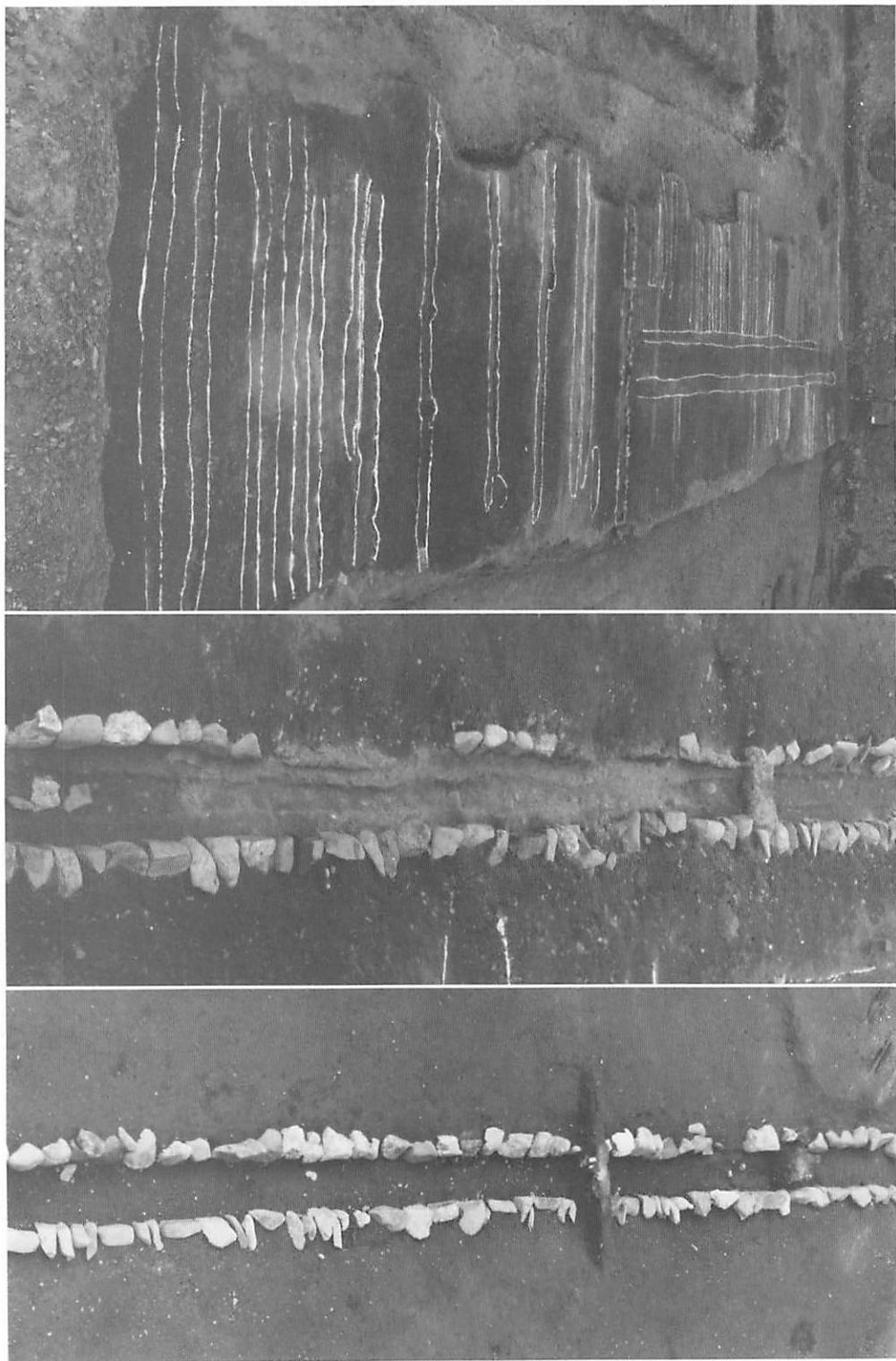
溝22 左：I地区北半(南より)，右：II地区南半(同)



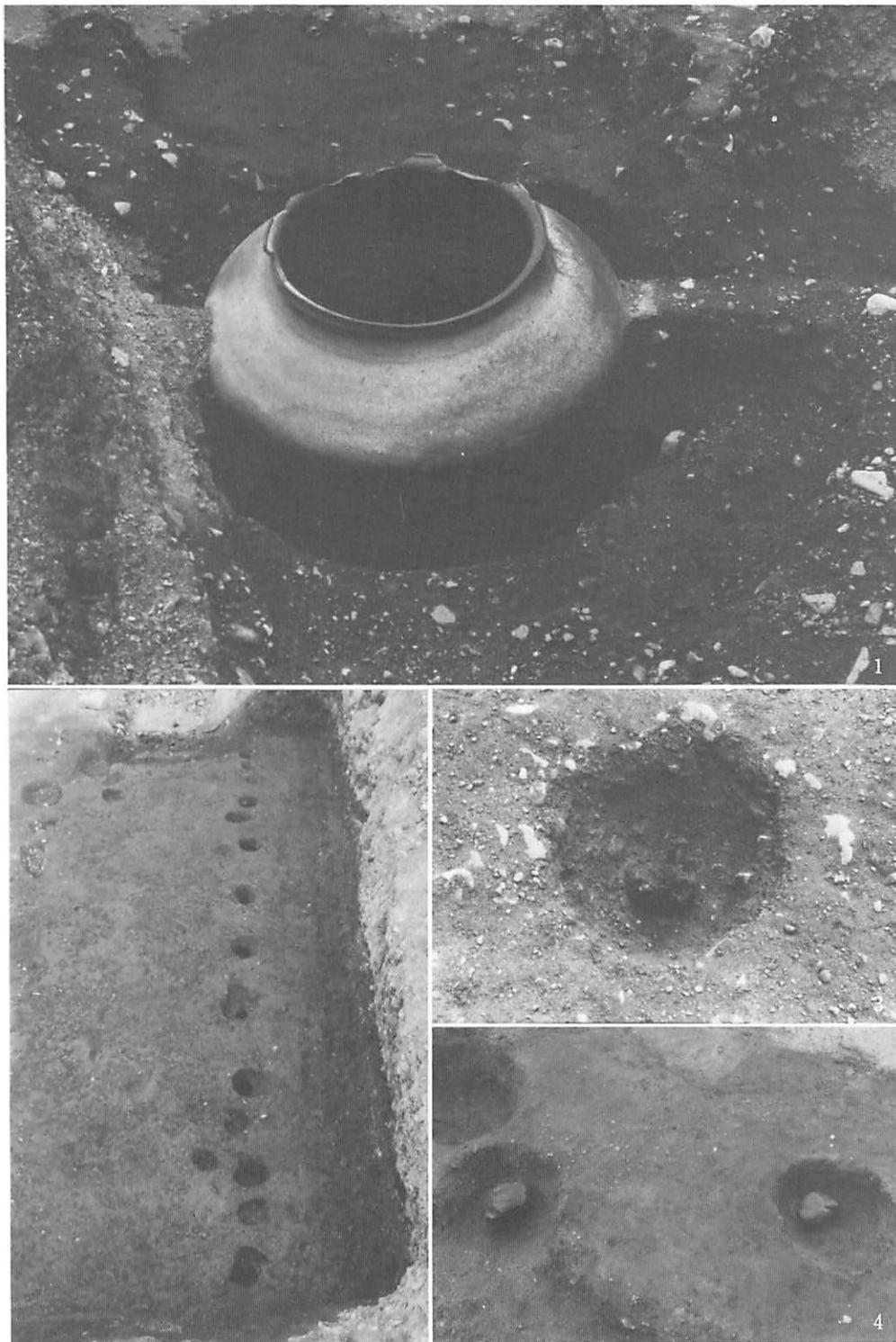
暗渠(1) 左：Ⅱ地区(南より)，右：Ⅲ地区(東より)



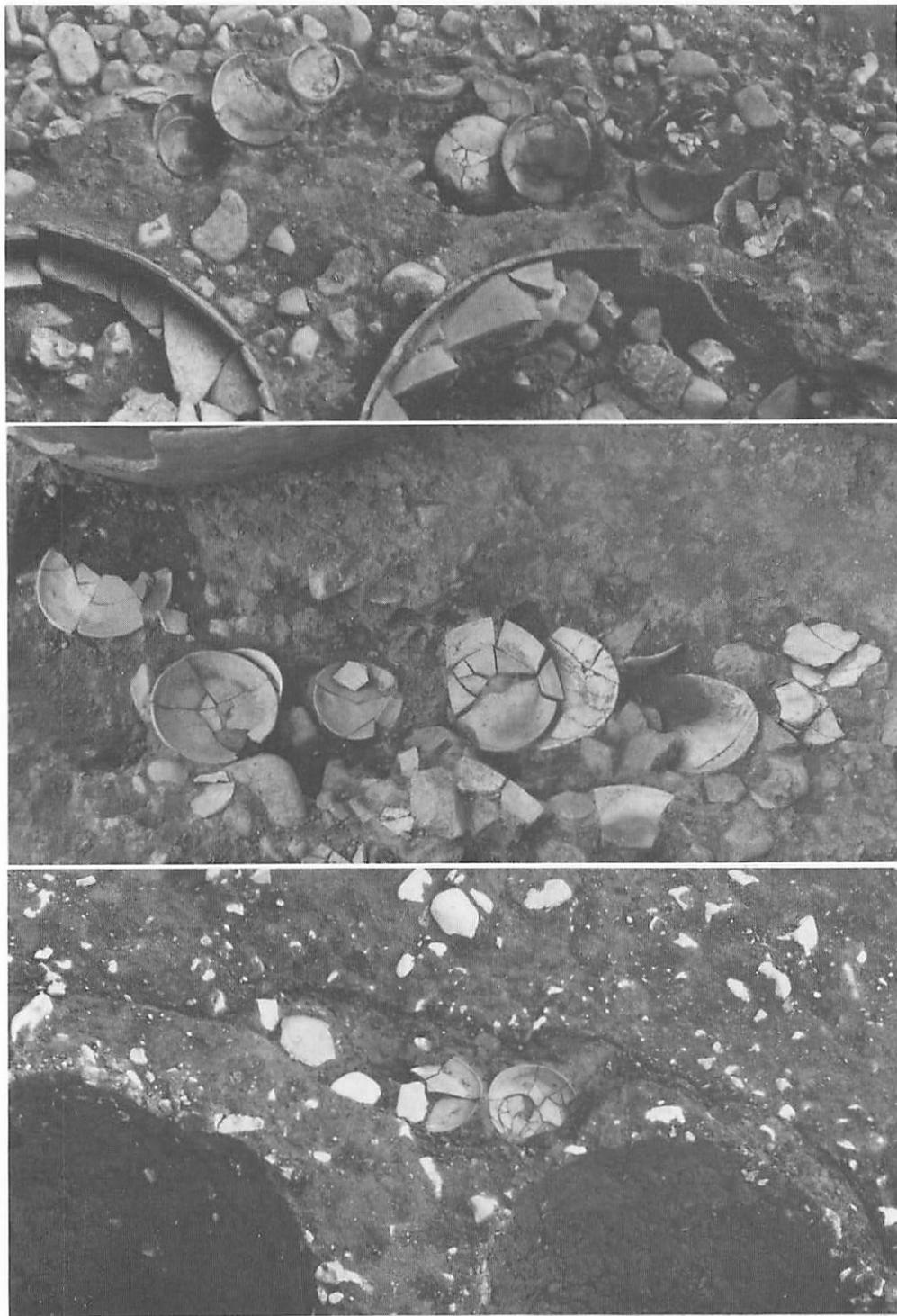
暗渠(2) 竹材接合部状況(Ⅲ地区)



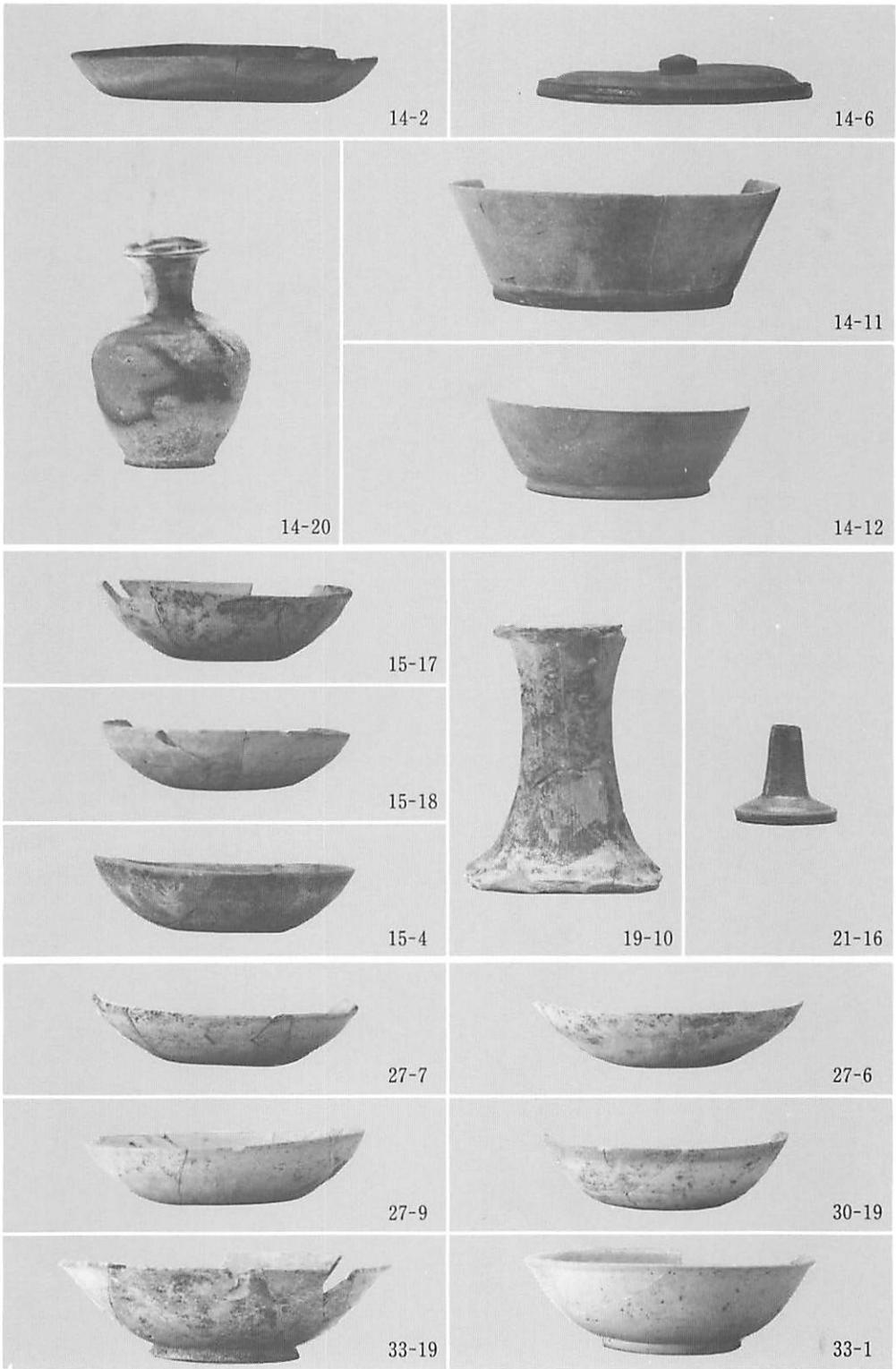
左：畝状遺構(Ⅱ地区北半, 東より), 中：石組溝(Ⅱ地区北半, 南より),
右：同(Ⅳ地区, 南より)



1：埋甕1(南より)，2：柵列(Ⅲ地区，東より)，3：柱穴柱根(土壙62，北より)，4：柱穴根石(土壙179・180，南東より)



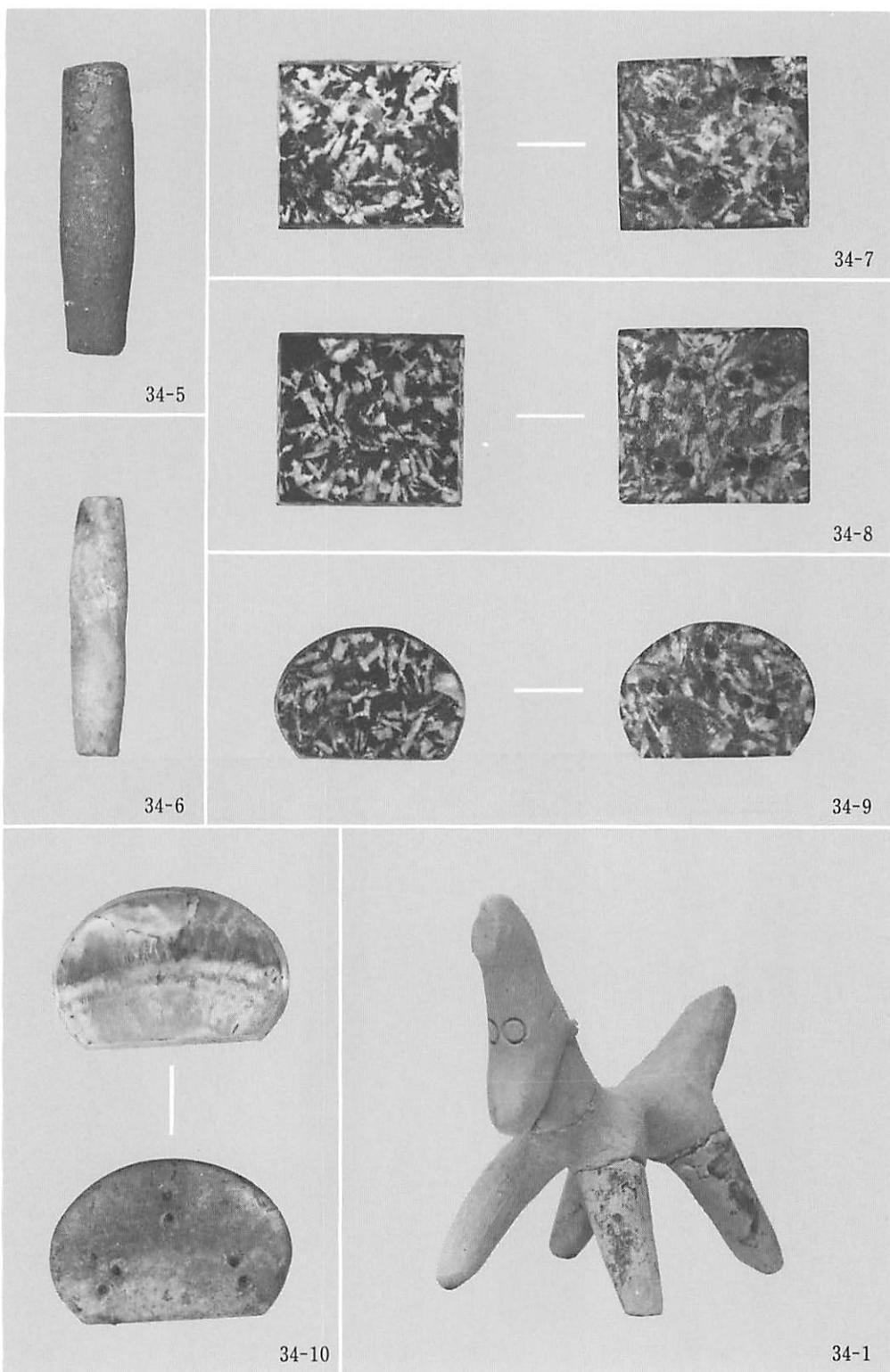
土師皿群 上：土師皿群1 (北より)，中：同3 (南より)，下：同4 (北より)



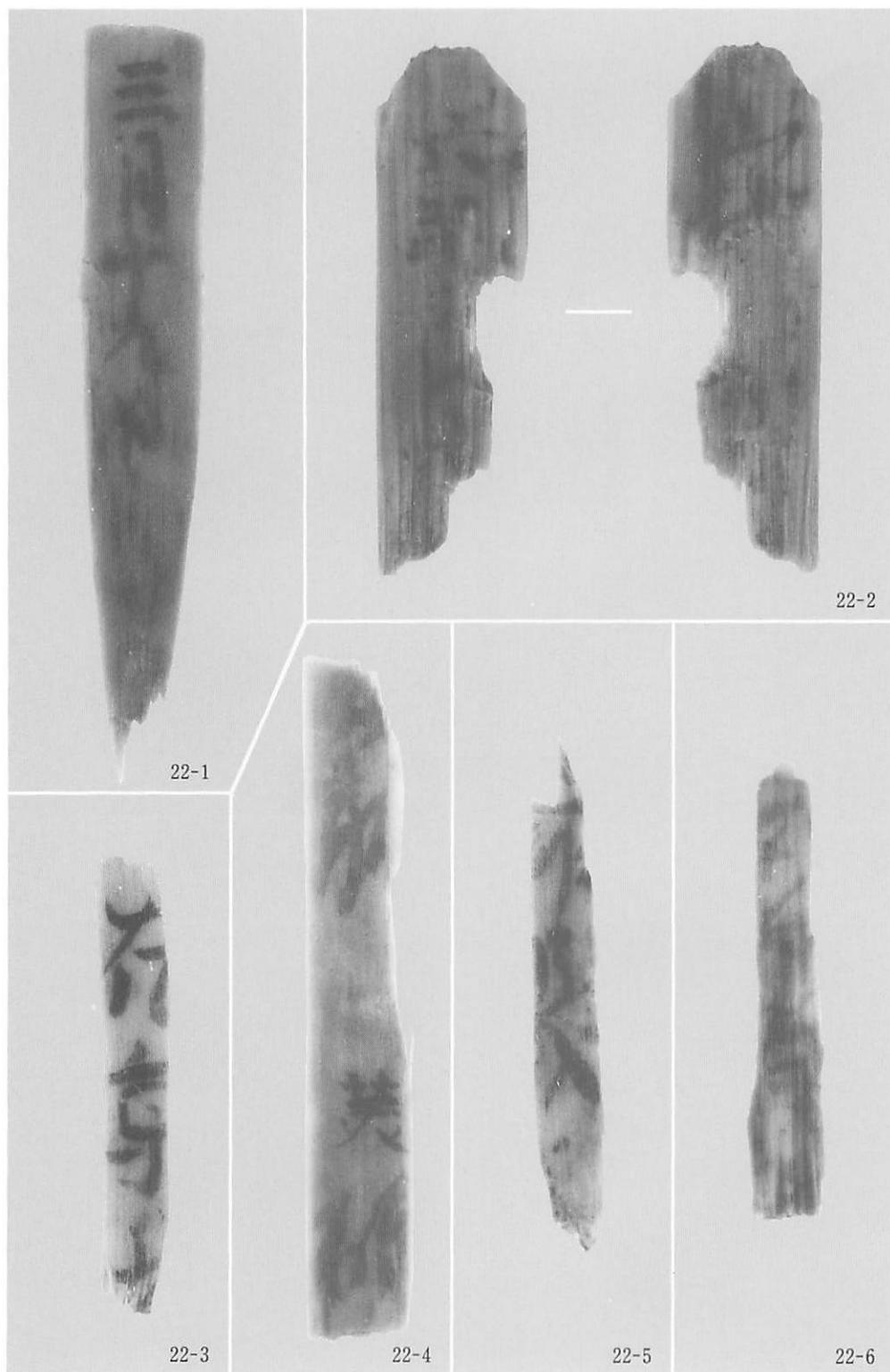
溝29出土遺物(1) 土器



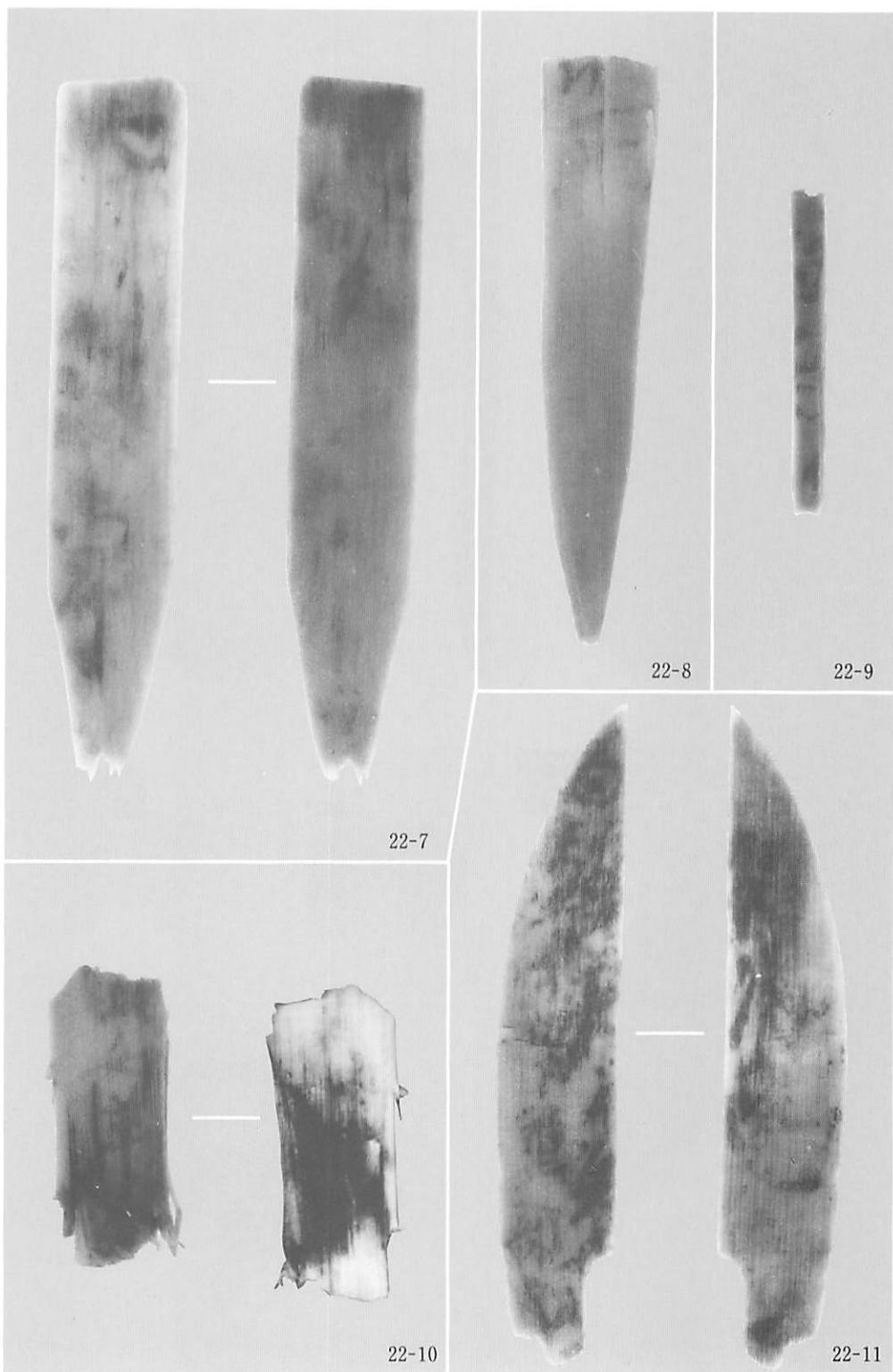
溝29出土遺物(2) 墨書土器(実大)



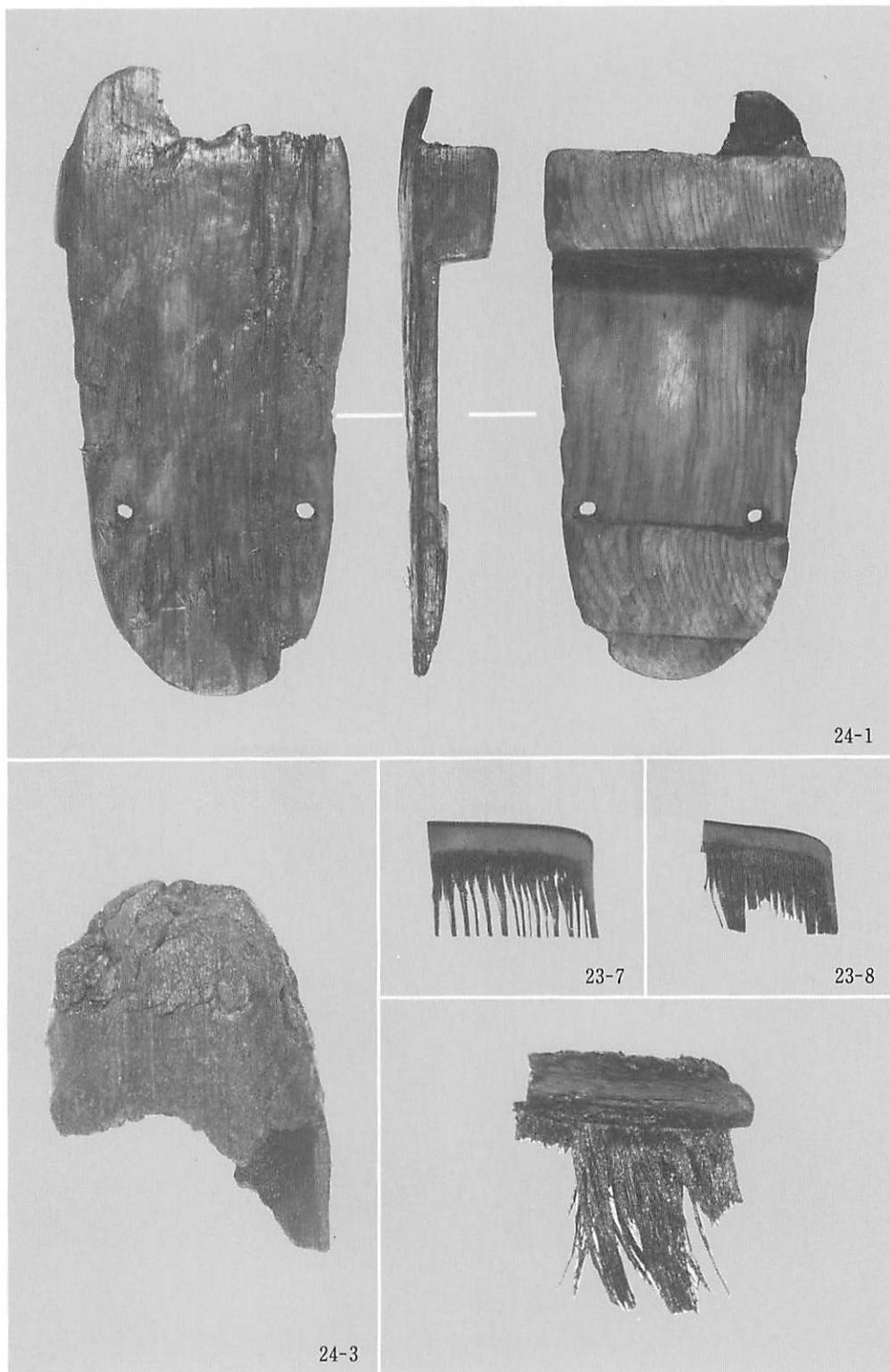
溝29出土遺物(3) 土製品・石製品(土馬を除いて、他はすべて実大)



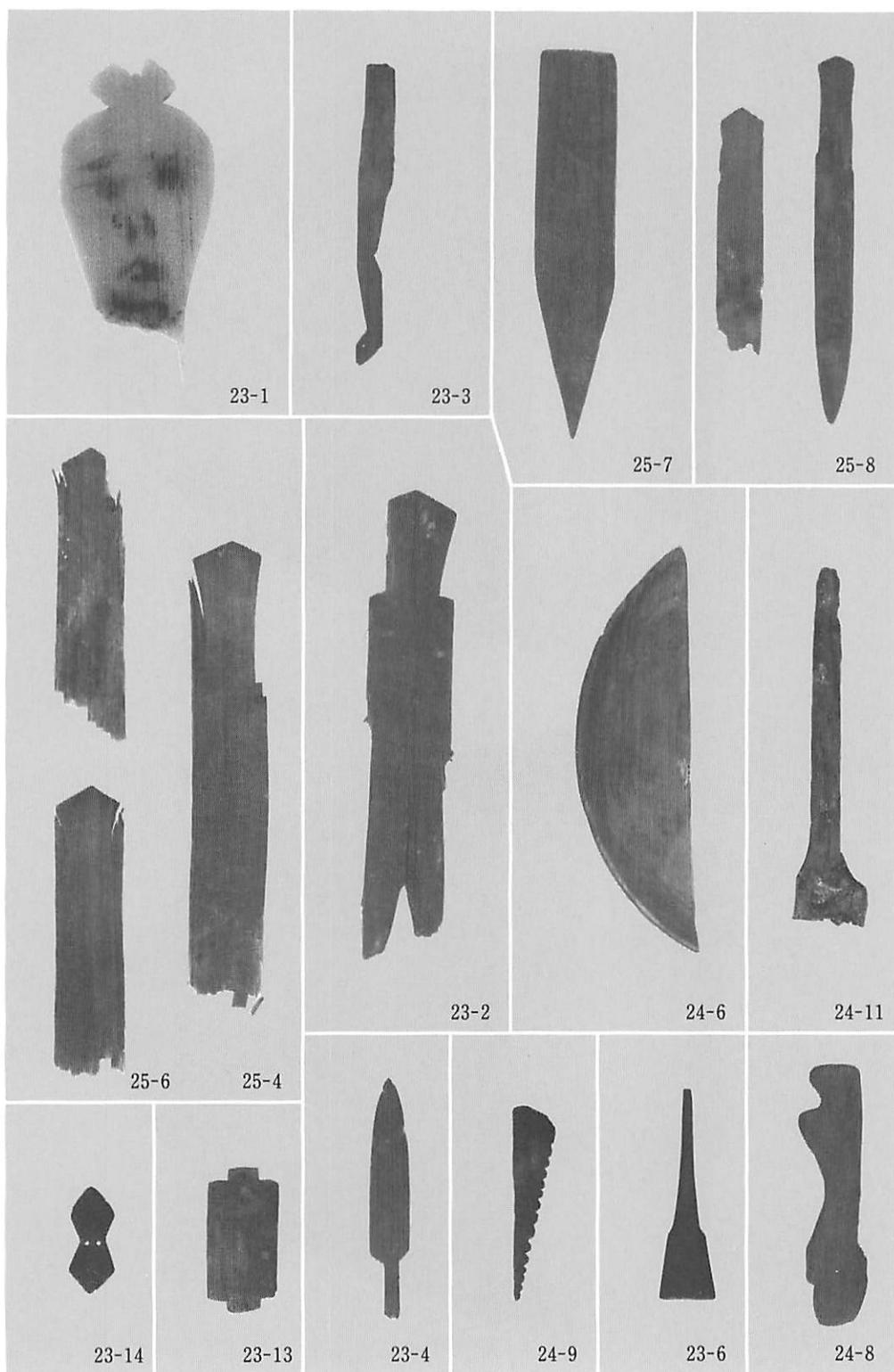
溝29出土遺物(4) 木簡(1)(実大)



溝29出土遺物(5) 木筒(2)(実大)



溝29出土遺物(6) 木製品(1)



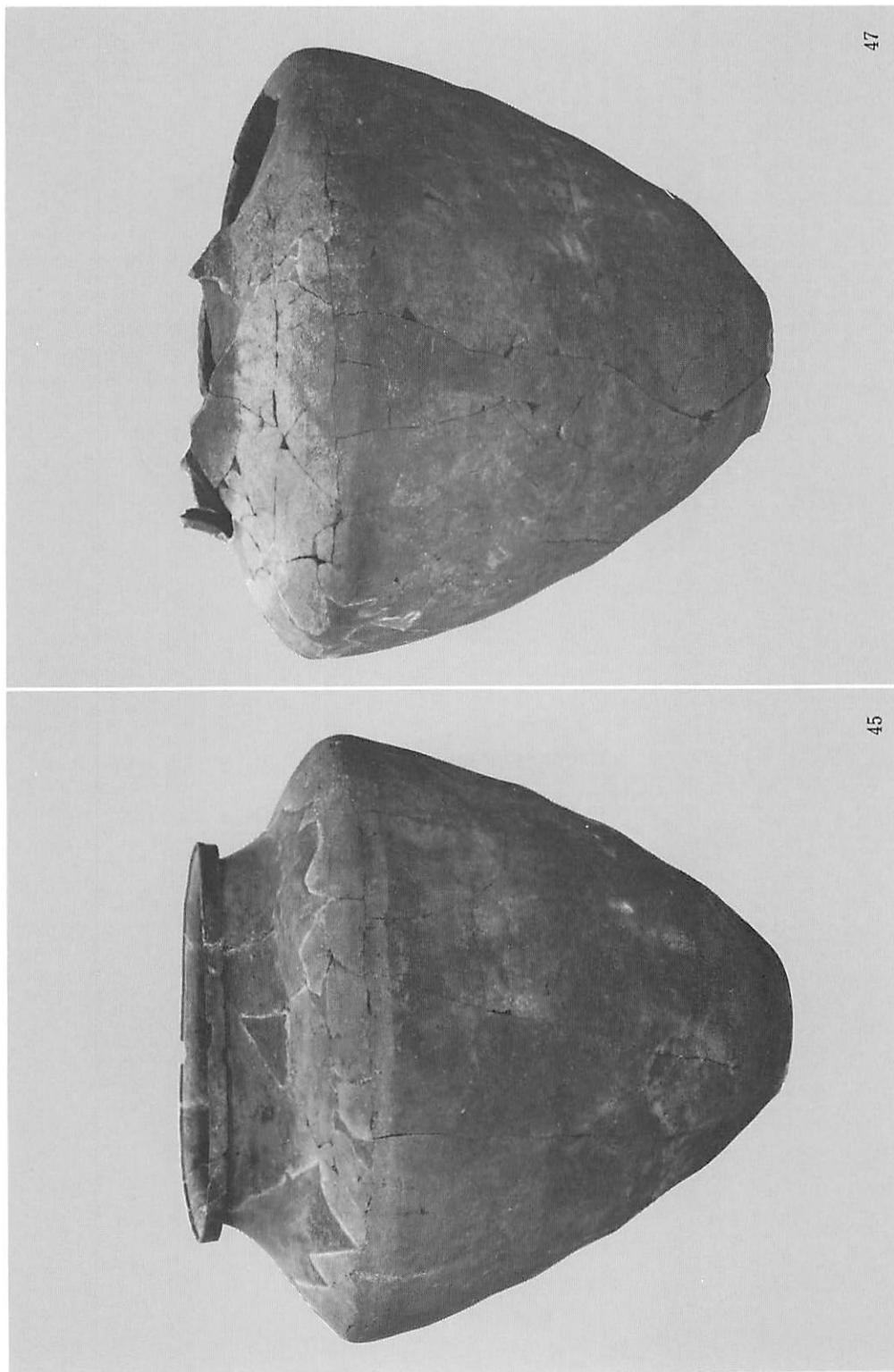
溝29出土遺物(7) 木製品(2)



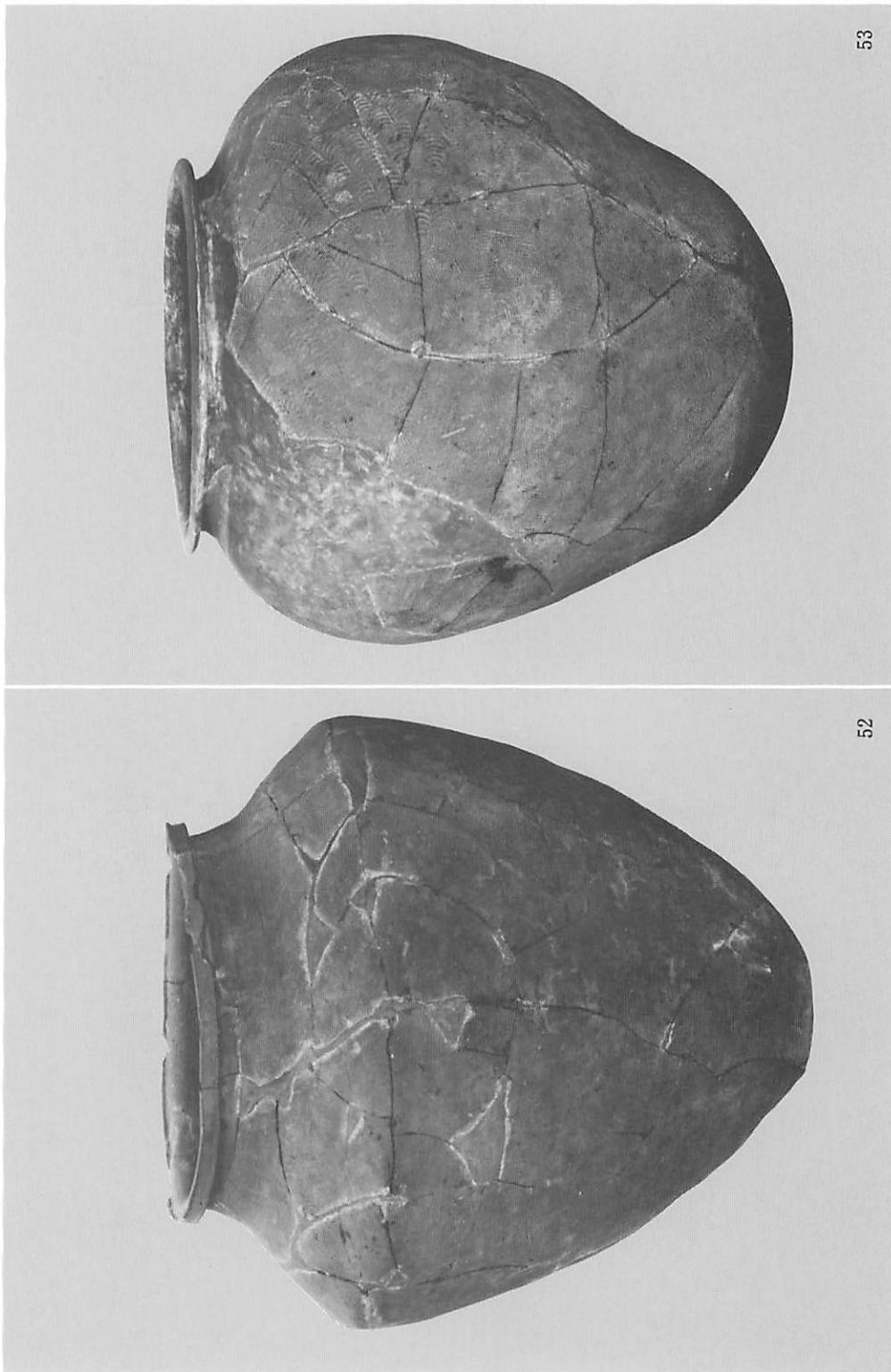
102-1

43

埋甕1・2 出土遺物 左：埋甕1 本体，右：埋甕2 本体



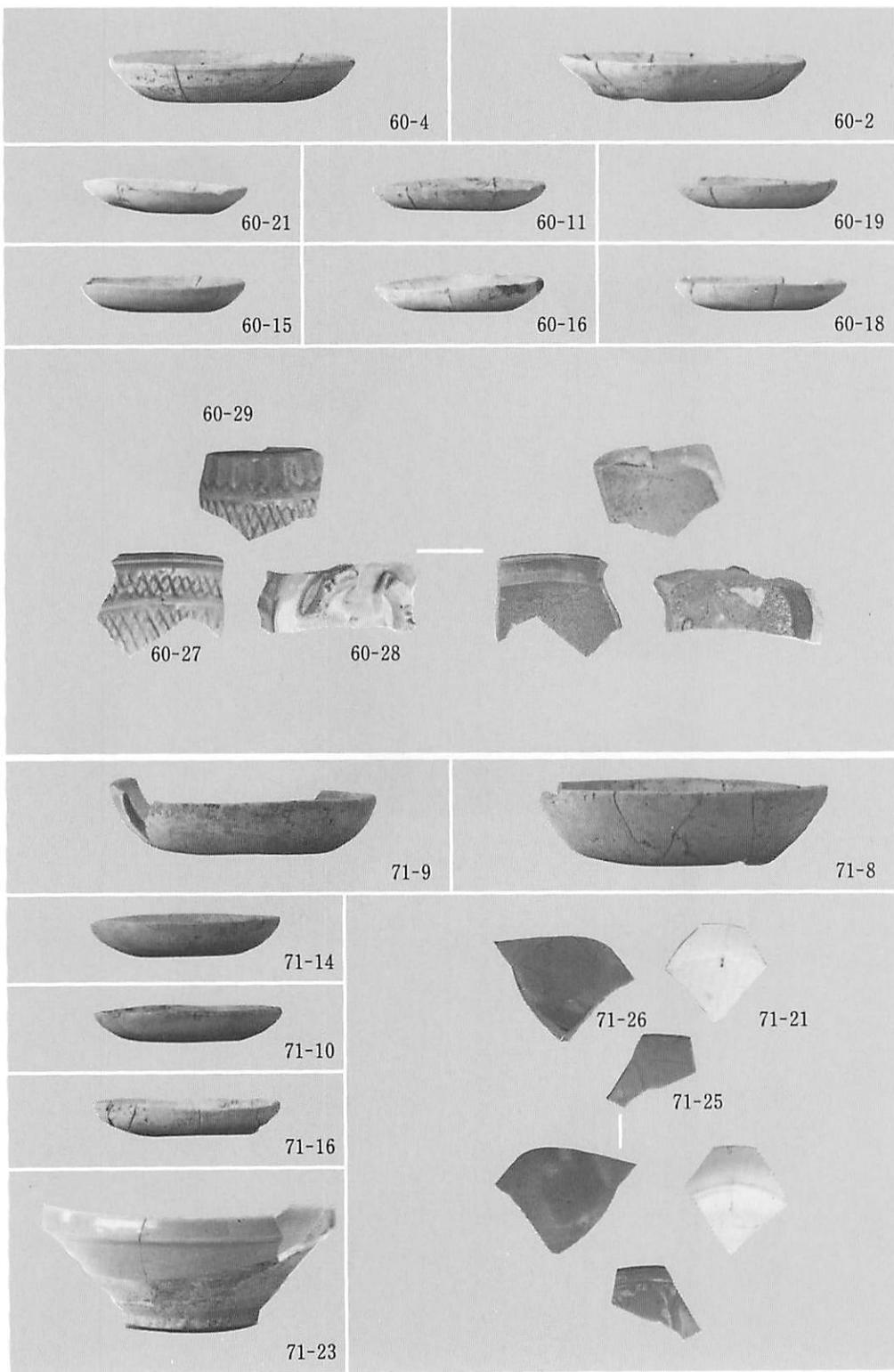
埋甕3·4出土遺物 左：埋甕3本体，右：埋甕4本体



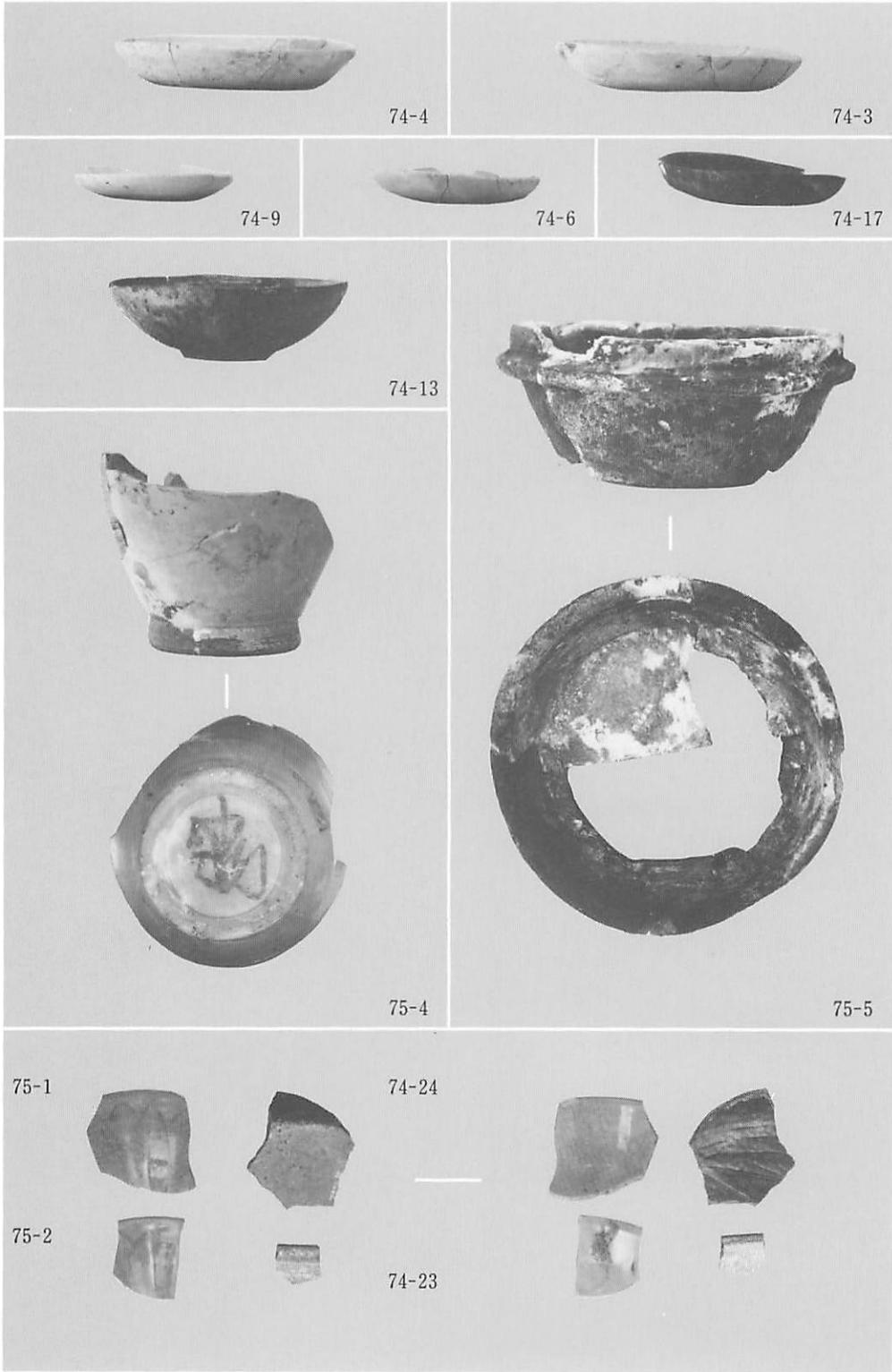
52

53

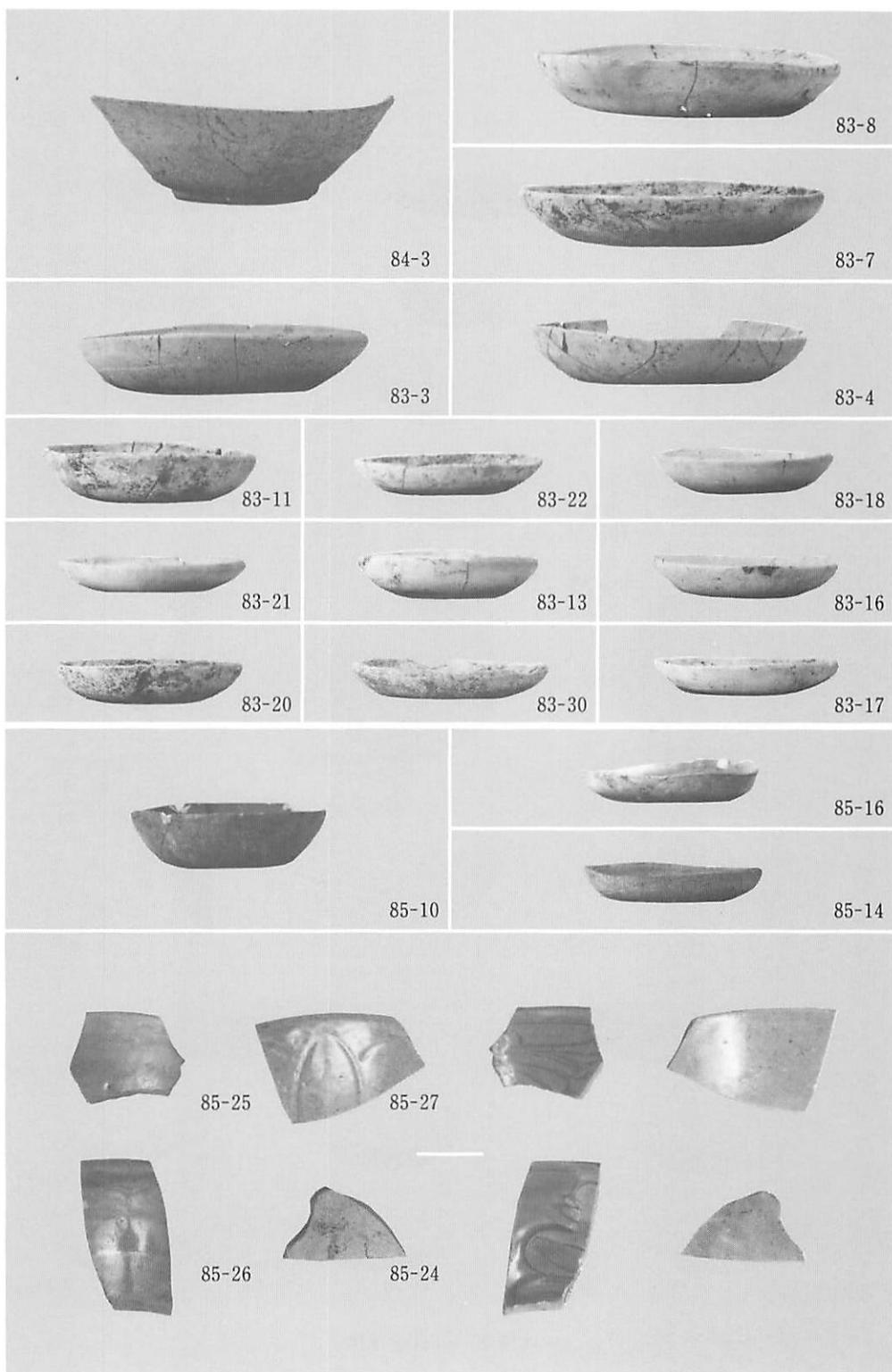
埋甕 6・7 出土遺物 左：埋甕 6 本体，右：埋甕 7 本体



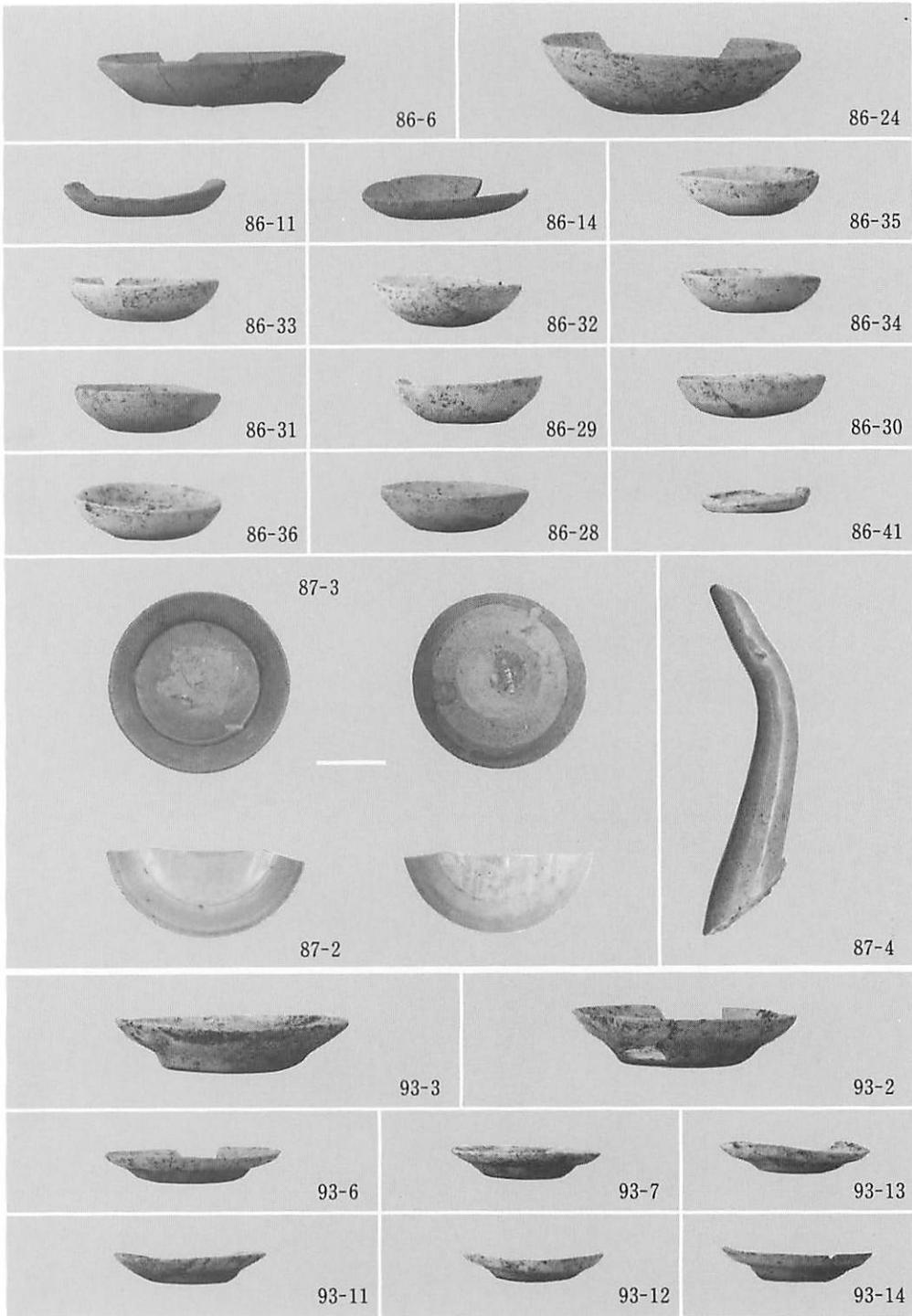
土城 3・井戸 4 出土遺物



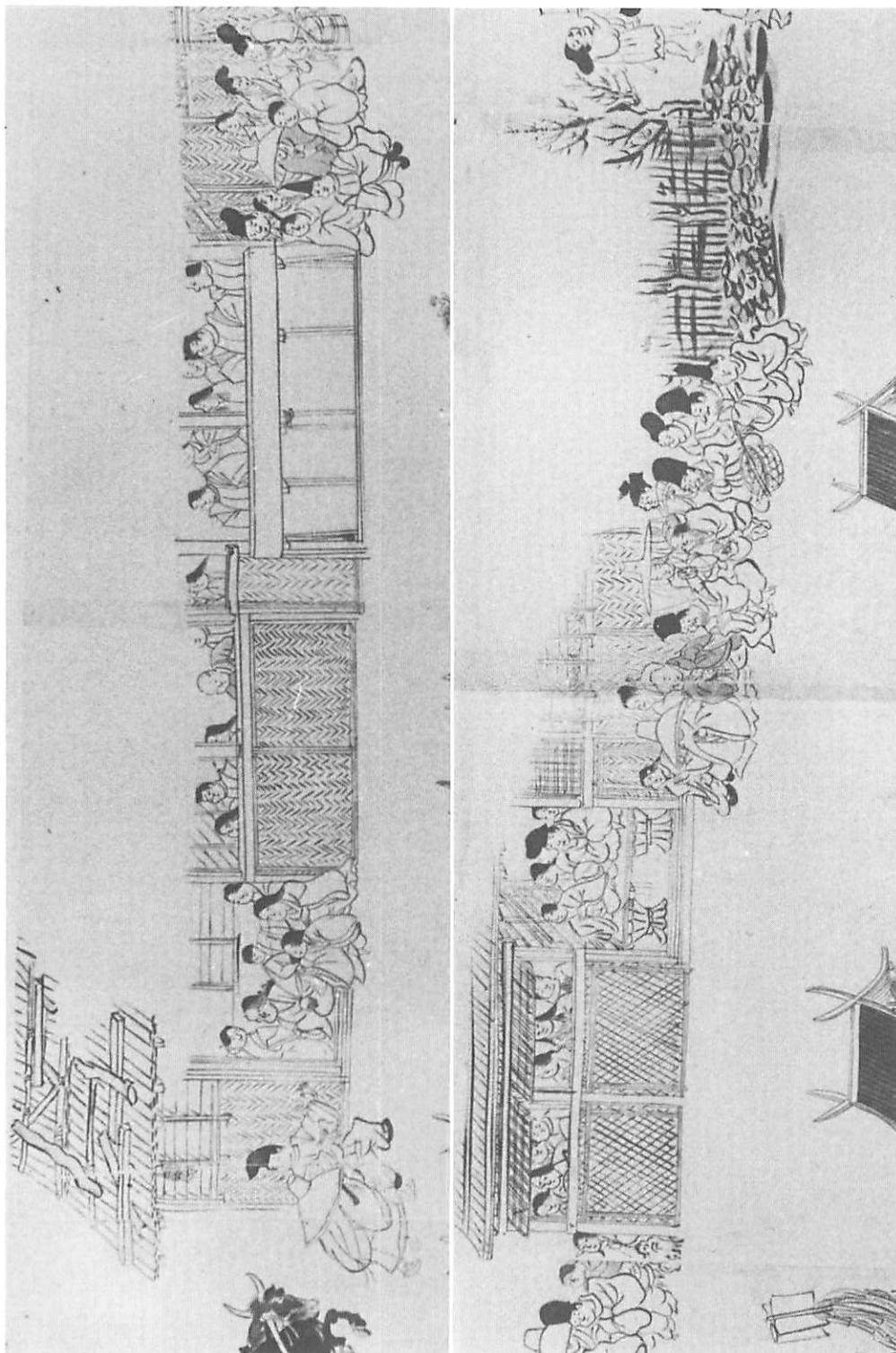
井戸12出土遺物



土壙1・2出土遺物



土壙 8・102 出土遺物



七条大路の民家(『年中行事絵巻』より)

平安京跡研究調査報告 第16輯
平安京左京八條三坊二町
—第2次調査—

発行日 昭和60年3月31日
編 集 平安博物館考古学第3研究室
定 森 秀 夫
発 行 財團法人 古 代 学 協 会
604 京都市中京区三条高倉上る
振替京都 8-850 番
T E L. 075 (222) 0888
制 作 東洋紙業株式会社
556 大阪市浪速区芦原1丁目3番
T E L. 06(567)2111

PALAEOLOGICAL STUDIES

IN THE CAPITAL HEIAN, VOL. XVI

EXCAVATIONS AT THE SECOND INSULA, REGIO III,
DECUMANUS VIII IN THE PARS ORIENTALIS OF
THE CAPITAL HEIAN

— THE SECOND SEASON —

THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO MCMLXXXV